

# 三雲・井原遺跡Ⅲ

— 八龍・三雲堺・宮ノ下・井原堺地区の調査 —

福岡県前原市大字三雲・井原所在遺跡の調査報告

前原市文化財調査報告書

第 82 集



2003

前原市教育委員会

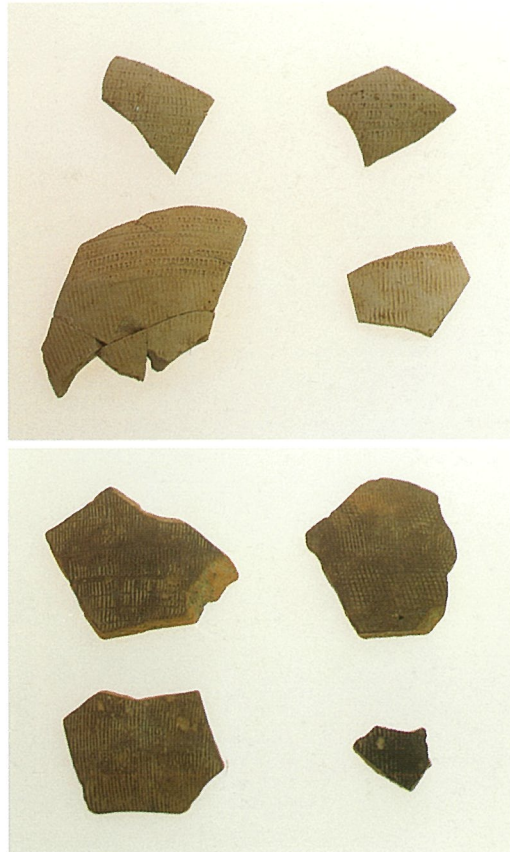




a. 八龍地区221番地大溝全景（北から）



b. 大溝出土初期須恵器



c. 八龍地区出土半島系土器  
（上：221番地大溝、下：234番地）





宮ノ下地区 Aトレンチ  
a. 木棺墓出土遺物



b. 井原塚地区2号甕棺墓出土ガラス玉（一部）



## 序

前原市は弥生時代に中国の史書「魏志倭人伝」に登場する「伊都国」の地として、その地理的条件から、対外交渉の拠点として繁栄していました。その証として、市内には重要な遺跡が数多く存在しています。中でも、三雲・井原遺跡は「伊都国」の中心地として栄えた場所で、そこを支配していた王の墓として確認されている三雲南小路遺跡、井原鍵溝遺跡、平原遺跡の三王墓からの数多くの大陸由来の貴重な副葬品が、その繁栄を今に伝えてくれます。

前原市教育委員会では、この貴重な文化遺産を後世により良い形で伝えていくために、平成6年から国・県の補助を受け、保存・整備に向けて、遺跡の範囲及び内容確認を進めております。近年の調査によって、三雲・井原遺跡の南東部の範囲確認ができ、遺跡整備にむけての貴重な成果が得られました。本書では、平成13年度の調査を中心に、近年その周辺地域で行なわれた発掘調査の成果をまとめたものです。

最後になりましたが、発掘調査に快諾いただきました地権者の方々に感謝申し上げます。

平成15年3月31日

前原市教育委員会  
教育長 菊竹 利嗣

## 例 言

1. 本書は福岡県前原市大字三雲284番地他に所在する遺跡の報告書である。  
発掘調査および遺物の整理と報告書の作成は平成13年度、平成14年度にそれぞれ国・県補助を受け、前原市教育委員会が実施した。
2. なお、八龍地区221・234・235番地、堺地区253・256・247・248番地、井原地区1025～1029番地の一部は平成12年度以前に遡る調査であるが、遺跡の性格をより具体的に把握するために、本書で一括して報告する。
3. 本書に使用した1/2,500、1/5,000地形図は前原市都市計画図（平成14年度および平成3年度作成）を使用した。
4. 本書に使用した遺構実測図及び写真撮影は八龍地区235番地、宮ノ下地区は岡部裕俊、牟田華代子、八龍地区221番地は角浩行、平尾和久、三雲堺地区253番地は岡部、上田健太郎（現兵庫県教育委員会）、248・256番地は角、八龍地区234番地、井原堺地区は川村博が行い、発掘現場の空中写真については、(有) 空中写真企画（代表 檀睦夫）に委託した。
5. 遺物実測は山崎賀代子、島影やよい、川上辰子、友池真由美、古川秀幸（二丈町教育委員会）岡部、平尾、牟田が行い、宮の下地区の白磁椀に関しては横田賢次郎（九州歴史資料館）、狭川真一（元興寺文化財研究所）の両氏からご教示を賜った。
6. 遺構図の製図は友池、岡部、牟田が行い、遺物図の製図は山崎、友池、岡部、牟田が行った。
7. 本書の執筆分担は本文目次および本文中に記載している。
8. 本書の編集は岡部の協力を得て、牟田が行なった。
9. 本書で報告した遺構、遺物図、写真記録、出土遺物は伊都歴史資料館で一括保管、管理する。

# 本文目次

I. はじめに…………… (牟田) 1	(4) 小結…………… 79
1. 調査にいたる経過…………… 1	4. 井原堺地区 (D地点) の調査
2. 調査の組織…………… 1	…………… (川村・牟田) 80
II. 位置と環境…………… (牟田) 2	(1) はじめに…………… 80
III. 調査の記録…………… 5	(2) 遺構と遺物の紹介…………… 81
1. 八龍地区の調査…………… 5	①甕棺墓…………… 81
(1) 234番地の調査… (川村・牟田) 6	②土壙墓…………… 91
①北区の調査…………… 6	③祭祀土坑…………… 92
②南区の調査…………… 10	④歴史時代の遺構と遺物…………… 94
(2) 221番地の調査… (角・牟田) 11	⑤包含層…………… 96
①大溝…………… 11	(3) 小結…………… 96
②歴史時代の遺構と遺物…………… 29	IV. 石器・鉄器・玉類…………… (牟田) 97
③小結…………… 33	V. 科学分析
(3) 235番地の調査…………… (牟田) 34	…………… (比佐陽一郎・片多雅樹) 101
①住居跡…………… 34	1. 前原市井原遺跡出土
②その他の遺構…………… 39	ガラス資料の材質調査… 101
(4) 小結…………… (牟田) 40	2. 三雲八龍遺跡から
2. 三雲堺地区の調査…………… 41	出土した小玉の材質調査… 103
(1) 247番地の調査…………… (角) 41	VI. おわりに…………… (牟田) 105
(2) 253番地の調査…………… (岡部) 41	
(3) 248・249番地の調査… (角) 42	
(4) 281-1番地の調査…………… (角) 43	
(5) 小結…………… (岡部) 44	
3. 宮ノ下地区の調査…………… (牟田) 45	
(1) Aトレンチの調査…………… 45	
①住居跡…………… 45	
②土坑…………… 56	
③歴史時代の遺構と遺物…………… 59	
(2) Bトレンチの調査…………… 60	
①祭祀土坑…………… 60	
②歴史時代の遺構と遺物…………… 70	
(3) Cトレンチの調査…………… 74	
①住居跡…………… 74	
②土坑…………… 77	



# 巻頭 図版

- 図版1— a 八龍地区221番地大溝全景（北から）  
b 大溝出土初期須恵器  
c 八龍地区出土半島系土器

- 図版2— a 宮ノ下地区Aトレンチ木棺墓出土遺物  
b 井原堺地区2号甕棺墓出土ガラス玉（一部）

## 図版目次

- 図版1— a 八龍地区234番地北区3号住居  
（北西から）

b 4号住居（北から）

- 図版2— a 7・9号住居（南から）  
b 7号住居遺物出土状況  
c 9号住居遺物出土状況

- 図版3— a 2～7号住居（北から）  
b 9～11号住居（南から）

- 図版4— a 八龍地区247番地全景（南から）  
b 石組溝（北から）

- 図版5— a 八龍地区221番地全景（南から）

- 図版6— a 大溝遺構全景（東から）  
b 同上（北側上空から）

- 図版7— a 大溝遺構東壁土層断面  
（I-2トレンチ）

b 大溝遺構東壁土層断面

（IIトレンチ）

c 大溝遺構遺物出土状況

d 同左

- 図版8— a 初期須恵器出土状況  
b 脚付二重口縁壺出土状況  
c 底部穿孔甕出土状況  
d 同左（半裁状況）

e 1・2号土坑（北から）

- 図版9— a 八龍地区235番地全景（西から）  
b 1・2・3号住居（西から）

- 図版10— a 1号住居（東から）  
b 同上 炉跡周辺土器出土状況

c 水晶玉出土地点、高杯出土Pit  
（東から）

d 1号住居床面水晶玉出土状況

- 図版11— a 石組溝検出状況（北から）

b 高杯出土状況（90号柱穴）

c 砥石出土状況（17号柱穴）

d 瓦器椀出土状況（89号柱穴）

- 図版12— a 堺地区253番地全景（北から）

- 図版13— a 宮ノ下地区Aトレンチ全景（西から）

b 北側拡張区全景（東から）

- 図版14— a 4号住居（東から）

b 8号住居（西から）

c 4号住居床面焼土層断面（西から）

d 1号土坑検出状況（北から）

- 図版15— a 木棺墓（東から）

b 同上（南東から）

c 副葬品検出状況（北から）

- 図版16— a 宮ノ下地区Bトレンチから  
細石神社をのぞむ（東から）

b Bトレンチ全景（東から）

- 図版17— a 祭祀土坑  
（中世溝に切られている状況、東から）

b 同上検出後全景（北東から）

- 図版18— a 溝状遺構全景（北から）

b 溝状遺構Aトレンチ土層断面

（東から）

c Bトレンチ南壁土層断面

- 図版19— a 宮ノ下地区Cトレンチ全景（東から）

b 1号住居（南から）

- 図版20— a 1・2号住居（東から）

b 1・2号土坑（東から）

- 図版21— a 井原堺地区（D地点）  
1号甕棺墓検出状況

b 2号甕棺墓検出状況（北から）

c 同上（西から）

- 図版22— a 2号甕棺墓上甕半裁状況（北から）

b 同上（西から）

c 同上 下甕検出状況（北から）

- 図版23－a 3号甕棺墓検出状況（北から）
- b 同上（東から）
- c 4号甕棺墓検出状況（北から）
- 図版24－a 4号甕棺墓検出状況（北東から）
- b 5号甕棺墓検出状況
- c S K 416内甕出土状況（南から）
- 図版25－a S K 416（北から）
- b S K 430土器出土状況（北から）
- c 2号土壙墓（北から）
- 図版26－a 1号祭祀土坑（S K 410）（東から）
- b 2号祭祀土坑（S K 436）（北から）
- c 同上（拡大）
- 図版27－a 八龍地区234番地北区住居出土遺物
- 図版28－a 八龍地区234番地住居出土遺物
- b 八龍地区221番地 大溝出土遺物①
- 図版29－a 大溝出土遺物②
- 図版30－a 大溝出土遺物③
- 図版31－a 八龍地区221番地1号土坑出土遺物
- 図版32－a 八龍地区221番地2号土坑出土遺物
- 図版33－a 八龍地区235番地住居出土遺物
- 図版34－a その他の遺構出土遺物
- b 宮の下地区Aトレンチ  
住居出土遺物①
- 図版35－a 住居出土遺物②
- b 1号土坑出土遺物①
- 図版36－a 1号土坑出土遺物②
- b 木棺墓出土白磁椀
- c Bトレンチ祭祀土坑出土遺物①
- 図版37－a 祭祀土坑出土遺物②
- 図版38－a 祭祀土坑出土遺物③
- b 1・2号溝出土遺物①
- 図版39－a 1・2号溝出土遺物②
- b Cトレンチ住居出土遺物
- 図版40－a 1号土坑出土遺物
- b 井原塚地区（D地点）1号甕棺
- c 3号甕棺
- 図版41－a 2号甕棺
- b 4号甕棺
- c 5号甕棺（上）・6号甕棺（下）
- 図版42－a 祭祀土坑・包含層出土遺物
- 図版43－a 出土石器
- 図版44－a 鉄器・玉類

# 挿 図 目 次

第1図	三雲・井原遺跡周辺遺跡分布図 (1/7,500) …… 3	第28図	宮ノ下地区遺構配置図 (1/400) ……45
第2図	三雲・井原遺跡南東部調査地点位置図 (1/2,000) …… 5	第29図	宮ノ下地区Aトレンチ遺構配置図 (1/120) ……46
第3図	八龍234番地北区遺構配置図 (1/80) …………… 6	第30図	1・3号住居跡実測図 (1/40) …… 48
第4図	住居跡出土土器実測図 (1/4) …… 8	第31図	4・5号住居跡実測図 (1/40) …… 50
第5図	住居跡出土半島系土器実測図 (1/3) ……9	第32図	3・4・6号住居跡出土土器実測図 (1/4) …… 51
第6図	八龍234番地南区遺構配置図 (1/60) …………… 10	第33図	7・8号住居跡実測図 (1/30) …… 54
第7図	八龍221番地遺構配置図 (弥生・古墳時代) (1/200) …… 12	第34図	7・8・9号住居跡出土土器実測図 (1/4) …… 55
第8図	大溝土層断面図 (1/60) …… 13	第35図	土坑実測図 (1/30) …… 57
第9図	I-2区土器出土状況実測図 (1/40) …………… 14	第36図	土坑出土土器実測図 (1/4) …… 58
第10図	IIトレンチ土器出土状況実測図 (1/30) …………… 15	第37図	木棺墓実測図 (1/30) …… 59
第11図	大溝出土土器実測図① (1/4) …… 17	第38図	木棺墓出土遺物実測図 (1/4、1/3) ……60
第12図	大溝出土土器実測図② (1/4) …… 18	第39図	宮ノ下地区Bトレンチ遺構配置図 (1/180) ……61
第13図	大溝出土土器実測図③ (1/4) …… 19	第40図	宮ノ下地区Bトレンチ南壁土層断面図 (1/120) ……62
第14図	大溝出土土器実測図④ (1/4) …… 20	第41図	祭祀土坑土器出土状況実測図 及び土層断面図 (1/30) …… 63
第15図	大溝出土土器実測図⑤ (1/4) …… 21	第42図	祭祀土坑出土土器実測図① (1/4) …… 65
第16図	大溝出土土器実測図⑥ (1/6、1/4) …… 22	第43図	祭祀土坑出土土器実測図② (1/4) …… 66
第17図	大溝出土半島系遺物実測図 (1/3) …… 23	第44図	祭祀土坑出土土器実測図③ (1/4) …… 67
第18図	八龍221番地遺構配置図 (歴史時代) (1/160) ……30	第45図	1・2号溝遺構平面図、 及び土層断面図 (1/60) …… 72
第19図	1号土坑出土土器実測図 (1/4) …… 31	第46図	1・2号溝遺構出土土器実測図 (1/3) …………… 73
第20図	2号土坑出土土器実測図 (1/4) …… 32	第47図	宮ノ下地区Cトレンチ遺構配置図、 及び土層断面図 (1/150、1/120) ……75
第21図	八龍235番地遺構配置図 (1/120) ……35	第48図	1・2号住居跡実測図 (1/40) …… 76
第22図	1・2・3号住居跡実測図 (1/60) ……36	第49図	1号住居出土土器実測図 (1/4) …… 78
第23図	1・2・3号住居出土土器実測図 (1/4) …………… 38	第50図	1・2号土坑実測図 (1/30) …… 79
第24図	その他の遺構出土遺物実測図 (1/4) …… 39	第51図	1・2号土坑出土土器実測図 (1/4) …… 80
第25図	堺253番地遺構配置図 (1/120) ……41	第52図	井原堺地区遺構配置図 (1/200) ……82
第26図	西壁土層断面図 (1/120) …… 42	第53図	1号甕棺実測図 (1/12) …… 83
第27図	堺256番地遺構配置図 (1/150) ……43	第54図	2号甕棺実測図 (1/8) …… 85
		第55図	2号甕棺墓出土ガラス玉実測図① (1/2) …………… 88

第56図	2号甕棺墓出土ガラス玉実測図② (1/2)	89
第57図	3・4号甕棺実測図 (1/12)	90
第58図	5・6号甕棺実測図 (1/6)	91
第59図	祭祀土坑出土土器実測図 (1/4)	93
第60図	歴史時代の出土土器実測図 (1/3)	94
第61図	包含層出土遺物実測図 (1/4、1/3)	95
第62図	出土石器実測図 (1/4、1/2、2/3)	98
第63図	出土鉄器・玉類実測図 (1/3、1/2、2/3)	100
第64図	No.3表側緑色部分 蛍光X線の分析結果	104
第65図	No.6 表側白色部分 蛍光X線の分析結果	104
第66図	三雲・井原遺跡南東部概念図 (1/5,000)	106
第67図	大溝土層断面図 (1/60)	107

## 付 図

三雲・井原遺跡南東部調査地点	(1/1,000)
----------------	-----------

## 表 目 次

第1表	八龍地区234番地北区出土土器観察表	7
第2表	井原堺地区 (D地点) 2号甕棺出土ガラス玉計測表①	86
第3表	井原堺地区 (D地点) 2号甕棺出土ガラス玉計測表②	87

# I. はじめに

## 1. 調査にいたる経過

三雲・井原遺跡は中国の歴史書「魏志倭人伝」に記載された「伊都国」の中心集落として知られており、これまでの調査から三雲南小路遺跡、井原鎚溝遺跡を含むその集落範囲が確認されている。

三雲・井原遺跡の調査は、昭和49年から開始されたほ場整備に伴って始められ、その後昭和62年まで13年間継続して行なわれた。調査は掘削される地域は全掘し、大部分の地域は一部トレンチ調査による遺構確認をおこない盛土による遺跡の保全をはかっている。これらの調査により少ない面積にもかかわらず数多くの大陸系遺物や重要遺物とともに、集落域、墓域、環濠と推定される大溝などが検出し、遺跡の範囲・内容を確認できる情報が得られている。しかしその大半がトレンチ調査であるため、調査面積に制約があり具体的な遺跡の範囲や集落像にまでは迫れていない現状である。

市教育委員会では当遺跡の史跡指定にむけて、より具体的な集落域の確定、遺構の詳細な情報を得るため、平成6年度から国県補助を受けて継続して調査を行なっている。また、翌平成7年度には三雲遺跡等調査指導委員会を発足し調査方針と体制の充実をはかっている。

本報告の調査は、南東部大溝の延長方向の調査による遺跡の範囲確認という調査方針に基づき、南東部に検出されている大溝の性格をより具体的にし、遺跡の範囲を確定することを目的として調査をおこなった。

調査にあたっては地権者の方々にご協力いただきました。また、平山邦一区長には、地元の住民の方々との調整等にご配慮いただきました。心より感謝申し上げます。

## 2. 調査の組織

平成13年度ならびに平成14年度における発掘調査体制は以下のとおりである。

調査主体 前原市教育委員会

調査指導委員会	委員長	横山浩一
	委員	西谷 正 坪井清足 小西龍三郎 町田 章 橋口達也 柳田康雄
総括	教育長	三嶋利彦（～平成13年6月） 菊竹利嗣（平成13年6月～）
	教育部長	上田勇介
	文化課長	松井 昇（平成13年度） 小池史哲（平成14年度）
	文化課参事	小池史哲（平成13年度）
	文化課課長補佐	中村鉄弥（平成14年度）
	文化財係長	林 覚
庶務	文化振興係長	児玉照代（平成13年度）
	主事	浜地 克
歴史資料館係 調査	主事	福山二葉（平成14年度）
	文化財係主査	岡部裕俊
	囑託	牟田華代子（平成13年度）
	主事	牟田華代子（平成14年度）

## Ⅱ．位置と環境

三雲・井原遺跡は、南側に井原山と雷山を含む背振山系がそびえ、そこに源を発する川原川と瑞梅時川に東西を挟まれた標高30～44mの扇状地上に位置する集落遺跡である。これまでの調査で縄文時代から中世にわたる遺跡が確認されている。その中でも、弥生時代～古墳時代にかけては、『魏志倭人伝』に登場する伊都国の中心地として集落が形成された場所であり、遺跡の密集度も高く重要な遺構、遺物を検出している。

三雲・井原遺跡の調査は、昭和49年に県営ほ場整備に伴いはじまり、これまでに約90ヶ所以上のトレンチ調査が行なわれている。その結果、狭い範囲にも関わらず伊都国の拠点集落としてふさわしい重要な遺物が多く出土している（第1図）。

これらの調査によって、三雲・井原遺跡では弥生時代前期の初めに、すでに集落が営まれていたことが確認されており、その主な遺構は遺跡の北側に集中している。前期の墓域は、井田御子守支石墓、加賀石支石墓とその周辺に甕棺墓が分布しており、住居域は、加賀石支石墓周辺で確認されている。加賀石支石墓では、直径2m以上の上石を使用し、副葬品として柳葉形磨製石鏃6本を所有する等、副葬品を持つ墓がきわめて少ないこの時期の貴重な資料となっている。前期の中頃～後半に入ると、加賀石地区の他に遺跡の中央部にあたる、番上・サキゾノ地区でも住居が確認されているため、いくつかの集落が点在していたと考えられる。

中期に入ってから、住居域はほぼ同じ所に位置し、番上・サキゾノ・仲田地区のトレンチを中心に確認されている。墓域は前期に営まれていた遺跡北側では点在するのみで、南側の八龍地区で甕棺墓群が集中ようになる。また、中期後半には、谷部を隔てて西側に伊都国の王墓と考えられる三雲南小路遺跡が存在している。この中期後半の集落域と墓域は後期に入ってもほぼ同じ様相を示していると考えられる。

また、三雲・井原遺跡の出土遺物の特徴として、大陸・半島系の遺物が多い点があげられる。楽浪土器・三韓土器は主に、番上・サキゾノ等、遺跡中央部の集落域から出土しており、仲田地区からは、中国産の辰砂、中近東からエジプトにかけてが原産のファイアンス玉等他の遺跡ではあまり見られない貴重な遺物が出土している。また、瀬戸内・山陰・畿内系の遺物も多く出土していることから、三雲・井原遺跡では広範囲に交流を行っていたと考えられる等、少しずつではあるが遺跡の様相が明らかになりつつある。

しかし、集落域の具体的な範囲、墓地の変遷、青銅器生産に関わる遺構など、遺跡の全容に関してはトレンチ調査という面積の制限上不明な部分が多く、その解明が今後の調査課題になっている。その、課題のひとつである遺跡の範囲について、これまでの調査成果からその範囲を想定しういくつかの情報が確認されている。

まず、調査と旧地形の状況から遺跡の東西を流れる2河川の氾濫原の範囲がある程度明らかになってきている（第1図アマカケ部分）。この氾濫原についてはトレンチによる確認と、地形変化を考慮して想定しているため、今後調査を行っていない地域に関しては、調査によって地形の確認も行っていかなければならない。

また、集落域を想定する上で重要な遺構として、遺跡の南東部にあたるイフ、石橋、寺口、八龍地区の4ヶ所の調査から、幅約2.5～4m、深さ約50～90cmの大溝が確認されている<sup>①</sup>。この大溝



第1図 三雲・井原遺跡周辺遺跡の範囲および主要遺構と遺物 (1/7,500)

※うすいアミかけ部は氾濫原および谷地形、濃いアミカケは調査地点

は、寺口、八龍地区の調査でそれぞれ2条づつ確認されており、それらが一連のものと推定するならば遺跡の南東部を北東から南西にむけて2重にめぐる可能性が指摘されてきた。また、イフ、石橋地区でも同様の溝の一部が確認されているため、さらに北側に溝が伸びることも推定された。しかしトレンチ調査であるため、溝の一部が確認されたにとどまり、溝の方向やそれぞれの溝の関連を確定できず遺跡の範囲を規定するまでにはいたっていない。

各地区の溝の掘削時期については、確実な遺物が無く明らかでないものの、寺口地区の溝の最下層から弥生時代中期後半の、石橋地区の溝下層には中期中葉遺物が含まれているためそれ以前に掘削された可能性も指摘されている。溝の埋没時期については、イフ地区の溝で周辺に住居を建築に伴い、弥生時代終末～古墳時代初頭にかけての土器が大量に廃棄されて意識的に埋めた状況がみられるため、埋没時期をこの時期に捉えている。寺口、石橋地区も同じ時期の遺物が最上層から出土しているため、同時期に埋没したと想定される<sup>②</sup>。

また、溝の南側より、溝が機能していた時期にあたる弥生時代中期中葉～後期にかけての墓群が、溝の北西部には、前述のとおり、番上・仲田地区を中心に住居群が確認されている。住居地は点在する調査地を結んで、現段階では南北約650m、東西約350mの範囲に形成されていたものと想定される<sup>③</sup>。しかし、すべてトレンチ調査のためその詳細に関しては具体的な情報が得られていない状態である。溝の目的、役割を考えていく上で同時期の遺構を確認していくことは重要である。

市教育委員会では調査指導委員会でも重点事項の一つとして挙げられていた溝の延長方向の調査に焦点を当てて、平成10年度から13年度まで八龍地区で2ヶ所、三雲界地区で4ヶ所、宮ノ下地区で3ヶ所のトレンチを設定した。今回はその成果報告にあたる。

---

(注)

- |   |       |      |         |                 |          |
|---|-------|------|---------|-----------------|----------|
| ① | 小池史哲編 | 1981 | 『三雲遺跡Ⅱ』 | 福岡県文化財調査報告書第62集 | 福岡県教育委員会 |
|   | 小池史哲編 | 1982 | 『三雲遺跡Ⅲ』 | 福岡県文化財調査報告書第63集 | 福岡県教育委員会 |
|   | 小池史哲編 | 1983 | 『三雲遺跡Ⅳ』 | 福岡県文化財調査報告書第64集 | 福岡県教育委員会 |
| ② | 同上    |      |         |                 |          |
| ③ | 小池史哲編 | 1983 | 『三雲遺跡Ⅳ』 | 福岡県文化財調査報告書第64集 | 福岡県教育委員会 |



### Ⅲ. 調査の記録

#### 1. 八龍地区の調査

八龍地区は4ヶ所の調査報告を行なう。八龍地区の調査目的は、福岡県教育委員会が調査し、寺口、八龍地区で検出された大溝の延長を確定し、遺跡の南東部を確定することにある。234番地南区・北区は大溝の発見された寺口から南へ30～40mの所に位置しており、牛舎小屋関連施設建設に伴う昭和56年、57年度の緊急調査である。221番地は平成10年度国県補助を受けて行なわれ、以前調査を行った八龍地区のトレンチを広げ大溝の延長方向を確認する目的で行なわれた調査である。235番地は平成14年度国県補助を受け遺跡の南東部端における遺跡の分布と集落の範囲確定を目的として調査を行なった。以下、各地点の報告を行なう。



第2図 三雲・井原遺跡南東部調査地点位置図 (1/2,000)

※アマカケは本報告地点

## (1) 234番地の調査

### ①北区の調査

前原市大字三雲字八龍234番地にて、畜産業を営む土地所有者からサイロを建設した旨の申出により、前原市農政課と協議し、事前調査を実施することになった。

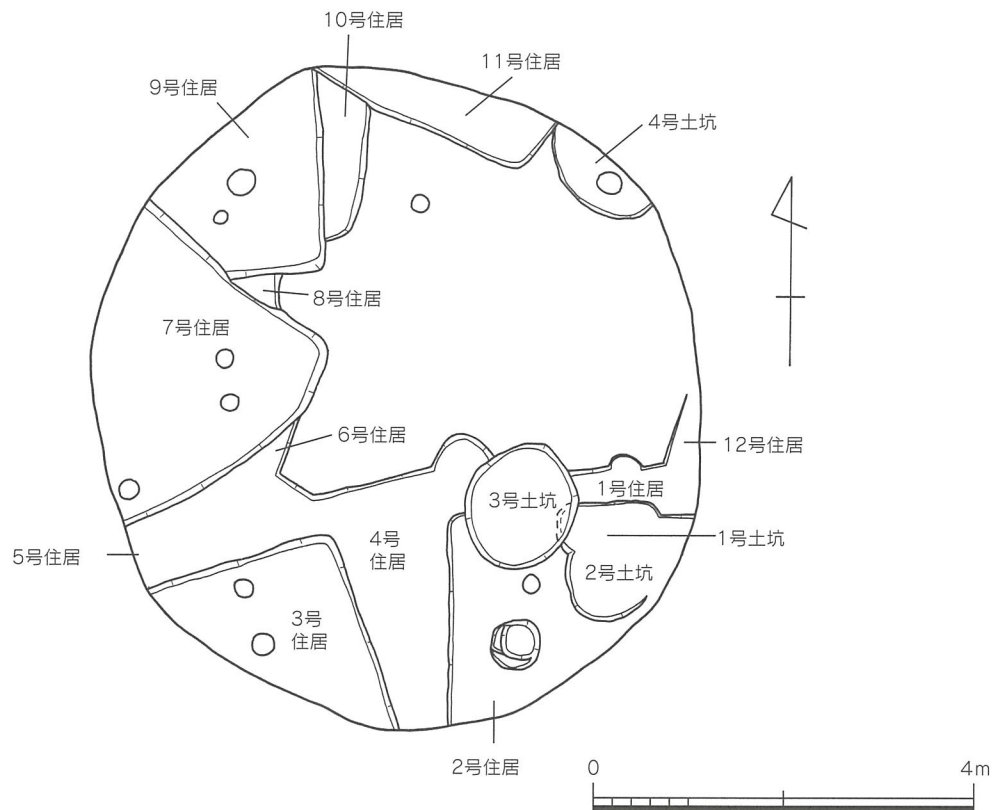
調査区は、農政側の補助事業の関係から最低限度の調査ということで、サイロの平面形状である円形に設定した。遺構は、竪穴式住居跡10軒、土坑4基を確認した。

### 住居跡 (図版1～3、第3図)

1号住居跡は2号土坑に切られ、3・4・12号住居跡と重複し、壁面1辺のみの検出である。2号住居跡は1～3号土坑に切られ、1コーナー、柱穴のみの検出である。3号住居跡は住居跡壁2辺、柱穴のみの検出である。4号住居跡は2号土坑に切られ、5号住居跡と重複し、住居跡の1辺のみの検出である。5・6号住居跡は同様で、7号住居跡に切られている。7号住居跡は8・9号住居跡を切って、床面には3個の柱穴を検出した。9号住居跡は10号住居跡を切っており、11号住居跡に切られて、床面には3個の柱穴を検出した。住居跡のプランはすべて方形である。

### 土坑 (第3図)

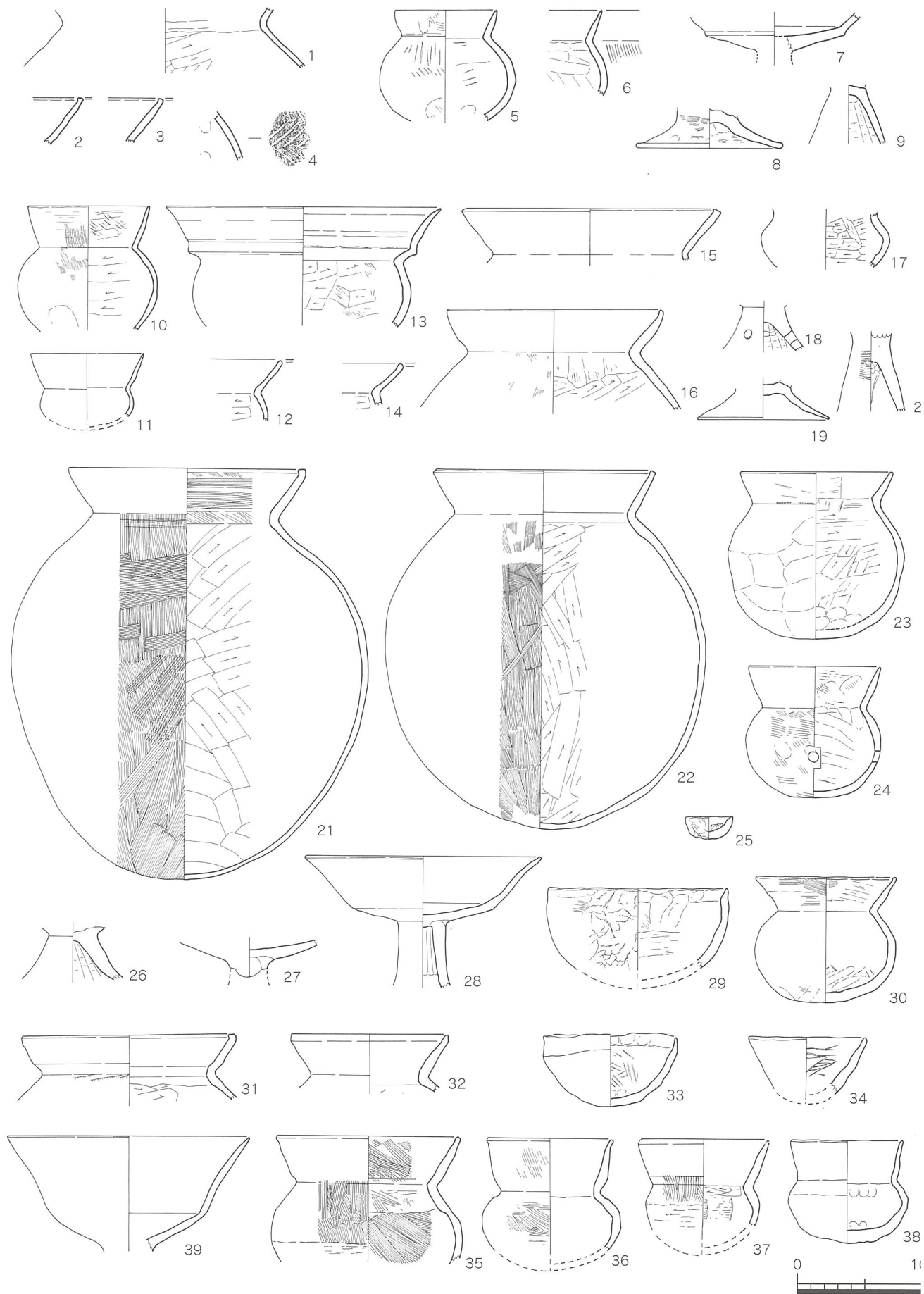
1・2号土坑は、重複し、切り合いは不明で、1号土坑は楕円形プラン、2号土坑は隅丸長方形プランになるものである。3・4号土坑は円形プランである。



第3図 八龍234番地北区遺構配置図 (1/80)

第1表 八龍地区234番地北区出土土器観察表

No.	器形	法 量	出土地点	胎 土	色 調	焼 成
2号住居跡						
1	甕	頸部径 15.3	床面	砂粒含む	淡黄白色	あまい
2	甕		埋土	微砂粒・砂粒含む	灰白色	あまいが精緻
3	甕		埋土	砂粒含む	赤褐色	非常にあまい
4	壺		覆土	石英質粒等を含む	浅黄色	
3号住居跡						
5	埴	口径 7.6	床面	砂粒なく精緻	灰茶色	ややあまいが精微
6	埴		埋土	微砂粒含む	淡黄褐色	非常にあまい
7	高坏		埋土	砂粒わずかに含む	赤褐色	精微で良好
8		脚部径 11.2	床面	砂粒含む	淡褐色	ふつう
9	高坏		埋土	微砂粒・砂粒含むが精緻	淡赤褐色	精緻だがあまい
4号住居跡						
10	埴	口径 9.2	床面	微砂粒・砂粒含むが精緻	褐色	良好
11	埴	口径 8.4	床面	砂粒なく精緻	黄褐色	ややあまいが精緻
12	壺		床面	砂粒なく精緻	明黄褐色	精緻で良好
13	壺	口径 20.8	床面	砂粒・雲母片含む	褐色	良好
14	甕		床面	微砂粒含む	明黄褐色	精緻で良好
15	甕	口径 19.5	床面	微砂粒含む	明黄褐色	あまいが、精緻で良好
16	甕	口径 15.8	床面	微砂粒・雲母片含む	褐色	良好
17	埴	胴部最大径 9.6	床面	微砂粒含む	明黄褐色	精緻で良好
18	高坏		床面	砂粒なく精緻	黄褐色	あまいが、精緻で良好
19			床面	砂粒なく精緻	黄褐色	あまいが、精緻で良好
20	高坏		床面	砂粒なく精緻	茶褐色	あまいが、精緻で良好
7号住居跡						
21	甕	口径 17.6	床面	微砂粒・雲母片含む	明黄褐色	良好で堅い
22	甕	口径 16.7	床面	砂粒なく精緻	黄白色	ややあまい
23	壺	口径 11.4	床北一括	微砂粒・雲母片含む	褐色	良好
24	壺	口径 9.9	床北一括	微砂粒・雲母片含む	褐色	良好
25	手捏	口径3.7	床北一括	微砂粒・砂粒含むが精緻	明褐色	精緻で良好
26	高坏		床北一括	砂粒含む	黄褐色	良好
27	高坏		床北一括	砂粒含む	黄褐色	良好
28	高坏		床北一括	砂粒なく精緻	黄褐色	あまいが、精緻
29	椀	口径 13.3	床北一括	砂粒なく精緻	黄褐色	あまいが、精緻
30	壺	口径 9.8	床北一括	砂粒なく精緻	赤褐色	精緻で良好
9号住居跡						
31	甕	口径 15.9		砂粒・砂粒含むが精緻	淡黄褐色	良好
32	壺	口径 11.8		砂粒・砂粒含むが精緻	淡黄白色	良好
33	椀	口径 10.0	埋土	砂粒・砂粒含むが精緻	赤褐色	良好
34	椀	口径 8.9		砂粒・砂粒含むが精緻	淡黄褐色	良好
35	壺	口径 13.8		砂粒・砂粒含むが精緻	黄褐色	良好
36	埴	口径 9.3		微砂粒・雲母片含む	赤褐色	良好
37	埴	口径 9.1		微砂粒・雲母片含む	赤褐色	良好
38	埴	口径 8.2	埋土	微砂粒・雲母片含む	褐色	良好
39	高坏	口径 18.2	覆土	微砂粒・雲母片含む	褐色	良好



第4图 住居跡出土土器実測图 (1/4)

出土土器 (図版27・28、第4図)

土師器 (図版27、第4図)

住居跡からの出土土器は、2号では甕3個体、3号では埴2個体・高坏2個体・脚部1個体、4号では甕・埴・高坏各2個体・壺4個体・脚部1個体、7号では、甕2個体・壺3個体・高坏3個体・椀1個体・手捏ね土器1個体、9号では、壺1個体・埴5個体・椀2個体を図し、各土器の詳細は第1表のとおりである。

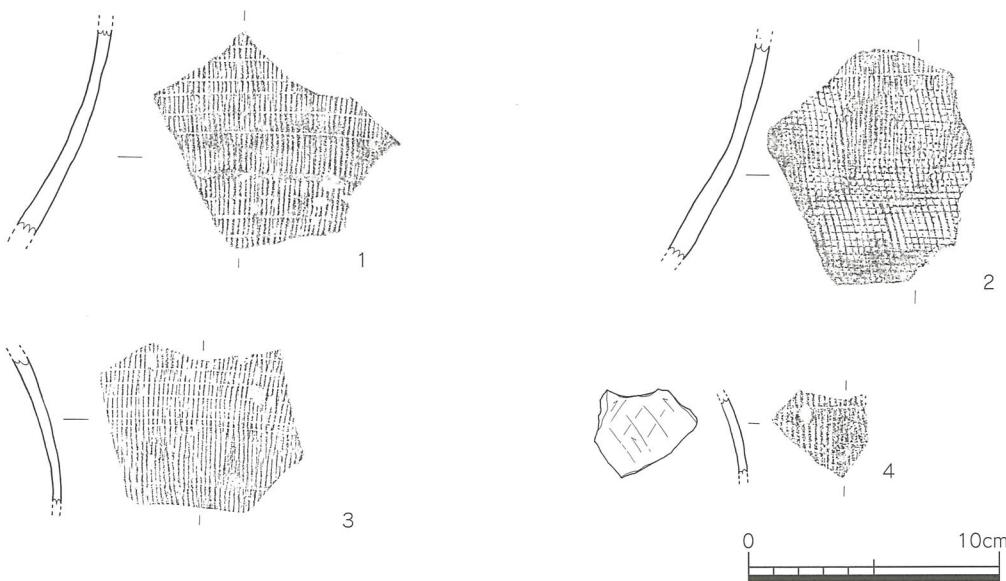
韓式土器 (図版27・28、第5図)

40は、2号住居跡床面出土で、外面は細い沈線文、縄蓆文のくずれの叩き目を上位に、中位には縄蓆文のくずれの叩き目と格子目の叩き目を施し、下位に格子目の叩き目を施している。内面は叩き目あて具の後丁寧にナデている。胎土は石英質砂粒をわずかに含むが精選され非常に良好で、焼成はやや軟質であり、色調は、外面で濁赤茶色、内面で明赤茶色を呈す。41・42は、3号住居跡床面出土で同一個体であろう。41の外面は細い沈線文、縄蓆文のくずれの叩き目を、内面は叩き目あて具の後丁寧にナデている。42の外面は細い沈線文、縄蓆文のくずれの叩き目から格子目の叩き目で、胴部最大径の下位の部位にあたるもので、外面で淡黒赤茶色、内面で濁赤茶色を呈す。現破片では、胎土には石英質砂粒は認められない。43は、7号住居跡床面出土で、外面は細い沈線文、縄蓆文のくずれの叩き目をもち、内面はヘラ削りである。内面は灰白色で、外面は黒赤茶色で、韓式土器もどきである。

石器 (図版43、第62図)

1は9号又は10号住居跡の埋土出土で、石鏃先である。図化していないが、1・2号土坑の埋土出土で、黒曜石製石鏃先と考えられる遺物も出土している。

今回の調査では、狭い調査区であり、また、短期の調査になかで、検出した遺構のほかに、韓式土器が住居跡の床面から出土し、2号住居跡覆土に弥生前期の壺片が出土したことは下部の遺構等の存在を推定できるものであり、特記できる。 (川村)



第5図 住居跡出土半島系土器実測図 (1/3)

## ②南区の調査

前項と同様に、前原市大字三雲字八龍234番地において、畜産業を営む土地所有者から畜産関係施設を建設する旨の申し出により、前原市農政課と協議し、事前調査を実施することになった。

農政側の補助事業の関係から、最低限度の調査ということで、調査区の設定を行った。

遺構は、竪穴式住居跡3軒、土坑1基、石組の溝2条などを確認した。

### 住居跡（図版4、第6図）

1号住居跡は、調査区の南東部で検出、東西石組溝に切られた方形プラン住居跡でベッド状遺構をもつ。ベッド部の壁面には周溝をもつが、他の壁面には周溝は検出できていない。2号住居跡は、調査区の北西部で検出し、ベッド状遺構をもつ方形プランを呈する。南北石組溝に切られていたが、3号住居跡との前後関係は不明である。3号住居跡は、2号住居跡の北側で検出し、壁面1辺のみを調査した。

### 土坑（第6図）

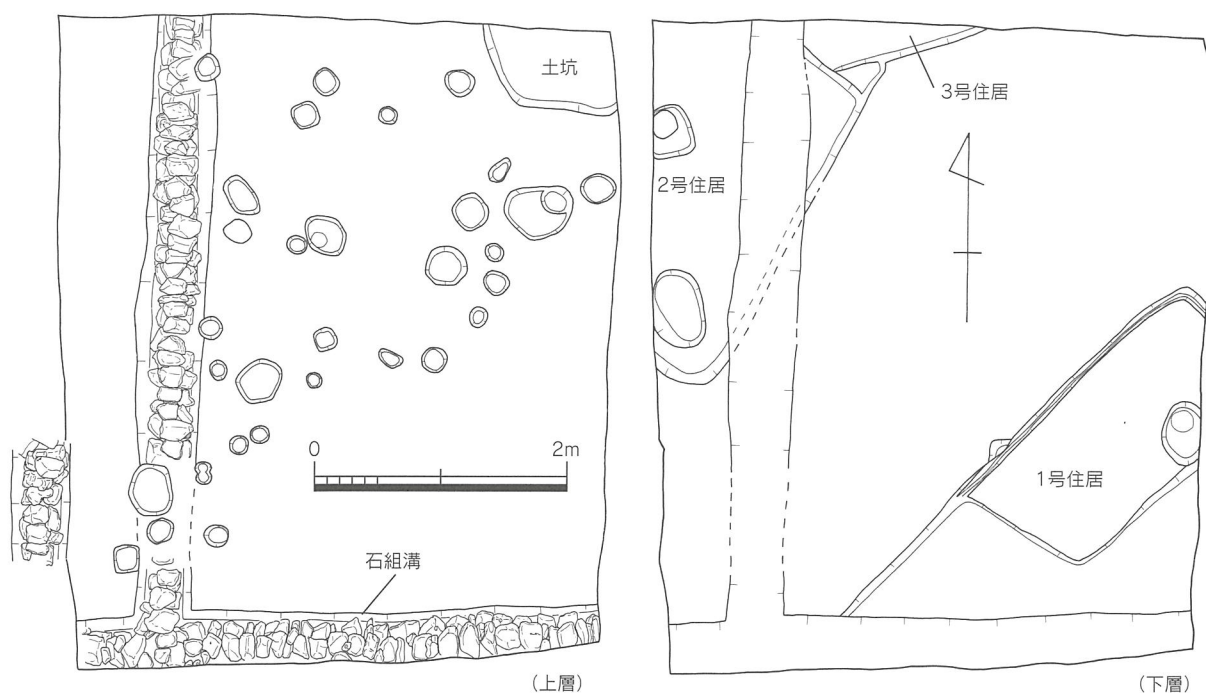
土坑は、不整形プランを呈する。

### 石組溝（第6図）

東西石組溝は、調査区の南側で検出、長さ約4.15mを調査できた。南北石組溝は、溝の掘り方の幅が平均して約0.5mで、長さ約4.70mを調査した。石質は花崗岩質・砂岩質で、約15～35cmの大きさのものを使用している。溝の側面では石塊の平坦部を内面に使用し、溝の蓋部にも石塊の平坦部をうまく使い、施工していた。溝内面の底部の土質は砂質混じり粘質土であり、水が絶えず流れていた状況ではなかったようである。

### 柱穴（第6図）

石組溝を検出した時点で、ある程度、大き目の掘り方を有し、柱の抜き跡の痕跡をもつ柱穴を検出したため、建物跡・柵列の検出に努めたが、まとまりのあるものにできなかった。（川村）



第6図 八龍234番地南区遺構配置図（1/60）

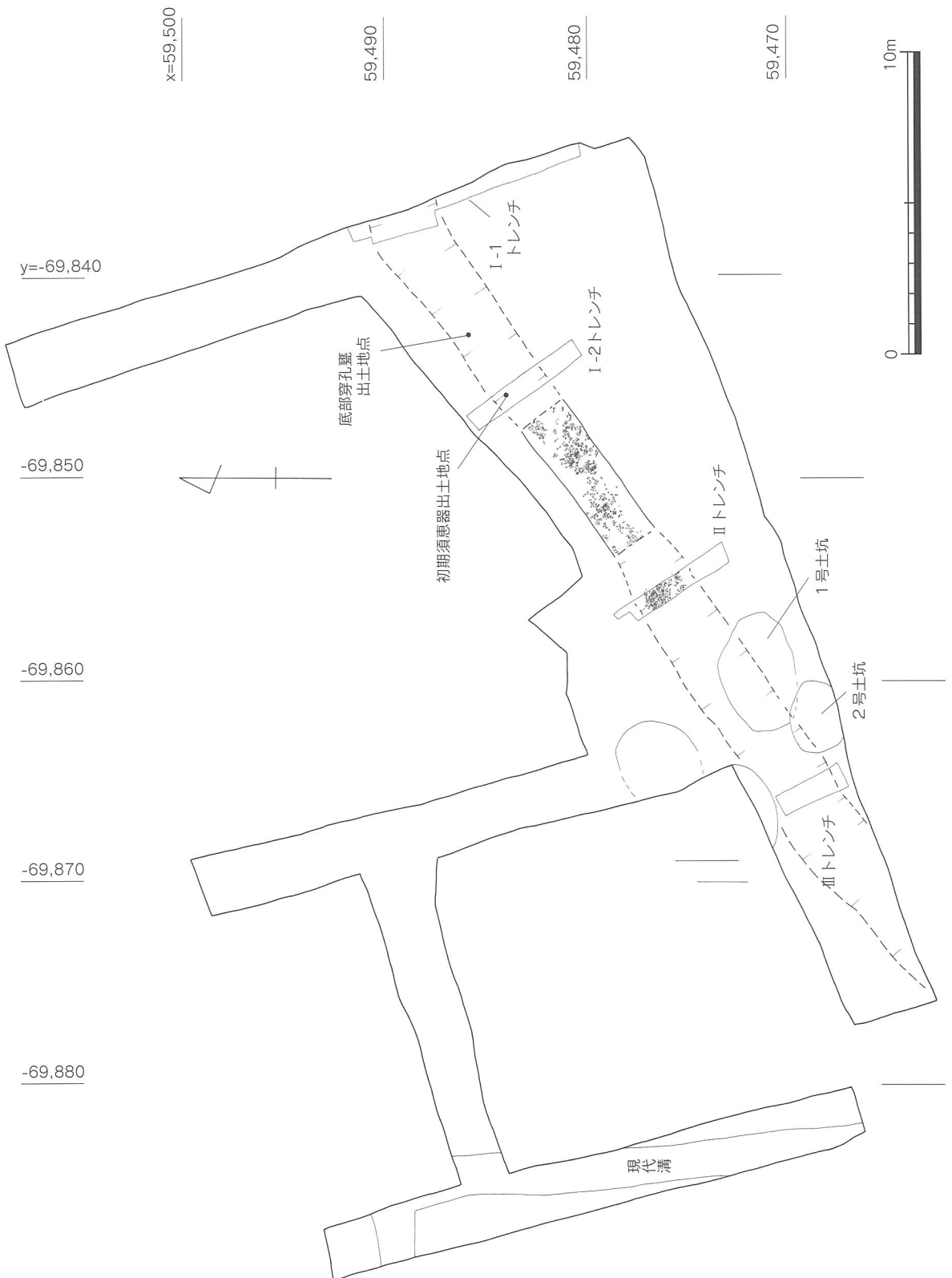
## (2) 八龍221番地

福岡県教育委員会により実施された寺口Ⅱ-17地区の調査で、2本の大溝が検出されている。この大溝は八龍Ⅰ-3・11地区で検出された2本の大溝に続くものと考えられていた。八龍221番地は八龍Ⅰ-3・11地区の西に隣接する水田で、検出された大溝の続きを確認することを目的として発掘調査を行なった。調査地点はもともと3枚の水田であったものを昭和50年代前半の圃場整備により1枚にしたもので、北東部はもとの水田が低かったため、約60cmの盛土がなされていたが、西側から南側にかけては、ほとんど盛土はなかった。地山は黄褐色砂質土で、遺構は上層で中世の土坑、ピット、下層で弥生時代の大溝が検出された。遺構面は南西から北東に向かって傾斜している。西端の一部を除いて古墳時代と思われる包含層が存在しており、この上面が中世の遺構面となっている。調査の目的が大溝の確認であったため、東半部については大溝部分のみ包含層を除去しプランを確認した。その他については下層の遺構は確認していない。また、上層の中世遺構も大溝の範囲にあるものは完掘し、土坑のうち2基とピット数基を掘削しただけで、その他はプランの確認を行なっただけである。なお、発掘調査は平成10年度に実施した。

### ①大溝（図版5～8、第7～10図）

北東-南西方向の大溝で幅2.75～3.45m、深さ83～110cmで、長さ42mを検出した。大溝はほぼまっすぐに掘られており、西端でやや南に曲がり気味で調査区外に伸びている。大溝は調査区の東端が最も残りが良く、西端は残りが悪い。これは調査区周辺の地形が川原川に向かって東に傾斜しており、水田造成の際に西側の高い部分が深く削平されたためと考えられる。大溝には4ヶ所のトレンチを設定し、断面形の確認および土層の観察を行なった。断面はほぼ逆台形を呈するが、Ⅰ・Ⅲトレンチでは底は皿状になる。Ⅰ-2トレンチではしっかりした逆台形に近い断面であった。溝底のレベルは東端のⅠトレンチで標高37.02m、西側のⅢトレンチで標高37.44mで、西から東に向かって緩やかに傾斜している。Ⅱトレンチでは北岸に階段状の平坦面が存在したが、トレンチを拡張していないため全体の形状は不明である。平坦面は溝底から約40cmの高さで、幅は約30cmである。溝内に降りるための段状のテラスであったのかもしれない。溝の埋土は5～6層に分かれ、全体に小礫を含んでおり、下層の2層は砂質土であった。いずれのトレンチでも土層の堆積状況はよく似ており、大溝全体が同じように埋ったものと考えられる。土層の観察では人為的に埋められた痕跡は確認できなかった。埋土中からはほとんど遺物が出土せず、わずかに弥生時代中期末から後期の土器片と思われるものが出土しただけであるが、最上層の暗褐色土層からは大量の土器が出土した。時期は弥生時代中期末から古墳時代前期までのものが含まれるが、ほとんどは弥生終末期から古墳時代前期のものである。この最上層は東端からⅡトレンチまでは存在するが、Ⅲトレンチでは検出されなかった。これは先述のとおり上部が削平を受けたためと考えられる。

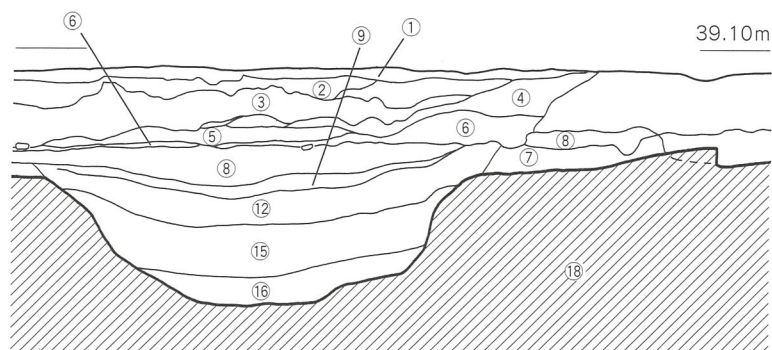
最も東側のⅠトレンチの土層断面では溝の南側に盛土らしきものが確認された。黒褐色土層（7層）としたものがそれである。厚さ約20cm、幅115cmが検出され、上部を古墳時代の包含層である暗茶褐色土層（8層）により削平されていることから、それ以前のものであると考えられる。旧表土である可能性も否定できないが、人工的な盛土である可能性を考えておきたい。もし、人工的なものであるとすれば大溝に伴う土塁状のものがあった可能性が考えられる。



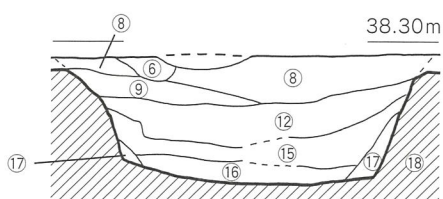
第7図 八龍221番地遺構配置図 (弥生・古墳時代) (1/200)



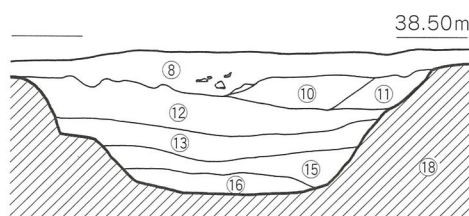
I-1トレンチ(東壁)



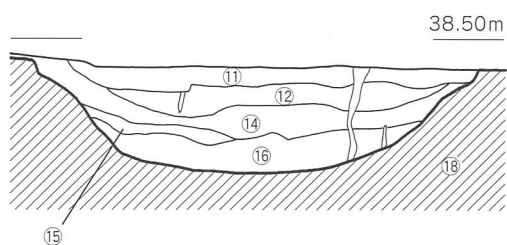
I-2トレンチ(東壁)



IIトレンチ(東壁)



IIIトレンチ(西壁)



- |           |        |             |
|-----------|--------|-------------|
| (土層)      |        |             |
| ①暗黄褐色(床土) | } (盛土) | ⑫暗黄褐色土      |
| ②真砂土      |        | ⑬にぶい黄褐色土    |
| ③明黄灰褐色土   |        | ⑭淡褐色土       |
| ④明灰褐色土    |        | ⑮淡褐色土       |
| ⑤淡黄灰褐色土   |        | ⑯こげ茶砂質土     |
| ⑥明灰褐色土    |        | ⑰黄褐色土       |
| ⑦黒褐色土     |        | (地山がくずれたもの) |
| ⑧暗褐色土     |        | ⑱黄色砂質土(地山)  |
| ⑨明褐色土     |        |             |
| ⑩黄褐色土     |        |             |
| ⑪褐色土      |        |             |



第8図 大溝土層断面図 (1/60)

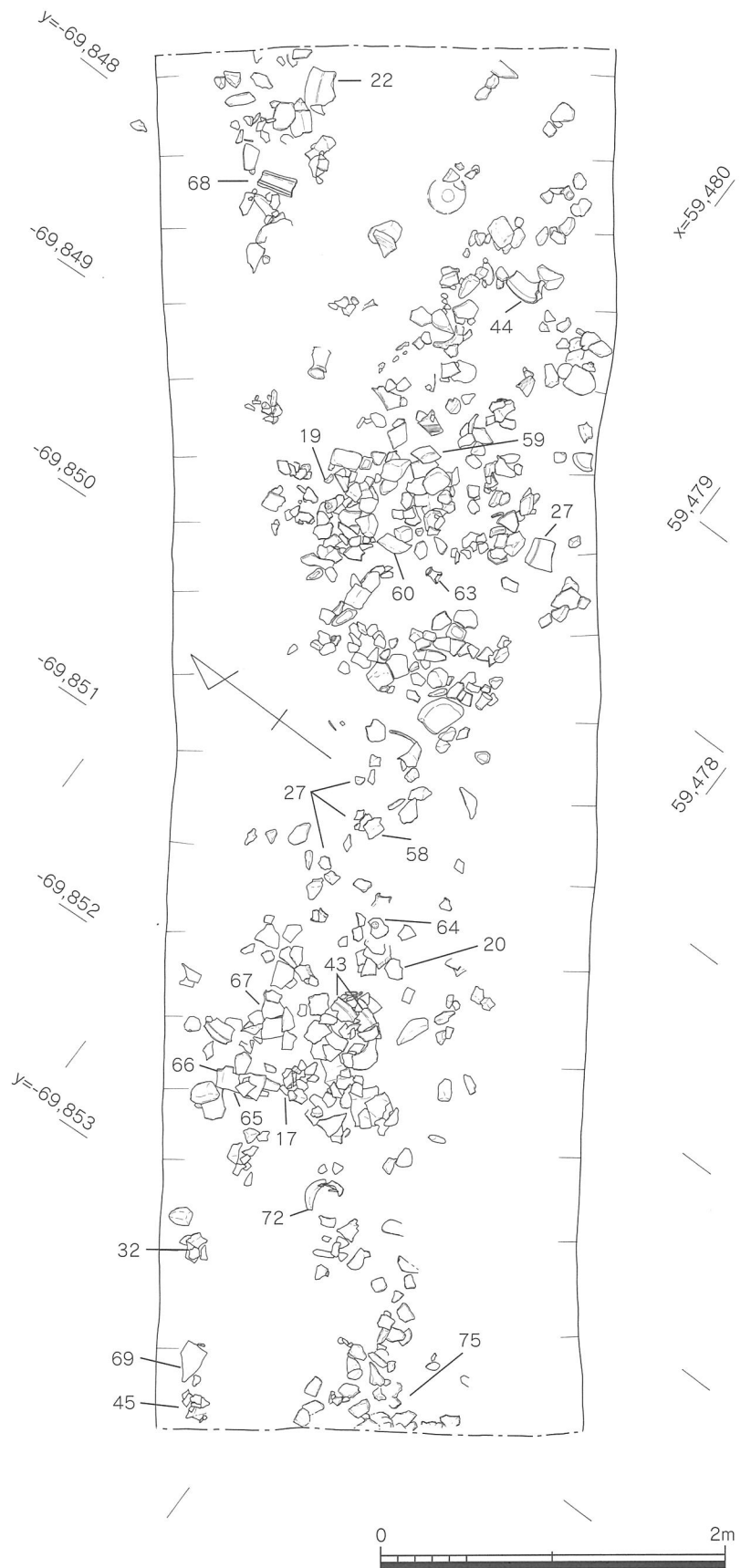
最上層から出土した大量の土器はいずれも破片で、完形で出土したものはほとんどなかった。ほとんどが弥生終末期から古墳時代前期のものである。土器は部分的に密度が違うものの、ほぼ溝の幅全体にわたって検出されている。このことから大溝は古墳時代前期にはほぼ埋まった状態であったことがわかる。最上層はI-2・IIトレンチでは大溝の外側まで広がっていた。土器は摩滅していないことから、他の場所から流されたものではないと考えられる。また、その出土状況からみると、埋納された状況でもなさそうで、祭祀に関連するものとも考えにくい。これらのことから、最上層の土器群は、大溝がほぼ埋って窪地状になったところに廃棄されたものと考えられる。

土器の中には1点だけ人為的に埋納されたと考えられるものがある。大溝の東部で検出された完形の甕がそれである(図版8-c・d)。甕は土坑の中に口縁部をやや下にして横倒しに埋納されていたようで、上部に別の甕が逆さにかぶせられていた。上部の甕は削平により底部が失われているが、肩部から上はもともと打ち欠かれている。土坑は平面ではプランをなんとか確認できたが、断面では不明確で形状を明らかにできなかった。甕の出土状況から考えると土坑状の掘り方があったものと考えられる。この土器の内部の土は持ち帰って水洗したがなにも発見されなかった。また、

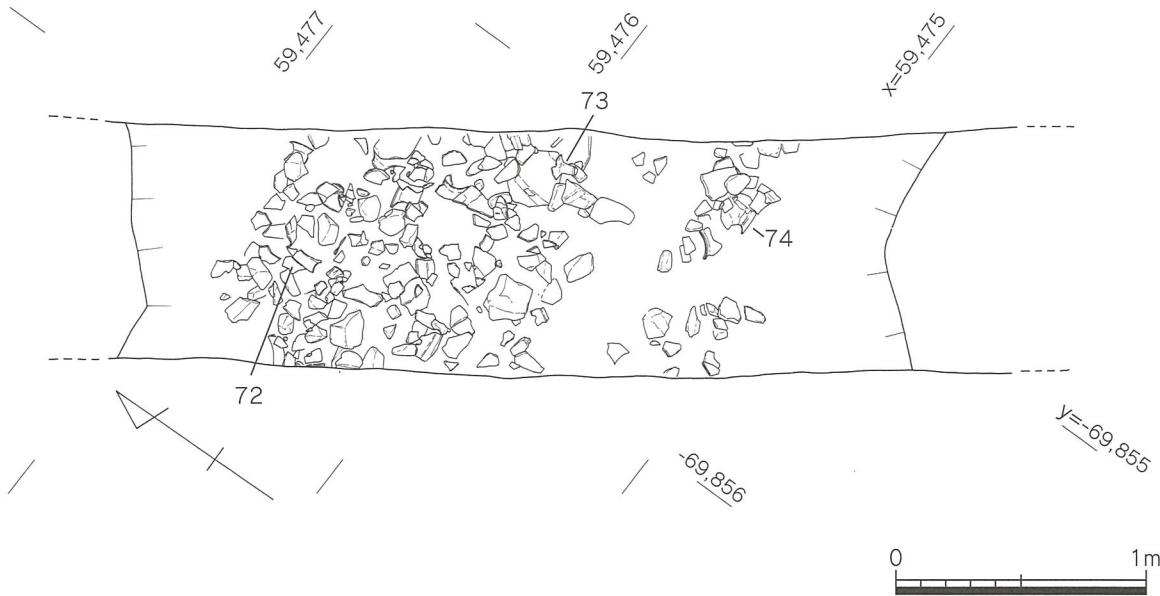
下部の甕には穿孔が施されていた。このような状況で遺構の性格は明らかにできないが、祭祀行為に伴う埋納である可能性を考えたい。

I-2トレンチで大溝の北岸付近から高坏を1点検出した。坏部が半分ほど欠損していたが、その他には欠損はなかった。欠損部を下にして横倒しの状態で検出されたが、その直下で重なり合うような状態で土師器の甕の破片が検出された。トレンチ掘削中に検出したため、何らかの遺構に伴うものかどうかは確認できなかった。出土した層位は大溝の最上層にあたるが、重なって出土した甕の口縁部片は、最上層から出土する土師器よりは新しく、時期的には下るものである。よって、高坏もこの口縁部片と同時期のものと考えられる。

寺口II-17地区では大溝の周辺から古墳時代の住居等が検出されているが、そのうち1・2号住居は前述の埋納された甕と同時期である。また、6号住居からは陶質土器の壺などが出土しており、時期も共伴した土師器から、I-2トレンチで出土した高坏と同時期と考えられる。このことから埋納された甕や高坏は大溝埋没後に建てられた住居址等の遺構に伴う可能性が考えられる。



第9図 I-2区土器出土状況実測図 (1/40)



第10図 II トレンチ土器出土状況実測図 (1/30)

八龍地区でも大溝の周辺には古墳時代の遺構の存在が予想されるが、今回は下層遺構の確認をしていないため将来の課題となるであろう。

今回検出された大溝はその位置から八龍Ⅰ-3・11地区で確認された2条の大溝のうち、北側の大溝Ⅰの続きである。これは、北東に伸びて寺口Ⅱ-17地区の中央で検出された大溝につながる可能性が高いと考えられるが、西側が不明である。そこで、調査区の西側の堺247の1番地で承諾を得られたため、長さ50mの南北方向のトレンチを設定し、遺構を確認した。トレンチの位置は検出した大溝の西端から約60mの距離にある。ここでは全面に砂利層が検出され、土師器や陶磁器片が出土したが、大溝は検出されなかった。

大溝Ⅱについては、位置的に今回の調査区の東南隅をかすめる可能性があったため、調査区の東端に沿って南北方向にトレンチを設定し、下層の遺構確認を行なったが、残念ながら検出できなかった。調査区内において検出した大溝の南側については、下層遺構の確認を行っていないので確証は無いが、北側に曲がる可能性は低いと考えられる。おそらく南側の畑の北東端から南西方向に今回検出された大溝とほぼ並行して延びているものと推定されるが、その確認についてはその後の課題となった。

そこで平成11年度に調査区の南側の堺248・249番地および平成12年度に堺253番地についても、発掘調査を行ったが、大溝は検出されなかった。堺248・249番地では調査区の北西隅が落ち込んでおり、西側の堺253番地でも北側が落ち込んでいた。また、平成10年度に調査した三雲堺地区247番地でも大溝は検出されておらず、調査区の南端が落ち込んでいた。このことからこの周辺の旧地形は谷状に落ち込んでいたものと考えられる。

このように、2条の大溝は221番地以西では、検出されていない。また、平成13年度に行った西側の宮ノ下地区の調査でも検出されていない事から、南側へ曲がっている可能性等も考えなければならぬだろう。(角)

**出土土器** (図版28~30、第11~17図)

**下層出土土器** (第11図1~3)

**甕** (1~3)

1は、口径22.8cmで、後円部下に低い断面三角形の突帯をもつ。外面調整はナデ、内面調整は指押さえとナデで、口縁部はヨコナデ。胎土は1~4mm大の石英、長石、金雲母、黒色粒を含み、焼成は良好、色調外面橙色、内面灰黄褐色である。2は口径23cmのやや内傾するT字口縁をもつ。調整は内外面ともにナデ、口縁部はヨコナデ。胎土は1~5mmの石英、長石、金雲母を含み、焼成は良好、色調は橙色である。3は、甕の底部で、底径6.4cm、外面調整は粗いタテハケ、内面はナデ調整。1~3cm大の石英、長石を多量に含み、焼成良好、色調は黄橙色。底面全体に黒斑あり。

**中層出土土器** (第11図4~8)

**甕** (4~8)

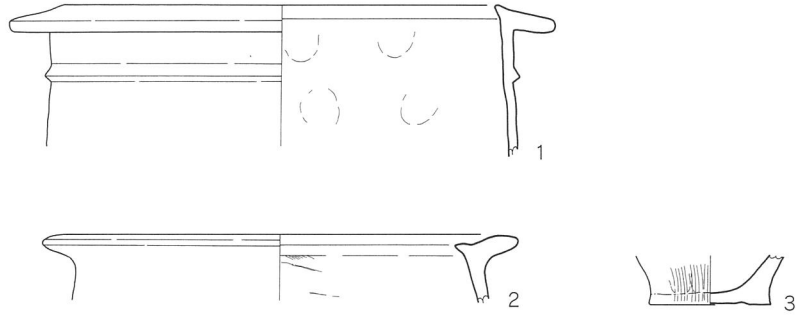
4はやや内傾するT字口縁で頸部に低い三角突帯が巡る。口縁径23.4cm。口縁下にヘラによる工具痕が残る。内面調整はナデ、口縁部はヨコナデ。5は口径22.8cm、外面調整はタテハケ目、内面調整指押さえとナデ調整。胎土は1~2mmの石英、長石を含み、焼成は良好、色調は灰黄褐色。6は口径20.8cm、外面調整は風化により不明、内面調整は指押さえの後板状工具によるヨコナデ。外面には赤色顔料が塗布してあった可能性あり。胎土は1~3mmの長石、石英を含み、焼成は良好、色調は内外面ともに橙色。7は薄手のつくりで、口径21.6cm。外面調整はタテハケ、内面は指押さえ後ヨコナデ。胎土は1~2mm大の石英、長石を含み、焼成は良好、色調は内外ともに橙色。8は口径24.2cmで、口縁下は板状工具によるヨコナデが観察できる。調整は内外面ともにナデ。胎土は1~2mm大の長石、石英を多く含む。焼成は良好、色調は橙色。

**上層出土土器** (図版28~30、第11~17図)

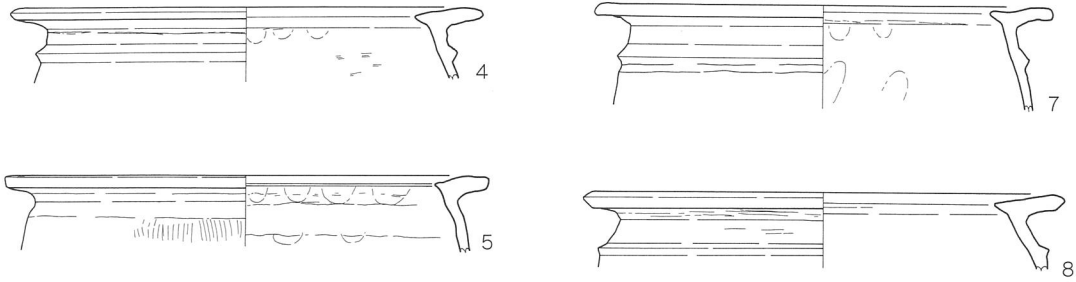
**甕** (11・12・17~25・28~31・36~40・48~52・66~69)

11は口縁部が内傾する口径35.8cmの大型の甕である。外面調整は風化により不明、内面調整はナデ、口縁部ヨコナデ。胎土は1~2mm大の長石、石英を含み、焼成良好、色調淡黄白色。12は口径20.2cm、調整は内外面ともナデ、胎土は1~2mmの長石、石英を含み、焼成良好、色調は赤褐色。17は頸部に低い突帯を持ち、口縁が立ち上がる。口径は23.5cmで、やや歪みがある。調整は外面が肩~胴部は左回りの叩き調整を行い、下半部は板状工具によるかき上げ、口縁部は指ナデの後粗い斜めのハケで最後はナデ消している。内面調整は細かい底部から口縁部方向のハケ目を施す。胎土は1~4mm大の石英、長石、微粒の金雲母、角閃石を含む。焼成は良好、色調はにぶい橙色。18はやや下膨れを呈し、口径21cmをはかる。外面調整の口縁部は指押さえの後斜め方向のハケ目を施し、頸部から胴部にかけては乱雑な斜め方向のハケ、下半部は細い板状工具での底部方向からのナデツケを行なっている。内面頸部は指押さえで、その他の箇所は横方向の細かいハケ調整である。胎土は1~7mm大の石英、長石粒を多く含み、微粒の金雲母もわずかに含む。焼成は良好、色調はにぶい黄橙色。上半部に黒斑あり。19は器壁が厚く口縁が直立に近く立ち上がり、胴部最大径は下半部にある。口径は25.4cmで、口縁端部は8mmほどの平坦部を持つ。外面調整の口縁部~肩部は縦方向の粗いハケ、胴中部は斜め方向の粗いハケ、下半部はヘラ状工具による縦方向のミガキ風の調整を行なっている。内面の口縁部は横方向のハケ目で、頸部から下は斜め方向の粗いハケ調整の後ナデ消している。胎土は1~2mm大の長石、石英を含み、微粒の黒雲母、金雲母を含む。焼

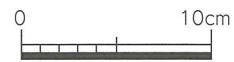
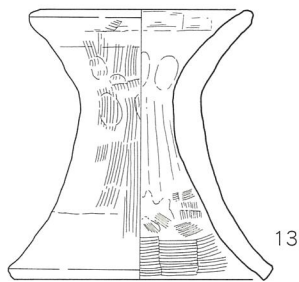
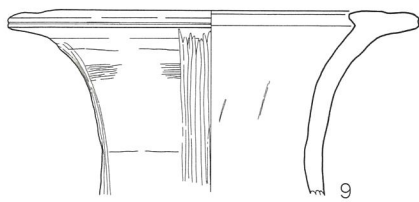
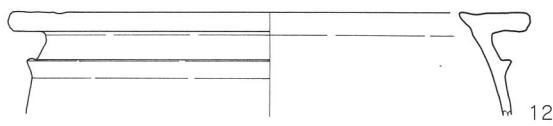
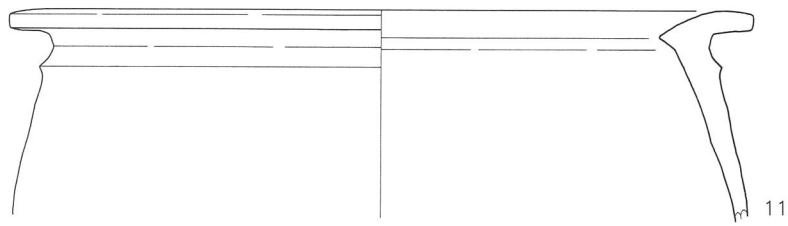
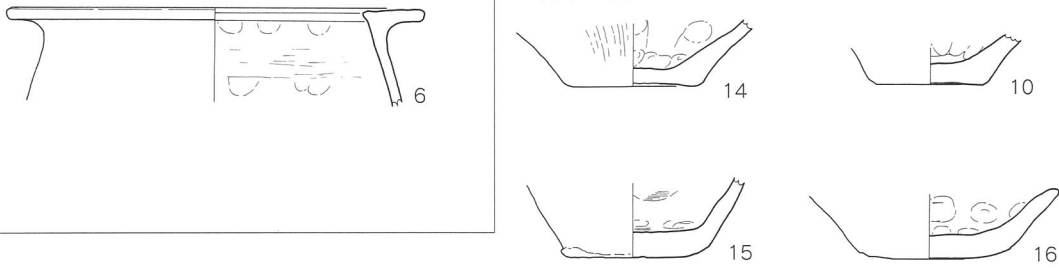
下層出土土器



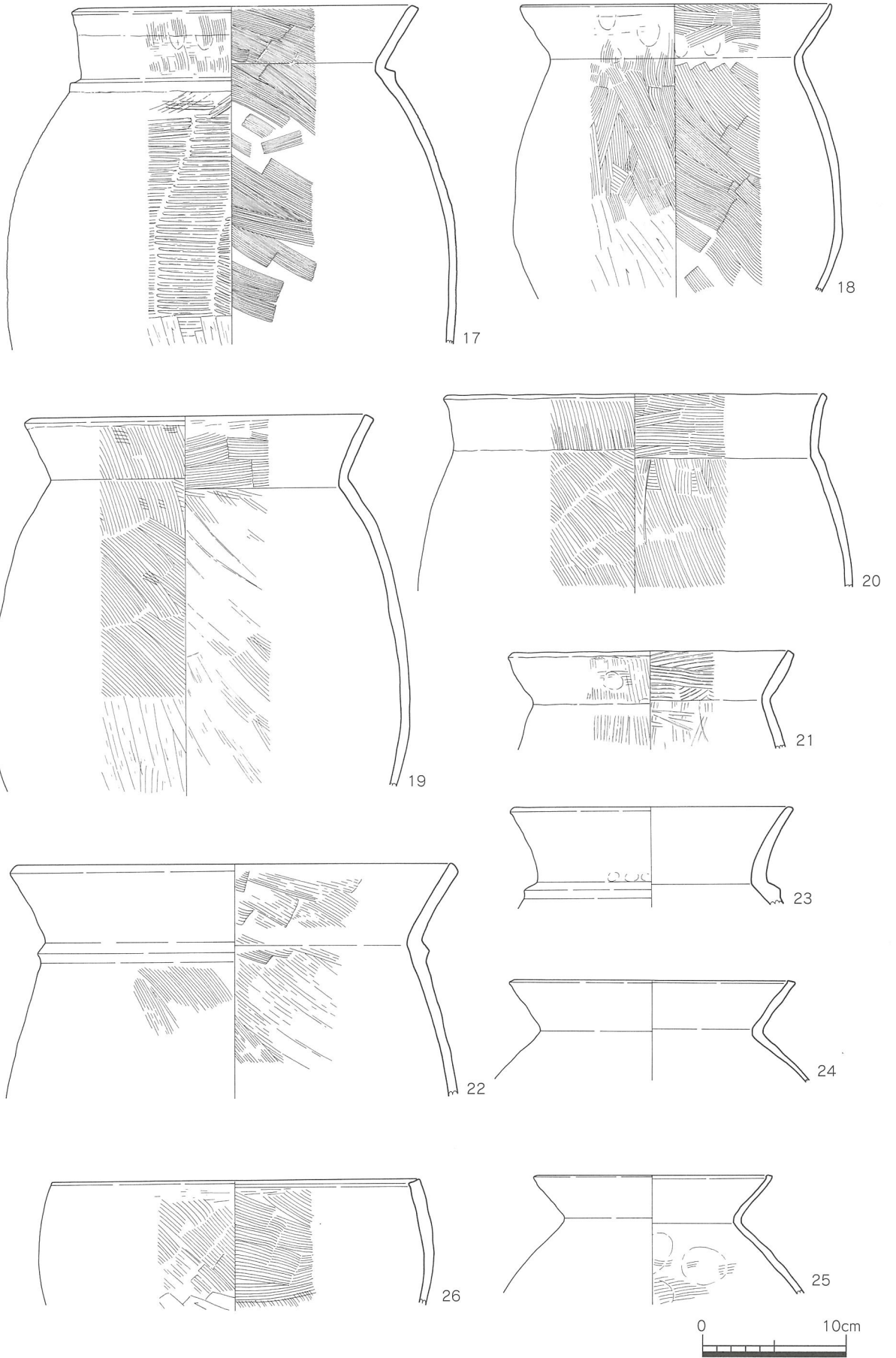
中層出土土器



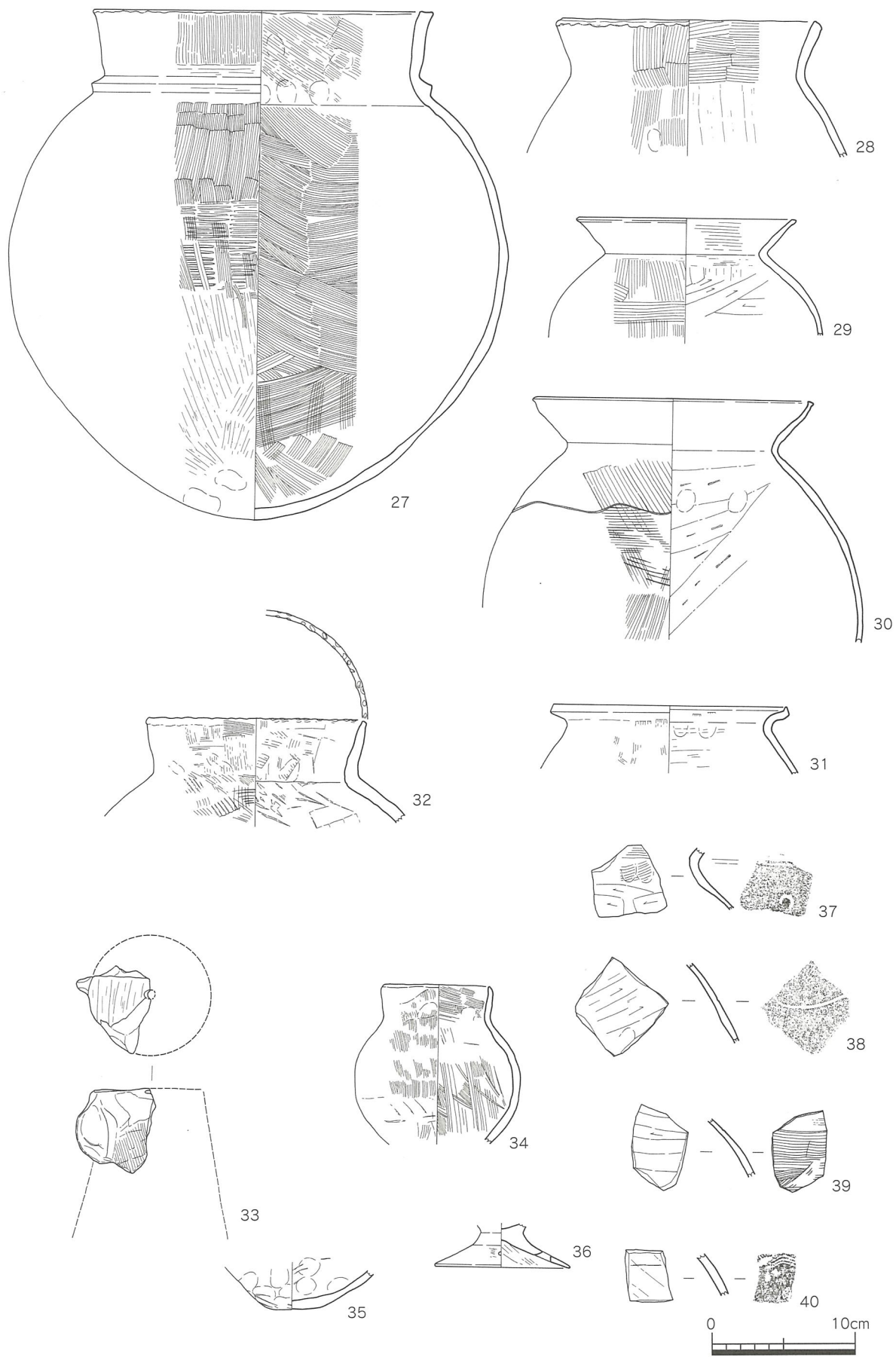
上層出土土器



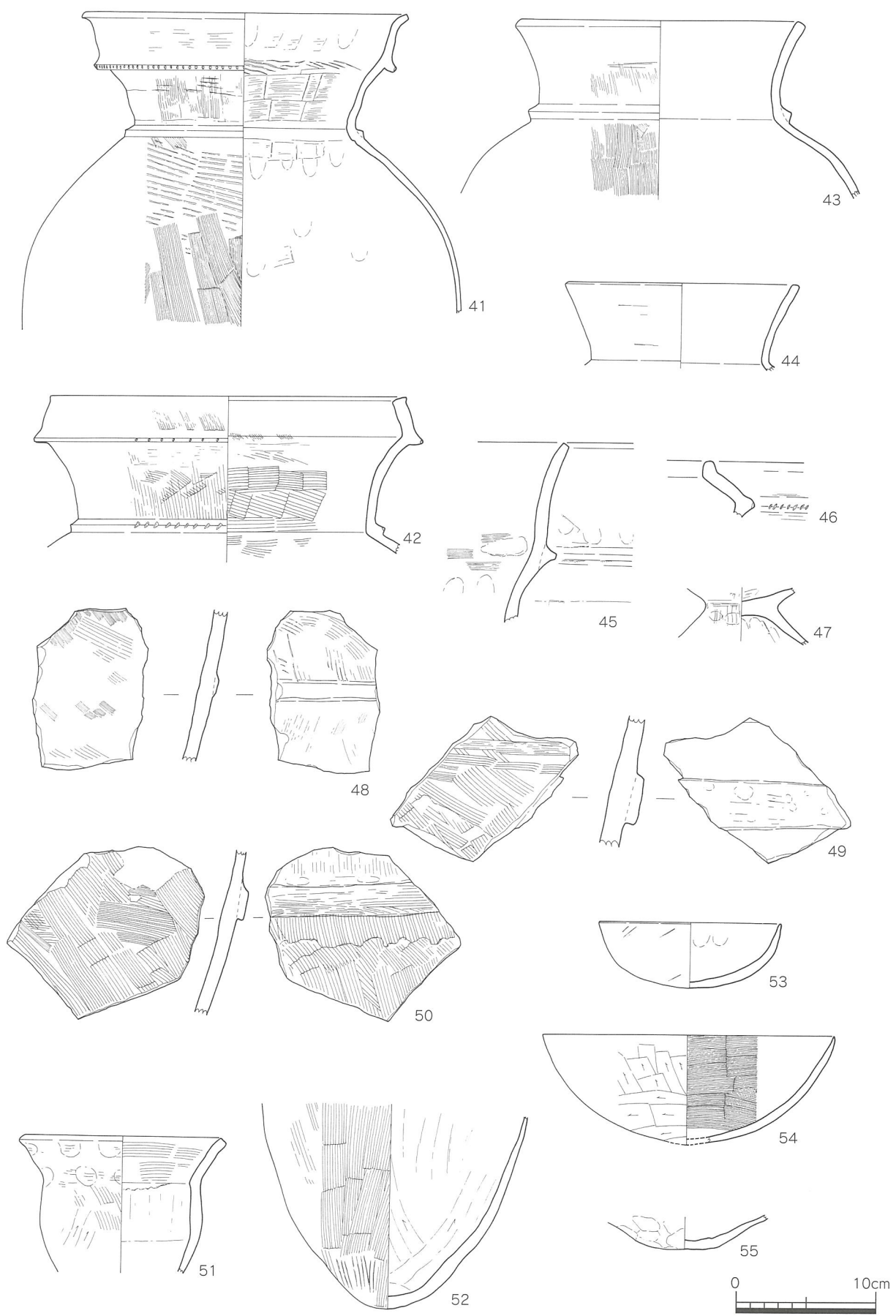
第11図 大溝出土土器実測図① (1/4)



第12図 大溝出土土器実測図② (1/4)

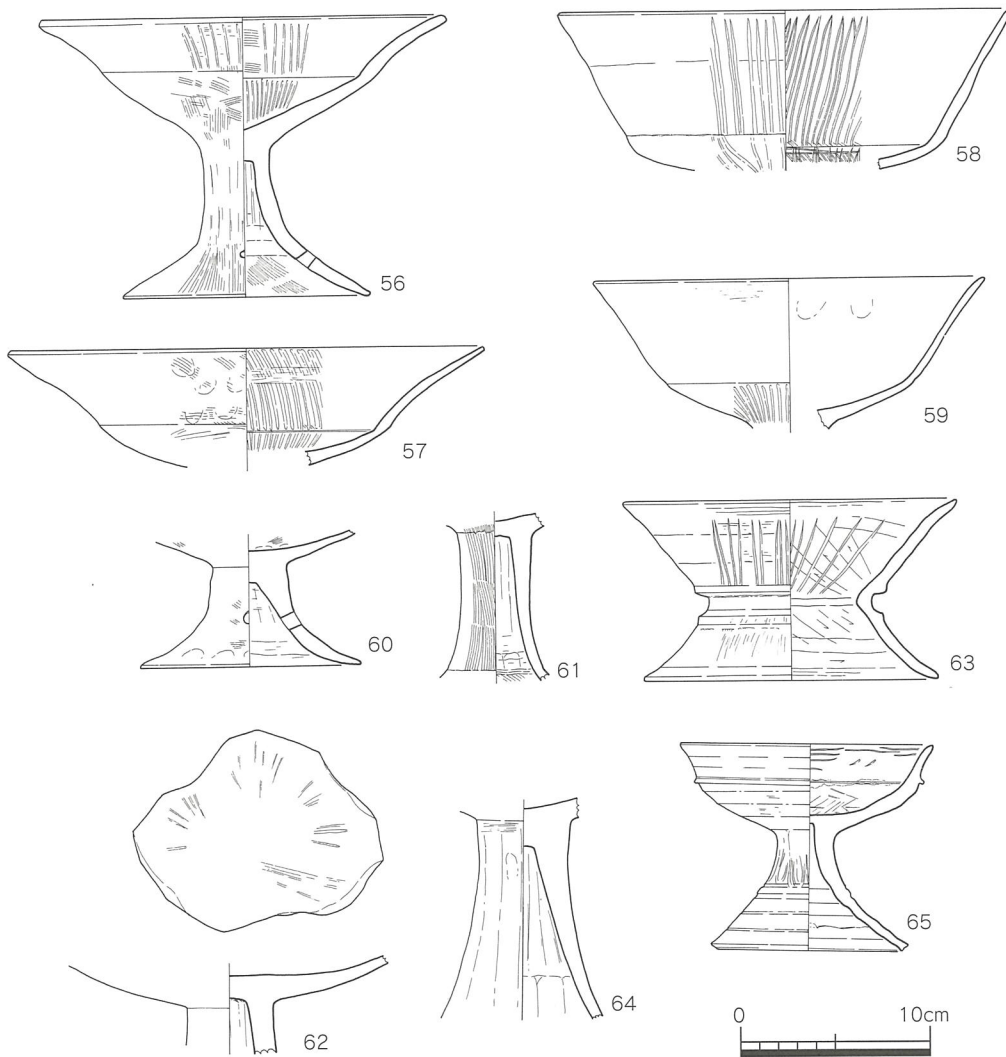


第13图 大溝出土土器実測图③ (1/4)



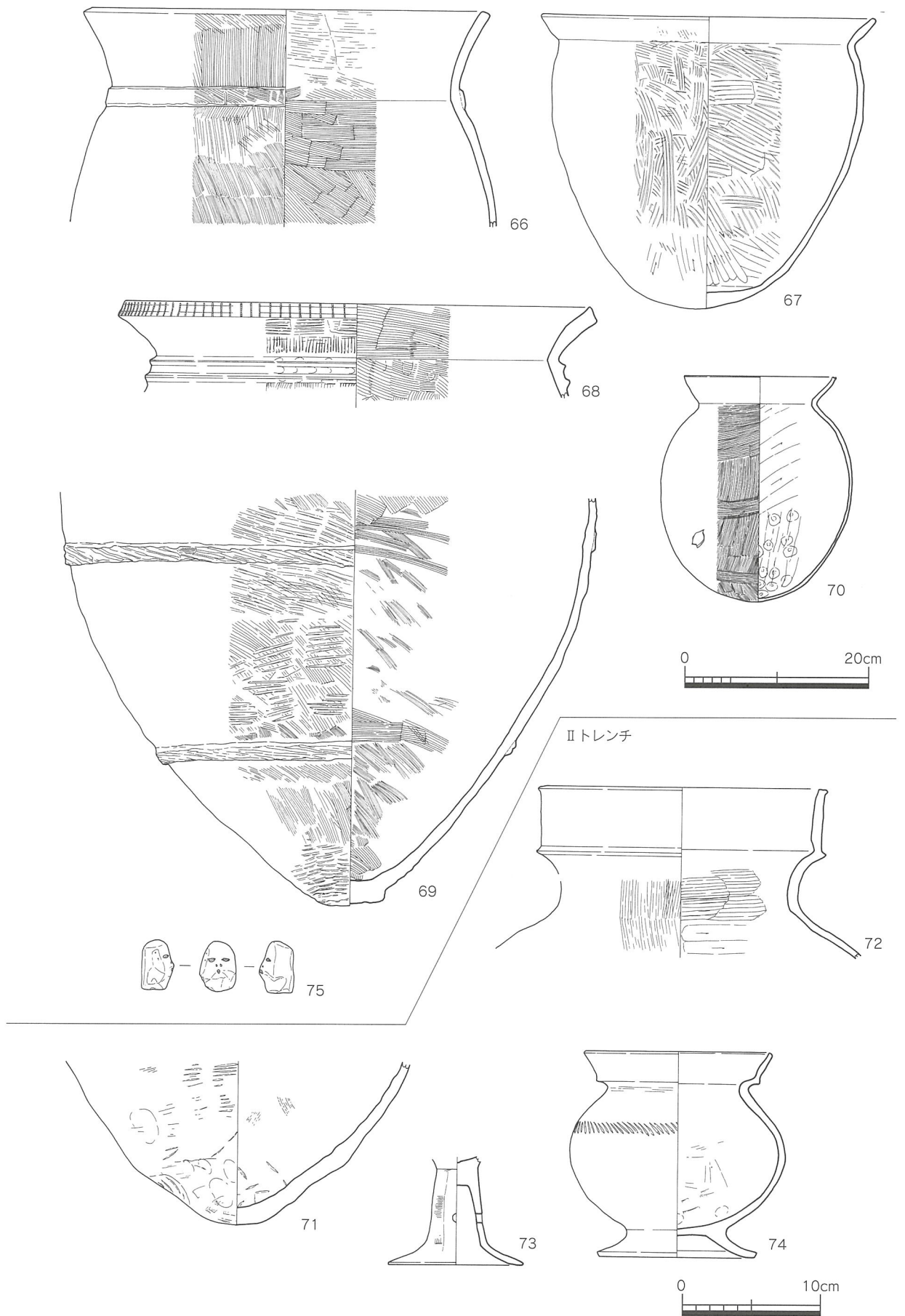
第14図大溝出土土器実測図④ (1/4)



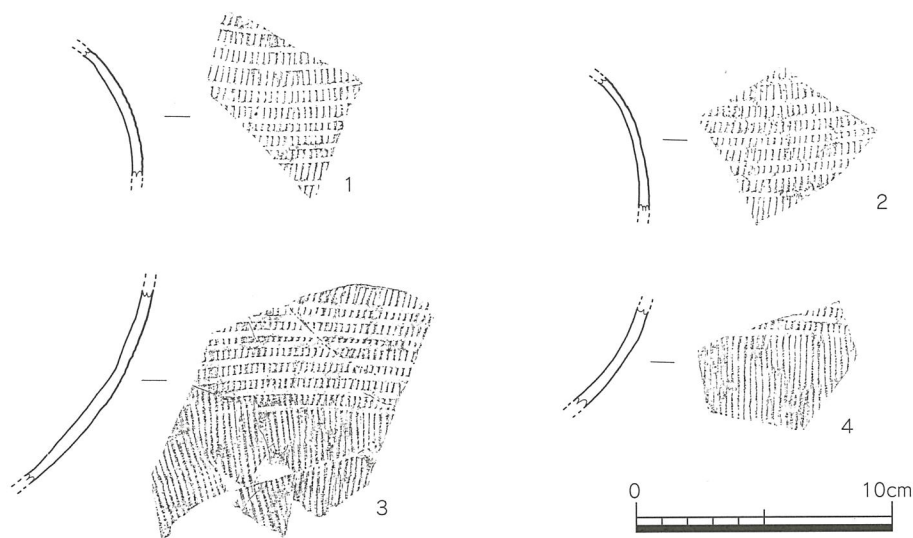


第15図 大溝出土土器実測図⑤ (1/4)

成は良好、色調は内面橙色、外面は灰褐色である。20は口縁部がほぼ直立に立ち上がりやや外反する。口径は27cm。外面調整の口縁部は縦方向の粗いハケ、頸部から胴部は斜め方向の粗いハケ調整で、内面の口縁部は横方向の粗いハケ、胴部は横方向と縦方向の粗いハケ調整。胎土は緻密で1mm大の石英、長石粒と微粒の金雲母を含む。焼成は堅牢、色調は内面橙色、外面はにぶい黄橙色。黒斑あり。21は口径19.4cmのやや小ぶりの甕である。口縁部は「く」の字形で、やや内湾する厚みのある口縁部である。調整は内外面ともにやや雑で、外面の口縁部は粗い縦方向のハケ調整と、指押さえの後、板状工具によるナデ調整を行なっている。頸部は粗い縦方向のハケ調整。内面の口縁部は横方向の粗く強いハケ調整で、頸部は縦、斜め方向の細かい板状工具によるナデ調整を行なっている。胎土は1~2mm大の長石、石英を含み、焼成は堅く、色調はにぶい黄橙色である。22は、頸部に三角突帯を一条めぐらし、立ち上がったくの字口縁をもつやや大型の甕である。口縁は30.4cmで、外面調整は風化しているもののわずかに斜め方向のハケ目が観察できる。内面も風化が進んでいるが斜め方向の粗いハケが観察できる。胎土は1~3mm大の石英、長石、金雲母を含み、焼成はやや不良、色調は赤褐色である。24は口径19.3cmで、くの字に屈曲する。器表面は風化が激しく、調整は不明である。器壁が大変薄くもろい。胎土は1~2mm大の長石、石英粒を含み、若干の金雲母を含む。焼成はやや悪く、色調は浅黄橙~淡橙色で、黒斑がみられる。25は口径が



第16図 大溝出土土器実測図⑥ (66~70は1/6、71~75は1/4)



第17図 大溝出土半島系遺物実測図（1/3）

16.2cmで、「く」の字に屈曲する。器壁は大変薄く、外面調整は風化のため不明である。内面は指押さえの後、粗い横方向のハケ調整を行なっている。胎土は1mm大の長石と石英、微粒の角閃石と黒色粒子を含む。焼成はやや悪く、色調は橙色である。

28は、直立に近い形の「く」の字口縁をもち、器壁は口縁部にかけて分厚くなる。口径は18.6cmで、外面調整は粗い縦方向のハケ、内面口縁部の調整は横方向の粗いハケ、頸部下は板状工具によるナデ調整を行なっている。胎土は緻密で1~2mm大の長石、石英を含み、焼成は良好、色調は橙色である。29は「く」の字の口縁部を持ち、口径は14.8cmで口縁端部に平坦面をもつ。口縁部の外面調整はヨコナデ、胴部は粗いタテハケで、肩部分に横方向のハケ調整をおこなっている。口縁部の内面調整は粗い横方向のハケがヨコナデの下に観察できる。頸部以下は底部から頸部方向へのケズリ調整を行なっている。胎土は1~2mm大の長石、石英、1mm大の金雲母、角閃石も含む。焼成は良好、色調は暗褐色である。30は、「く」の字の口縁部を持ち、口径は19.0cmで口縁端部に平坦面をもつ。外面口縁部の調整はヨコナデ、胴部は粗い縦、横方向のハケ後肩部にヘラ書きによる一本の波状文を施す。内面口縁部の調整はヨコナデ、頸部下は底部から口縁部にむけてのケズリ調整を行なっている。胎土は1~2mmの長石、石英、金雲母を含み、焼成は良好、色調は淡赤褐色を呈す。29、30は近畿系の土器である。31は口縁部を上部につまみあげた形態ので、器壁も薄く、胎土も緻密で精良なものを使用している。口径は16.9cmで外面調整はタテハケ後、ナデ調整を行い、内面は指押さえと横方向の板ナデ調整を行なっている。焼成は良好、色調はにぶい黄橙色である。

36は脚付甕の一部で、直径6mmほどの穿孔が2ヶ所確認されている。おそらく穿孔は3ヶ所に施されていたものと思われる。外面調整は、摩滅しており詳細は不明、内面は不定方向の粗いハケ調整が残る。底径は9.5cm、胎土は微粒の金雲母を含む。焼成は普通、色調は内外ともに橙色である。

37は肩部に竹管文をもつ甕の頸部の破片で、外面はかすかに縦横方向のハケ調整がみられ、内面は肩部はケズリ調整である。38は布留系甕の肩部で、波状文の一部がみられる。内面はケズリ調

整がみられる。39も、甕の胴部で横方向のハケ調整が明瞭に観察できる。40も同じく甕の胴部で肩部分に波状文が見られる。布留系甕の一部と考えられる。

48は大型の甕の胴部で扁平な突帯が貼り付けられている。内外面ともに粗いハケ調整が行われている。胎土は1～4mmの大粒の石英・長石・金雲母を多く含む。焼成は良好、色調は橙色を呈している。49も同じく大型の甕の胴部で扁平で幅の広い突帯を貼り付けている。表面の調整は風化しており不明だが、内面調整は斜め、横方向のハケ調整を行っている。胎土は石英・長石・赤色、黒色粒子、微粒の金雲母を含む。焼成は良好、色調は橙色。50も大型の甕の胴部でやや幅の狭い扁平な突帯を貼り付けている。ない外面ともに粗いハケ調整を行っており、胎土は石英・長石・金雲母を含む。焼成は良好、色調はにぶい黄橙色。51は小型の甕で「く」の字に屈曲する口縁部を持ち胴部の張りは少ない。胴部に火を受けたような痕跡が残る。口縁径は15.0cmで外面調整は口縁部指押さえの後ハケ調整をし、ナデ消しており、肩部は粗い斜め方向のハケ調整、胴下半部は斜め方向の削りを行っている。内面調整は口縁部は横方向ハケ調整、頸部以下は縦方向の板ナデ調整を行っている。胎土は石英・長石・黒雲母・金雲母を含み、焼成良好、色調は橙色である。52は中型の甕の底部で丸底。外面調整は縦方向のハケ調整で、底部の部分だけケズリ状の工具痕が残る。内面は指でナデあげた痕跡が残る。胎土は石英・長石・金雲母で細かい砂粒が含まれている。焼成良好、色調は赤褐色である。

66は頸部に扁平な突帯を施し、口縁が「く」の字に屈曲する。口径は42.2cmで、外面調整は口縁は横方向と縦方向のハケ調整で突帯にもハケ調整を施す。頸部は縦方向のハケ調整で、肩部は縦方向のハケ調整。内面は口縁～頸部は横方向のハケ調整で肩部以下は斜め方向で底部から頸部方向へ掻きあげている。67は大型の甕で口縁部は「く」の字に屈曲し、底部は平坦部をもたず分厚く形成されている。外面調整の口縁部は粗い縦方向のハケ調整で胴部は縦、斜め方向のハケ、底部付近は細い工具によるケズリ状のナデツケを行っている。内面は胴部上半は横方向のハケ調整、下半部は底部から口縁部方向へのハケ、底部は幅のない工具によるケズリを行う。内外面ともに使用した工具は同じものと観察される。68は大型の甕の口縁部で口縁端部に櫛状工具による刻み目が入る。頸部には二条の三角突帯が施される。口縁径50.6cm。外面調整の口縁部は横方向のハケ調整、突帯貼り付け部分は縦方向のハケ調整を行った後、突帯を貼り付けている。内面は横方向のやや粗いハケ調整を行う。69は扁平な突帯を多重に巡らす大型の甕で底部はやや平坦部をもつものの、タタキによって丸底化している。外面調整は全体をタタキ調整し、その後粗いハケ調整をおこないさらに底部と胴部中央部はタタキを行っている。突帯貼り付けもタタキによって行っているため、突帯表面にもタタキ痕が残る。内面調整は、突帯貼り付け内面のみ横方向のハケ調整を行い、突帯貼り付け時の内面への張り出しを調整している。そのほかは底部から口縁部方向へのハケ調整を行っている。70は、布留系甕の完形で、下半部に焼成後穿孔がある。口径16.5cm、胴部径20.6cm、器高24.8cm。外面調整の口縁部はヨコナデ、胴部はハケ調整を行う。内面調整の頸部以下はケズリ調整を行う。器壁が薄く、焼成は良好、色調は暗赤褐色である。71は甕の底部で丸底化している。外面調整の底部は指押さえ、胴部はタタキ痕が残る。内面調整は摩滅しており不明だが、底部付近に工具痕が明瞭に残る。

壺 (9・10・14～16・27・34・35・41～46・55・72・74)

9は広口壺の口縁部で、口径16.0cm、口縁外径21.8cm。外面調整はヨコハケ後ナデ調整を行い、

縦方向のヘラミガキを施す。内面調整はナデで所々に板状工具の痕跡が残る。胎土は1～2mm大の長石、石英粒を含み、焼成良好、色調は橙色。10は底径5.5cm、若干凹んでいる。内面調整は指押さえ痕が明瞭に残る。胎土は2～3mm大の石英、長石を含む。焼成は良好。色調は橙色。

14・15は壺の底部で、13は底径6.5cm、外面調整は縦方向の研磨痕が僅かに観察できる。丹塗りの可能性もある。内面は強い指押さえ痕が明瞭に残る。胎土は長石、石英を大量に含む。焼成良好、色調は橙色。14は、底径4.0cm、底部の形はややレンズ状になる。外面調整は摩滅により不明、内面調整は強い指押さえ痕が残る。胎土は粗い1～5mmの石英、長石が含まれる。焼成は良好、色調は橙色。16は、底部径が約6cmで、調整は外面が摩滅し、内面は指押さえとハケ目が残る。胎土は1～2mmの長石、石英を多く含む。焼成は良好、色調は内面黒灰色、外面は灰褐色～にぶい橙色である。

27は直口壺で頸部に三角突帯を貼り付ける。底部は丸底で厚みのある口縁をもつ。外面調整は口縁部縦方向ハケ調整で、頸部～肩部も縦方向のハケ調整、胴部中央は横方向のタタキ調整でその後ハケ調整を行っている。胴部下半は板状工具による縦方向のケズリ状調整を施す。底部付近は指押さえを行う。内面調整は口縁部斜め方向のハケ、頸部は指押さえ、胴部上半は斜めと横方向の細かいハケ調整、底部付近は縦方向と斜め方向のハケ調整が行われている。口径23.6cm、復元器高36.2cm、胎土は大粒の石英・長石・金雲母を含む。焼成は良好、色調は赤褐色である。34は、小型の壺で口縁は直立し、底部は丸底を呈すと思われる。作りが雑で器面調整も粗い。口縁部の残りが悪かったので胴部で直径を出している。復元口径は7.8cm、器高は12cmほどになるとと思われる。外面調整は細かい縦方向のハケ調整後に指で押さええて器面を整えている。底部付近は縦方向のケズリ後、粗い縦方向のハケ調整を行っている。内面は口縁部斜め方向ハケ調整、肩部ヨコナデ、胴下半部縦、斜め方向のハケ調整を行っている。口縁部は歪みが著しく、手捏ね風の成形である。胎土は緻密で精良、焼成は良好、色調は外面橙色、内面浅黄色である。35は壺の底部と思われる。内外面ともに指押さえ痕が明瞭に残り、若干底面に平坦部をもつ。

41は二重口縁の壺だが、頸部に三角突帯を持つこと、肩部分のタタキなど本来の二重口縁壺の形態とは異なる。在地系の影響が強いと考えられる。二重口縁部は外反し、屈曲部に刻み目を施す。外面調整は口縁部ヨコナデ、頸部はタタキ後縦方向のハケ調整。肩部は斜め方向のタタキで、胴部下半は縦方向のハケ調整が施される。内面調整は口縁部ヨコナデ、頸部横方向のハケ調整、頸部下は指押さえ痕と板ナデ痕が残る。二重口縁部接合部分は、ヘラ状工具による押さえが観察できる。胴部の作りは大変薄く、重量も軽い。口径23.5cm、胎土は石英・長石・金雲母・黒雲母を含む。焼成良好、色調は橙色である。42も二重口縁の壺で、口縁は内傾し、屈曲部に刻み目を施す。頸部に三角突帯を施し、その上に櫛状工具で刻み目をつけている。外面調整の口縁部はタテハケ後ヨコナデ調整を行い、頸部は縦方向と斜め方向の粗いハケ調整を行っている。内面調整の口縁部はヨコナデ、頸部は横方向のハケ調整、二重口縁部のつなぎ目は細かいハケ調整を行っている。口径25.8cm、胎土は石英・長石・金雲母を含み、焼成良好、色調は淡黄白色である。43は頸部に三角突帯をもち、直立しやや外反した口縁をもつ壺である。外面調整は口縁部縦方向のハケ調整、頸部以下は縦方向のハケ調整を行っている。内面は風化しており不明である。口径20cm、胎土は角閃石、長石、石英の微粒が含まれており、焼成はやや悪く、色調は赤褐色である。44は、「く」の字に外反するやや長さのある口縁部をもち、丁寧な作りである。器面調整は内外ともに風化が進み不

明である。

45は、大型の二重口縁壺の口縁で、小片のため口径を出すことができなかつた。二重口縁部の下端部は貼り付け突帯で形成している。表面調整は外面指押さえ、板状工具による小口の痕が明瞭に残る。内面は横方向のハケ調整と指押さえ痕が残る。46は二重口縁壺の口縁部で、屈曲部に刻み目を施す。調整は内外面ともヨコナデ調整を行う。胎土は石英・長石・金雲母を含む。焼成は良好、色調は灰褐色～浅黄色を呈す。

55は壺の底部である。底部には僅かに平坦面が残る。外面の調整は指押さえ痕が明瞭に残る。内面は指押さえ痕と板ナデ調整が残る。

Ⅱトレンチからの出土遺物の紹介を行う。72は、二重口縁壺で、口縁部は厚みがあり直立している。頸部まで器壁は厚い。器面調整の頸部は縦方向の粗いハケ調整で、内面は頸部は横方向のハケ調整、頸部以下は横方向のケズリを行っている。口径19.8cm、胎土は角閃石・石英・長石・金雲母の細砂粒が混入し、焼成は良好、色調は淡赤褐色を呈す。74は脚付の二重口縁壺で、肩部にヘラ状工具による列点文が巡らされている。胴部最大径はほぼ中位にあり、全体的に厚みのない作り。口縁部は若干内湾している。調整は、外面口縁部ヨコナデ、体部は板ナデ、脚部は摩滅しており詳細は不明。内面は、口縁部ヨコナデ、体部は板状工具によるヨコナデ、底部は指おさえ、脚部はナデ調整をおこなっている。調整はすべて丁寧に施されている。口径13.4cm、脚部径11.5cm、器高15.1cm、胎土は石英・長石・金雲母・黒雲母・赤色粒子を含む。焼成良好、色調橙色である。  
**鉢 (26・53・54)**

26は、口縁部にかけて大きく内湾する形の鉢形土器で、口縁端部に平坦面を持つ。器壁も厚くしっかりしたつくり。外面調整は胴部から口縁方向へのハケ調整で、最大径下は口縁方向へのケズリ。内面調整は粗い横方向のハケ調整で、口縁方向で調整を行っている。下半部は縦方向のハケ調整を行う。口径26cm、胎土は長石・石英・金雲母を含む。焼成良好、色調は赤褐色を呈す。53は、内外面ともに調整は不明である。口径は12.9cm、器高4.8cmである。54は、扁平な半球形を呈している。外面調整の口縁部付近はナデ調整だが、あとは縦方向と横方向のケズリ調整を行っている。内面は細かい横方向のハケ調整をおこなっている。口径21cm、器高8cm、胎土は石英・長石・赤色粒子を多く含む。色調は橙色である。黒斑あり。

#### **高坏 (56~62・64・73)**

56は、やや厚みがあり、坏部の開く形をしている。外面調整の坏部はヨコナデ後縦方向の暗文風のヘラミガキがわずかに観察できる。脚中部は板状工具により器表面を調整し、裾部は縦方向のハケ調整を行う。内面は坏部横方向のハケ調整後暗文風の縦方向のヘラミガキがかすかにみられる。脚部は絞り痕と、斜め方向のハケ調整を行う。穿孔は脚部に3ヶ所あり、焼成前穿孔で直径が6mmである。口径21cm、器高15cm、底部径12.8cm、胎土は長石・石英・金雲母・赤色粒子を含む。焼成良好、色調は橙色を呈す。57は、坏部のみで、口径24.2cm。外面調整は指押さえ後、斜め方向のヨコハケ後、ナデ消している。内面は横ハケ調整後、暗文風のミガキ調整を行っている。胎土は緻密で、長石・石英・金雲母を含む。焼成は良好、色調は内外ともに橙色を呈す。58は、高坏の杯部で、やや大型のもの。口縁端部は角張っていて、上面に狭いが平坦面をもつ。外面調整はナデ後、縦方向の暗文風のヘラミガキがみられる。内面はハケ後暗文風のミガキを行っており、ミガキは二本一組の単位で研磨している。屈曲部には接合時のナデ調整のほか、斜め方向の研磨痕がみ

られる。口径23.5cm、胎土は精良で、長石・石英・金雲母を含み、焼成は良好、色調は内外ともに橙色を呈す。59は、坏部で、口径20.5cm。外面調整は摩滅が激しいが、屈曲部下はかすかに暗文風のミガキが残っている。内面調整は摩滅によりほとんどわからないが、指おさえが残っている。胎土は長石・石英・赤色粒子が含まれ、焼成は良好、色調は橙色を呈す。

60は脚付の甕の部分の可能性があるが、外面に一部赤色顔料の痕跡が見られたので、高坏に入れている。外面は指押さえ後、ヨコナデ、タテハケ調整を行い、内面は坏部板ナデ、脚部指押さえ後、板状工具によるナデ調整を行う。胎土は長石が多く、黒色粒子、赤色粒子、金雲母が含まれる。焼成は良好、色調は黄褐色を呈す。61は脚部で、細長い形の脚部である。外面調整は細かい縦方向のハケ調整で、内面は絞り痕と指押さえ、ヨコハケ調整が残る。胎土は石英・長石を含み、焼成は良好、色調は橙色を呈す。62は、坏部と一部脚部が残存する。調整は摩滅しているが、内面は放射状の暗文が残る。胎土は金雲母を多く含み、石英・長石赤色粒も僅かに含む。焼成は良で、色調は橙色を呈す。64は脚部で、坏部は内外面ともに赤色顔料が塗布されている。脚部にも一部丹塗りの痕跡が見られることから、本来はすべてに赤色顔料が塗られていたものと考えられる。外面調整は指押さえ痕が残るが、摩滅が激しいため詳細は不明である。内面は絞り痕と指押さえ痕が明瞭に残る。胎土は石英・長石・金雲母が混入し、焼成は良好、色調はにぶい黄橙色である。73は、小型の高坏である。外面調整はハケ調整と面取りを行って、縦方向に数本筋がはいる。内面は摩滅が激しく詳細は不明である。焼成前に3ヵ所、7×7mmの焼成前穿孔をおこなっている。底部9.7cm、胎土は石英・長石・赤色粒子が目立つ。焼成は普通で、色調は橙色を呈す。

#### 器台 (13・33・63)

13は完形の器台で、受部径11.0cm、器高14.3cm、裾部径13.3cm。調整は外面が指押さえ後粗いハケ目で受部周辺はヨコナデを行い整えている。内面は上面指押さえとヨコナデ、クビレ部は絞り痕残り、裾部は粗い横方向のハケ目が観察できる。胎土は1～3mm大の石英、長石、2～3mm大の赤色粒子を含む。焼成は良好で、色調は橙色である。

33は鱗付の支脚で、頂部の平坦部には径5mmの焼成前穿孔が中央に一個所施されている。頂部の調整は板状工具による調整を行う。胴部は縦方向のハケ調整を行っている。鱗状突起は胴部からつまみ出されるようにして形成されており、4cm×1.5cmほどの大きさである。内面は指押さえを行って調整している。胎土は石英・長石・金雲母を含み、焼成は良好、色調は淡赤褐色を呈している。

63は、鼓形器台で山陰地域の影響を受けた器台である。つくりがよく、薄くて焼成が良い。受部は外面口縁部は横ハケ後、ヨコナデ調整を行い、暗文風の縦方向のヘラミガキを行っている。内面も不定方向に削った後、斜め方向の暗文状のミガキが放射状に広がっている。裾部は外面板状工具による縦方向のナデ調整を行い、底部はヨコナデを行っている。内面は上半は斜め方向のケズリだが、底部は粗い横方向のケズリとハケ調整を行っている。斜め方向のケズリは底部に向かって削られている。受部径は、17.4cmで、裾部径は15.2cm、器高は9.6cmである。胎土は、細かく、1～2mmの石英・長石を多く含み、若干ではあるが1mm大の金雲母も観察できる。焼成は良好で、色調は内外ともに橙色を呈す。

#### その他の土製品 (図版29、第16図-75)

##### 土製人形 (75)

75は、I-2区上層から出土した土製人形頭部片で、首の部分から下は欠損している。両目、鼻、

口の表現は、工具で突き刺してつくり、耳、頭髪表現はない。胎土は大きい砂粒は入らず、きめ細やかで緻密である。白色粒子と金雲母を若干含むが、ほとんど観察できない。胎土の感じから、中世のあるいはそれ以後のまぎれ込みかとも考えたが、出土状況から大溝に伴っており、大溝に伴う時期のものと思われる。

頭頂部はやや平坦で、鼻の部分はやや高まるように成形されている。あごの部分は意図的にへこませたものかは不明。表面は丁寧にナデている。色調は橙色で、残存長2.8cm、最大幅2.0cm、厚さ1.9cmである。

#### 大溝上部の出土遺物（図版28・29、第13図-32、第15図-65）

大溝の埋土中ではないが、上部で検出した遺物である。溝埋没後に作られた遺構の遺物で、大溝の時期に伴うものではない。遺構は確認できなかった。

#### 甕（32）

32は、須恵質の高坏に共伴して出土した甕である。口縁は直立に近く、やや外向きに広がる。口縁端部はあまい刻み目が施されているものの、規格性にとぼしくあまい刻み目である。調整は粗く雑な作り。外面は口縁部タテハケ調整後、ヨコナデ、ナデ消しを行い、肩部は縦方向と斜め方向の粗いハケ調整後、ナデ消しを行う。内面調整は、口縁部粗いヨコハケ調整後、細かいヨコハケ、ナデ消しを行い、一部タテハケも見られる粗雑な作り。頸部下はへら状工具と板状工具にて調整を行っている。口径15.4cm、胎土は緻密で長石・石英・金雲母を含む。焼成は良、色調は浅黄橙色である。

#### 高坏（65）

65は須恵質の高坏である。坏部は1/3ほど欠損しているが、残りは良い。外面調整は坏部回転ナデ、突帯下は回転へらケズリ、脚部縦方向のハケ状工具によるナデ調整、以下回転ナデ。内面は坏部ヨコナデ後、板状工具による不定方向のナデ調整を行い、工具痕が残る。脚部は回転ナデ調整を行う。口径は若干歪みがあるため13～14cmで、器高11cm、底径10.4cm。胎土は微粒の白色粒、金雲母を含む。焼成はややあまい焼成と思われる。色調は褐灰色である。

大溝出土土器は、下層出土の土器はわずかであったが弥生時代中期後半のものが含まれる。中層～上層にも弥生時代中期後半～末の土器が含まれる。上層の土器の中心は、土師器であるため、それ以前に溝の大部分は埋もれていたと考えられる。

土器の出土状況は、下層～中層は破片のもの、上層は完形のものも含むが、ほとんどがバラバラに分散して出土している。特に下層～中層の遺物は形になるものがなく、破片も細かいものが多いことは、大溝が使用されていた時期には、おそらく、何度も溝さらいを繰り返していたと考えられる。上層の土器は完形のもの以外は、広範囲に同一個体の破片が分布していたため、溝埋没最終段階に一括投棄した後につくられた遺構に攪乱をうけているものと考えられる。（牟田）



## ②歴史時代の遺構と遺物

中世の遺構は調査区全体で検出されたが、ほとんどはピットでその他は土坑数基が検出されている。とくに調査区西側では楕円形の大型土坑が5基検出された。そのうち2基を完掘したが、残りの3基はプランの確認を行っただけである。ピットは一部を完掘したが、ほとんどはプランを確認しただけである。建物は確認できなかった。出土遺物は土師器、陶器、磁器の破片などが出土した。1・2号とも時期差はあまり無く、12世紀頃と思われる。

### 1号土坑

調査区の中央やや西よりで検出された、楕円形の大型土坑である。東西6m、南北3.7mで、深さ45cmである。北側の半分は大溝にかかっており、大溝を切り込んで作られている。南西部は一部2号土坑に切られている。床面はほぼ平坦で、ピット等は検出されなかった。土坑内からはほぼ全面にわたり多量の土師皿が出土した。わずかに完形に近いものもあったが、ほとんどは破片である。また、量は少ないが瓦器、陶磁器の破片も出土している。その他埋土の一部には炭化物を多く含む層があり、若干の焼けた石なども出土している。出土状態は乱雑に投げ込まれたような状況を呈しており、これらの土器は土坑に廃棄されたものと考えられる。(角)

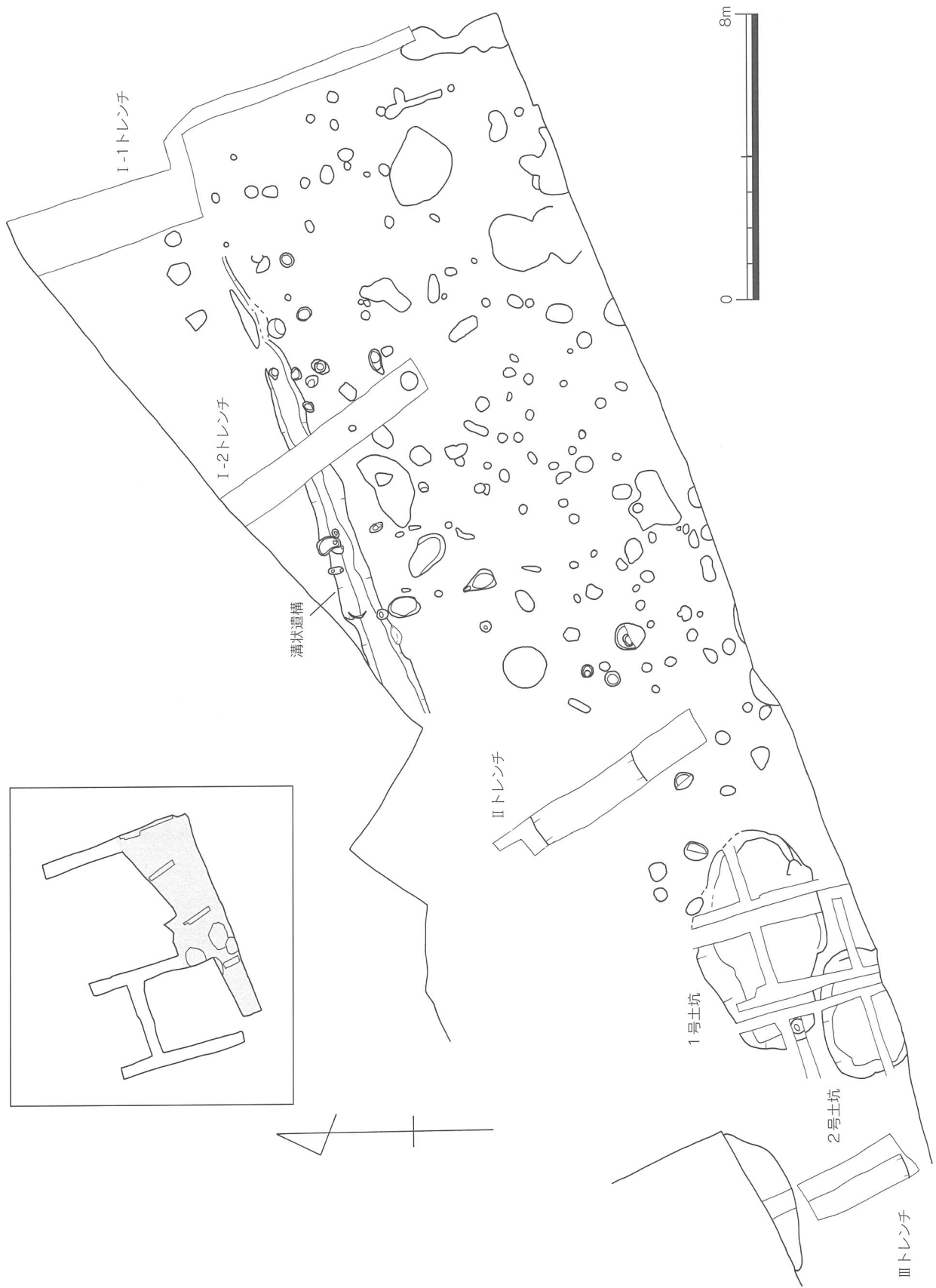
### 出土遺物 (図版31、第19図)

1～6は陶磁器である。高台を持つものが3点ある。1は口径16.1cm、暗緑色の釉のかかる青磁椀である。2は口径16.2cm、器高7.2cm、底径5.3cmの青磁椀である。3は青磁椀、4は口径16cmの青磁椀、5は底径5.9cm。6の底部は回転ナデで底径3.6cmの青磁椀である。

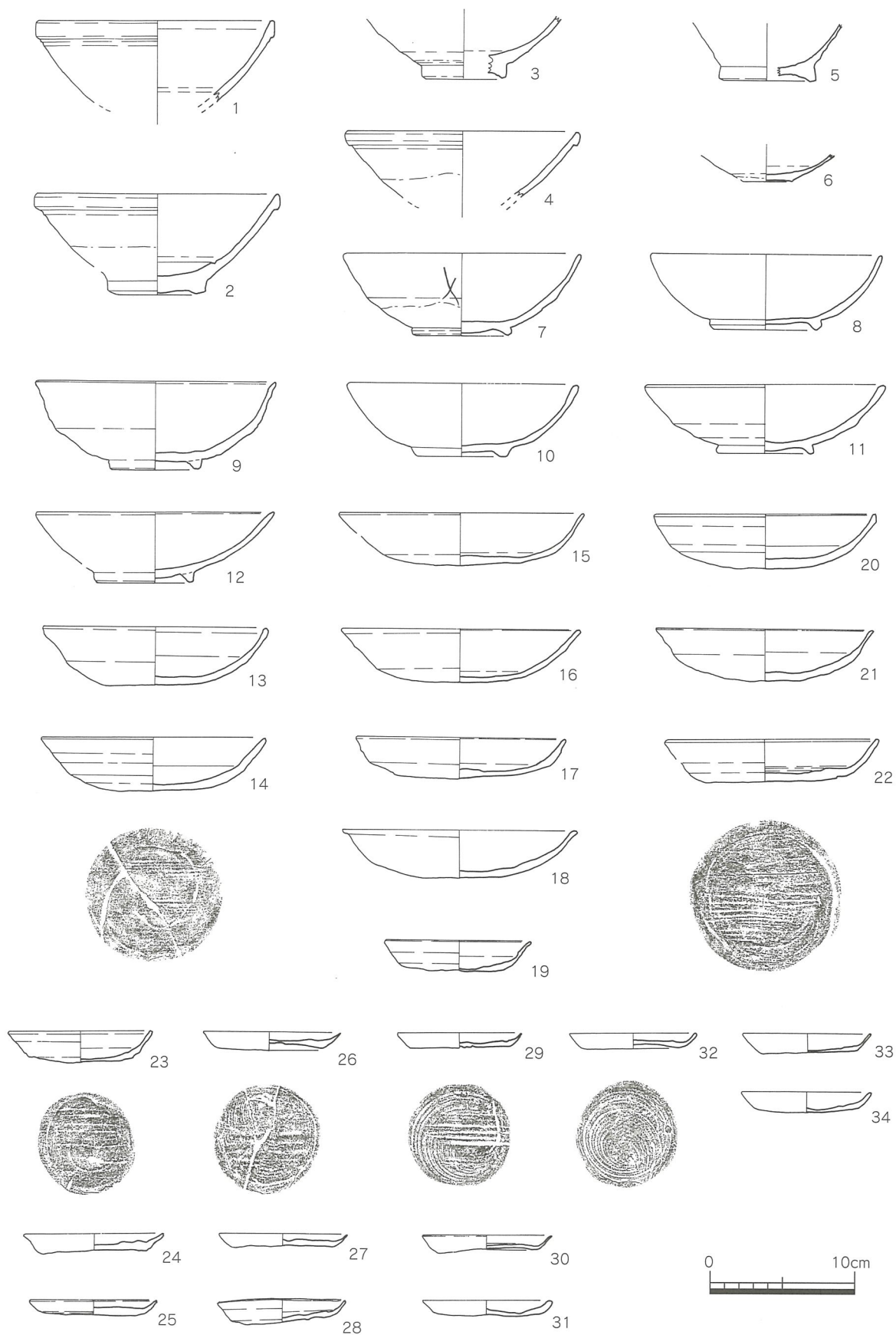
7～12は瓦器椀である。7は外面胴部と底部にヘラによる記号が(×の形)見られる。口径16cm、器高5.7cm、底径6.4cm。色調は淡灰色である。8は、口径15.8cm、器高5.2cm、底径7.3cmで内外ともに灰色。9は、口径16.2cm、底径5.7cmで調整は回転ヨコナデを行なう。10は口径15.5cm、器高5.1cm、底径6.3cm。11は、口径16.3cm、器高4.8cm、底径6.8cmで、胴部下半にヘラケズリの痕跡が明瞭に残る。12は、口径16.4cm、器高4.9cm、底径6.7cmで色調は灰色。調整は内外面とも指ヨコナデ。

13～23は杯である。13は、口径15.4cmで、底部はヘラ切り、他は回転ヨコナデ調整を行なっている。14は、口径15.6cm、器高3.7cmで、底部は右回りのヘラ切りで、板目痕が明瞭に残る。15は、口径16.8cm、器高3.7cm、底部はヘラ切りで他は回転ヨコナデ調整を行なっている。16は、口径16.3cm、器高3.7cm、底部径6.5cmで、底部はヘラ切りである。17は、口径14.5cm、底部はヘラ切りで、その他は回転ヨコナデ調整を行なっている。18は、口径16.4cm、器高3.4cmで、底部に板目痕残る。19は、口径9.8cmで底部はヘラ切り、その他は回転ヨコナデ調整を行なっている。20は、口径15.6cm、3.8cmで器表面は風化しており調整は不明である。21は、口径15.2cmで、底部はヘラ切り、その他は回転ヨコナデ調整を行なう。22は、口径15.6cmで底部に明瞭な板目痕が観察できる。底部以外は、回転ヨコナデを施す。23は、口径9.6cmで底部がヘラ切りで、板目痕がみられる。

24～34は小皿で、口径が8cm前後のものが殆どである。底部は26・29・32が糸切りをおこなっているが、ヘラ切りも共存する。(牟田)



第18図 八龍221番地遺構配置図（歴史時代）（1/160） ※アミカケ部が拡大部分



第19图 1号土坑出土土器实测图 (1/4)

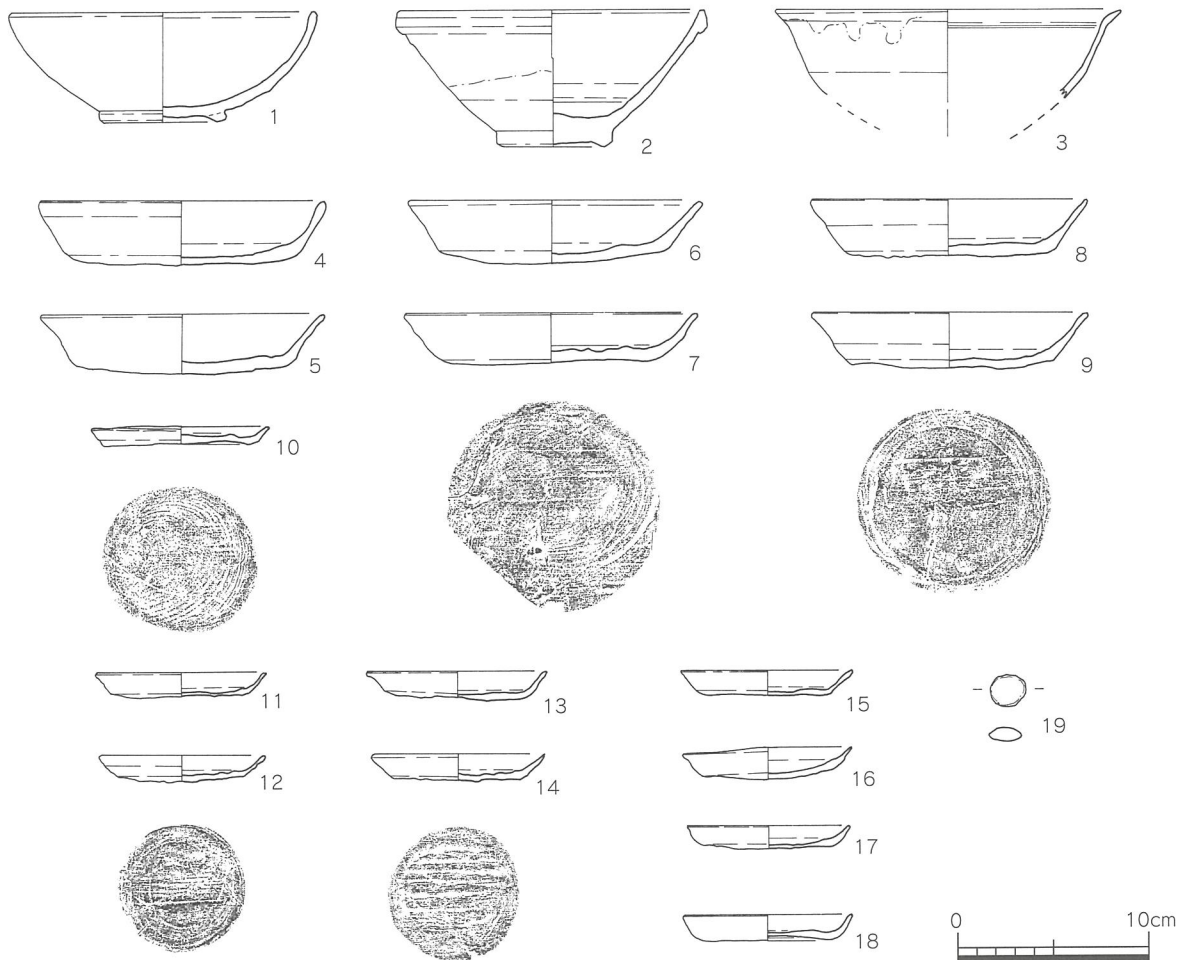
## 2号土坑

1号土坑の南西で検出された、楕円形の土坑である。東西3.5m、南北2.2m以上で、深さ40cmである。南側の一部は調査区外に広がっている。1号土坑を切って作られている。床面はほぼ平坦で、ピット等は検出されなかった。土坑内からはほぼ全面にわたり多量の土師皿が出土した。わずかに完形に近いものもあったが、ほとんどは破片である。また、量は少ないが瓦器、陶磁器の破片も出土している。その他小鉄塊や焼土などが出土している。出土状態は乱雑に投げ込まれたような状況を呈しており、これらの土器は土坑に廃棄されたものと考えられる。(角)

### 出土遺物 (図版32、第20図)

1は瓦器碗で、口径16.2cm、器高5.8cm、底径6.1cmで器面調整は回転ヨコナデである。2は青磁碗で、外面中位くらいまで暗緑色の釉がかかる。口径16.2cm、底径5.3cm、器高7.2cmである。3は、白磁碗で口径18.2cmである。

4~8は杯で、4は口径15.2cm、底部はヘラ切りで板目痕が残る。5は、口径15cm、底部はヘラ切りで板目痕あり。6は口径15.3cm、底部に板目痕残る。7は、口径15.4cm、底部は糸切りで板目痕残る。8は、口径14.6cmで底部はヘラ切り、板目痕が残る。9は口径14.5cm、底部に板目痕残る。11~18は小皿で、底部は糸切りとヘラ切り両方がみられる。19は、おはじきのようなもので表面は使用による光沢がある。暗青灰色の石製である。(牟田)



第20図 2号土坑出土土器実測図 (1/4)

### ③ 小結

今回の調査の目的は大溝の確認であったが、これについては約40mにわたり検出された。北東に位置する寺口Ⅱ-17地区で検出された大溝につながるとすれば、長さ150mに及ぶ。さらに、福岡県教育委員会の調査時に北東に20mほどが確認されていることから、長さは170m以上となる。そこで大溝の掘削時期について考えてみると、古墳時代前期には確実に埋まっていたため、それ以前であることは明らかである。また、埋土から弥生後期の土器片が出土していることから、後期のある時点で埋まり始めた可能性が高いと考えられる。よって掘削時期については少なくとも弥生後期以前であると考えられるが、それ以上の時期を明確にする根拠は無い。可能性としては弥生中期末以前を考えておきたい。大溝の機能については現状の周辺の遺構の分布状況から見る限り、2条の並行する大溝が三雲遺跡の居住地と墓地を区画する可能性が高いと考えられるが、今回の調査においてはそれを確定できるだけの資料は得られなかった。今後の課題としては2条の大溝がどの方向に伸びてゆくのか、あるいはどのくらいの長さになるのか全容を確認する調査を実施する必要がある。

須恵質の高坏についてはその時期が布留式の最終末ないしは直後の時期と考えられる。この土器の生産地がどこであるかが問題となるが、時期的に見るとまず朝鮮半島の可能性が考えられる。韓国の福泉洞21-22号墳、華明洞2号墳、同7号墳、七山洞20号墳には類似した器形のものが見られる。これらの古墳はいずれも朝鮮半島南岸の東側の地域、いわゆる伽耶地方に存在する。しかし、細かく見ると坏部や脚部の形態が若干異なっている。また、本例は焼成がやや甘く感じるが、福泉洞古墳群のものは写真で見ると硬質で、かなり良いようである。実見していないのでなんとも言えないが、いずれも若干異なるようである。一方、日本国内で見ると朝倉窯跡群の可能性が考えられるが、小隈窯跡、山隈窯跡出土の高坏とは形態が異なるようである。八並窯跡の高坏の発見例はないようである。筑紫野市の隈・西小田地区窯跡群については高坏の脚部が1点出土しているが、形態的にまったく異なるため、生産地である可能性は低いと考えられる。居屋敷窯跡については高坏が出土しておらず、不明である。さらに、初期須恵器の生産地として著名な大阪府の陶邑窯、一須賀窯の出土品とも器形が異なるようである。最後に地元の糸島地方では福岡市西区の新開窯跡が唯一須恵器の窯跡として知られているが、公表された高坏の脚部とは形態が異なる。

このように現段階ではいずれの産地とも断定できない状況である。ところで、本例も基本的にはロクロを使用して成形しているが、坏部内面は最後に不定方向のナデで仕上げている点が気になる。このような調整が他の出土品に見られるかどうかは、確認が必要である。また、全体のプロポーシオンもやや鈍さを感じ、焼成もやや甘いように感じる。今のところは初期須恵器である可能性を考えておきたい。新開窯跡では定型化以前の資料も存在するようで、操業開始が須恵器の初現段階までさかのぼる可能性があるとのことである。そうすると新開産である可能性も考えられる。須恵器生産の多元的な発生の様相が明らかになりつつあることから、中国や朝鮮半島との交流が盛んに行われていた糸島地方に初期の須恵器の窯跡が存在してもおかしくはないのではないだろうか。

以上、高坏の生産地について若干検討してみたが、現段階では明確にする事はできなかった。今回は筆者の怠慢により十分な資料調査を行っていないので、明確な結論を導くにはいたらなかったが、これについては後日を期したい。

(角)

### (3) 235番地の調査

八龍235番地の調査は、隣接する牛舎小屋の関連施設を建設する計画が持ち上がったことから行なうこととなった。調査面積は100㎡ほどで、調査区西側から約18mのところ旧地形の段落ち部分にあたることからそれ以東は調査を行っていない。地山は、暗橙褐色～黄褐色のやや粘性のある土質であった。

今回の調査は、調査地点が三雲・井原遺跡の南東端部にあたり、南に30mいくと弥生時代中期中葉～後半の甕棺墓群があることから、集落端部に形成される墓群の存在の有無、大溝等にみられる区画溝の有無等の確認を目的としている。結果として弥生時代の墓群や区画溝は発見できなかったが、古墳時代前期の住居址を3軒検出し、以前の調査（福岡県教育委員会）でも同時期の住居が南に30mの地点から11軒検出しているため、古墳時代前期にこの一帯は住居群が形成されていたことをうかがわせる。

主な遺構は、竪穴住居址3軒、近世の石組溝状遺構1条で、1号住居の床面から水晶製算盤玉が1点、床面からヒスイ製の小玉が1点出土している。また、1号住居の炉跡周辺から住居埋没時の甕、小型丸底壺などがまとまって検出している。包含層や住居の埋土等に黒曜石の剥片が多く含まれていたことから、縄文時代の遺構も近くに存在すると思われる。

調査期間は平成14年9月から11月の約三ヶ月間行なった。

#### ①住居跡（図版9・10、第21・22図）

住居は全部で3軒確認された。切りあいから1号住居が一番新しく、大型の住居である。出土遺物からみて、1～3号住居はそれほど大きな時間差もなく作られたものと考えられる。

##### 1号住居（図版9・10、第22図）

1号住居調査区中央、現代溝部分で一部切られるものの、平面プランがほぼ完全に確認できた。プランは、東西に長く4.6～5.4m、南北に3.6～4.1mで東側がやや膨らむ形の長方形を呈している。南北の壁に周溝をもつが周囲を巡らず途中で切れた状態で検出した。周溝の長さは北側で4.2m、幅15cm、深さ18cmで、南側は残存長1.5m、幅18cm、深さ21cm、断面の形状は逆台形を呈している。また、床面のレベルもほぼ水平である。貼り床は確認できなかった。

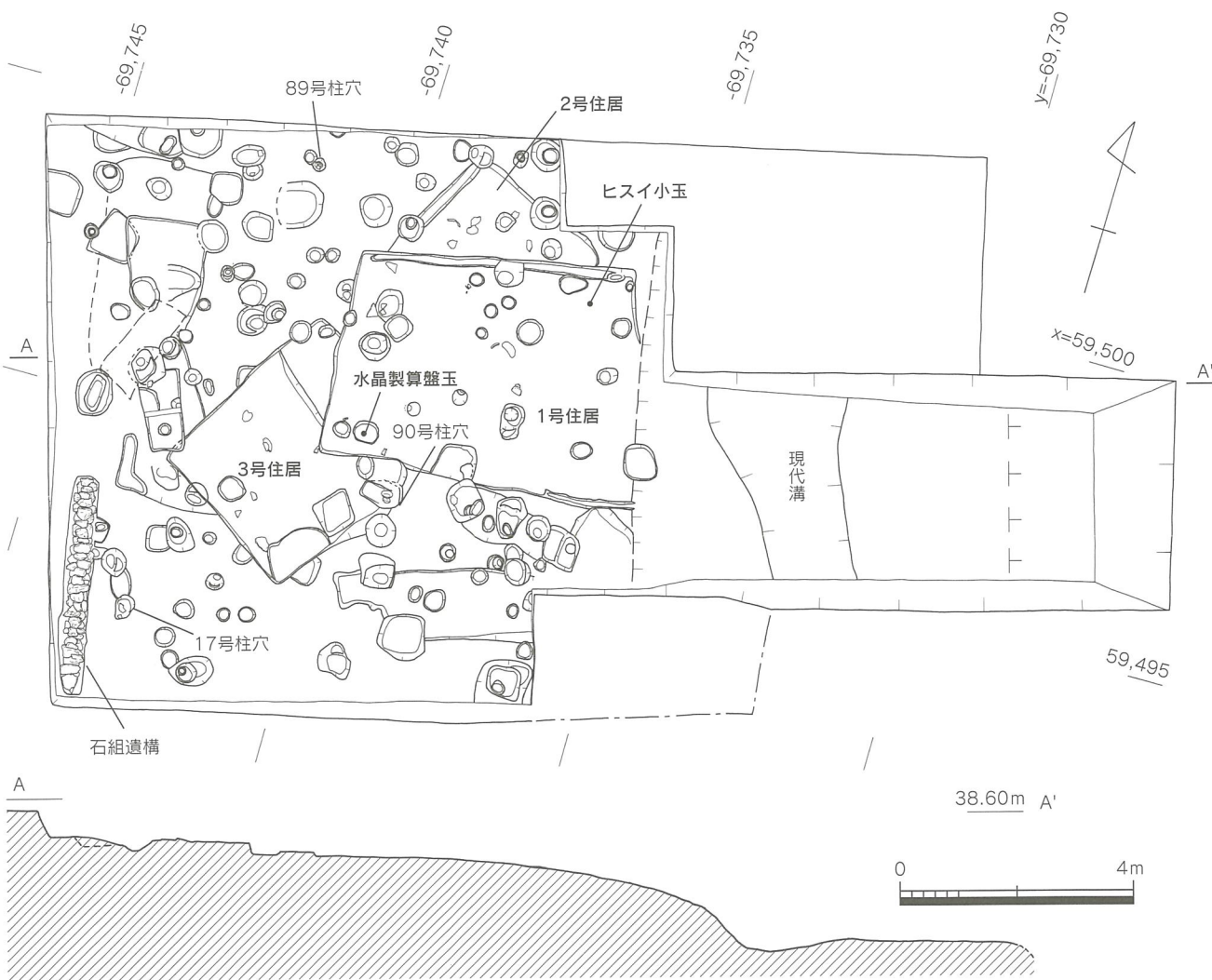
住居のほぼ中央に焼土と炭が薄く堆積しており、炉跡と思われる掘り込みを確認した。焼土は、住居のほぼ中央に直径約45cmの範囲に堆積しており、炭の範囲は焼土よりも広く、東西方向に約1m、南北方向に80cmほどで、上面から甕形土器4点が横倒しの状態で出土している。その他、炉周辺から小型丸底壺、器台、高坏脚台、手捏ね土器等がほぼ完全な形で出土している。

土器のほかに住居南西隅の床面から水晶製の算盤玉1点と、北東隅からヒスイ製の小玉が出土している。水晶製算盤玉は住居に伴う不整形のピット上面で検出したが、ピット内埋土からではなく住居の床面直上である。水晶製算盤玉は、調査区から南へ約30mに位置する同時期の土坑跡からも4点出土している。大きさ、形状ともに類似している。水晶の出土は、三雲仲田I-16地点住居から原石が出土しており、水晶の原石が採れる叶岳も近くにあることから、周辺で製作した可能性が高いと思われる。

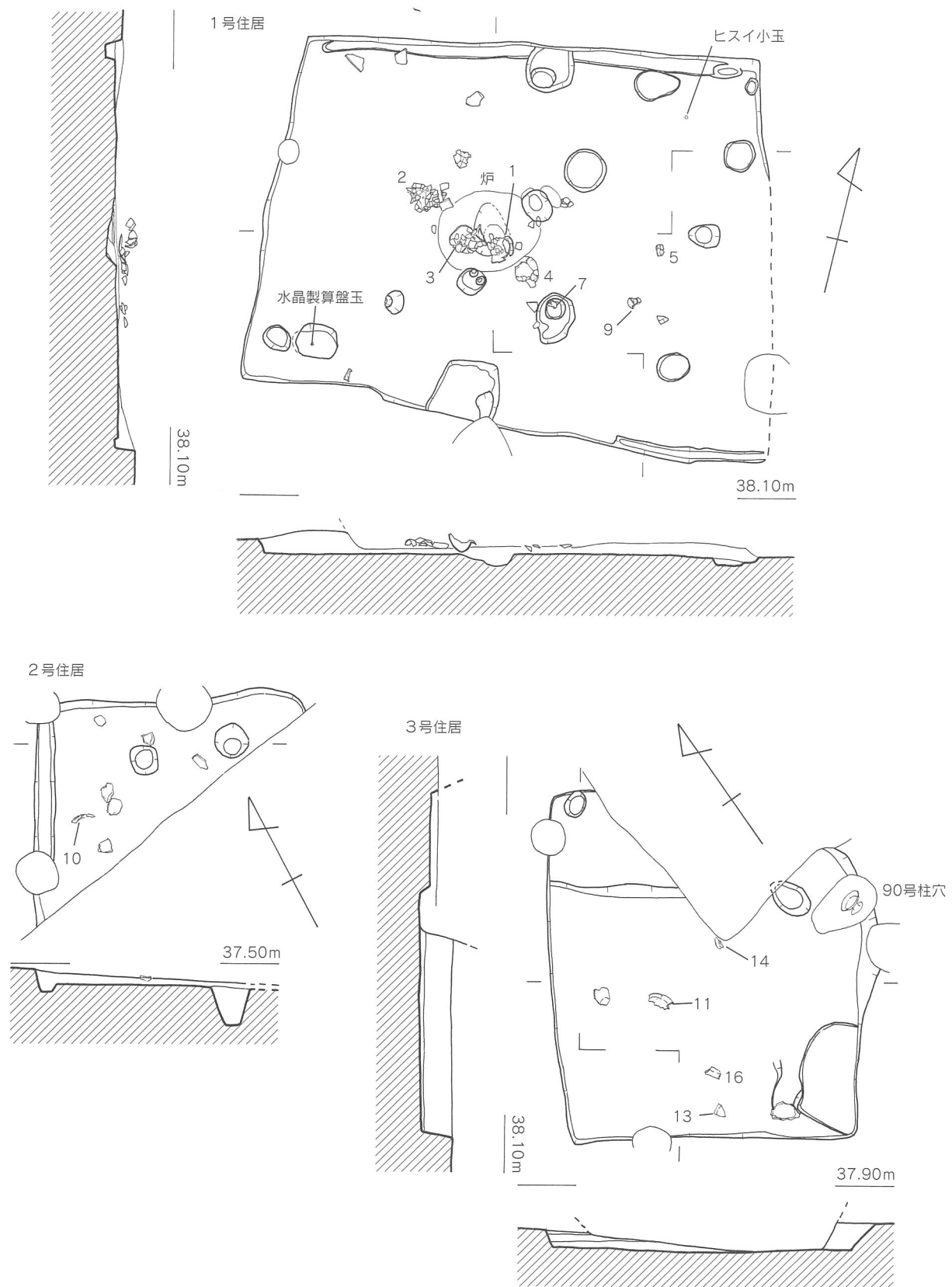
住居に伴う柱穴は数ヶ所確認したが、柱として並ぶものはなさそうである。

出土遺物 (図版33、第23図)

甕 (1~4) 1は、口径18cmで残存器高21cm、口縁上端部は平坦面をもつ。表面の調整は口縁部~頸部にかけてはヨコナデ、肩部はヨコハケ、肩部以下は幅の狭い工具による不定方向のハケ調整を行なう。内面調整の口縁部はヨコナデ、頸部は指押さえ、肩部以下は下から上方向のケズリ調整を行なっている。器壁が薄く、堅牢なつくり。色調は橙色。胴下半部に煤が付着している。2は、口径19.3cmで、胴部最大径は24.4cm。外面肩部分にヘラ状工具による沈線が一周する。外面調整は口縁部指押さえ後ヨコナデ、肩部~胴部はヨコハケ目、下半部はタテハケ目。内面調整は、口縁部指押さえ後ヨコナデ、頸部以下は下から上方向のケズリ。焼成良好、色調はにぶい褐色。黒斑があり、胴部に所々煤が付着する。3は、口径18cm、器高32.7cm、最大胴径32.7cm、口縁部は器壁が厚く頑丈なつくり。外面調整は、口縁部ヨコナデ、肩部細かいタテハケ後3ヶ所刺突文が施されている。胴下半部はヨコハケ、細かいタテハケ調整をおこなっている。内面調整は頸部以下がケズリ、底部は指押さえ痕が残る。器壁は胴部が薄く、焼成も良好。色調は灰黄色。4は、口縁部が欠損しており、縦半分が残存している遺存状態である。外面調整は頸部から肩部にヘラ状工具による三本の沈線はいる。肩部はヨコハケ、胴部下半は細かいタテハケ目調整が施されている。内面調整は頸部指押さえ、胴部は下から上方向のケズリ調整、底部は指押さえを行なっている。焼成は良



第21図 八龍235番地遺構配置図 (1/120)



第22図 1・2・3号住居跡実測図 (1/60)



好、色調は外面黄褐色、内面は黒色を呈している。

**小型丸底壺**（5・7） 5は口径11cmで、外面調整はナデ、内面調整はヨコハケとナデ。焼成は良好で色調は内外とも橙色。残存が悪く、全体の1/3ほどしか残っていない。7は口径8.8cm、外面調整は口縁部ヨコナデ、頸部以下は不定方向のハケ調整。整形時のタタキによる面が観察できる。内面調整は口縁部ヨコナデ、胴部は板ナデ調整を行なっている。焼成は良好、色調は外面灰黄色～橙色、内面暗灰黄色。

**高坏**（9） 短脚の高坏で、穿孔は直径6mmほどで2ヶ所確認されるが全部で3ヶ所施されているものと思われる。坏部との接合面は接着を考え刻み目が入れている。内外面調整ともに風化により不明。裾部径15cmで焼成良好、色調は内外ともに橙色。

**器台**（8） 小型の器台で、約1/2残存している。受部径7.8cm、器高9.1cm、裾部径8.3cmで外面調整は指押さえ、内面調整は絞り痕が残る。焼成はややあまく、色調は灰黄褐色である。

**手捏ね土器**（6） 口縁部が欠損している。表面調整は指押さえ痕と一部板ナデ調整を行なっている。胎土は細かく、焼成は普通。色調は内面褐灰色、外面にぶい黄橙色。

## 2号住居（図版9、第22・23図）

2号住居は北西部のコーナーのみ残存していた。住居の殆どは1号住居によって切られているが、出土遺物からはそれほど時期差は見られないようである。住居に伴う柱穴が住居の北東部分で確認できたが、それに対応する柱穴の確認はできなかった。南北方向に幅21cm、深さ9cmの周溝をもつ。小型の住居で東西幅2mほどである。

## 出土遺物（図版33、第23図）

**甕**（10） 口縁部のみ残っている。口径は18.2cmで口縁端部は平坦面をもちやや内湾する。外面調整はヨコナデ、内面調整はハケ調整後ヨコナデで、焼成は良好で色調は内外ともに橙色である。

## 3号住居（図版9、第22図）

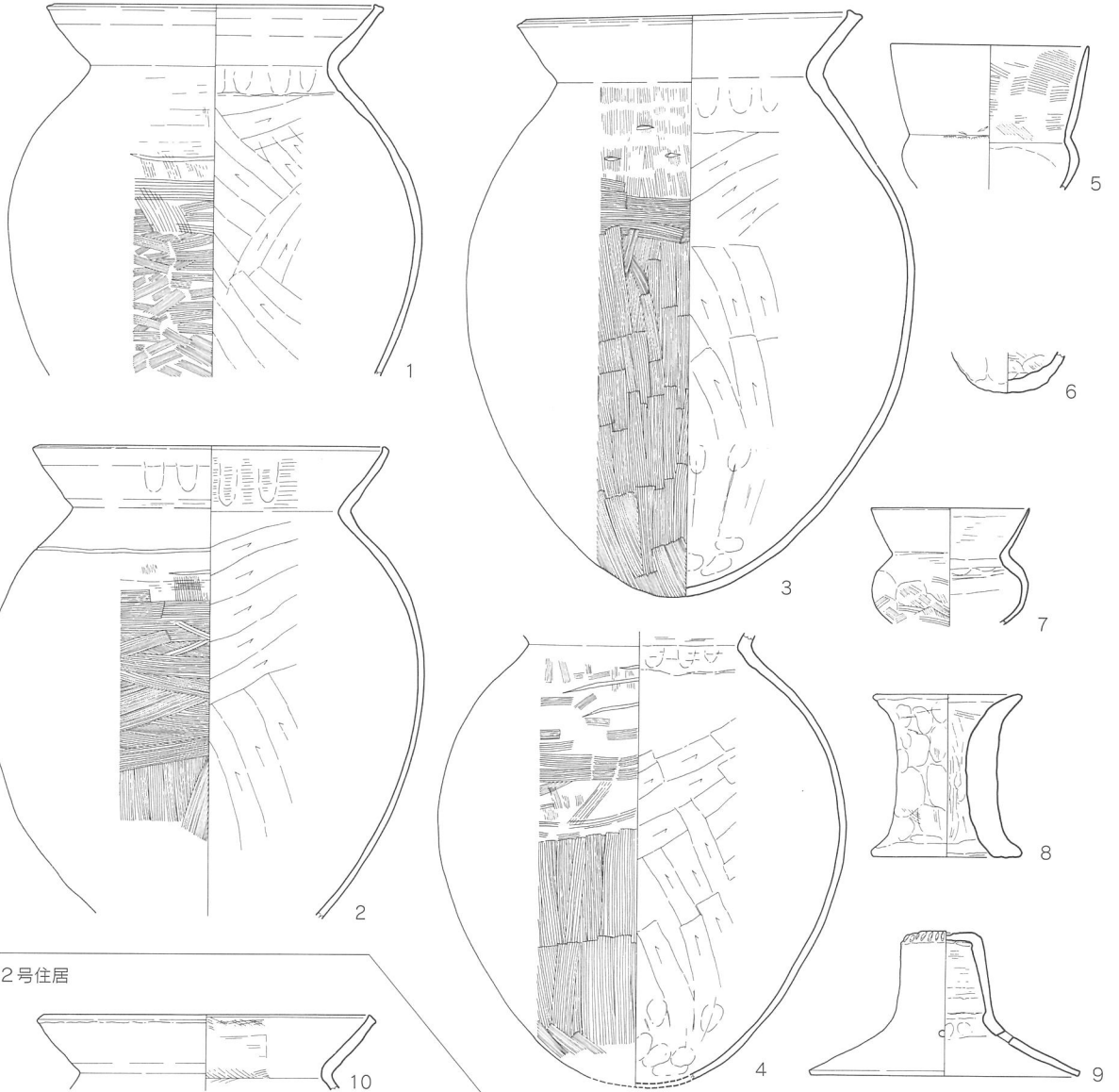
1号住居に東隅をきられるが、大半が残存していた。3号住居のみ北東側にベット状遺構をもつ。住居の大きさは南北方向に3.3m、東西方向に3.1mで、ベット状遺構の高さは約9cmである。住居の南角に土坑が検出され、その西側に盛土上の高まりを検出したが用途は不明である。出土遺物はその大半が床面からではなく、浮いた状態で検出しているため、遺構の時期を正確に示すものではない。

## 出土遺物（図版33、第23図）

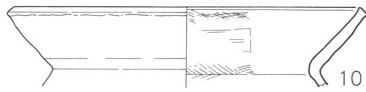
**甕**（13～16） 13は床面近くで出土している。口径11cmで内外面ともに横、斜め方向の粗いハケ調整が行なわれている。焼成は良好、色調はにぶい橙色である。14は床面近くで検出している。口径18.6cmで、外面調整は風化して不明、内面調整は頸部以下はケズリ、指押さえがみられる。焼成良好、色調は橙色である。15の口径は14.2cmで、外面はナデ調整、内面頸部以下はケズリである。焼成は良好、色調は橙色。16は口径16cm、外面調整は肩部ヨコハケ、内面調整は頸部以下はケズリ調整。焼成は良好、色調は橙色である。

**鉢**（11・12・17） 11は上層の埋土中より出土している。口径28.3cmで、外面調整は口縁部ナデ、胴部ハケ調整、内面調整は口縁部ハケ調整と放射状のヘラミガキを行なっている。12は口縁部およそ15cmで、外面調整は口縁部ヨコナデ、胴部斜め方向のハケ調整、内面は板状工具による調整がみられる。焼成は良好、色調は橙色～褐色である。17は口径9.4cm、表面調整はは摩滅していて不明で、焼成良好、色調は橙色である。

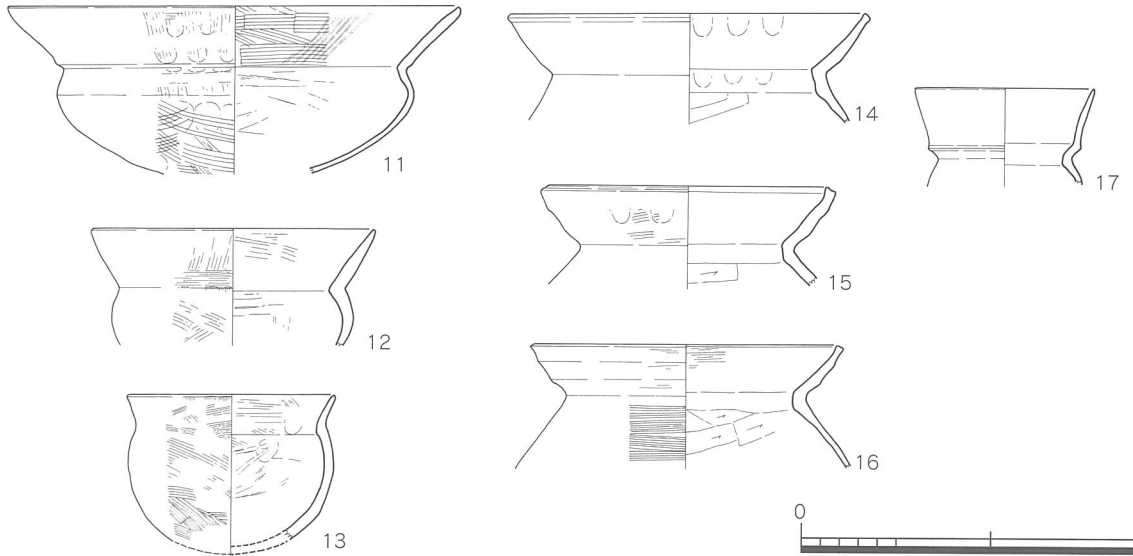
1号住居



2号住居



3号住居



第23图 1・2・3号住居出土土器実測图 (1/4)

## ②その他の遺構（図版11）

**石組遺構** 調査区の南西に幅約44cm、長さ約372cmの石組の溝状遺構が検出した。遺構はまず溝を掘り、その溝の両側面にそって河原石を2列に並べ、その上に蓋石をする構造になっている。底面には石を敷いていないので側面と上面だけ石に覆われている状態である。溝状遺構は北側には延びず途中で止まっている。南側には調査区外にさらに延びていくと思われる。

同じ構造の遺構は、北側の八龍地区234番地（南区）でも確認されている。出土遺物は実測可能なものがなかったが、近世の陶磁器細片が出土しているのでその時期の遺構と考えられる。

**17号柱穴**（第24図-1、第62図-15） 弥生時代後期の甕形土器口縁とともに、砥石が出土している。どちらも埋土中より出土している。

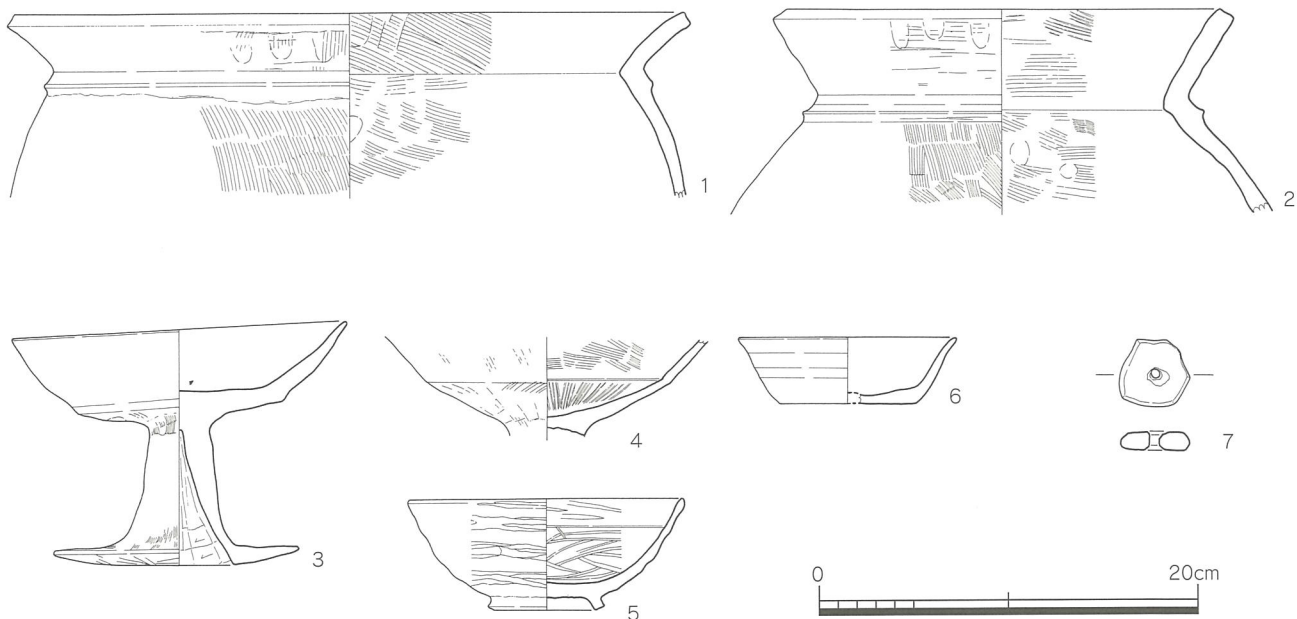
**90号柱穴**（第24図-3） 3号住居の東側面をきる柱穴で、隅丸長方形を呈している。深さは約30cmほどで、その底面近くに横たえた状態の完形の高杯が1点出土している。

**89号柱穴** 直径23cmの円形で、深さは16cmある。ほぼ底面から伏せた状態の瓦器碗が出土している。

### 出土遺物（図版34、第24・62図）

**甕** 1は17号柱穴の埋土より出土した頸部に突帯をもつ大型の甕形土器の口縁である。口径は35.4cmで、調整は内外面ともにハケ調整を行なっている。2は、92号柱穴の埋土から出土した甕形土器の口縁である。口径23cmで、器面調整は内外ともにハケ調整である。1・2ともに小破片である。

**高杯** 3は90号柱穴に埋置されていた高杯である。杯部分の屈曲が顕著で、脚部が柱状化している。口径は17.5～18cmで、外面調整は杯部分はヨコナデ、脚部はナデと細かいハケ調整が観察できる。内面調整は杯部はヨコナデ調整、脚部はシボリとケズリ調整が行なわれている。4は、高杯の杯部で脚部との接合部には接合のための刻みが残っている。外面調整はタテハケ後ナデ消し調



第24図 その他の遺構出土遺物実測図（1/4）

整を行ない、内面調整はヨコハケと、下半部は放射状のヘラミガキが施されている。焼成良好、色調橙色。

#### その他の遺物（5～7）

5は、89号柱穴から出土した瓦器碗である。口径14.4cm、器高5.8cm、底径6.1cmで外面調整はヘラミガキだが隙間が多く雑な磨きで終わっている。内面調整は不定方向のヘラミガキで隙間が多い雑な磨き方になっている。高台は貼り付けで、節合痕が明瞭に残る。6は須恵器の坏で土坑の上層から出土している。口径11.6cm、器高3.5cm、底径7.1cmで、焼成は普通で色調は灰色を呈している。7は、1号柱穴から出土した土器片再利用の紡錘車で縦2.6cm、横2.8cm、厚み7.5cm、重さ6.0gである。穿孔は焼成後穿孔で孔径3.5～4.0mm。焼成は良好だが、表面は磨耗しており詳細は観察不明である。

八龍235番地の調査区域は、川原川までわずかな距離の台地東側縁辺部にあたる。今回の調査では3棟の竪穴住居が検出しているが、寺口Ⅱ-17、八龍Ⅰ-7、八龍Ⅱ-18で行われた近隣の調査でも、同時期の住居群が確認されている。今回の調査によって、この周辺に古墳時代前期を中心とした集落が形成されていたことが再確認された。また、1号住居床面から出土した水晶製算盤玉は、八龍Ⅰ-18の1・2号土坑から出土したものと大きさ、形態ともに酷似している。八龍Ⅰ-18の2号土坑はおそらく埋葬施設であったと思われるが、三雲遺跡内での住居からの水晶の出土は今回の調査地点の他に、仲田Ⅰ-16から原石3個の出土例がある。算盤玉の形態の類似性と原石の採れる叶岳も近いことから、将来弥生時代終末～古墳時代前期にかけての玉造りの工房が三雲・井原遺跡周辺で確認される可能性も考えられる。

#### （4）小結

今回の八龍地区の調査成果は大きく分けて2点ある。まず、寺口Ⅱ-17地区で確認されていた大溝と同様の大溝が三雲遺跡の南東部端を一定区間巡ることが確認されたことがあげられる。両調査区で確認されている大溝の断面形態、埋没時期など類似している点が多く、おそらく一連のものと考えられる。遺跡南東部で、これまでの調査で確認された大溝の全長は約73mだが、寺口Ⅱ-17地区と八龍地区221番地の大溝が続くと考えると、弥生時代中期～後期にかけて、南東部を約170m以上にわたって北東～南西方向にむかってややカーブしながら巡っていたことになる。大溝の時期に関しては検討しなければならないが、下層、中層からは殆ど土器が検出されないことから、弥生時代終末～古墳時代前期には溝としての機能はなくなり、一気に埋められたと考えられる。おそらく最上層の土師器大量投棄の時期には大溝は窪み程度の痕跡で、近隣の住居が作られるのに伴い埋められていったと考えられる。

もう一点は、この大溝から南東側の台地の落ち際にかけては大溝の機能していた時期に伴う弥生時代の生活空間が見られないということである。以前の調査では、周辺から弥生時代中期～終末期にかけての箱式石棺墓、土壙墓、甕棺墓等の墓群が確認されている。今回の調査では墓群は確認できなかったが、以前の調査と同様に、弥生時代の住居址はなく、大溝の埋没後の古墳時代前期にかけての住居址が存在していた状況が確認された。

（牟田）

## 2. 三雲堺地区の調査

### (1) 247番地の調査

堺247番地は八龍221番地で確認された大溝の西100mに位置する水田である。221番地では大溝が東からS50°W方向に直線的に掘削されていたことから、大溝の延長方向の確認を目的として、水田を南北に縦断する幅3mのトレンチを設定し、遺構の確認を行った。調査は平成10年度に行なった。

水田下には中世遺構面があったが、トレンチ内で遺構を確認できなかったため、さらに下層の弥生～古墳時代の遺構面である礫を多く含む黄褐色砂質土層まで掘り下げた。

顕著な遺構は確認できなかったが、遺構面は北から南に向かってなだらかな下り勾配となり、調査地点の南は浅い谷地形であることが判明した。谷底はトレンチの南端よりさらに南側の市道下にあるものと推定された。

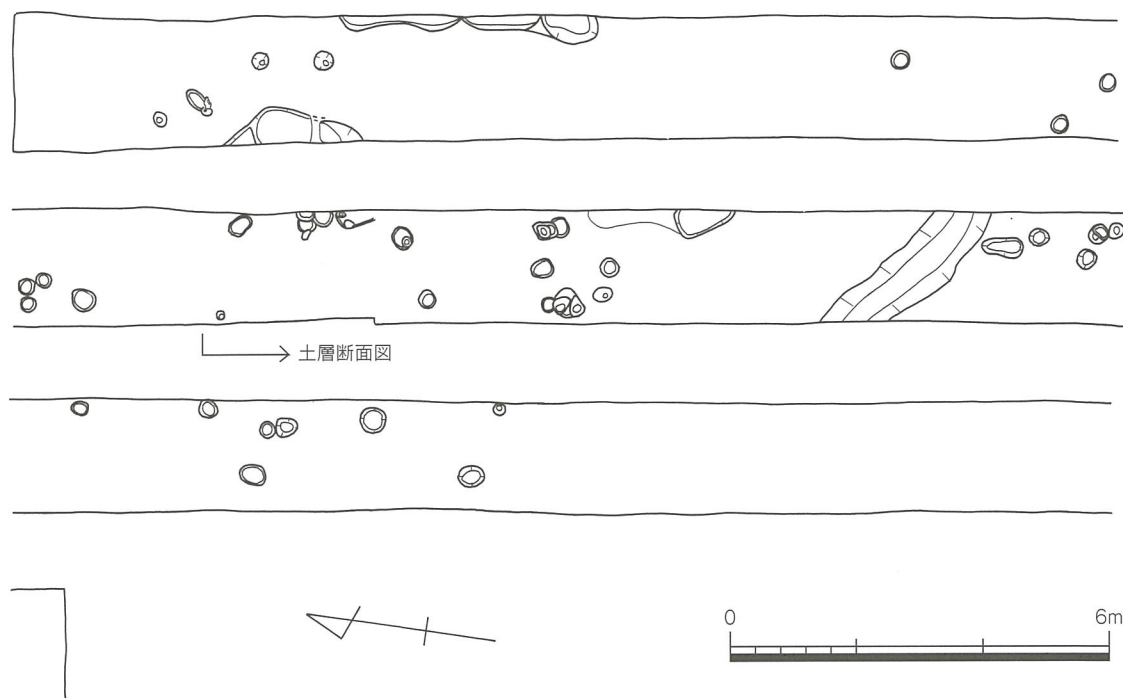
(角)

### (2) 253番地の調査

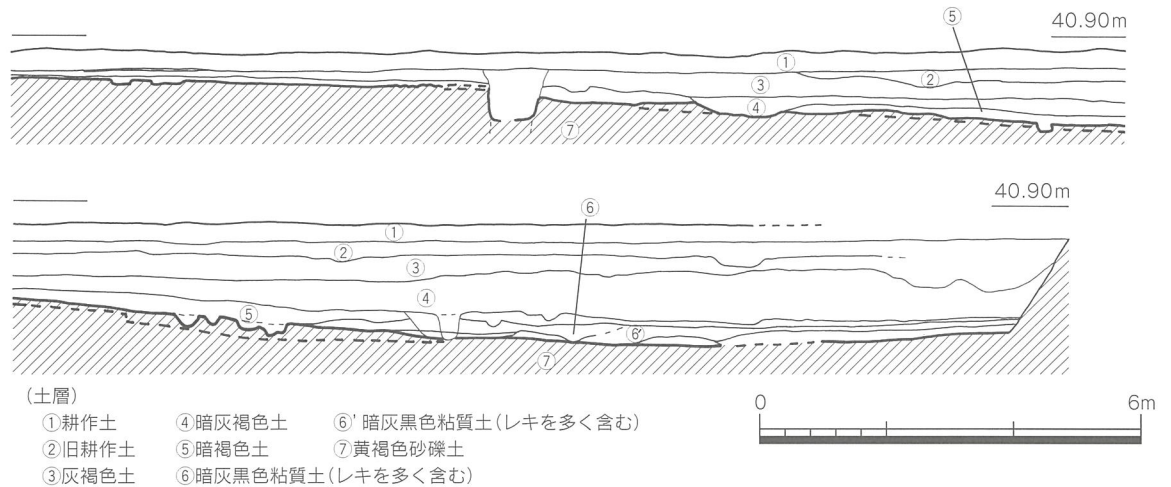
堺253番地は堺247番地の南に市道を挟んで隣接する水田である。

247番地で大溝が確認できなかったことから、大溝が向きを南に変えた可能性を想定して、水田を縦断する南北総長約60m、幅2mのトレンチを設定し、調査を実施した。

トレンチの南部は、標高42.2m前後で平端に整地されており、耕作土直下で地山面を検出した。南では顕著な遺構は確認できず、中ほどで小径の柱穴群を検出したが、いずれも浅く、整地によりかなり大きく削平を受けたことをうかがわせた。また、中ほどから北に向かって徐々に下り勾配とな



第25図 堺253番地遺構配置図 (1/120)



第26図 西壁土層断面図 (1/120)

り、247番地で確認した谷の南岸を確認することができた。谷はトレンチの北端から南3mで標高40.9mの最も深い地点となり、そこから北に向かって少し浅くなっている。

4層下には平安～鎌倉期の遺構面があり、柱穴、溝遺構を検出した。1号溝は幅90cm、深さ30cmほどの断面が逆台形の浅い溝である。

5層下が弥生～古墳時代の遺構面で黄褐色砂質土層の地山となる。わずかにPitが点在する程度であった。調査範囲もせまかったため、Pit群の性格は不明である。地山直上で古式土師器片が出土している。

3層には弥生～中世の遺物を包含しており、須玖式成人甕棺の口縁片、古墳時代前期の大型甕棺片などが出土した。おそらく削平された南部の高所に当該期の甕棺墓が分布していたものと推定される。しかし出土量は少なく甕棺墓は密に分布していたわけではなさそうである。土器はいずれも小片のため、実測はしていない。

また、同層からは完形の鑄造鉄斧が出土している (第65図-11)。弥生時代墳墓の副葬品であった可能性もある。

(岡部)

### (3) 248・249番地

調査地点は平成10年度の調査で大溝が確認された八龍221番地の南約50mに位置する。大溝の続きを確認する目的で平成11年度に発掘調査を実施した。標高は40mをはかり、現状は畑であった。周辺では昭和50年代のは場整備に伴う調査で、南側の水田 (堺Ⅱ-30～32) から弥生前期の土壙墓、同中期の木棺墓、甕棺墓が検出されている。

調査区では八龍221番地で検出された大溝の方向から考えて、西側を中心に幅1.5mのトレンチを「口」字型に設定した。東トレンチでは深さ60～70cmで黄褐色砂質土の地山が検出された。また南トレンチではそれよりやや浅めで同じく地山が検出された。北トレンチでは西側に行くに従い徐々に地山が下がっており、西端が最も深くなっていた。西側トレンチでは北に行くに従い徐々に地山が下がっており、北端が最も深くなっていた。よって調査区の東から南側が高く、北西端が最

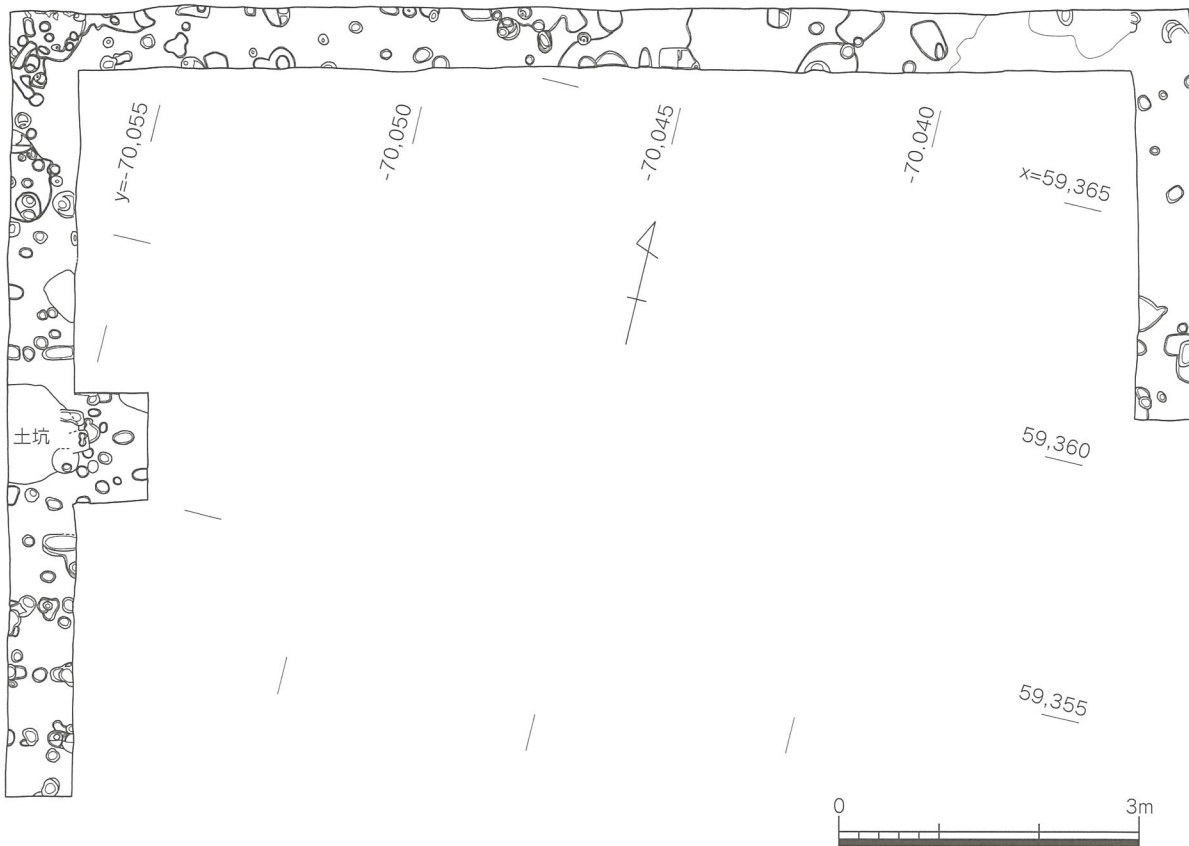
も深くなっていた。この部分の深さは1.5mであった。北西端付近では地山が砂礫を多量に含む暗茶褐色土に変化していた。遺構は地山面でピットをわずかに検出しただけで、大溝は検出されなかった。南トレンチを除き地山の上層には弥生土器片、土師皿片、陶磁器片等を含む包含層が3～4層存在したが、遺物の出土量は少なく、いずれも細片で図示できない。

調査地点は東から南が高く、北西側に向って落ち込み状の地形となっていることがわかった。しかし、この落ち込み状の地形は弥生～古墳時代ころすでにそうであったのか、あるいはその後の開発または造成により、落ち込み状となったのかは不明である。 (角)

#### (4) 281-1番地の調査

調査地点は水田であったが、住宅の建設が計画されたため遺構の確認を行った。なお、付近からは昭和50年代のほ場整備に伴う調査で、西側の畑(堺I-13)から古墳前期の甕棺墓が、北側道路(堺I-6～8)の調査では弥生終末期の甕棺墓、石棺墓、中世の集石、ピットが検出されている。確認調査は平成8年度に実施した。住宅の基礎は盛土内におさまり、遺跡は保存されている。

調査地点は標高43mをはかる。建物の建設予定をもとに、幅1.3mのトレンチを「コ」字型に設定した。約50～70cmの盛土を除去すると中世の遺構面が検出された。遺構は土坑1基とピットが多数であった。西トレンチでは約50cmの盛土を除去すると暗黄褐色砂質土の地山が検出されたが、北トレンチでは東側にゆくに従い地山が徐々に下がって暗褐色土層がかぶっていたが、これが遺構



第27図 堺256番地遺構配置図 (1/150)

面となっていた。

土坑は西トレンチの中央部で検出された。幅2m、長さ1.4mを検出したが、西側は調査区外に広がっていた。深さは約20cmであった。一部を掘り下げたのみであるが、埋土からは土師皿の細片が出土した。ピットからは土師皿や弥生土器などの細片が出土した。建物になるような配置を取るものは確認できなかった。その他遺構検出に伴って土師皿や弥生土器などの細片が出土した。遺物は少なく、いずれも細片で図示できるものは無かった。

調査地点からは弥生土器の細片が出土していることから、弥生～古墳時代の遺構の存在が予想される。ピットの中にはその時代のものである可能性が考えられる。また東トレンチでは一部を掘り下げて地山の確認を行ったが、約1m掘り下げても地山は確認できなかった。これについては、弥生～古墳時代ころにすでに落ち込み状となっていたのか、あるいはその後の開発または造成によりそうなったのかは不明である。(角)

## (5) 小結

堺地区では寺口～八龍地区で検出した大溝の性格、延長方向を確認するため、想定される延長方向にあわせてトレンチを設定して遺構の確認を行なったが、これまでの調査では大溝は八龍221番地より西側で、その消息が途絶えたままとなっている。247、253番地で南北に100mのトレンチを設け遺構の確認を行ったが大溝は確認できていない。わずかに現市道下に10mほど未調査区を残すが、道路下はまさに東からのびる谷の底にあたり、247番地では弥生～古墳時代の遺構が全く検出されなかったことも考え合わせると、ここから大溝が検出される可能性は極めて少ない。谷は253番地付近で長さ40mほどを計り、さらに東に延びて、八龍Ⅱ-10調査地点の南を通って赤崎川の氾濫原へと抜けるものと推定される。現水田面からの深さは1.4mほどで、大溝が八龍221番地から西に延びていても、谷に面し、そこで途切れている可能性もある。溝がさらに延びているとすればその延長方向はかなり絞られてきたことになる。

これまで、八龍～寺口地区の大溝が三雲・井原遺跡集落域の南東部の区画を目的として掘削されたことを想定して調査を進めてきた。しかし、溝が現確認地点から西に大きく展開していないとすれば、未調査区内で終息しているか、あるいは南北いずれか直角方向に大きく屈曲している可能性も考慮すべきかもしれない。そうなれば、集落域を規定する区画溝ではなく、集落内の小区画、墓域の区画溝である可能性もある。今後はこのような他の機能も想定した調査を進める必要がある。

また、谷によって集落域が南東端の区画されていた可能性もある。谷の形状・範囲など旧地形の復元も含めた確認調査も必要であろう。(岡部)



### 3. 宮ノ下地区の調査

宮ノ下地区の調査は、宮ノ下284～286番地、291番地を平成13年10月2日から約4ヶ月間調査を行なった。調査目的は八龍221番地で確認されている大溝がその西側の堺地区の調査で確認されなかったことから、北西側へ大溝が方向を変えた可能性を考えて調査を行なった。

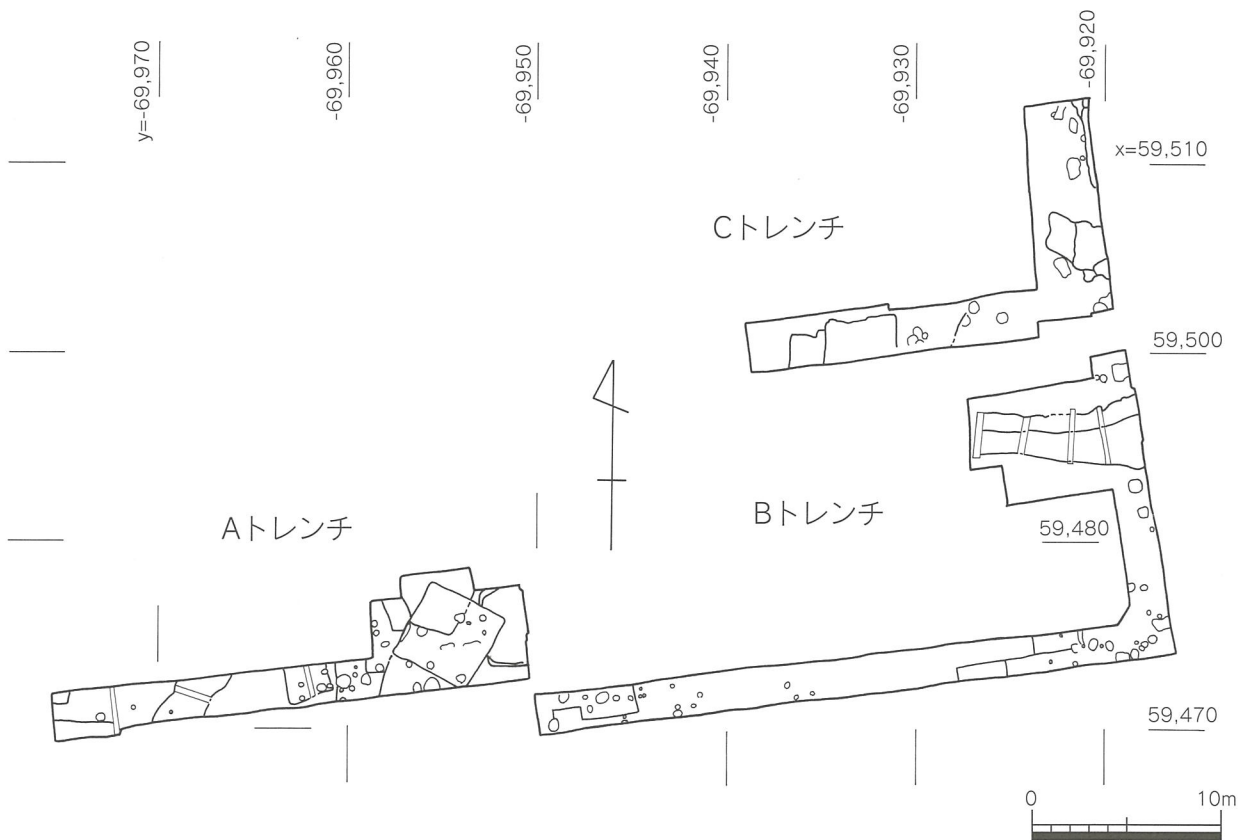
調査区は全部で3ヶ所設定し、西側の286番地にAトレンチ、284・285番地にはBトレンチ、北側の291番地にCトレンチをそれぞれ設定している。B・Cトレンチは東西、南北方向にL字状に調査区を設定した。

宮ノ下地区では大溝に関する遺構は検出しなかったが、主な遺構として、Aトレンチでは弥生時代終末～古墳時代前期の住居跡、土坑、鎌倉時代の木棺墓等を検出した。Bトレンチでは、古墳時代初頭の祭祀土坑、中世の溝状遺構を検出し、Cトレンチでは弥生時代の住居跡を検出した。

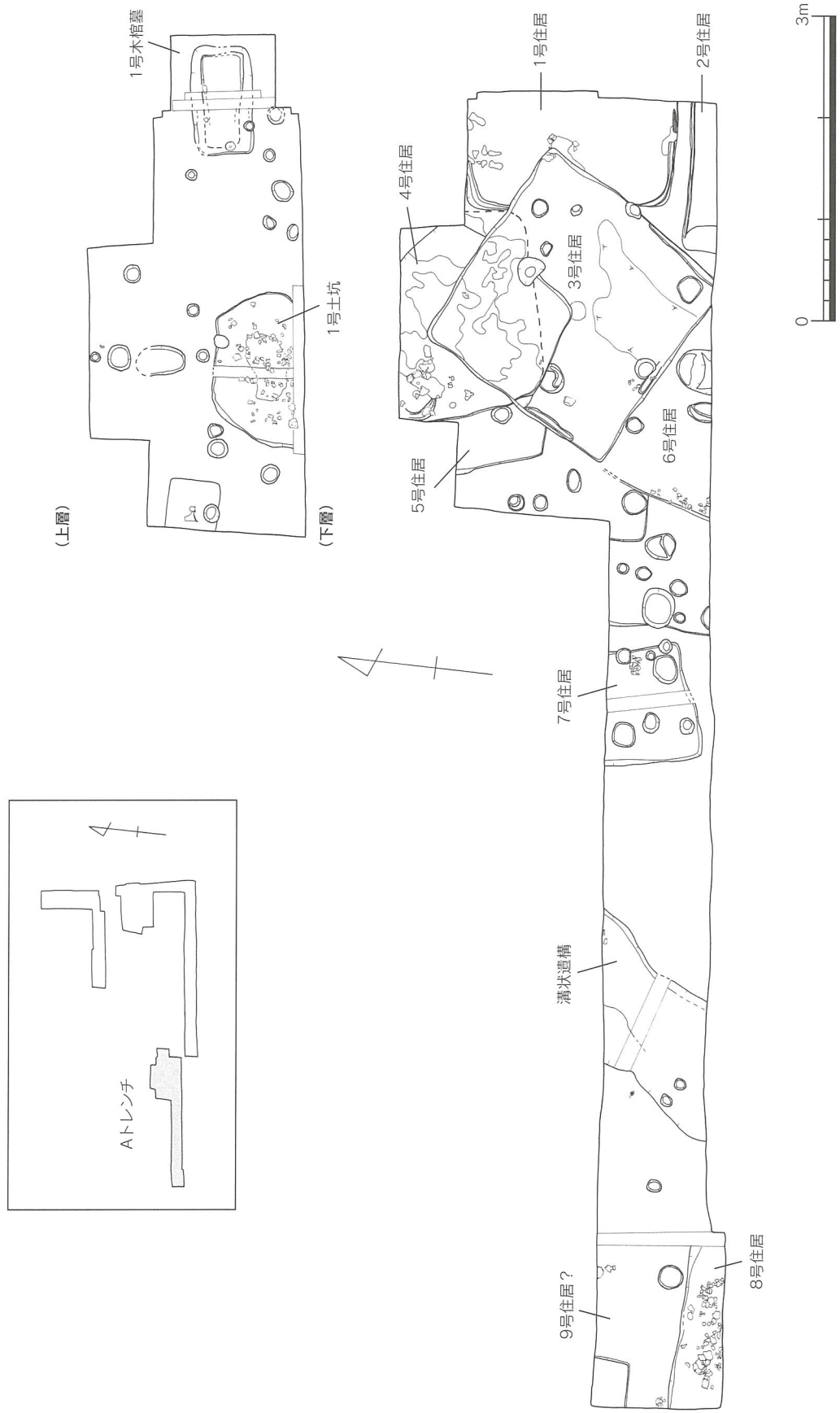
以下、各トレンチの報告を行なう。

#### (1) Aトレンチの調査

トレンチは、はじめ2mの幅のトレンチを東西方向に25mの長さ入れたところ、住居群を確認したため、住居の時期や形態を把握するため調査区を北側に約3m、長さ8.5m拡張して調査を行なった。主な検出遺構は、古墳時代前期を中心とする竪穴住居8軒、同時期の土坑1基、中世の木棺墓1基である。



第28図 宮ノ下地区遺構配置図 (1/400)



第29図 宮ノ下地区Aトレンチ遺構配置図 (1/120)

## ①住居跡

### 1号住居 (図版13、第30図)

調査区東端で検出した、3号住居に切られるやや隅丸方形の住居である。平面プランから3号住居よりやや古い時期の住居と考えられる。東半分は調査区外のため全体の大きさは不明だが、南北方向は約4mである。殆ど床面しか残っておらず、住居の中央と、南北両方の壁側中央付近に周溝を切って焼土塊と一部炭が集中している。中央部分に炭と焼土が集中していたので、炉跡ではないかと思われる。周溝は全体に廻らしていたものと考えられ、幅8cm～16cm、深さ8cmほど残存していた。最初にトレンチを入れた南半分は若干掘り下げてしまい、本来の床面より低くなってしまった。

出土遺物は炉周辺から細片が出土したものの、図化できるものがなかった。

### 2号住居 (図版13)

調査区の南端で一部床面を検出した。幅6cm、深さ4cmの周溝が東西方向に確認できたが南北方向は確認できなかった。住居全体の大きさ等も調査区外にあたり不明である。出土遺物は無く、時期は不明だが周辺の住居と同時期のものと考えられる。

### 3号住居 (図版13、第30図)

調査区内で一番大きな住居で、440×430cmのほぼ正方形のプランを呈する。壁面は残りのよいところで28cmほど残っていた。東側は残りが悪く床面のみである。周溝は南側コーナーと西側に、一部観察できる。幅約14～20cm、深さは床面から8cmほど残っている。

床面はほぼ平坦で、貼り床等はなかった。床面の地山は黄色の砂質土だが、一部粘質で鉄分の塊を含んだ暗褐色の土質の広がる部分を南側床面で確認したため、カクランとして掘り下げたが遺物も全く出土しなかった。住居に伴う柱穴は7ヶ所確認したが、柱として並ぶものはなかった。住居の中央に焼土塊があり、炉跡と考えられる。

出土遺物は殆ど無かったが、床面より若干浮いた位置で2点、椀と台付皿等が出土している。

### 出土遺物 (図版34、第32図1・2・6・7・18・19)

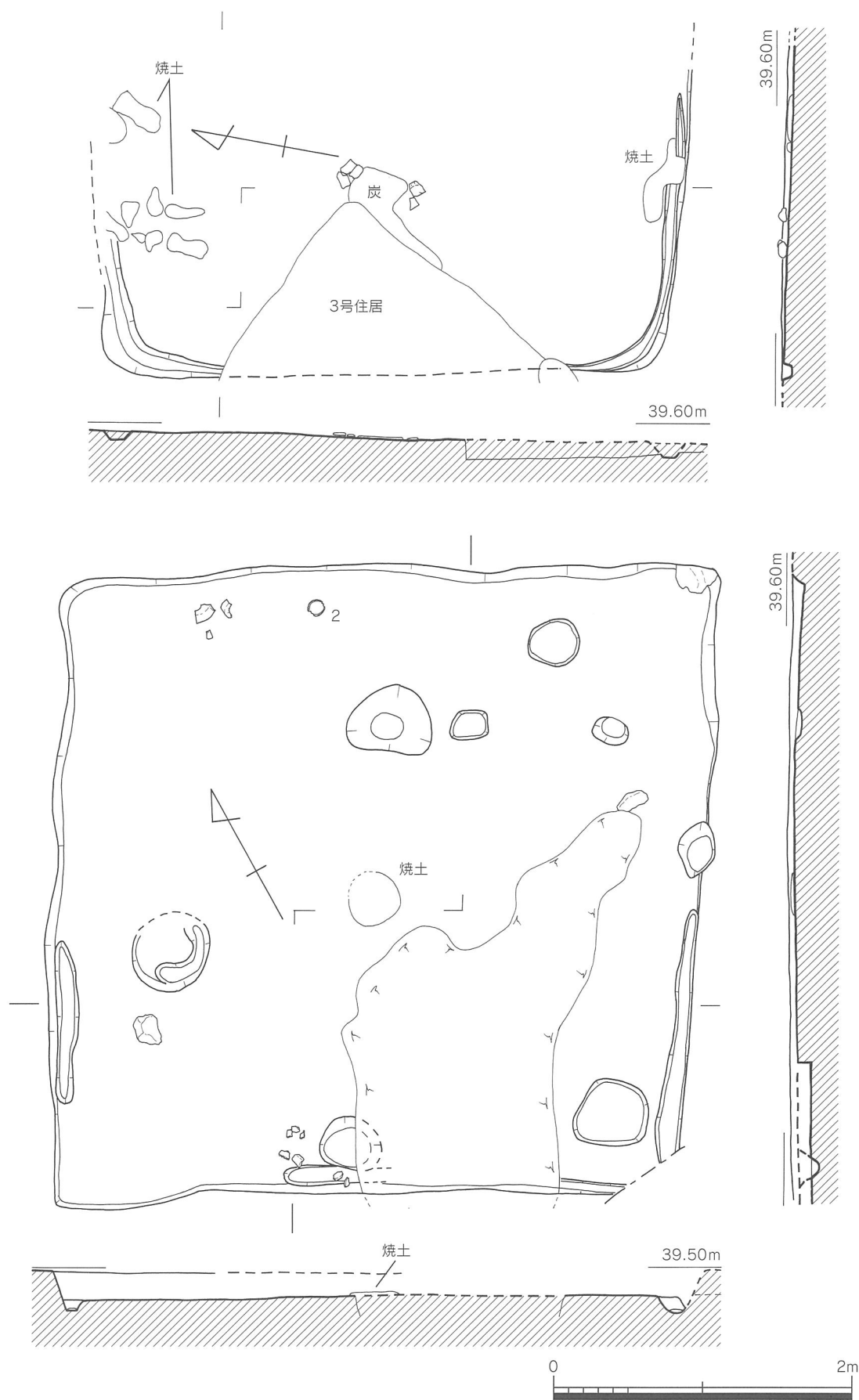
1は、椀である。住居北側から床面より若干浮いた状態で出土した。器壁が大変薄く、器面内外面ともに風化が激しく調整観察はできない。口径16.4cm、器高5.7cmで半分ほど残存している。胎土は1～2mmの長石、石英とわずかに金雲母を含む。焼成はやや不良、色調は黄褐色である。

2は、台付皿で、ほぼ床面から検出した。大変器壁が薄く表面の風化も激しい。口径9.7cm、器高9.7cm、脚台径3.9cm。胎土は金雲母を多く含み、1～2mm程度の長石を含む。焼成は不良、色調は淡黄褐色である。

4は高坏で、3号住居の床面から出土した。口径6.7cm、口縁部にやや煤が付着している。内外面ともに風化が激しく器表面の調整観察が難しいが、若干放射状の細い暗文が観察できる。胎土はわずかに金雲母を含み、1mm程度の長石を含む。焼成は良好、色調は淡赤褐色である。

6は甕で、床面からの出土である。口径18.1cm、内外面ともにナデ調整である。

7は鉢で、口径10cmで、底部をやや欠損するが若干底部をもつ小型の鉢である。外面に型押しで成形した際のひび割れ状の痕跡が見られることから、型押し成形と考えられる。内面は細い工具による搔きあげ痕がみられ、上半は胴部から口縁部へ、下半部は底部から口縁方向へ調整を行なっている。



第30图 1 · 3号住居跡実测图 (1/40)

18・19はともに3号住居の埋土上層から出土した遺物である。18は、小型の甕で口縁部はほぼ直立ちかく立ち上がり、底部を欠損している。口径12.1cmで、内外面ともに上半はハケ調整、下半はケズリ調整を行なっている。胎土は1mm大の砂粒を含み、色調は暗褐色、焼成は良好である。外面に煤が付着している。

19は、器台で、器高13.7cm、受部径8.2cm、脚部径12.2cmで、内面はナデ調整、外面はヨコナデとケズリ調整を行なっている。

#### 4号住居 (図版14、第31図)

3号住居に切られる住居で、3号住居の床面下に4号住居の床面が残っていた。この住居は床面部分一面に焼土の塊が広がっていて、3号住居に切られていないところでは焼土の厚みが10cm前後堆積していた。焼土の下には、炭の層が薄く堆積していて層状を呈していた部分もあった(図版14、第31図)。断ち割った部分では、炭の層と地山の黄色砂質土に若干炭が混ざった層が交互に、深さ約16cm堆積していることが確認できた。焼土の分布範囲はほぼ床面全体だが、特に土器の集中していた北西部分に顕著だった。焼土周辺、及び焼土内の土を水洗してみたが、焼土の意味を考える上での情報は得られなかった。焼土の無い床面部分には、炭が薄く堆積していた。

住居の平面プランは、当初3号住居の床面を検出した時点で4号住居の床面とほぼ同じレベルであったため、南側の壁面の認定が難しかったが、焼土の分布範囲からほぼ方形のプランが想定される。また、調査区隅の北西部には焼土塊の集中と、烏帽子形支脚や土器が出土している部分があり、その焼土の塊を一部持ち帰り洗浄してみるとそれも烏帽子形支脚一部(第32図16)であったため、おそらくこのあたりに炉があったのではないかと考えられる。ここから土器のほか自然石も出土しているが、焼けた痕跡のあるものが数点確認できた。北西部に固まって出土した土器は、烏帽子形支脚2点のほか、甕形土器1点、鉢3点、高坏3点、脚付甕の脚部1点である。それぞれ焼土の中に埋もれた状態で検出した。

また、その他の遺物として、焼土内より小型の鉢(第32図11)、無茎磨製石族1点、床面より粘板岩製小型の仕上げ砥石1点、鉄製穂摘具1点が出土している。石器と鉄器に関しては、後のページでまとめて報告している。

住居内の焼土に関してだが、分厚い焼土層のほかに炭化材等家屋の火災に伴う痕跡は見られなかったが、床面全体に焼土層が確認できる状況を考えて火災等でできた可能性も考えられる。今後近隣からの類例を待って、検討を行ないたい。

#### 出土遺物 (図版34、第32図3・8～17・20)

3は、北西隅の焼土内土器群内からバラバラの状態で見出した。上半部は全周残っているが、下半部は全く残っていない状態である。口径23.2cm、残存高27cm、器壁の厚さは一律に5～6mmある。外面調整は口縁部から胴部上半までは粗い縦方向のハケ調整で、胴部に若干叩きの痕跡が残る。下半部は細い板状工具による削り状のナデツケを行なっている。内面調整の口縁部は細いヨコハケで、胴部は粗めの斜め～縦方向のハケで、調整方向は底部から口縁部方向である。胎土は金雲母を多く含み、1～4mm大の長石、石英粒を多く含み、角閃石も混入している。焼成は良好、色調は淡赤褐色～淡黄褐色である。

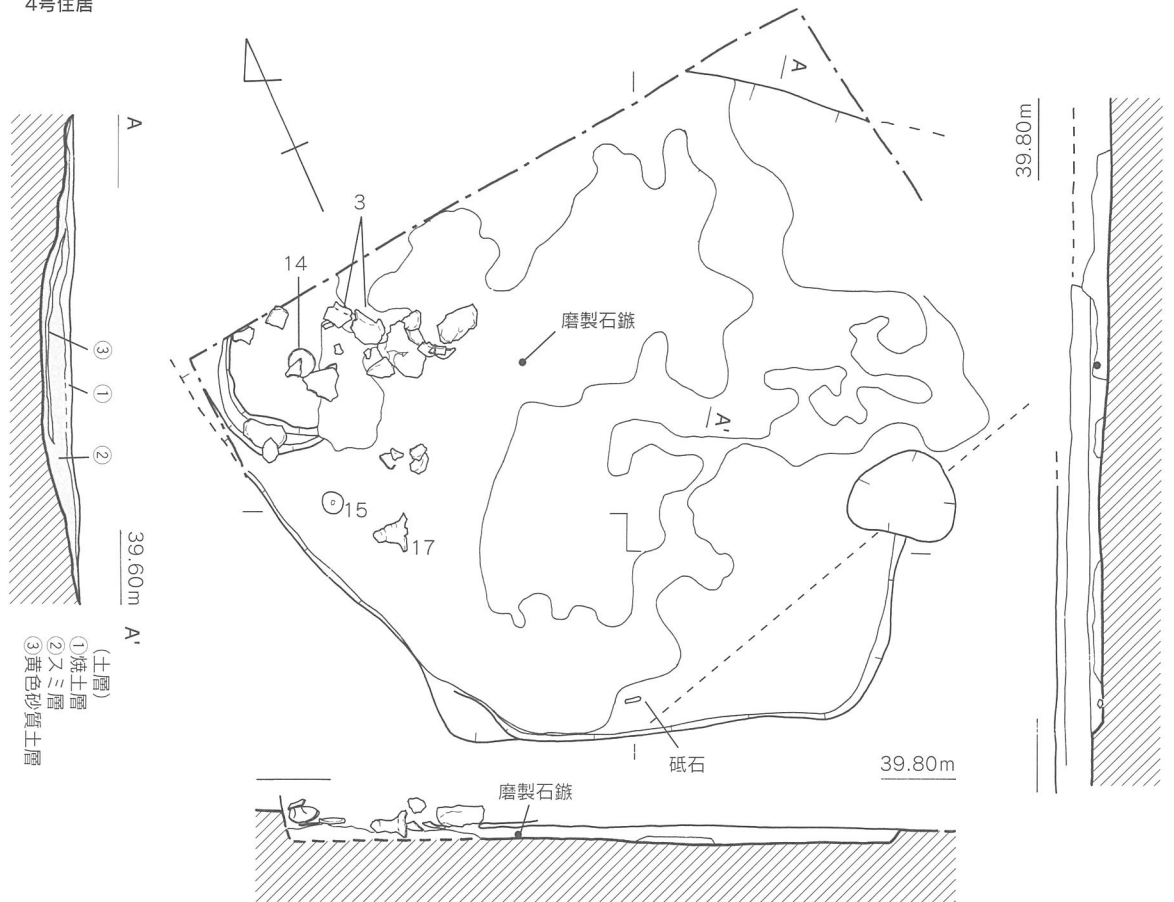
8～11は鉢である。8～10は北西隅の焼土内土器群からで、11は床面焼土中より出土した。

8は、器壁の厚いしっかりしたつくりで、口径16.3cm、残存高4.3cmである。外面調整は細い縦

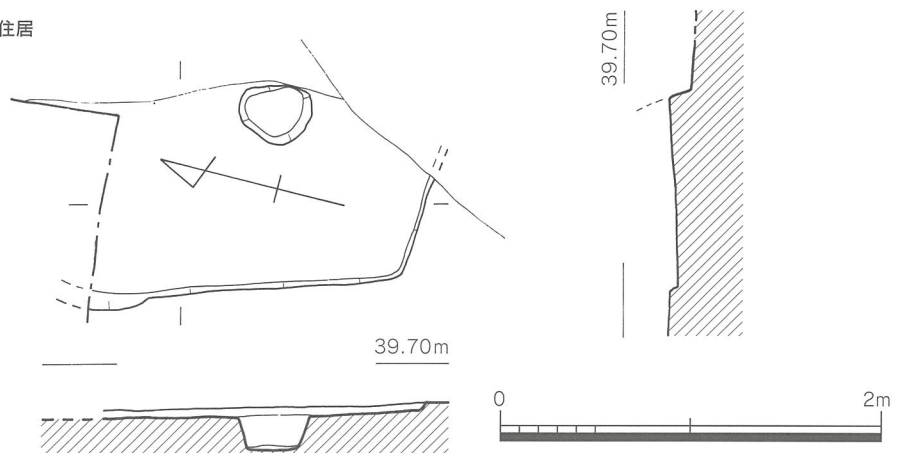
方向のハケ調整後、上半は横方向のケズリ、下半は縦方向のケズリ風のナデツケを行なっている。内面調整の口縁部は指押さえより成形しており、ややいびつで、胴部は横方向の細かいハケ調整を行なっている。外面には黒斑が残る。残存が1/6ほどなので、写真には表示できなかった。

9は器壁が厚く、型押し成形で作られた鉢である。口径14.0cm、器高7.9cmで、底部は凸状になっているがやや平坦面をもつ。外面調整は型押し成形によるヒビ状の痕跡がみられる。内面調整は指押さえによる全体の成形後、上半はハケ調整、底部は指圧痕がそのまま残っている。胎土は1～3mmの長石、石英、金雲母を含み、焼成は良好、色調は赤褐色である。黒斑が外面下半にのこる。

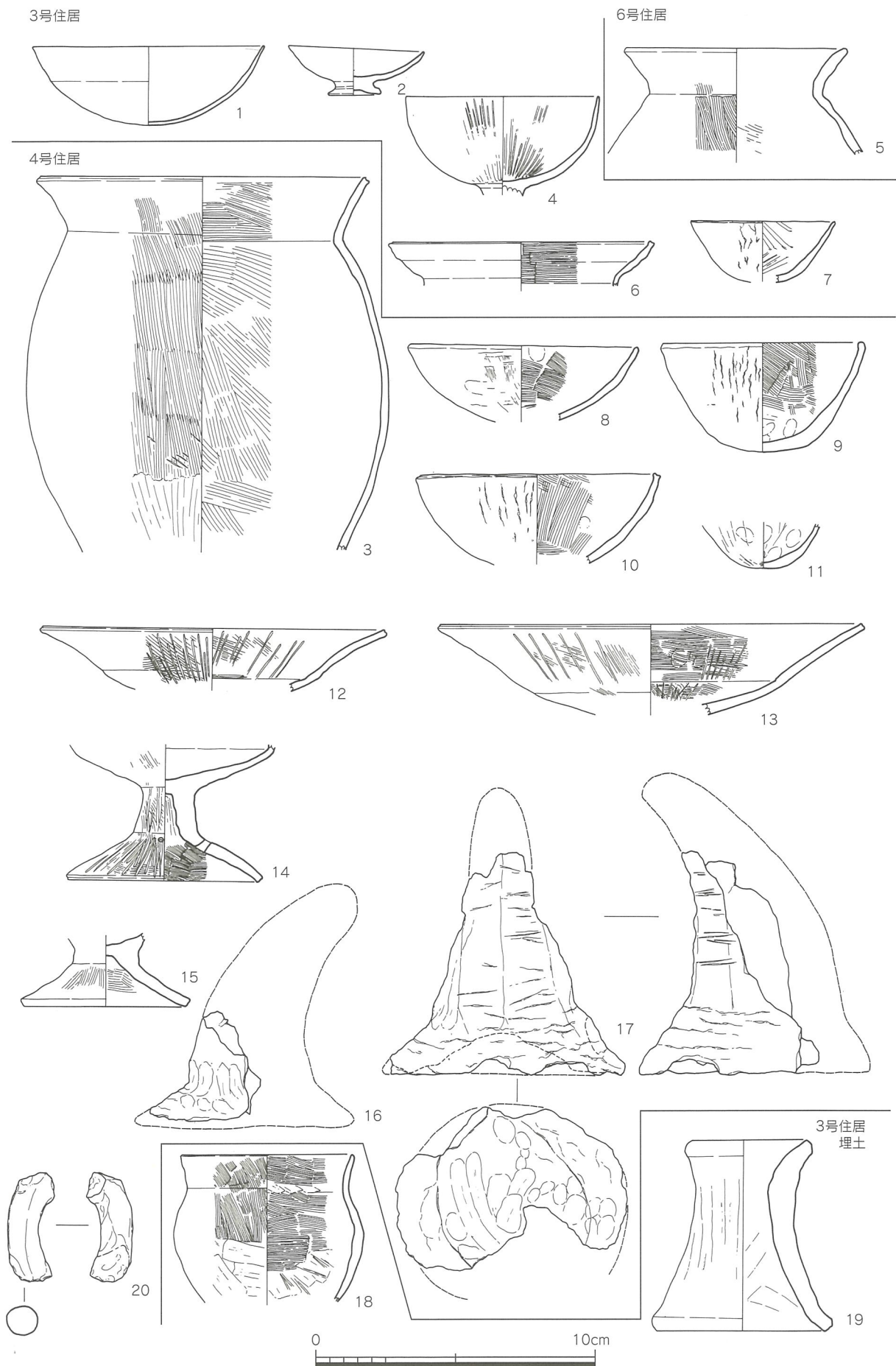
4号住居



5号住居



第31図 4・5号住居跡実測図 (1/40)



第32图 3·4·6号住居跡出土土器実測図 (1/4)

10は、口縁の広い厚みのある鉢で、9と同じく型押しによる成形を行なっている。口径は16.6cm、残存高6.2cmで、口縁部は平坦面をもつ。外面調整は型押しによるヒビ状の痕跡が残っているが、底部付近はヨコナデを施している。内面は斜め方向のハケ後、縦方向の粗いハケ調整を行なっている。胎土は1～3mmの長石、石英、角閃石を含む。焼成は良好、色調は淡黄褐色である。

11は、手捏ねによる成形で、若干の底部平坦面をもつ。口縁部は欠損しており不明。調整は、内外面ともに指押さえによる成形である。胎土は精良な胎土を使用し大きめの砂粒は含まれていない。焼成はやや悪い。

12～14は高坏である。すべて調査区北西部の焼土内土器群からの出土である。

12は、口径24.2cmの坏部で器壁は約5mmあるしっかりとしたつくりである。外面調整は粗いヨコ、ナナメ方向のハケ後細かい暗文を放射状に施している。内面調整はナナメ方向のやや細かいハケ調整後外面と同様の細かい暗文を施し、接合部分をヘラ状工具で横方向にナデている。胎土は金雲母を多くみ、1～3mmの長石、石英を含む。焼成は良好、色調は明褐色である。

13は大型の高坏で、口径が30.2cm残存高は6.5cm、器壁が7mm前後とやや分厚い。外面調整は細かいヨコ、タテハケ後細かい暗文を等間隔で放射状に施している。内面は指押さえ後細かいヨコハケを施し、最後に細かい暗文を施している。暗文は明瞭には残っていない。胎土は1～3mmの長石、石英を含み、焼成は不良、色調は明赤褐色を呈している。

14は、脚部径13.5cm、残存高9.8cmで、焼成がよく作りのきれいな高坏である。脚柱部は短くやや開く。脚部には焼成前穿孔が等間隔に3ヶ所施されている。坏部は接合部から上側を欠損する。外面調整は全体を粗いハケで調整した後脚部に縦方向の暗文を施している。内面調整の脚柱部分は絞り痕、脚裾部は横方向の細かいハケ調整を行なっている。

15は、脚付甕の脚部で、表面に煤が付着している。器壁が厚く、平均して7～8mmの厚さがある。脚径11.6cm、残存高5.3cmで外面調整は粗いタテハケで、内面も横方向のハケ調整を行なっている。胎土は金雲母を多く含む精製された胎土で、焼成は良好。

16、17は烏帽子形支脚で、ともに北西部土器集中部分からの出土である。体部はともに中実である。16は当初焼土塊と思っていたが、持って帰り洗浄してみると烏帽子形支脚の一部（脚部）であった。

16は火を受けたせいか大変脆く、水で洗うだけでぼろぼろと壊れてしまう。表面は指押さえ痕と、ナデ痕しか確認されていない。成形は手捏ねで行なわれたと思われる。胎土には長石、金雲母、石英がみられやや粗い胎土である。色調は赤褐色である。

17は約1/2ほど残存している。16よりも脆くはないが、水洗いで崩れてしまう。裾部裏面は凹状に窪んでおり、接地面は3.5cmほどの平坦面をつくり安定性をもたせている。体部は縦方向に面取りを行なっており、ヘラ状の工具で横方向に器面調整をおこなっている。裾部分は指押さえ痕や、ヒビ、シワ状の痕跡が残っている。裾部分に煤が多量に付着している。胎土は石英、長石の大粒のものを多量に含んでいる。焼成は悪く、色調は赤褐色を呈す。

20は、4号住居の埋土上層から出土した。把手状の土製品で、ややひねりが入った形態をしている。断面径は、2.0～2.2cmのやや楕円形で、残存長7.8cm。胎土には石英、長石細粒が大量に含まれ、焼成は良好である。色調は灰黄色である。

遺物は、ほとんどが欠けた状態で出土している。床面直上から出土しているものの、散乱した状



態で出土し、完形のものはなかった。

#### 5号住居（図版14、第31図）

5号住居は3号、4号住居に切られ、住居の南西部コーナーのみしか残存していない。床面近くで炭化材の破片が数点確認されている。ほとんど床面しか残存していない状態で住居の壁も2cmほど残っているのみで残りが悪い。住居に伴う柱穴が1ヶ所確認した。柱穴の直径は35cm～40cmほどである。出土遺物は図化できる物はなかった。

#### 6号住居（図版13）

西側の壁面のみ確認されており、出土遺物も壁面周辺にいくつかまとまって出土している。ほとんど甕の口縁ばかりであったが、図化できたものは1点のみで（第32図-5）1～5号住居よりも時期が新しい。

#### 出土遺物（第32図-5）

5は、甕形土器で器壁の厚い頑丈な作りのものである。口径はやや小さくて15.4cmである。口縁は立ち上がり気味に外反し、口縁端部はやや丸みを持つ。器面調整は外面タテハケで、内面は口縁部ヨコナデ、胴部はハケ調整である。

#### 7号住居（図版13、第33図）

東西とレンチのほぼ中央に位置する、平面方形プランの住居跡である。東西方向2.2m、南北方向は調査区外になり大きさは不明だが現況では1.8mまで確認されている。規模が大変小さいが現在のところ住居と考えている。床面は、貼り床等は無く、周溝も確認できなかった。住居に伴う柱穴は西側に2ヶ所確認できた。

住居の東側壁で、甕が一個体床面に貼りついた状態で検出している。

#### 出土遺物（図版35、第34図-5）

5は、甕の上半部分で胴部がかなり張る形をしている。口縁端部を内側にやや摘み上げている。口径20.0cm、残存高16.1cmで、外面の調整は口縁部ヨコナデ、頸部から肩部は細かいタテハケとヨコハケ、胴部中位は粗めのハケで底部方向から口縁部方向へかきあげている。肩部に、3ヶ所刺突文がある。列点文のように周囲を巡るかは不明だが、八龍235番地や八龍I-18など三雲遺跡の他の地点で確認されている類例から、一部分のみ施すタイプの刺突文と考えられる。

内面調整は底部から頸部方向へのケズリ調整を行なっている。胎土は金雲母を多く含み、微細な長石も含む。焼成は良好で、色調は外面淡赤褐色で、内面は淡赤褐色～黒斑による黒色を呈している。

#### 8号住居（図版14、第33図）

東西方向のトレンチ最西端で検出した住居で、さらに南側に続くと考えられるが、細石神社の参道下に入るため今回は住居の北壁を検出するのみとなった。表土から耕作土を取ると直ぐに遺構が検出され、床面全体に遺物が重なるようにして検出した。遺構の遺存状態は非常に悪く、床面が辛うじて残っている程度である。そのため、遺物の残存状況も悪く、住居の状況など詳細は分からなかった。

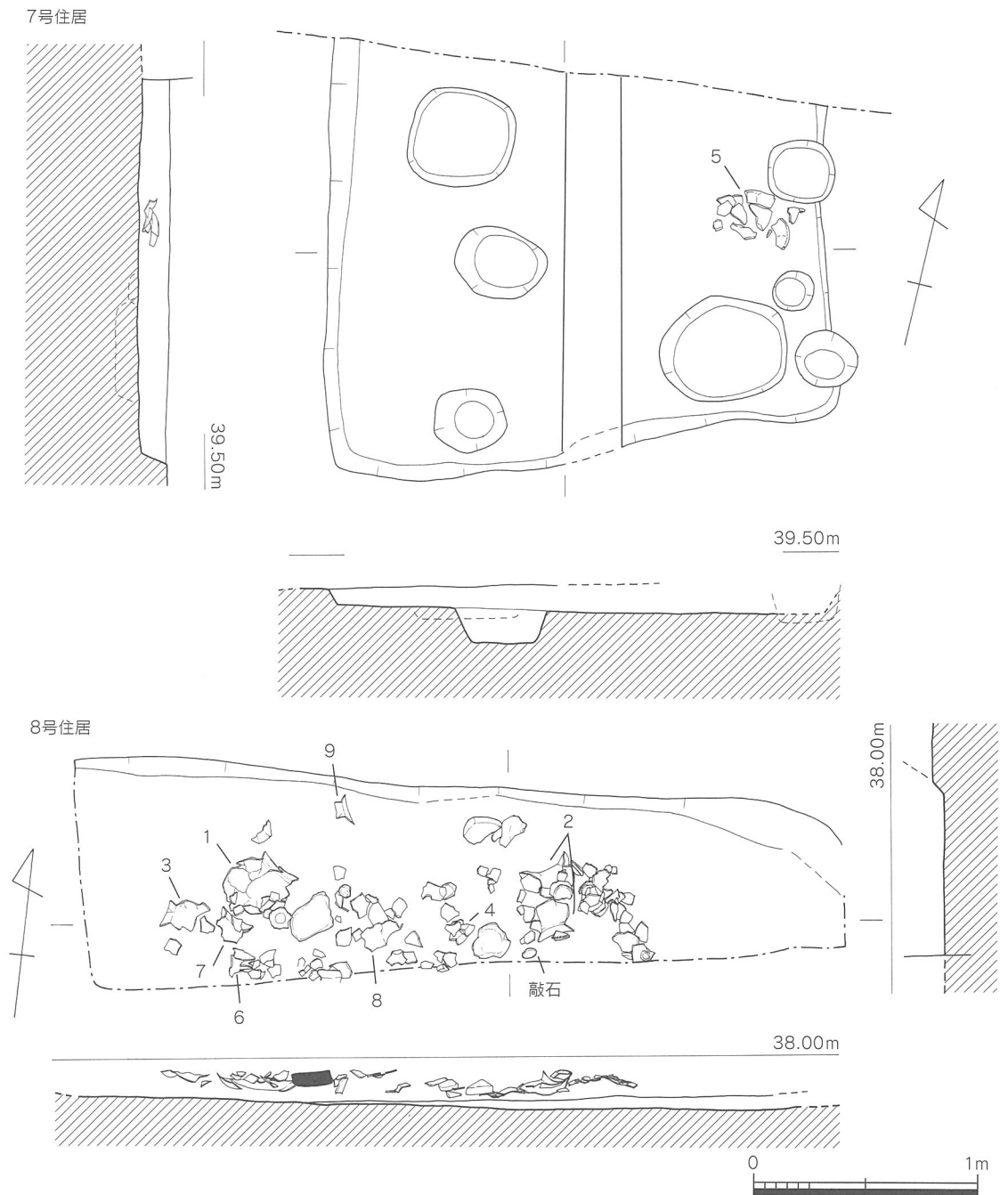
出土遺物は、その殆どが甕で、他に鉢、支脚などが重なるように出土した。また、遺物の間には大小の礫が混在していたが、使用痕のあるものは1点のみだった。調査区南端のやや東寄りの部分で、土器とともに出土した石英製の敲石で、長径の両端に使用痕が観察できる。石英はピンク色～淡褐色をしており大変きれいな石である。大きさは手のひら大である。

8号住居は、今回Aトレンチで調査した8つの住居址の中で最も遺物を多く保有していた住居であるが、遺跡の中でもレベルの高いところにあり、後世による削平が大変著しい場所であったため残りが悪い。この8号住居からさらに細石神社の参道の下、西側に住居群が続くと思われる。また、埋土の中に弥生時代中期の甕片がいくつか混ざっていたので、周辺を広げて調査すると弥生時代中期後半代の遺構が近くにある可能性が高い。

床面までは深さ約2～5cmほどしか残存しておらず、住居の大きさについては不明である。また、焼土、炭などは残存していない。

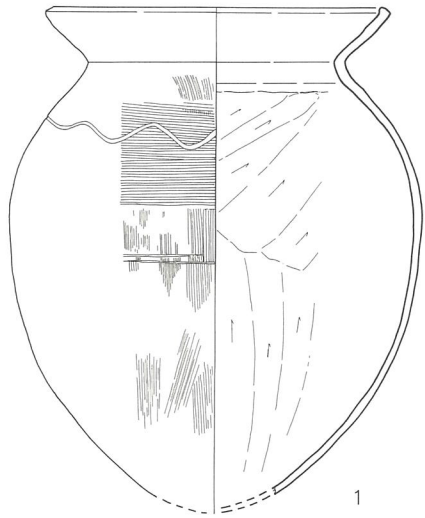
出土遺物 (図版35、第34図)

甕形土器 (1～4、6～9)

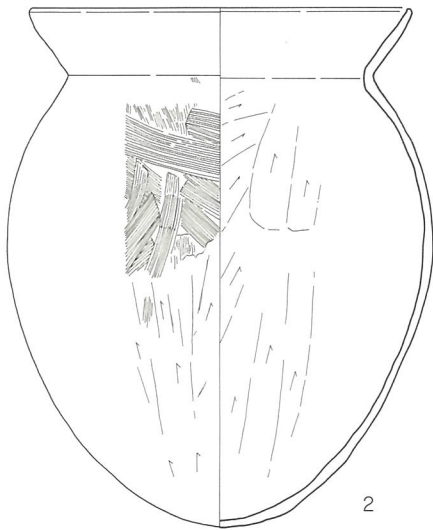


第33図 7・8号住居跡実測図 (1/30)

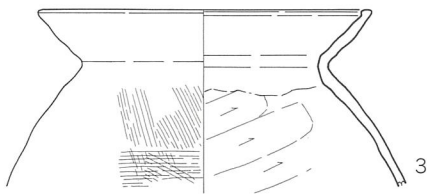
8号住居



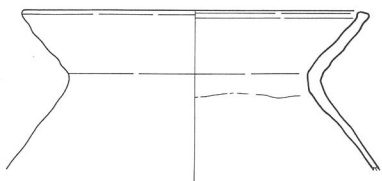
1



2

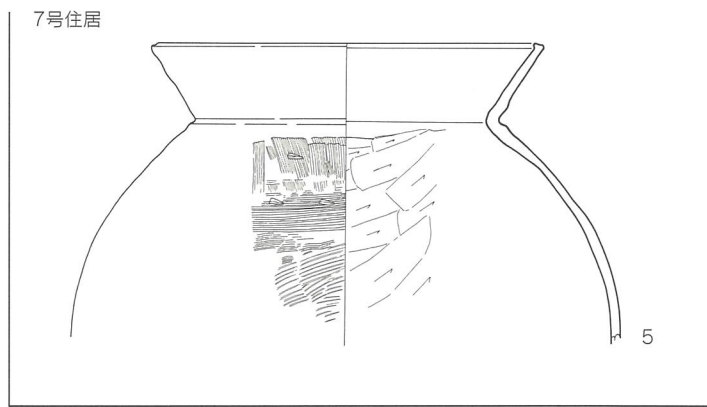


3

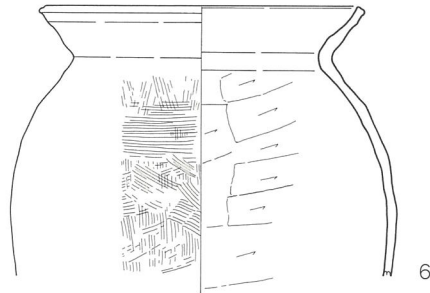


4

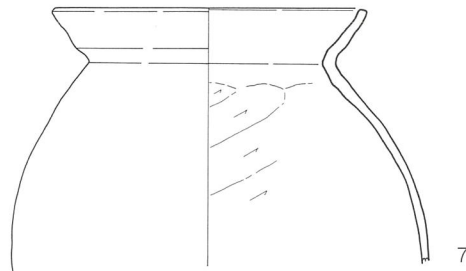
7号住居



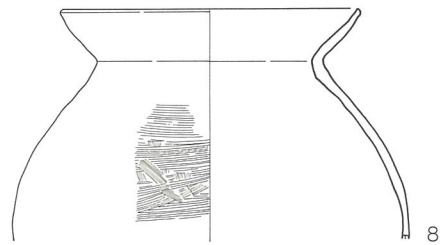
5



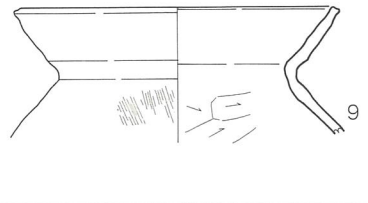
6



7

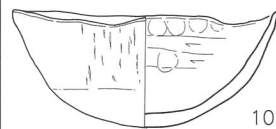


8

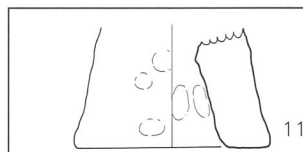


9

9号住居



10



11



第34图 7·8·9号住居出土土器实测图 (1/4)

1は、肩部に波状沈線をもち、口縁部端をつまみあげている。口縁径17.2cm、残存高25.8cm。外面調整は肩部ヨコハケ、下半部はタテハケ後縦方向にナデしているため、ハケ調整が見難くなっている。肩部の波状沈線の他に胴部中央部に同じ工具で施したと思われる2本の沈線が巡る。内面はケズリ。外面には煤が付着している。

2は半裁された状態で床面から出土している。口縁端部は丸みを持ち、やや内湾する。口径19.8cm、器高27.6cmで、口縁部はヨコナデ、外面頸部から肩部にかけては細かいタテハケを施すが、肩部横方向のハケはない。下半部はケズリ状のナデ調整を行なっている。内面は底部から頸部方向のケズリをおこなっている。最大胴径は肩部にあり、底部は丸底である。器壁は全体的に薄く、4～5mmである。胎土は1～2mmの長石、石英粒を含み、焼成良好、色調は内面淡橙褐色～灰白色、外面淡黄褐色である。

3は、外面全体にタール状の煤が付着している。口径16.8cm、残存高9.5cmで、外面調整は肩部ヨコハケ、胴部タテハケ、内面はケズリを行なっている。

4は、口縁内面に黒斑があり、頸部以下はたいへん薄いつくりで、肩部があまり張らない形をしている。口径17.5cm、残存高8.5cm、表面調整は風化が激しく観察できない。色調は赤褐色で焼成は良好である。

6は、外面全体にうすく煤が付着している。口径16.5cm、残存高9.1cm。外面調整の肩部はヨコハケで胴部はタテ、ナナメ方向のハケ調整、内面はケズリ調整を行なっている。内面にやや赤褐色のスリップが付着している。

7は、口径16cmで残存高14cm。外面調整は風化しており不明だが、内面は底部～口縁方向の粗いケズリ調整を行なっている。胎土はやや粗い砂粒を含んでおり、焼成は良好、色調は赤褐色である。

8は床面からの出土した全体的に大変薄いつくりの甕で、口径15.6cm、残存高12.2cmである。口縁部は内外ともにヨコナデ、外面肩部は粗めのものと細かいものの2種類のヨコハケ、内面ケズリを行なっている。胎土は金雲母、1～3mmの長石と石英を含んでいる。焼成は良好である。

9は、やや厚みのある甕で、口径16.4cm、表面に煤が付着している。外面は風化が激しいが、縦方向のハケが観察できる。内面頸部以下はケズリ。胎土は非常に細かく、焼成は良好、色調は淡黄褐色である。

## 9号住居

プランは確認できなかったが住居である可能性が考えられることから、9号住居として報告をおこなう。

8号住居の北側に、地山作り出しのベット状遺構と思われる遺構があり、床面と思われる周辺から土器も2点出土している。しかし、それ以上の住居の痕跡は殆ど削られているため分からなかった。炉、周溝等は確認できなかった。

## 出土土器（図版35、第34図-10・11）

10は、型押し成形の鉢で、口径13.8cm、器高7.2cmで、口縁部は指圧痕が全面に観察でき歪みのはげしい。また、口縁部から胴部かけて煤が多量に付着している。内面調整は指おさえ後、指ナデを行なっている。

11は、支脚の裾部で裾部径9.8cm、残存高6.3cm。器面調整は指押さえとナデ調整を行なっている。胎土は粗く、焼成は良好、色調は淡黄褐色である。

## ②土坑

### 1号土坑 (図版14、第35図)

北拡張区の中央部分で確認された土坑で、3号住居の中央にあたる部分で検出した。最初の東西のトレンチを入れた時点では遺構の確認ができなかったため、南側半分は検出できなかった。土坑の大きさは東西幅3m、南北幅は残っている部分で1.6mほどである。断面形態は中心に向かって徐々に深くなり、一番深い部分に炭が溜まっていた。埋土は下層になるにつれ暗褐色土層から黒褐色の炭混じりの土へと変化している。遺構検出層からは中世の遺物が含まれていたため、当初は中世土坑かと考えたが、埋土中、下層からは土師器のみ出土したため、古墳時代の土坑と確認した。埋土中には、大きめの自然石、有孔石錘、土師器片、弥生土器片等が含まれていた。土師器片は図化できないものも含めると、数多く出土している。土坑は3号住居が埋没後直後に掘られたものと考えられる。

### 出土遺物 (図版35・36、第36図)

#### 壺 (4~6)

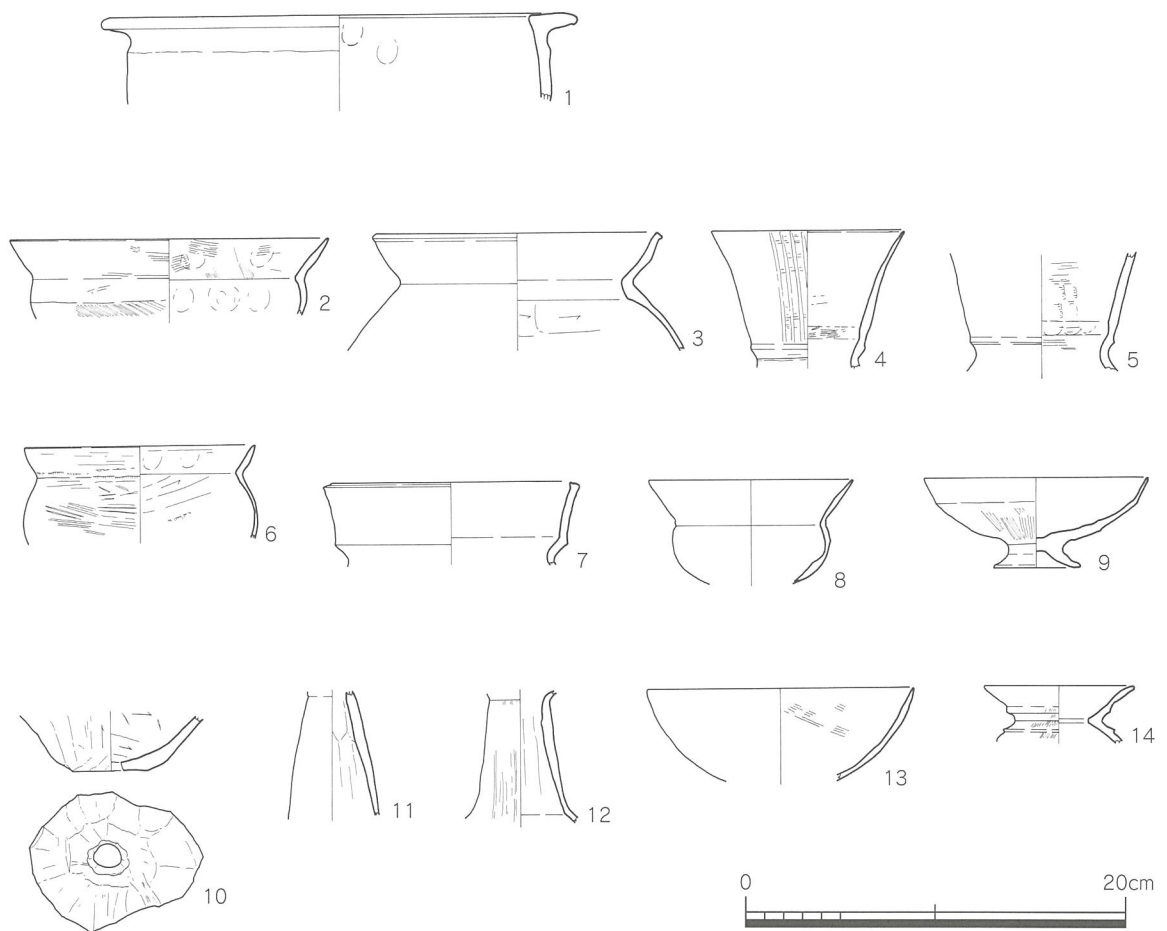
4は、幅のある二重口縁を持ち、口縁部外面には縦方向の暗文が残る。口径10.1cmである。5は、幅のある二重口縁をもつ小型の壺で、外面調整は風化しておりわからないが、内面調整はヨコハケ後ヨコナデ調整を行なっている。4と同じ形態である。6は小型の壺形土器で、口径12.3cm、外面調整は口縁部ヨコナデ、頸部は木口痕がのこり、肩部は粗いハケが残る。内面調整は頸部以下ケズリである。焼成は良好、色調は暗灰黄色。

#### 甕 (1・3・7)

1は、甕形土器の口縁部で、口径23cmで内外面ともにナデ調整を行なっている。内面には一部指圧痕が残る。焼成は良好、色調は黄褐色である。弥生時代中期前半のもので遺構の時期に伴うものではない。3は甕形土器で、やや立ち上がる形態をもつ。口径14.7cm、外面調整は風化してお



第35図 土坑実測図 (1/30)



第36図 土坑出土土器実測図 (1/4)

り不明。内面は頸部以下ケズリを行なっている。焼成は良好、色調は淡灰黄褐色。7は立ち上がった二重口縁をもち、口径12.5cm、器面調整はナデを行なっている。

**鉢形土器 (2・8・9・13)**

2は口径16.8cm、外面調整は口縁部ヨコハケ、肩部細かなナナメハケ、内面調整は指押しえ後ハケによる調整をおこなっている。焼成は良好、色調は内外面ともに暗灰黄色である。8は口径10.9cm、表面調整は内外面ともに風化しており不明である。9は脚台付皿である。口径11.8cm、器高4.7cm、脚径4.6cmで、外面調整はタテハケ、内面は風化しており不明である。13は、口径14.1cmの浅くて器壁の薄い形態をしている。

**高坏 (11・12)**

11、12は脚柱部で、内面には絞り痕がのこる。12は外面にタテハケが観察できる。

**器台・甑 (10・14)**

10は甑の底部である。やや平坦部をもち、底部中央に内側からの焼成前の穿孔がある。底径4cm。穿孔の大きさは1.1cm×1.4cmで、外面調整はタテケズリ、内面調整は不定方向の板ナデを行なっている。14は山陰系の鼓形器台で、受部径7.9cm、器高も復元しても3.5cmほどの小型のものである。外面にタテハケが観察できる。

### ③歴史時代の遺構と遺物

中世の遺構として柱穴、木棺墓を確認した。

#### 木棺墓 (図版15、第37図)

木棺墓は北拡張区の東端で検出した。表土を20cmほど下げた地点で遺構を検出した。木棺墓は主軸をほぼ東西にむけ、掘り方は短軸120cm、長軸207cm、木棺部分は長軸189cm、短軸69～75cmで、西側付近に白磁の椀と刀子を並べて副葬してあった。白磁椀は口縁をほぼ水平に置かれた状態で出土し、刀子は刃部を被葬者側にむけた状態で検出した。木棺の痕跡は掘り方の暗褐色土よりやや粘質があり黒褐色に近い土質であった。底面はほぼ平坦で、ベルト内から釘と思われる棒状の鉄器と、同じくベルト西側より土師杯が出土している。土師杯は埋土中から出土したが、おそらく木棺の蓋付近に置かれていたものが腐朽とともに棺内へ転落したものと考えられる。

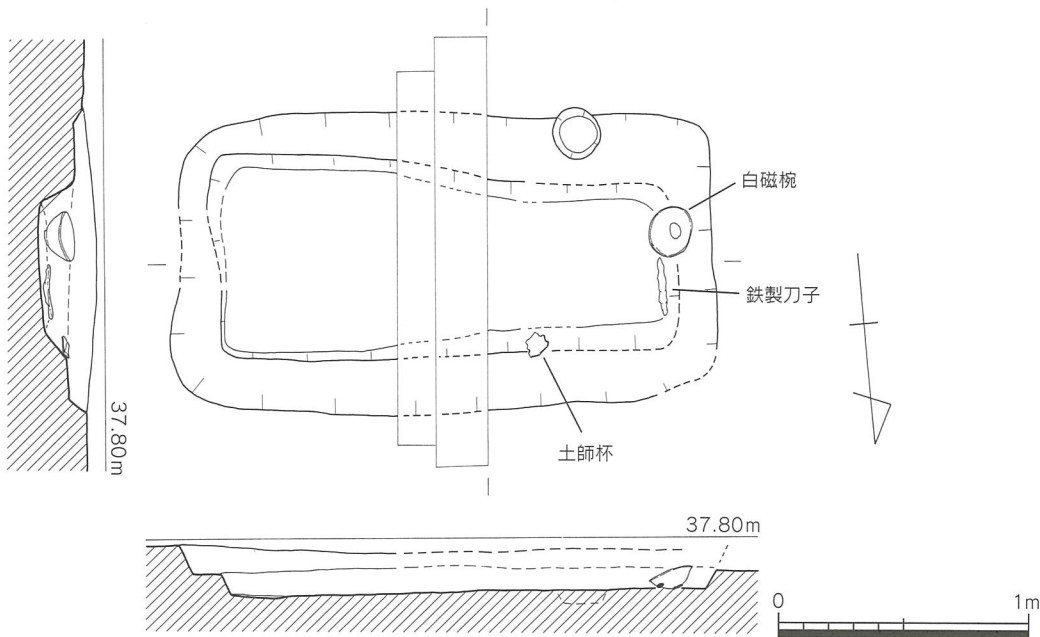
#### 出土遺物 (図版36・44、第38図)

1は棺内頭部付近副葬の白磁椀である。口縁部には6ヶ所に輪花が施されており、見込には蓮華文と櫛描文が入っているが、釉が分厚いため明瞭には見えてこない。蓮華文は片切彫りである。釉薬はにぶい黄色～灰黄色を呈している。釉薬は口縁部から高台までかかっており、口縁部は特に厚く釉薬を施している。高台部は高いがくりが浅く、分厚い底部になっており重い。内底部に黒色のガラス質の付着物が見られる。胎土はやや黄色味をおびた白色で微粒の黒色物を含む。口径が、18.8cm、器高7.2cm、高台径5.9cmである。

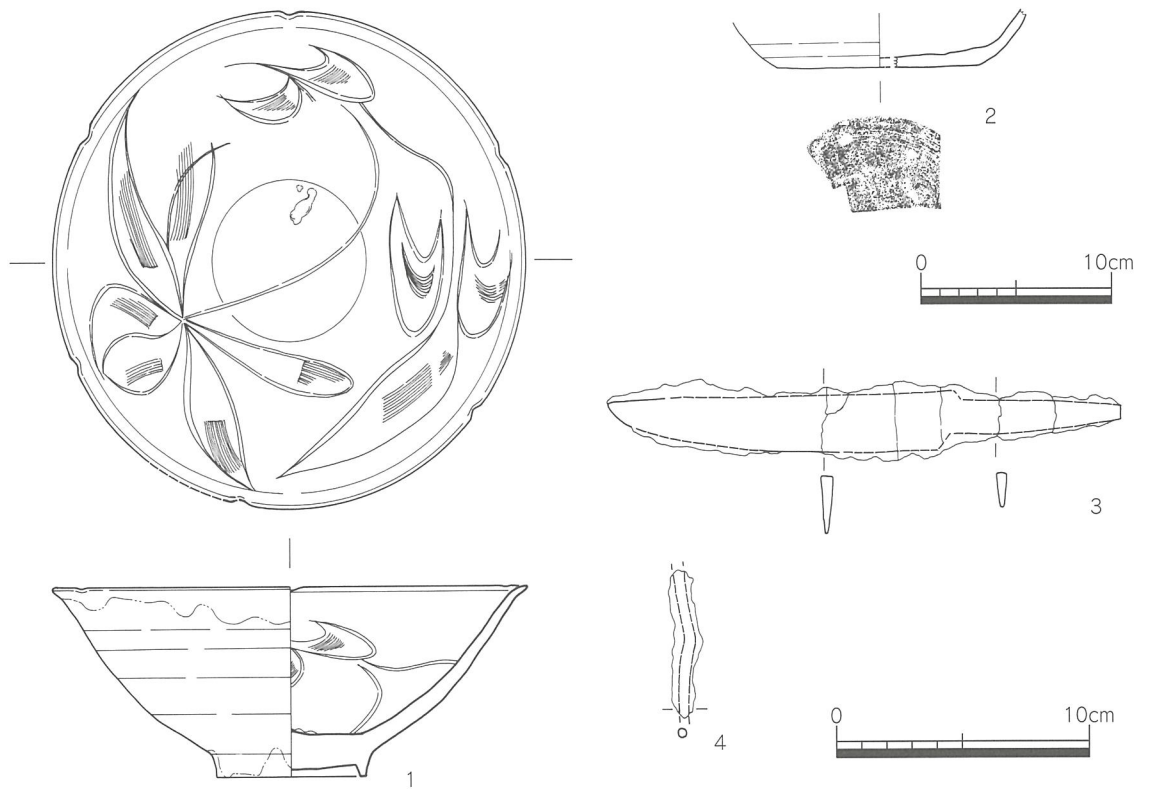
2は土師質の杯で、回転糸切りの底部を持つ。残存は1/4程度で底径は11cm、胎土は微粒の金雲母を多量に含み、その他1～2mmの粒子も含む。焼成は良好、色調は内外ともににぶい黄褐色を呈す。

3は、白磁椀とともに棺頭部付近に副葬されていた鉄製刀子で、全長20.2cm、刃部13.1cm、幅2.3cm、である。木質の付着は見られない。なお、実測図の復元線は、X線透過写真から推定したものである。

4は棒状の鉄製品で、木棺の埋土中より出土した。両先端が欠損している。おそらく棺材を留め



第37図 木棺墓実測図 (1/30)



第38図 木棺墓出土遺物実測図（1・3・4は1/3、2は1/4）

ていた釘であろうと思われる。残存長5.6cm、直径は0.45cmである。

木棺の時期は回転糸切り底の杯が出土していることから白磁碗の時期よりもやや新しい12世紀後半代の遺構と考えられる。

## （2） Bトレンチの調査

トレンチははじめ、幅2mで東西に約34.5m、南北に13mのL字状に設定した。地山西側は砂礫層であったが、東へ23mのところでは黄色砂質土に変わり、そこから徐々に東に向けて落ち込んでいた（第40図）。砂礫層が地山の部分は中世の小さなピットを検出したが、その他の遺構は検出していない。黄色砂質土の地山の部分では弥生時代～古墳時代にかけてのピットと祭祀土坑、中世の溝を検出した。

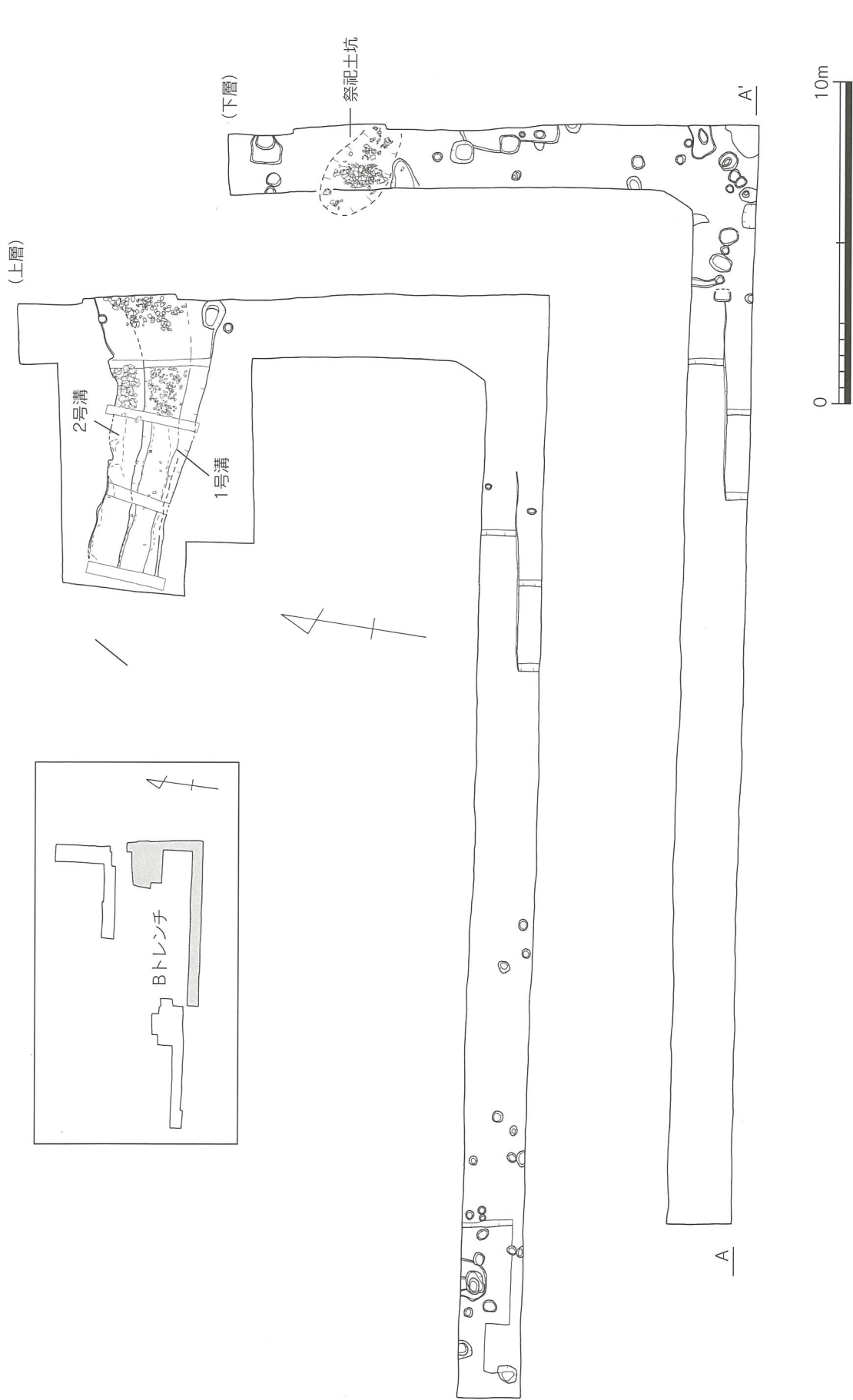
西から約13mのところでは旧水田の畦が設けられていたため、そこから東側とでは層序が異なり、現地表面でも若干のレベル差がある。さらに調査前から西側に向けて現地表面が下がっていたため、もともと東側に谷部を想定していた。実際、旧地形はBトレンチの西側から23mの地点から徐々に落ち込み、約30～40cmほどの高低差があった。また、落ち込み部分から地山が変わり、黄色砂質土になり弥生時代～古墳時代の遺構が確認された。

3層目から柱穴が掘り込まれているが、いずれも近代の遺構である。

### ① 祭祀土坑（図版17、第41図）

祭祀土坑は、L字に設定した南北方向のトレンチから検出した。検出遺構面は現地表面から約0.7





第39図 宮ノ下地区Bトレンチ遺構配置図 (1/180)

mの深さで、土坑の上半は中世の溝状遺構によって大半を削平された状態であった（第45図）。検出時は上層は中世の溝の礫に埋もれた状態ではっきりとはしなかったが、底部分は黄褐色の地山に切り込む形で検出した。埋土は黒褐色の粘質土と、暗褐色の砂質土で、ともに暗褐色の砂粒を含み、土坑内底面は黄色砂質土であった。後世の遺構に切られているため正確な平面プランは確認できないが、底面部分は土器の集中している部分中央がやや挿鉢状に窪むが、ほぼフラットな断面を確認できた。土坑東側にかけて底面に炭が薄く堆積しており、その一部が土坑状に窪み約10cmもの炭が分厚く残存していた。現在確認できる平面プランで、南北1.2~2.0m、東西3.1mの楕円形である。

土器は、北東部に集中して厚く堆積しており、断面図には上層しか書き込んでいないが、10cmほど堆積していた。ほとんどが完形のまま潰されたような状態で検出し、器種も甕、壺、高坏、鉢、器台、支脚と器種が揃っている。土坑の南側は削平が大きかったため、復元可能な個体が少なく現地でも破片が多かった。遺物は土器のみで、土器の他は、祭祀土坑南側のピットから焼けた痕跡のある砂岩質の砥石が1点出土しているのみである。土器の状態は残りがよく、下層のものはほぼ完形のものが多かった。

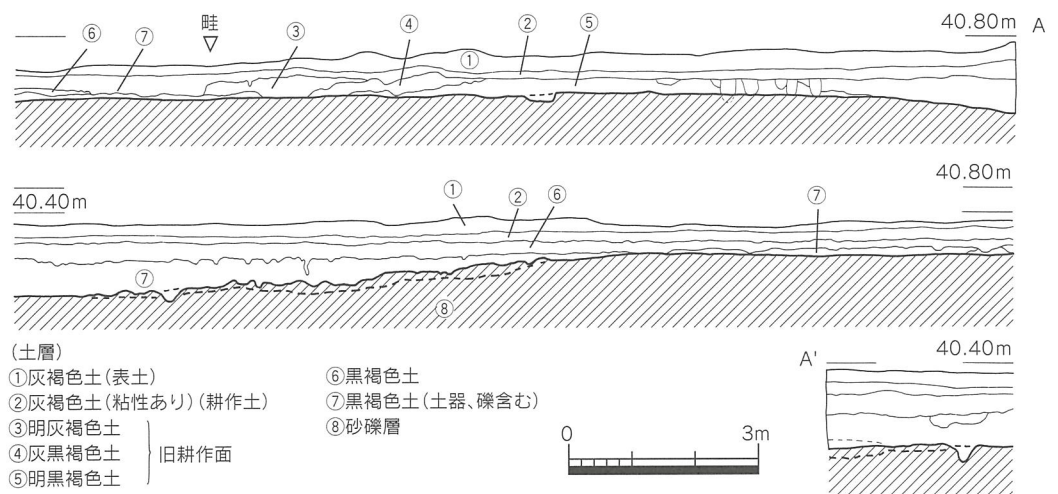
土坑は南東側調査区外にさらに広がっているが、北西側には続かないようである。中世の溝に削平された可能性も考えられるため調査区を西側に約10m拡張したが続きは確認されなかった。検出面の標高は39.00m、底面の標高が西側で38.80m、東側で38.75mである。地山も東側にむけてやや低くなっている。土坑はさらに東側へと続いていくものと思われる。また、土坑中央に炭が固って検出していることから祭祀用の土坑と考えられる。

#### 出土遺物（図版36~38、第42~44図）

祭祀土坑出土土器は完形のものが多かったが、破片も多く、図化できていない個体も多い。打ち欠きや穿孔などがあるものは見られない。

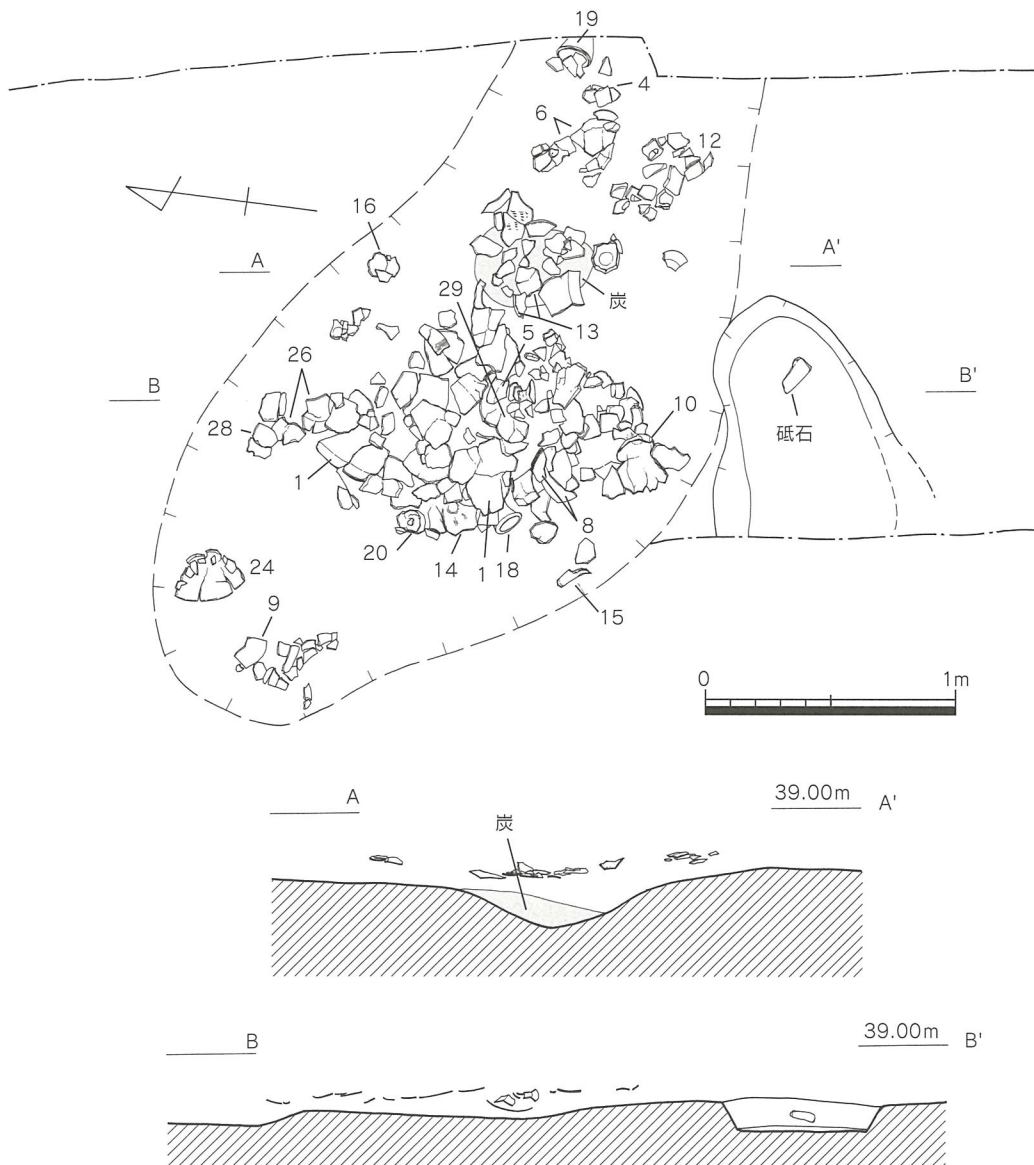
#### 壺（第42図1・7）

1は、口縁部分が一部欠けているが、ほぼ完形である。北西部の土器だまりの上層から出土した。口縁部はやや内傾する。頸部は太く、直線的で長い。頸部から胴部にかけてはくびれず、屈曲も緩やかである。突帯は低い三角突帯を貼り付けている。胴部の割合が小さく、胴部の張りも少なく、



第40図 宮ノ下地区Bトレンチ南壁土層断面図（1/120）

底部は完全な丸底を呈している。外面調整の頸部は粗い縦方向のハケ調整で、四段階に分かれている。口縁部はハケ目が横方向に施されている。胴部上半は頸部よりもやや細かいハケで縦方向に調整を行っており、下半部はヘラによるケズリ状の調整を行なっている。胴上半部にはタタキの痕跡がハケ目の下に観察できる。内面調整の複合口縁部はヨコナデで、頸部はナナメ方向の細かいハケ調整、胴部はタテ、ナナメの細かいハケ調整、底部は横方向の明瞭なハケが観察できる。口径23.5cm、器高40.3cmで胎土は1~2mmの石英、長石、金雲母を含み、焼成は良好、色調は橙色~にぶい黄橙色を呈す。胴部に2ヶ所とそのちょうど180度反対側の頸部にも黒斑が残る。7は、直口壺で口縁部~胴部の半分ほどしか残存していない。口縁はほぼ直立で、胴部は球状に張る形をしている。底部は欠損している。外面調整は口縁部、ヨコ、タテ方向のハケ、胴部上半はナナメ、タテ方向のハケでその上から板状工具による横方向のケズリに近いナデ調整を行なっている。下半部は縦方向のケズリの後粗いハケ調整を行なっている。内面調整は口縁部、指押しえから斜め、横方向の板ナデを行い、胴部は指押しえから板ナデ、ハケ目、下半部は指で押しえながら斜め方向に

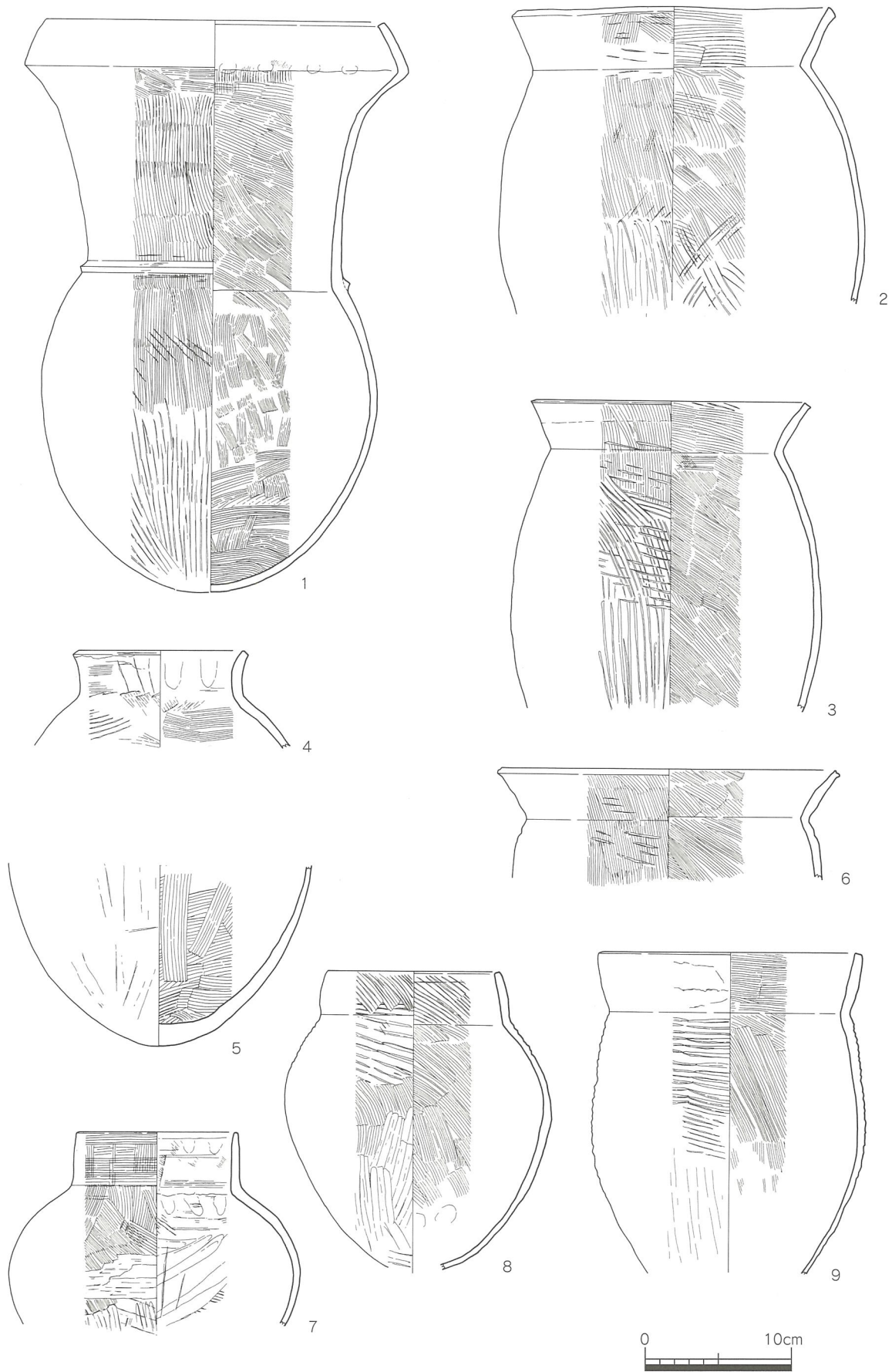


第41図 祭祀土坑土器出土状況実測図及び土層断面図 (1/30)

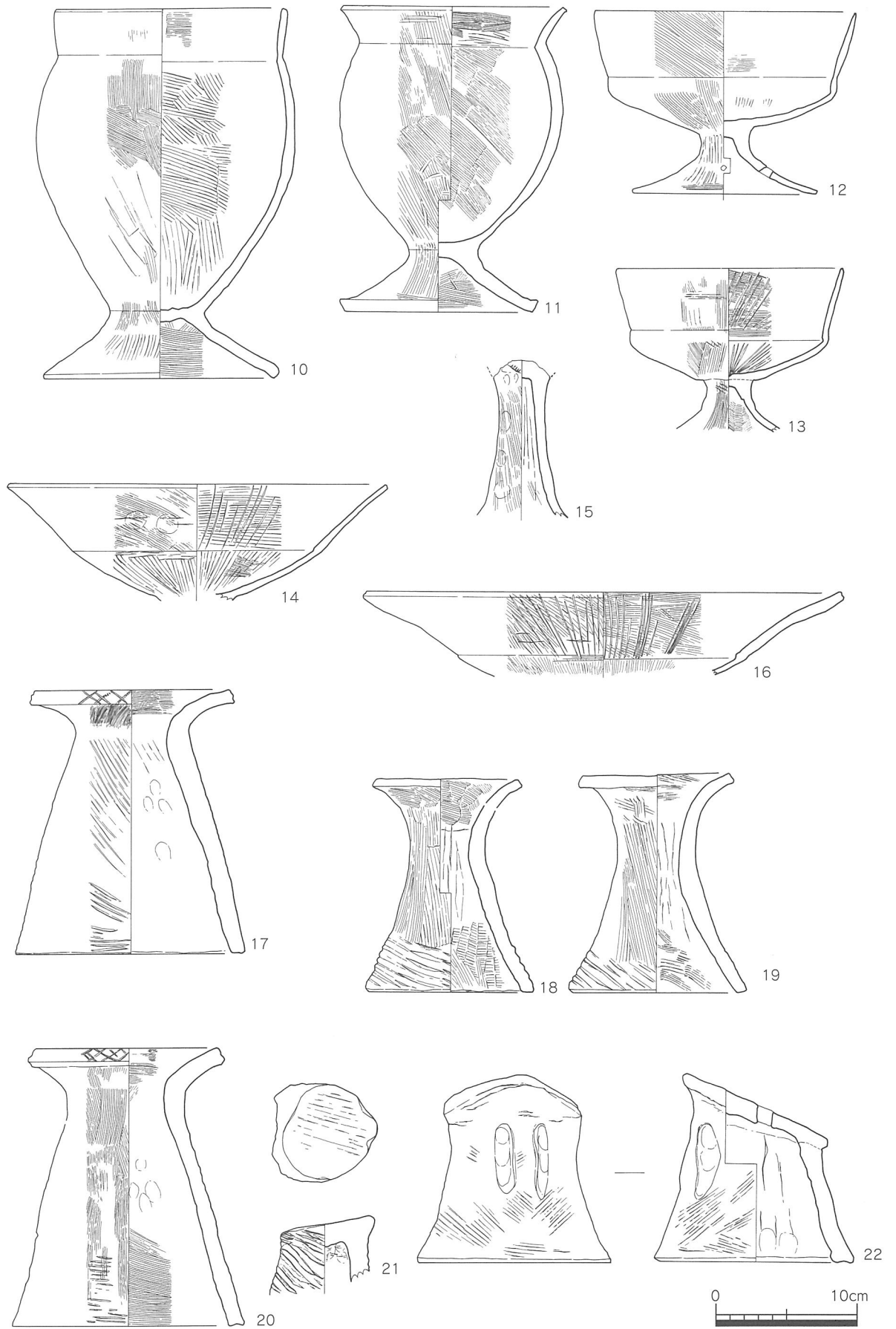
ナデた痕跡が残る。口径はやや不正確だが10.8cm、胎土は石英、長石、白色粒子、黒色粒子、金雲母をふくむ。焼成は良好、色調は橙色である。

甕 (第42図2～6、8～11、29)

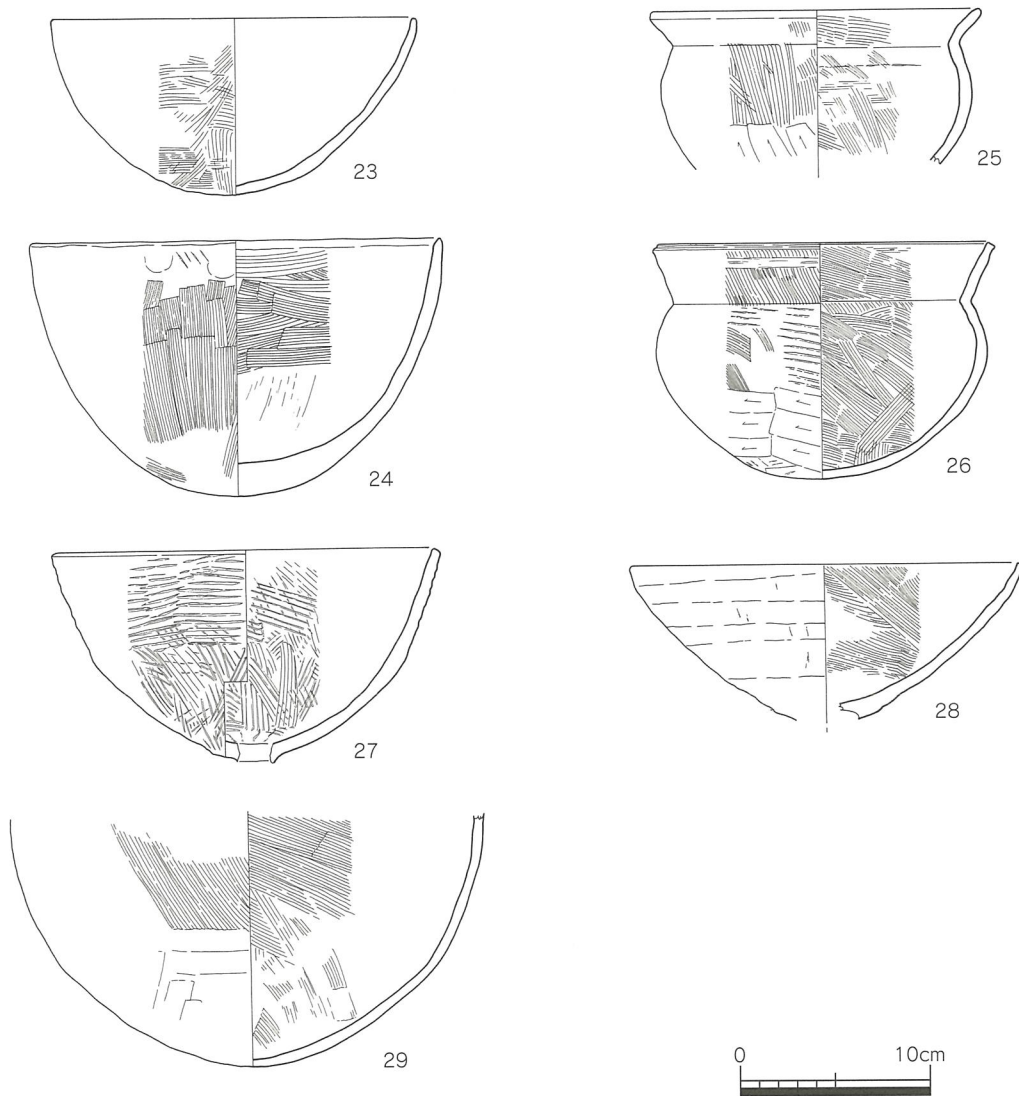
2は北西部土器群の上層から出土している。口縁部は分厚く、平坦面をもつ。くの字に屈曲するが、ほぼ直立に近く立ち上がっている。胴部の張りは少なく、胴部中位に最大胴径がある。外面調整は口縁部タタキ後ナナメハケで、頸部に近いところはヨコナデを行なっている。胴部上半はタタキ後タテハケ、下半部は幅の狭い工具で器表面を掻き上げている。内面調整は口縁部ヨコハケ、胴部は縦、斜め方向のハケ調整、下半部は幅の大きいハケで調整している。口径22.6cm、胎土は緻密で1～5mm大の石英、長石粒と金雲母、黒色粒子、茶色粒子を含む。焼成良好、色調は明黄褐色と橙色である。黒斑があり、胴部から口縁部まで煤状の付着物がある。3は、北西部土器群下層から出土し、3/4ほど残存している。口縁部は「く」の字口縁で口縁端部に平坦面をもつ。胴部はあまり張らず最大胴径は中位にある。器壁は5～6mmである。外面調整はタタキ痕が全体に残り、その後をハケで掻き消している。ハケは上半と下半で異なり、上半部は縦方向のやや細かいハケで、中位は粗いハケで調整を行なっている。下半部は細い工具によるケズリ状のナデ調整を行なっている。内面は横、斜め方向の粗いハケ調整で口縁部、胴部上半と下半でハケの方向が若干異なる。口径は19.6cm、胎土は緻密で石英、長石、赤色粒子の大粒粒子を含み、金雲母、黒色粒子の微粒も含む。焼成は良好、色調は内外ともに橙色である。4は5と同一個体で、南東の掘削された土器群から出土した。やや外反するしっかりとした口縁部をもち、やや雑なつくりの甕である。外面調整は口縁部板状工具痕と細かい横方向のハケ目、頸部はハケ工具による圧痕がのこる。肩部、タタキ痕がうっすらと残っている。底部付近は丁寧な板ナデで、やや平坦面をもつ尖り気味の底部である。内面調整は口縁部指押さえ、肩部斜め方向のハケ、底部は粗い縦、横、斜め方向のハケで、一部指ナデで消している部分もあるが図面中には表現していない。口径11.2cm、胎土は石英、長石、微粒の金雲母を含む。焼成は良好、色調は橙色。6は、北西部の土器群上層の出土である。「く」の字に屈曲する口縁をもち、器壁が薄く作りのよい土器である。外面調整はタタキの後に粗い縦方向のハケ調整を行ない、内面は斜め方向の粗いハケ調整である。口径は23.4cmで、胎土は精良、焼成は良好、色調は暗褐色である。8は北西部土器群の上層から出土した小型の甕である。口縁部はやや内湾しながら立ちあがり、内傾しているもののほぼ直立している。胴部は上半が張り、底部にかけてすぼまり、すっきりとした下半部をもつ。底部は欠損しており形態が不明だが丸底であろう。調整は内外面ともによく残っている。外面調整は口縁部強い斜め方向のハケで、タタキ痕を掻き消している。頸部はタタキ痕がそのまま残っており、胴部中位には斜め方向のハケが残る。底部にかけては細い板状の工具でケズリ状に掻き上げている。内面は粗い斜め方向のハケ調整である。底部付近は指押さえ痕がのこる。口径12cm、推定器高20.2cm、胎土には金雲母を多く含み、長石、石英も含む。焼成は良好、色調は橙褐色。9は外面にタタキが明瞭に残り、外面には煤が大量に付着していた。外面調整は、肩部～胴中部にかけて横方向のタタキが残る。タタキの工具幅は約3cmで、下半部は板状工具でケズリ状のナデを施している。内面調整は口縁部、ヨコハケ、胴部は斜めハケを施している。口径22.4cm、胎土には長石、石英を多く含み赤色粒子も含まれている。焼成良好、色調は赤褐色である。10は北西部土器群の上層から出土した脚付甕で、口縁部は直立して頸部にあまり屈曲のない形態をしている。胴部には煤が付着している。外面調整の胴部は縦方向の細かいハ



第42图 祭祀土坑出土土器实测图① (1/4)



第43図 祭祀土坑出土土器実測図② (1/4)



第44図 祭祀土坑出土土器実測③ (1/4)

ケ調整と、下半部はハケ目と板状工具痕が残る。脚は、粗い縦方向のハケ目がのこる。内面調整は胴部、脚部ともに粗いハケ調整を行なっているが、口縁部は細かい横方向のハケ調整を行なっている。口径16.0cm、器高26.3cm、脚部径16.5cmで、胎土には石英、長石を多く含み、焼成は良好、色調は淡黄褐色を呈している。11も脚付の甕で、北西部土器群の下層から出土している。ほぼ完形である。口縁部が外反し、肩部がやや張る形態をしている。脚部接合部分は小さく底部のすぼまりが大きい。器壁はやや厚い。外面調整は粗い縦方向のハケ調整で、脚部まで続く。一部ハケ後に横方向にナデている痕跡がのこる。内面調整は口縁部ヨコハケ、胴部は斜め方向の粗いハケ調整、脚部斜め方向のハケ調整を行なう。口径15.6cm、器高21.8cm、脚径13.4cmで、胎土は長石、石英を含み、焼成は良好、色調は赤褐色で、胴部に黒斑がある。29は甕の底部で、内外面ともに煤が付着している。北西土器群上層から出土している。底部は完全に丸底化し、外面はタタキ痕がわずかに観察できる。外面調整はタタキ後ハケ調整で底部付近はケズリ状の工具痕が見られる。内面調整はナナメ方向のハケ調整である。胎土は金雲母、長石を多く含み、焼成は良好、色調は淡褐色である。

### 高坏 (第43図12~16)

12は、南東部土器群上層から出土した。口縁部が欠損しているがほぼ完形の個体である。坏部の接合部から上半はやや開き気味に直立して口縁部に続き、脚部は低く穿孔を持つ。外面調整は粗いハケ調整で、脚部は一部縦方向に磨いた痕跡が残る。内面は風化して不明な部分が多いがハケ目はわずかに残っており、13の調整例から見ると暗文が施されていたと考えられる。脚部の穿孔は3ヶ所焼成前に作られている。口径18.4cm、器高13.1cm、脚部径12.9cmで、胎土は金雲母、長石を含み細かく、焼成は良好、色調は黄褐色である。13は、北東部時群の炭集中部上層から出土した高坏である。接合部からやや開き気味に直立して口縁部に続き、口径は小さく、短く径の小さな脚がつく形態をしている。中空で内面には絞り痕はみられない。このタイプの高坏は類例が少なく、出土時期もある程度限られている。外面調整は細かいタテハケで、脚部もハケ調整で終了している。内面は坏部の接合部の上部に放射状の暗文を施している。脚部は横方向のハケが観察できる。口径16cm、残存高11.7cmで、胎土は長石、石英、金雲母を含み、焼成は良好、色調は淡赤褐色である。脚部内面に黒斑がある。14は北西部土器群上層から出土した高坏の坏部で、口縁部が大きく開く形態をしているが、深さがある。器壁は全体的に薄く、丁寧な作りである。外面調整は指押さえ後斜め方向のハケ調整を行い、下半部は粗いハケ調整を行っている。内面は暗文が放射状に施され、接合部上部と下部で暗文が異なる。横方向のハケ後暗文を施している。口径26.8cmで、残存高8.4cmである。胎土は長石、石英、角閃石、金雲母を含み、焼成は良好、色調は淡赤褐色を呈す。15は、脚部で坏部との接合部分のところで剥離している。北西部土器群の上層から出土しており、脚部の3/4ほど残存している。接合部分には小口痕を押し当てたような痕跡が残り、坏部との接合を考えた調整を行なっている。脚部は直線的で、中空である。外面調整は指押さえ後縦方向のハケ、内面は絞り痕が残っている。胎土は細かく、石英、金雲母、長石、赤色粒子を含む。焼成は良好、色調は内外ともに橙色である。16は大型の高坏の坏部で器壁が厚く、作りが丁寧である。北西部土器群と南東部土器群の間から出土した。外面、内面調整ともにハケ調整後に放射状の暗文を施している。口径は33.8cmだが、小片のため口径はやや前後すると思われる。胎土は金雲母、石英、長石を含み、精製された細かい胎土である。焼成は良好、色調は赤褐色である。

### 器台 (第43図17~20)

17は口縁端部に刻み目を施したやや大型の器台である。北西部土器群上層からの出土である。器壁が全体的に厚く、重量がある。刻み目は櫛状の工具を用いている。外面調整は頸部は細かいナメハケで、体部はタタキ痕と粗いハケ調整を行なっている。内面調整の受部は細かいヨコハケで体部は指押さえ痕がのこる。受部径13.9cm、器高18.8cm、裾部径16.4cmで、胎土には金雲母、長石、石英が含まれる。焼成は良好で、色調は淡灰色~淡黄褐色を呈している。18は径の小さな器台で厚みが1cmほどある。外面の受部近くは斜め方向のハケで、体部は縦方向の粗いハケ裾部はタタキ痕が明瞭に残る。内面の受部はナメ方向のハケで、体部はシボリ痕がのこり、裾部はハケ目が観察できる。受部径9.7cm、器高15.2cm、裾部径11.8cmで、胎土は石英、長石、金雲母を含むやや粗い胎土で、焼成は良好、色調は赤褐色である。19は、南東部土器群から出土し、ほっそりとしたスマートな形態をしている。受部と裾部が同じくらいの大きさで、くびれ部が細い。外面調整は粗いタテハケで、裾部に一部タタキ痕が残る。内面は絞り痕と裾部に粗いハケ目がのこる。受部径10.5cm、器高15.6cm、裾部径12.8cmで、胎土は金雲母、長石、石英を含み、焼成は良好、色調



は黄褐色～赤褐色を呈している。20は、北西部土器群上層から出土した器台で、口縁端部に刻み目を施す。器壁はそれほど厚みが無く、すっきりとしたつくりである。外面調整の体部は細かいタテハケで裾部にタタキ痕がみられる。内面調整は横方向の細かいハケと、指押さえがみられる。受部径12.9cm、器高19.9cm、裾部径16.4cmで、胎土は金雲母、長石、石英、角閃石を含み、焼成は良好、色調は淡灰褐色～黄褐色である。

#### 支脚（第43図21・22）

21は、北西部土器群上層から出土した支脚である。上面平端部につまみがある。外面調整はタタキのままで、内面は指押さえ痕が残る。上面は粗いハケが残る。受部径6.8cmで、胎土は石英、長石、金雲母を微粒に含む。焼成は良好～やや悪い、色調は赤褐色である。22は側面につまみをもつ支脚で上面中央に径1.2cmの穿孔をもつ。器高は低く径が大きい。側面のつまみ部分は指でつまみ出したようなつくりで指圧痕がのこる。外面調整はタタキ後粗いハケ調整をこない上面と体部とのさかいに接合痕が観察できる。上面はハケ目がうっすらと残っている。内面は絞り痕のような縦方向の亀裂がみられ、裾部には指押さえ痕がみられる。上面径は10.3cm、器高13.4cm、裾部径15.6cmで、胎土はやや細かく石英、長石、金雲母、黒色粒子を含み、焼成は良好、色調は淡黄褐色である。外面裾部に2ヶ所、左右対称の位置に黒斑がみられる。

#### 鉢（第44図23～28）

23は、ボウル状の鉢で北西部土器群上層から出土した。口縁部はやや内傾し、底部は丸底である。器壁の厚さは一定で、5～7mmである。外面調整はケズリ後粗い不定方向のハケ調整を行ない、内面はナデ調整を行なっている。外面には煤が付着している。口径18.8cm、器高9.4cm、胎土には金雲母と長石、石英が含まれ、焼成は良好、色調は淡赤褐色である。内面に黒斑がある。24は、北西部土器群から出土したボウル状の鉢で器壁が分厚く重量がある。底部が厚く、1.7cmをはかる。外面はタテハケだが、口縁部は指押さえ、底部付近は板ナデ痕がのこる。内面調整は2種類のヨコハケと、底部は板ナデである。口径は22cm位でやや歪んでいるため正確ではない。器高は13.5cmで、胎土は金雲母、角閃石を多く含み、焼成は良好、色調は淡赤褐色～黄褐色を呈す。黒斑が外面にあり。25は、ゆるく外反する「く」の字口縁をもつ鉢で、体部上半に最大径をもつ。北西部土器群下層から出土している。残りが悪く、底部と口縁部1/2は欠損する。外面の胴上半部は粗い縦方向のハケ目で、下半部はケズリである。内面は不定方向のハケ目が観察できる。口径17.4cm、器高8.3cm、胎土は長石、石英、金雲母、角閃石を含み、焼成は良好、色調は暗赤褐色である。外面口縁部に煤が付着している。26は北西部土器群上層から出土している。口縁は「く」の字に屈曲し、胴部は肩部に最大径があり、底部は丸底である。外面は口縁部タテハケ後一部ヨコナデ、肩部はタタキ後ハケ目、底部はハケ目後ケズリである。内面は不定方向のハケ調整である。口径は17.2cm、器高は12.5cm、底部は直径2cmほどの平坦面がある。胎土は長石、石英、金雲母、黒色粒子をふくみ、焼成は大変よく、色調は橙色である。27は甗で、底部中央に焼成前の穿孔が内面から外面方向に施されている。口縁部から底部までやや下膨れに続き、口縁部付近はタタキによる面ができていいる。外面の上半部は幅3.5～4.0cmの工具によるタタキ痕がのこり、下半部は粗いハケ目によってタタキ目が消されている。内面は粗いハケ調整を行ない、穿孔部付近はヘラ状工具によるナデツケが行なわれている。口径は19.6cm、器高11.3cm、穿孔径1.5～1.7cm、胎土は長石、石英を含み、焼成はやや不良、色調は鈍い褐色をしている。28は、口縁部から底部まで直線的

にすぼまり胴部に膨らみがない。外面には粘土帯のつなぎ目がそのまま残っており、内面はナナメ方向のハケ調整を行なっている。底部は欠損している。口径20.3cm、器高8.3cm、胎土は長石、石英を含み、焼成は良好、色調は淡黄褐色～淡赤褐色である。

祭祀土坑の出土遺物は上層と下層に分けたものの、あまり時期差は見られない。遺構の時期は庄内式並行期にあたり、布留系の土器は含まれていない。ある一時期使用され、すぐに埋没したものと考えられる。

弥生時代～古墳時代にかけての遺構としては、祭祀土坑のほかいくつかのピットが確認されている。その中で、祭祀土坑のすぐ南側から検出した方形のピット2つについては掘立柱建物の可能性がある。北側のピットには柱痕が残っており、直径が12cmほどである。調査区外に広がる可能性もあるが今回の調査範囲内では詳しくは分からない。

## ②歴史時代の遺構と遺物

歴史時代の遺構としては、中世の溝状遺構2条、中近世のピットなどが検出している。溝状遺構は古墳時代の祭祀土坑を切って検出しており、2条が切りあって検出している。新しい溝を1号溝、古い溝を2号溝として報告を行なう。

また、発掘調査時は古墳時代の祭祀土坑を当初溝と捉えていたため1号溝とし、中世の溝をそれぞれ新しいものから2号溝、3号溝として遺物を取り上げている。

### 1号溝（図版18、第45図）

今回検出された溝は2条が切りあっており、そのうちの新しい方の溝にあたる。どちらの溝にも礫が多く、最初検出した時点では敷石遺構かと考えたが、きれいに敷き詰めているわけではなく埋土と一緒に多くの礫が混入しているという状態であった。その礫の混入の仕方も両溝では異なり、1号溝では10cm未満の小さい礫が、2号溝では20～30cm大の大きい礫が混入していた。埋土内には、陶磁器を中心に、焼石、土師器も所々混入していた。

1号溝の断面はややU字形で2号溝よりも浅く残りが悪いが西側に行くにしたがい残りが良くなる。埋土は暗黒褐色土でその中に礫と陶磁器類が混入している。溝は調査区西端まで続いているが、だんだんと幅が狭くなっている。

溝の幅は東側で一番広く約2mで、西側では1.3mである。深さは東側で約10cm、中央の深い部分で15cmの深さがある。南側の掘り方のみ二段掘りになっている。

溝は調査区の東側、西側にさらに伸びて続いている。

### 2号溝（図版18、第45図）

2号溝は大型の礫が混入しており、1号溝に比べると遺物も少ない。土層断面を見ると、1号溝より深く幅も広い。埋土には砂層と礫のみが混入しており、礫の混入状態をみていると1号溝と同様で、埋土の間に大型の礫が混じりこみ、礫の面をそろえたり、敷き詰めたような状況ではない。焼石は混入していない。

2号溝の幅は土層断面より約1.7～2.2mで、深さは15～30cmである。西側に行くにつれて床面が平坦ではなく凹凸が顕著になる。埋土も砂礫土であること、遺物に形があるものが殆ど含まれないことなどの状況から見ると2号溝は水が流れていた可能性も考えられる。

土層断面を見ると1号溝の下、2号溝の南隣側に黒褐色砂質土層（第4層）がある。遺物は見つからないが、可能性として2号溝よりも古い溝があった可能性もあるが、面的には確認できなかった。

#### 出土遺物（図版38・39、第46図）

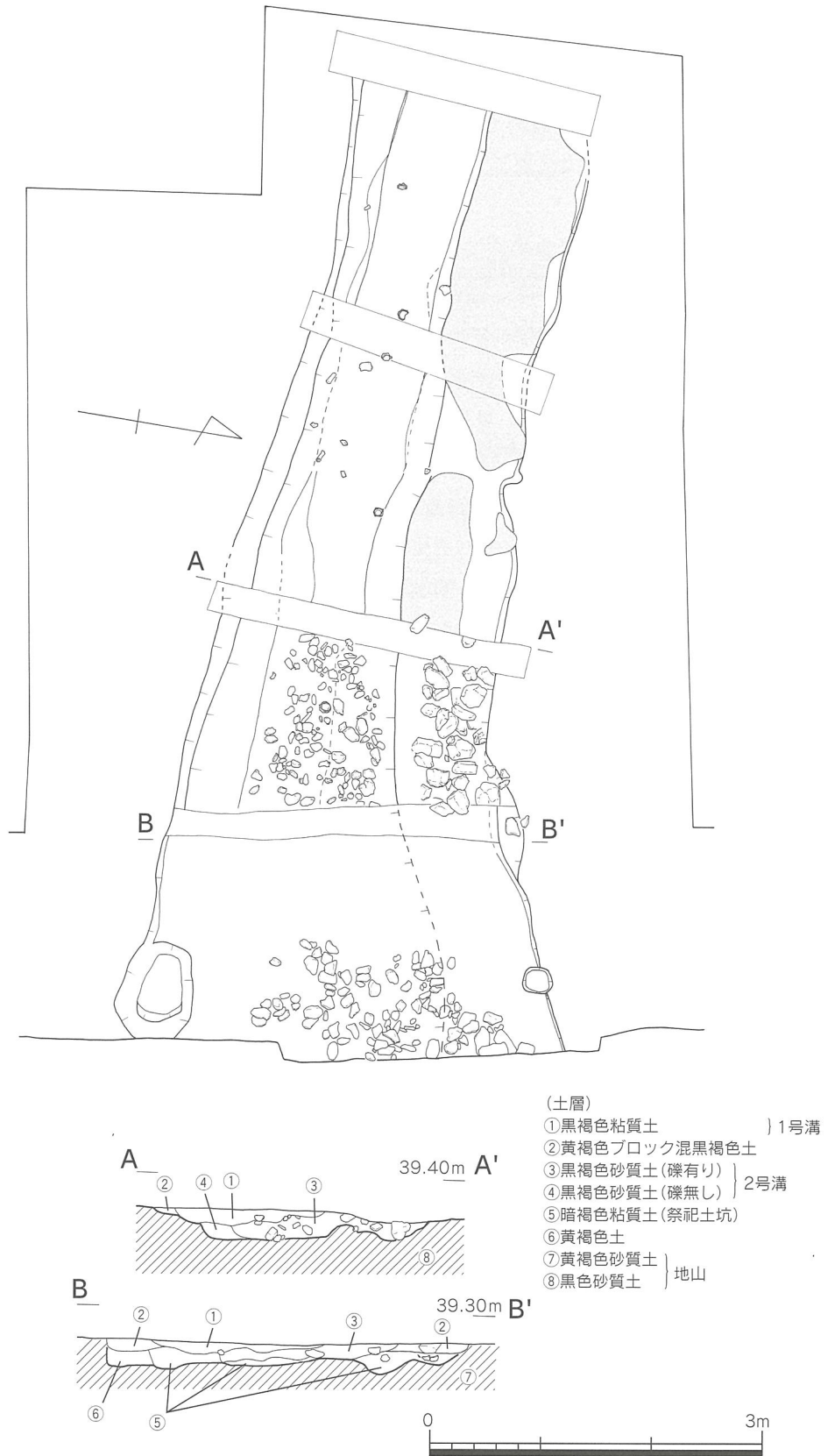
1～4が1号溝から出土した遺物で、5が2号溝より、6～12は1・2号溝検出時包含層内出土遺物である。なお、1号溝内に混入していた土師器類は小片であることと遺構の時期とは異なるため図化していない。

1は1号溝から出土した白磁製の瓦玉で、9.5×8cmの大きさである。見込みの部分に沈圈線が入り、高台部分近くまで釉がかかる。高台部分は露胎している。外底のくりはごく浅く、高台径で6.4cmある。打ち欠きは丁寧に行なっている。胎土は灰白色で、微粒の黒色粒子を含む。焼成は堅緻で良好、釉は分厚く不透明で、胎土の色が透けている。氷裂はみられない。2は白磁の瓦玉で大きさは7.5×9.0cmの大きさである。見込みの部分に沈圈線がめぐり、釉は見込み部分にのみかかっている。高台部分は露胎しており、外底のくりは非常に浅く、ベタ底にちかい形態である。高台径5.1cmで、胎土は灰白色、黒色粒子を含み、空隙がある。焼成は堅く、釉は不透明のため、釉の色ではなく胎土の色が表面に出て灰白色を呈している。3は青磁碗の瓦玉で7.8×9.2cmの大きさである。見込みの部分に沈圈線が巡り、その内側に胎土目と思われる白っぽい粘土状の塊が付着している。高台部分まで施釉しており、外底はくりが3mmほどあり、畳付2ヶ所と高台内1ヶ所に胎土目が付着する。高台径は5.8cm、胎土は灰白色で焼成は堅い。釉の色調はオリーブ色で氷裂はみられない。打ち欠き部分はやや雑な仕上げになっている。4は白磁碗の口縁部で胎土は灰白色で黒色の微粒粒子を含む。釉は不透明でややオリーブ色に入った灰白色である。釉は見込みから体部中位までかかっているようだ。氷裂は全体にはないが口縁内側に2cm幅で見られる。

2号溝からは陶磁器の破片は数点出土しているが図化できるものがほとんど無かった。5は、2号溝内から出土した白磁の瓦玉で5.1×9.0cmの大きさである。見込み部分に沈圈線があり、浅い片切彫の文様が見られる。釉は外面にはかからず、見込み部分のみ施されている。外底のくりは浅く、ケズリ痕が残る。高台径は5.9cmで、胎土は灰白色で、黒色粒子を若干含む。焼成は良好で、堅緻である。釉は灰白色で不透明あり、氷裂はみられない。

包含層からの出土陶磁器は1・2号溝検出時の包含層から出土した

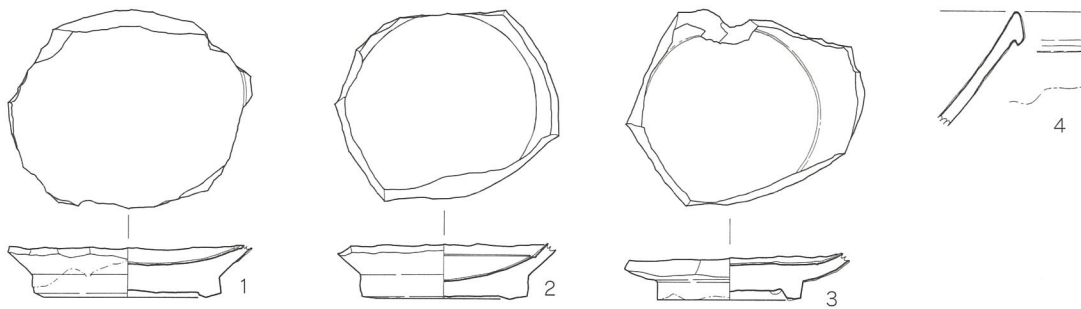
6は底部が1/2ほど残存している白磁の瓦玉と思われる個体で、見込み部分に蛇ノ目釉ハギがみられ、内側に砂目が見られる。外面は高台付近まで釉がかかる。外底はケズリを行なっている。高台径4.7cm、胎土は灰白色で黒色粒子を多く含む。焼成は堅緻で堅い。釉は灰白色で不透明で氷裂はみられない。7は青磁製の瓦玉で、底部の厚みが分厚く、細い高台をもつ。8.2×11cmの大きさで、釉は見込みから高台部分まで施されている。見込み部分には幅の広い沈圈線とその外側に櫛描文と片切彫の草花文が彫られている。高台径4.4cmで、胎土は灰白色で黒色粒子を若干含む。焼成は堅緻で、釉の色調は灰オリーブ色で氷裂はみられない。釉は全体的に分厚くかかっており、透明度がありガラス質である。8は、白磁の瓦玉で丁寧に打ち欠いて作っている。8.6×8.9cmの大きさで高台付近まで施釉している。外底のくりはごく浅く、胎土は灰白色で黒色粒子を含む。釉の色調は灰白色で見込みから高台脇までかかり、不透明である。氷裂はなく、見込み部分に沈圈線が入る。高台径は6cmである。9は青磁碗の瓦玉で8.6×9.6cmの大きさでやや雑なつくりである。見込み



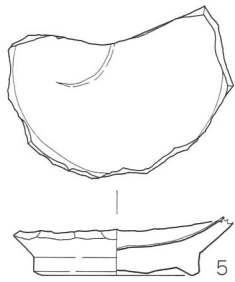
第45図 1・2号溝遺構平面図及び土層断面図(1/60) ※アミ部はそれぞれ礫分布域を示す。

部分に沈圈線とその外側に片切彫の文様が入る。外底部分はくりが深く、兜巾状に削っている。高台径は5.6cmで、胎土は灰白色で緻密、焼成は良好で堅緻である。釉の色調はオリーブ黄色で、氷裂はみられない。現存している外面は釉がかかっていない。10は、白磁碗の瓦玉で、丁寧に高台部分を残すように打ち欠いている。高台は細く、外底のくりはやや深くケズリ調整を行なっている。見込み部分に砂目と、蛇ノ目高台使用による釉ハギがみられる。高台径は6.4cmで、胎土は灰白色で黒色粒子を微粒含む。焼成は良好で堅緻である。釉の色調は灰白色で、不透明、氷裂はみられない。見込み部分には釉がはがれているが外面は高台付近まで施釉していたようだ。11は青磁の碗で、口径15.8cm、口縁部内側に凹線が入る。胎土は緻密で灰白色、黒色粒子を若干含む。焼成は良好で、釉の色調は灰オリーブ色で氷裂はみられない。見込みから高台よりやや上あたりまで施釉していたようだ。見込み部分の沈圈線のところで割れている。釉は口縁部分のみ二重に施している。

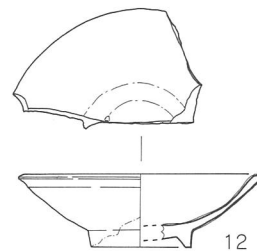
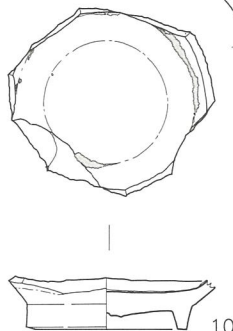
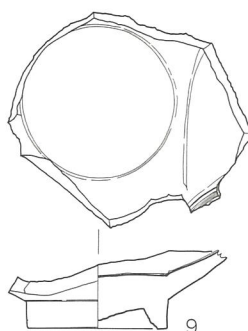
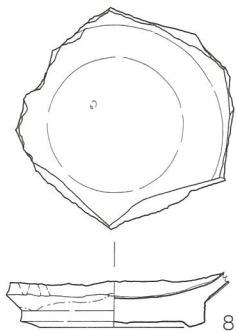
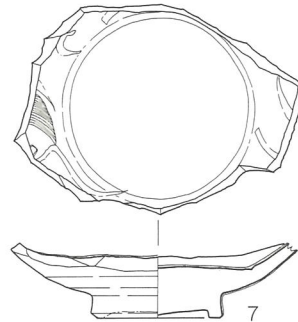
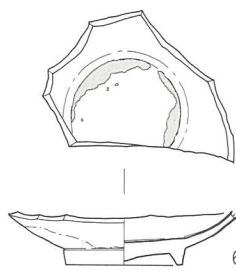
(1号溝)



(2号溝)



(包含層)



第46図 1号・2号溝出土土器実測図 (1/3)

12は、高台付の白磁皿で、1/4ほど残存している。口径は9.8cm、器高2.9cm、高台径4.0cmで、胎土は緻密で灰白色である。焼成は良好で、釉は灰白色で不透明で、氷裂はない。見込み部分には蛇の目高台による釉ハギ、若干の砂目もみられる。

### ③小結

Bトレンチでは古墳時代の祭祀土坑1基と中世の溝2条を検出した。また、旧地形を知る上で重要な情報として、トレンチ西端から23mの地点から東側に向かって地山が徐々に落ち込んでいることである。落ち込んだ部分のレベルと、大溝を検出した八龍地区221番地のレベルは50cmほど八龍地区のほうが低く、さらに東側の八龍地区235番地では30cmほど低くなっている。宮ノ下地区のA・Bトレンチあたりは若干高く、それから東に向かって徐々に落ち込んでいく旧地形が想定される。

祭祀土坑については、古墳時代初頭の土器が一括して出土したことで重要だが、同時期の住居は周辺に見られるが、墓域はなく、使用された時期も非常に限定されているため、何の目的の祭祀であったのか今後周辺の調査でその内容を検討していきたい。

### (3) Cトレンチの調査

Cトレンチの調査は、Bトレンチで確認された祭祀土坑に関連する遺構の有無と旧地形の落ち込みを確認する目的で調査を行なった。調査区はL字形に設定し、東西に幅2mで19m、南北に幅3.5mで11.2mの範囲を調査した。

調査の結果、住居3軒、土坑1基を検出した。時期は弥生時代終末～古墳時代初頭にかけてのもので、Bトレンチの祭祀土坑に近い時期の遺構が確認された。また、地山はBトレンチとほぼ同じ位置から東に向かって落ち込んでいることが確認された。

#### ①住居跡

住居は3軒確認した。1・2号住居は調査区西端で、床面のみ辛うじて残った状態で検出した。3号住居は住居かどうか認定が難しいが、調査区北東端の落ち込みを3号住居としている。ここからは鉄鏃が1点出土した。

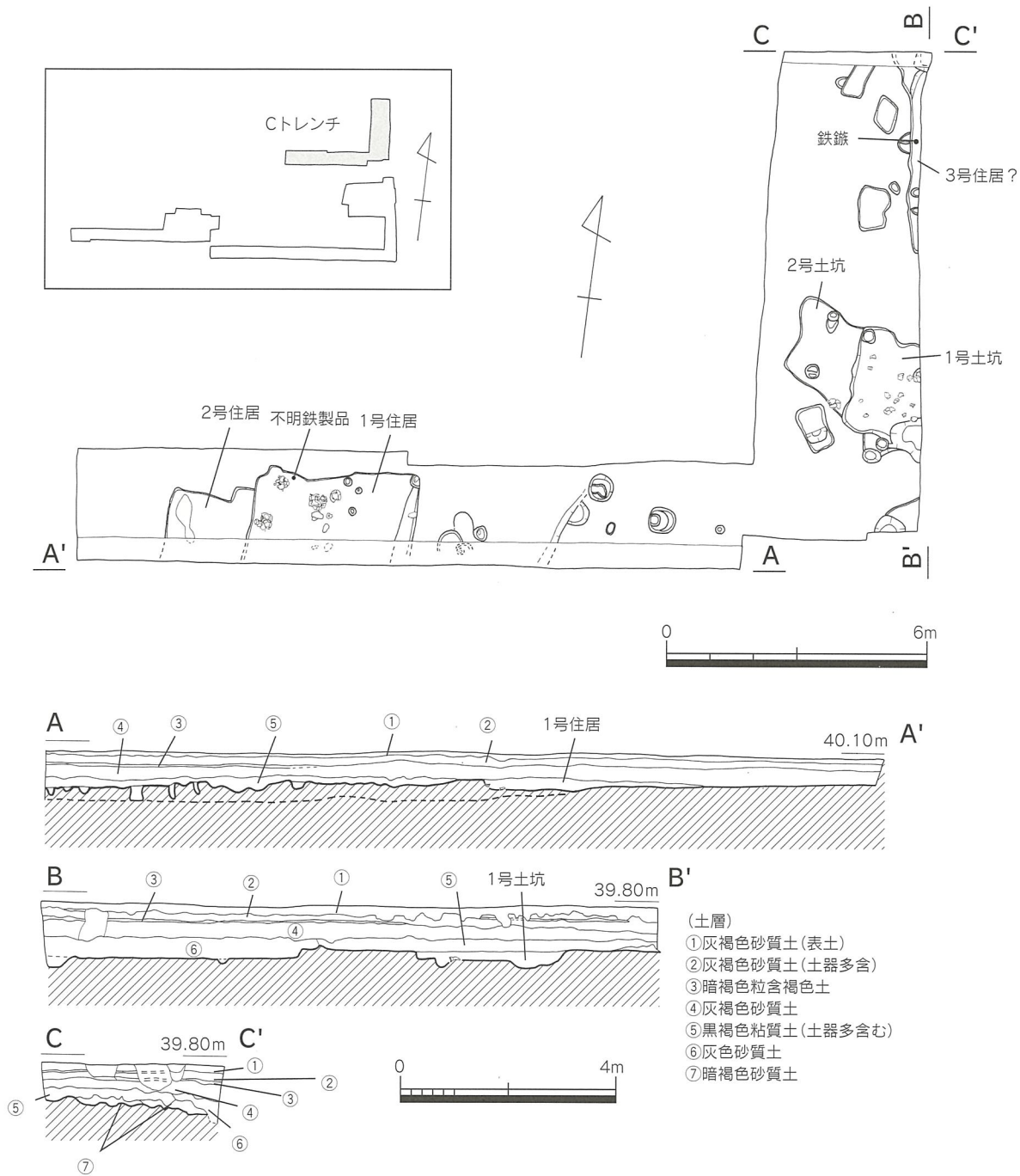
##### 1号住居（図版19、第48図）

1号住居は、床面と住居の北壁が残存していた。住居の平面プランはほぼ方形プランを呈しており、現存で東西3.8m、南北で1.8m残存している。床面中央北寄りの部分には炭が塊で残存しており、焼土も検出している。住居に伴う柱穴は3ヶ所確認されているが、柱として並ぶ柱穴はない。検出面は表土直下で削平が著しい。

出土遺物は住居の北西側床面から、甕が5個、鉢1個、高坏1個出土している。また、鉄器も2点出土している。1点は住居北壁近くから出土した鉄片（第63図の8）は刃部を持ち、鎌かとおもわれるが不明である。もう1点も床面から出土し、鉄鏃（第63図の3）である。

出土遺物 (図版39、第49図)

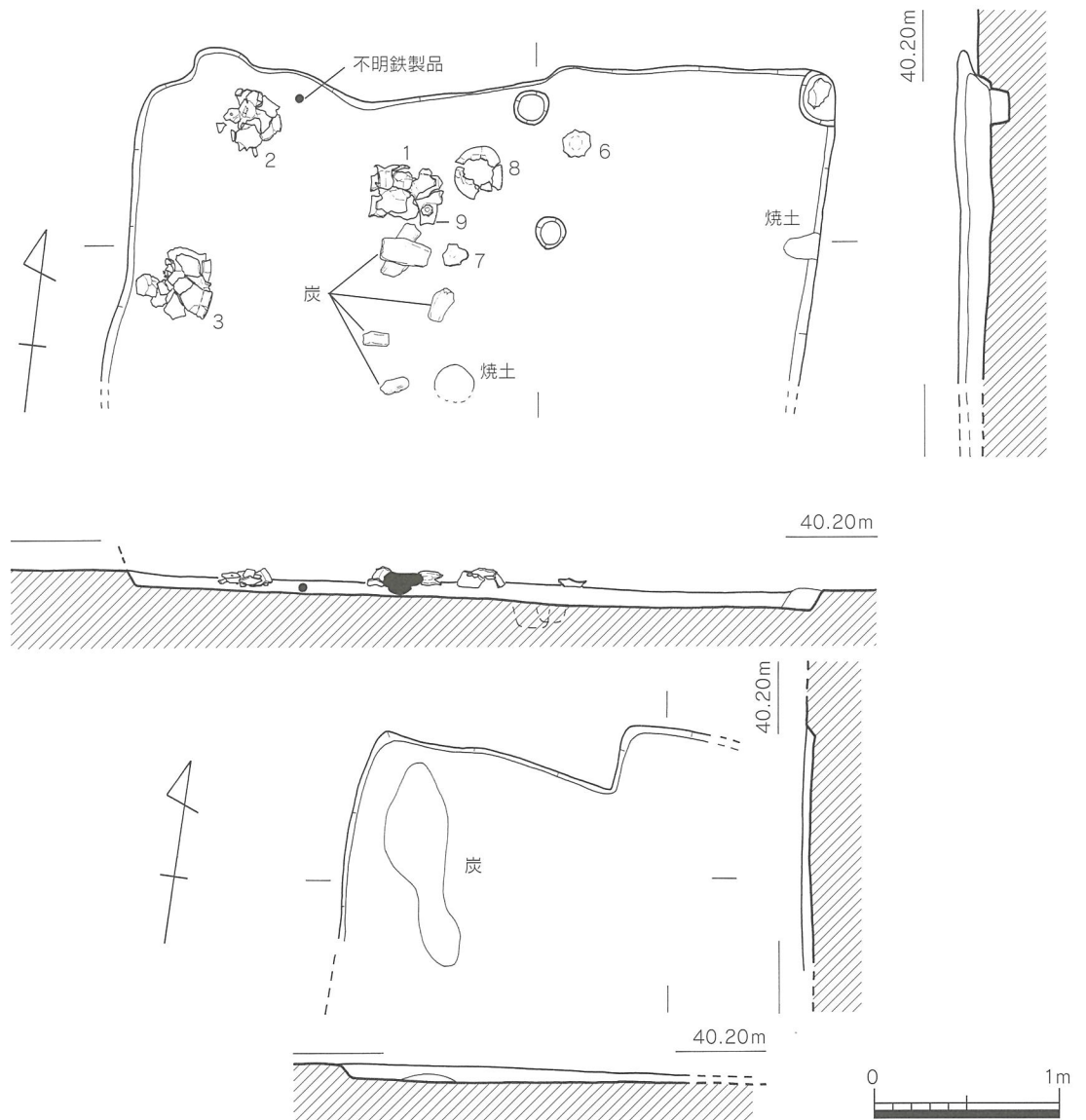
1は、完形の甕で底部に穿孔持つ。口縁部は「く」の字に屈曲し、長胴形の体部と、凸レンズ状の底部を持つ。器壁はやや厚く、胴部最大径は胴部中位にある。底部は屈曲が少なく、丸底化している。口径は19.3cm、器高は30.6cmである。外面調整の上半は細い不定方向のハケ調整で、下半部は幅の細い工具でナデツケを行なっている。内面は不定方向の粗いハケが施されている。胎土は金雲母、長石、石英が含まれている。焼成は良好、色調は赤褐色～褐色である。2は、「く」の字口縁をもつ甕の上半部で底部以外は残りがよい。口縁部は強く屈曲し、胴部の張りもやや強い。胴部最大径は胴部中位にある。外面の調整は上半部不定方向のハケ調整で、下半部は細い工具を用い



第47図 宮ノ下地区Cトレンチ遺構配置図及び土層断面図 (1/150、1/120)

て縦方向のナデツケを行なっている。内面調整は斜め方向のハケ調整を行なっている。口径は24.1cm、残存高は24.4cm。胎土には長石、石英を含み、焼成は良好、色調は淡赤褐色～褐色をしている。外面に黒斑がある。3は、「く」の字口縁を持つ甕で、やや直立ちかく立ち上がる口縁部を持つ。胴部最大径は中位にある。外面調整は頸部付近にタタキ痕が残るが、タタキ後斜め方向の細かいハケ調整を行なっており、下半部は不定方向の細かいハケ調整を行なっている。内面調整は斜め方向のハケ調整を行なう。口径は21cmで、残存高は20.1cmで、胎土は金雲母、長石、石英を含み、焼成は良好、色調は淡黄褐色である。

4は、住居南側のトレンチにかかる部分で検出した。口縁部は直立し、口縁端部がやや外反する。胴部最大径は中位にあり、底部はやや尖った丸底をしている。外面調整は上半部にタタキ痕が明瞭に残り、下半部は細いへら状工具によるナデツケを行なっている。内面調整は不定方向のハケ調整で、頸部以下はハケの方向、種類が場所により異なる。胎土は金雲母、角閃石、長石、石英を含む。



第48図 1・2号住居跡実測図 (1/40)



焼成は良好、色調は淡黄褐色。5は脚付の甕で、4と同様に1号住居にかかる南側のトレンチ掘削時に出土した。外面調整は縦方向のケズリ状で、脚部は縦方向のハケ調整である。内面調整は不定方向のハケ調整、脚部も粗いハケ調整を行なっている。脚径12.8cm、残存高11.6cm、焼成は良好、色調は淡黄褐色。6、7は底部でいずれも床面からの出土である。6はやや底部に平坦部があり、ない外面ともにハケ調整である。7は脚付の甕で脚部が接合部より剥がれている。外面調整はヘラ状工具によるナデツケ、内面はハケ調整である。

8は底部が削平により欠損する鉢である。口縁端部には平坦面を持ち、胴部の張りはない。外面調整は口縁部付近が斜め方向のハケ調整、下半部がケズリ調整で、内面調整は指押さえの後斜め方向のハケ調整をおこなっている。口径が13.1cm、残存高が11cm、焼成は良好で、色調は赤褐色である。

9は高坏で、坏と脚部の接合部分が残存している。表面の調整は風化のため観察できなかった。短脚の高坏と思われる。焼成はやや不良で、色調は淡黄褐色である。

## 2号住居（図版19、第48図）

1号住居に切られる住居で、床面のみ検出した。床面には炭の層が残る。出土遺物はない。

## 3号住居（第47図）

南北トレンチ東隅に方形の落ち込みがあり埋土より鉄鍬の茎部分（第63図-4）が出土している。調査区に切られ詳細は分からないが住居の可能性が考えられる。時期は不明。

## ②土坑（図版20、第50図）

南北トレンチ南側に方形の土坑を確認した。平面のプランから住居の可能性も考えられたが、住居としては小さいことと底面にピット類が無く焼土や炭類が見られないことから、住居としての確証が持てなかったためここでは土坑として報告を行なう。

### 1号土坑

土坑は東側は調査区外になり全体の様相は不明だが、現況で南北方向に2.4mで、深さは18～20cmである。土坑底面は平坦で南隅に土坑が掘られている。土坑内からは甕、鉢、器台が出土した。

### 出土遺物（図版40、第51図1・2・4・5・6）

1・2は甕である。1は底部が欠損しているがおそらくわずかに平坦面が残る底部だと思われる。外面調整は胴部にタタキ痕が残るがハケで上から消している。下半部は工具による縦方向のケズリ、内面は不定方向のハケ調整である。口径17.9cm、器高25.6cm、外面に黒斑がある。2は小型の甕で底部には10円玉大の平坦部がのこる。外面調整はタテハケと、下半部はケズリ、内面は粗いナメハケが施されている。口径11.7cm、器高16.4cmである。外面に黒斑あり。

4は浅い鉢で、外面ケズリ、内面ハケ調整を行なっている。口径16.7cm、器高5.3cm。外面に黒斑あり。5・6は器台でともに分厚い作りで、外面にはタタキが残る。6は受部に刻み目が施されている。6は受部径10.9cmである。



第49图 1号住居出土土器実測図 (1/4)

## 2号土坑

1号土坑に切られる浅い方形の土坑で、底面は平坦である。南側から鉢がほぼ完形で出土しており、現況で深さは5cmほどしか残っていない。

### 出土遺物 (第51図3)

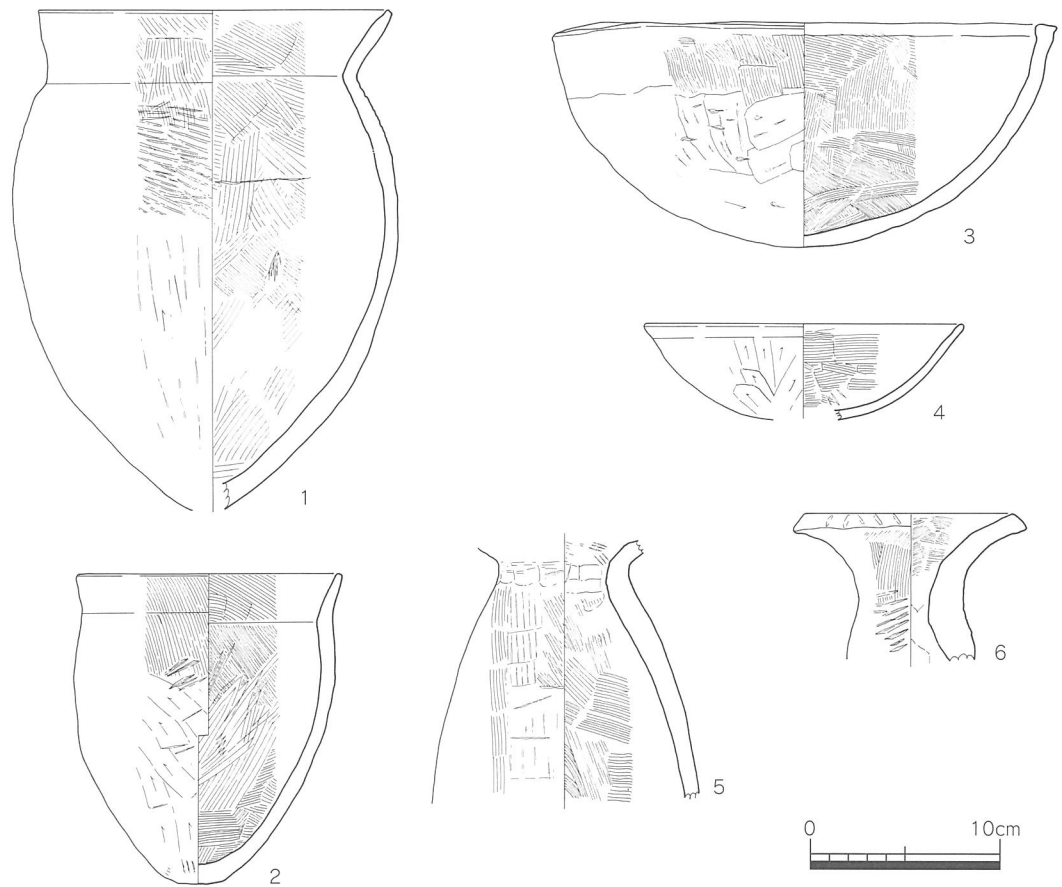
3は、大型の鉢でボウル状をしている。底部は丸い。器壁が厚く重量がある。外面は下半部がケズリ調整で、内面はハケ調整のままである。口径26.7cm、器高11.9cmである。

### ③小結

CトレンチではBトレンチと同様に調査区西端から約8mの部分で東に向けて徐々に落ちていくことが確認された。低い部分のレベルは38.80m、高い部分のレベルは39.20mで約40cmほどのレベル差があり、Bトレンチと同じ状況である。また、調査区西側のA・Cトレンチから弥生時代終末～古墳時代前期にかけての住居群が確認されており微高地上が住居地として利用されていた状況が考えられる。八龍地区の大溝が当該期に埋没しはじめたことを考えると、大溝の役割を明確にするためにも、周辺の遺構の分布状況をさらに明らかにしていく必要がある。



第50図 1・2号土坑実測図 (1/30)



第51図 1・2号土坑出土土器実測図(1/4)

## 5. 井原塚地区 (D地点) の調査

### (1) はじめに

井原塚地区 (D地点) 遺跡群の調査は、昭和56年度を当初年度とする井原地区県営圃場整備事業に伴うものである。

昭和55年度には、井原地区県営圃場整備事業地内の埋蔵文化財包蔵地の範囲確認調査を行い、圃場整備事業で削平される地域を最小限度に留めるため、客土の施工範囲を協議し、確約をとり、A～C地点を「埋蔵文化財包蔵地の重要地域」として、遺跡の保護に努めたところであった。A地点は、三雲・井原遺跡に隣接し、井原ヤリミゾ遺跡を含む範囲である。B地点は、三雲・井原遺跡の生活遺構が面として確認でき、全体的に三雲・井原遺跡群の住居跡より後出する住居跡群が確認でき、C地点については、歴史時代の遺構も確認できた地域であった。全体的に、三雲遺跡群→A地点→B地点→C地点と生活遺構の変遷を見ることができるといふことで、保存の確認がとれた次第である。

昭和56年度以降は、圃場整備事業にて削平される地区の調査を実施してきた。昭和55年度の埋蔵文化財包蔵地範囲確認調査の結果及び昭和56年度の削平される4地区の調査報告は、既に、『井原遺跡群—福岡県糸島郡前原町大字井原所在—』(前原市文化財調査報告書第8集)にて報告済みであるが、D地点の調査は、紙面の関係等により、概要の記載のみであったため、ここに報告する

ものである。

D地点の調査区は、昭和56年度井原地区県営圃場整備事業の範囲の北側、すなわち、大字三雲と接する大字井原地区の調査区にあたる。この地区は、この県営圃場整備事業の計画前にも、田畑の整理事業が行われていた地域である。この査区が非常に細長いものになったのは、客土施工により、圃場整備施工後の地割りの関係によるものである。なお、調査区は、大字井原1033番地である（圃場整備事業前の地番）。  
(川村)

## (2) 遺構と遺物の紹介

### ① 甕棺墓

調査区内では、甕棺墓4基と甕棺墓と想定可能な遺構が5ヶ箇所であったため、既報では9基と報告したところである。今回再度検討を行ったところ6基は確実に甕棺墓と確認でき、さらに、2基に関しては詳細不明ではあるが写真から甕棺墓と推定されたため報告を行なう。

#### 1号甕棺墓（図版21）

調査区のほぼ中央で検出した成人用の単棺である。墓壙の形状は隅丸方形になるものであろうが、大半は調査区外であり、幅約1.35m、深さ約0.65mを測る。墓壙に穿つ横穴は、形状が釣鐘状で、幅約1.15m、長さ約1.35m、深さ約0.5mを測る。甕棺は単棺で、木蓋であったであろうが、墓壙・横穴間にはその痕跡は確認できていない。棺は大甕で、ほぼ水平に埋置されていた。副葬品はなかった。  
(川村)

#### 甕棺（図版40、第53図）

砲弾形の単棺で、口径68.4cm、器高116.4cm、底径14.4cm、胴径66cmの上半がやや間延びした形態を呈する。口縁部は分厚く、内側にはあまり張り出さず、外側に大きく発達する。口縁平坦部は湾曲し、やや立ち上がる傾向を示し、口縁下に断面三角一条突帯で胴部やや下位にコの字突帯を二条めぐらす。胴部凸帯は胴部最大径にめぐらされ、突帯上は著しく長く作られており、胴部上部を伸ばすことで器高を高くできたと思われる。

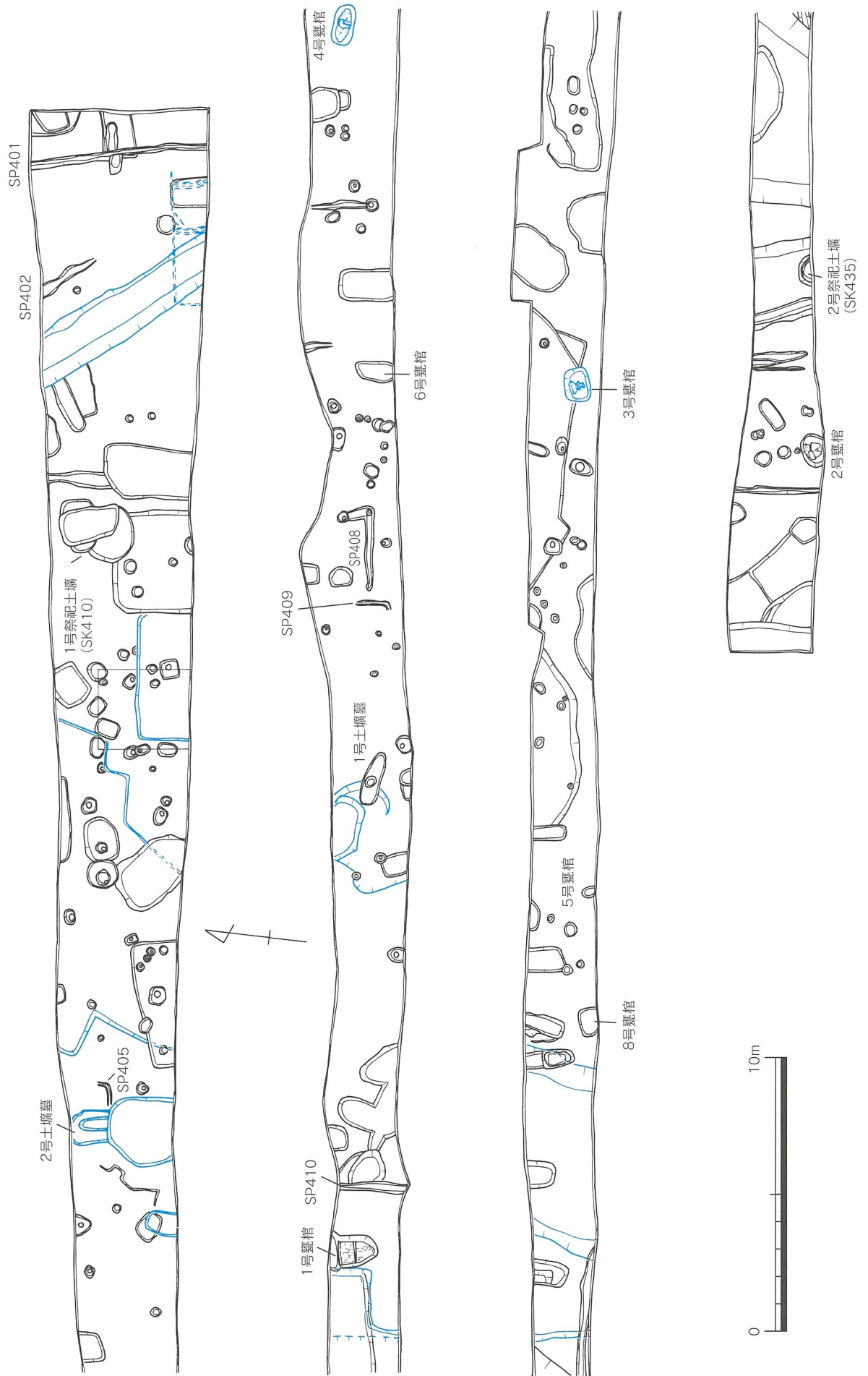
表面調整は内外面ともに丁寧なナデ調整を行ない、内面はところどころ工具痕が観察できる。色調は赤褐色で、焼成は良好。胎土は石英、長石、金雲母の微粒子を含み、細かい胎土である。

粘土帯のつなぎ目が観察でき、10～14cm幅の粘土帯を積み上げて成形している様子が観察できる。

時期は弥生時代中期後半にあたりと考えられる。三雲・井原遺跡内ではほぼ同時期の甕棺墓として三雲南小路遺跡、八龍Ⅱ-10地区、堺Ⅱ-30～32の2号甕棺、井原塚廻遺跡1号甕棺などがあげられるが、八龍地区、井原塚廻遺跡1号棺下甕と比較すると今回出土した1号棺よりやや古相を呈し、三雲南小路1号棺、2号棺はやや新相を呈している。  
(牟田)

#### 2号甕棺墓（図版21・22、第54図）

調査区の西側で検出した覆式甕棺墓で、墓壙の形状は不整形になるものであろうが、大半は調査区外であり、巾約1.20m、深さ約0.50mを測る。墓壙に穿つ横穴は斜めであった。甕棺は複式棺で、下甕は複合口縁の壺で、上甕は、開口壺で、頸部・胴部下半部を打ち欠き、打ち欠いた胴部下半部を下甕と合口にし、打ち欠いた頸部の部位には木蓋を施したものであった。ただし、木蓋の痕跡は確認できなかった。上甕の打ち欠いた口頸部の一部は、上甕・下甕の合口部に目張りとして施



第52図 井原塚地区遺構配置図 (1/200) ※青線は上層遺構

されていた。

副葬品は、ガラス玉が甕棺内より253点出土した。

(川村)

### ガラス玉 (図版44、第55・56図)

ガラス小玉は全部で253点出土している。すべて径が3～4mmのものが中心で、色調は3種類に分けられる。1～71は濃青色で、72～149はやや明るい淡青色、145～253は曇った淡青色である。製法はすべて引き伸ばした中空のガラス管を切断して製作されたものである。気泡は濃青色のガラス小玉にはあまりみられないが、淡青色のものには確認できる。淡青色の小玉は、気泡が大変多いものとあまりみられないものの2種類あり、やや曇った淡青色のものに多く確認される。小玉の形態は、切断面の角が鋭いものと、丸いものがあり、全体的には丸くなっているものがほとんどである。

第56図の254～257は、2号棺からの出土かどうかは不明である。

### 甕棺 (図版41、第54図)

#### 上甕

口径62.8cm、残存高59.2cm、最大胴径49.6cm、頸部34cmの広口壺である。口縁部にはヘラ状の工具によるキザミ目が施されており、頸部、胴部に頑丈なコの字突帯を貼り付けている。突帯はシャープで、平坦面がやや窪んでいる。頸部の突帯以上を打ち欠きにより約1/3欠損している。口縁部は上部に粘土帯を貼り付け補強しており、厚みは2～2.5cmある。胴部の打ち欠きは突帯以下4～8cmを雑に打ち欠いており、頸部の打ち欠きはそれに比べると細かく丁寧に打ち欠かれている。

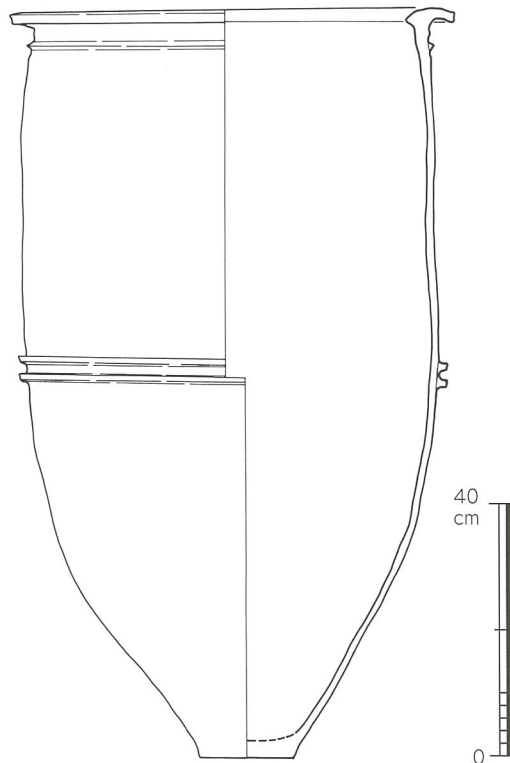
外面調整は、頸部、胴部ともに板状工具による丁寧なヨコナデをおこない、突帯は貼り付けによる強いヨコナデにより若干窪んでいる。内面調整は、頸部以上はヨコナデ後タテナデを行い、胴部はヨコナデ後斜め方向のケズリが観察できる。

#### 下甕

口径34.1cm、器高57.8cm、胴部最大径48.1cmを測る複合口縁の壺で、胴部下半部に1.5cm程度の穿孔をもつ。口縁部は一部打ち欠き、頸部・胴部に三角突帯を貼付け、底部はやや凸レンズ状を呈している。外面は、口縁部で全体的にヨコハケを施しその後ヨコナデを一部に行い、頸部・胴部上半部ではタテハケ、胴部下半部から底部にかけてはナメハケ、タテハケを施し、胴部上半部の一部ではタテハケ後軽くナデている。頸部・胴部の三角突帯を貼付け後ヨコナデで、突帯部内面には指頭圧根後ナデている。内面の調整は、口縁部でヨコナデ、口頸部でヨコハケ後、一部ナデている。胴部は全体的にナデている。

胎土は石英質砂粒等を含み、赤茶色を呈し、硬質な焼成で良好である。胴部に黒班がある。

(牟田)



第53図 1号甕棺実測図 (1/12)

### 3号甕棺墓 (図版23、第57図)

調査区の西側よりで、1号甕棺墓から西側20mで検出した合口甕棺墓である。隅丸方形の墓壇は、1.04m×1.4mの大きさで、深さ約0.62mを測り、底面は舟底状である。墓壇の横穴側は2段掘りである。横穴は斜めに設けられている。甕棺は小児用棺で、下甕は複合口縁壺で、上甕は高坏である。

副葬品はなかった。

(川村)

### 甕棺 (図版41、第57図)

#### 上甕

完形の高坏を上甕として利用している。口径32.8cm、脚径16.2cm、器高20.1cmで、口縁部端部はやや下がり気味で、内側にはあまり発達していない。脚柱部は細くやや直線的で、坏部との接合部で径は4.9cmである。器壁が全体的に厚くぼつりとした印象を受ける。

器面調整の外表面は風化が進んでいるが、縦方向のミガキを上部と下部に分けて二段階で行なっている。脚柱部は縦方向の細かいミガキ、脚裾部は斜め方向のミガキをやや雑に施している。内面調整の坏部は、放射状に縦方向のミガキが施され、3cm幅一単位で調整を行なっている。脚部はナデ調整を行ない、脚裾部は横方向のヘラナデを行なっている。中位に指押さえによる痕跡が残る。

脚部には丹塗りの痕跡と思われる赤褐色のスリップが観察できる。焼成は良好、胎土は1mm大の石英、長石を含むが精良である。

#### 下甕

口径34.1cm、器高41.1cm、胴部最大径30.6cmを測る複合口縁の壺である。頸部に三角突帯を、胴部にやや台形状の下向きの突帯を貼付け、底部は平底である。外面は、口縁部で最終的にヨコハケを施しその後きれいにヨコナデを施している。口頸部はナナメハケ、タテハケの後、一部ナデ消している。胴部上半部ではタテハケ後一部ナナメハケを施し、胴部下半部はタテハケ、底部付近はハケ目をナデ消している。頸部には三角突帯を貼付け後ヨコナデ、胴部最大部には台形状突帯を貼付けた後ヨコナデを施している。内面の調整は、口縁部でヨコナデ、口頸部でヨコハケ後、一部ナデている。胴部は全体的にナデている。

胎土は砂粒等を含み、赤茶色を呈し、硬質な焼成で良好である。胴部に大きな黒班が1ヶ所観察できる。

(牟田)

### 4号甕棺墓 (図版41、第57図)

調査区の中央部の1号甕棺墓から西側約45mの位置で検出した合口式甕棺墓で、長円形の墓壇で、1.37m×0.81mの大きさで、深さ約0.4mを測り、底面は舟底状である。甕棺の埋葬角度はほぼ水平である。甕棺は小児用棺で、上甕・下甕ともに甕である。

(川村)

副葬品はなかった。

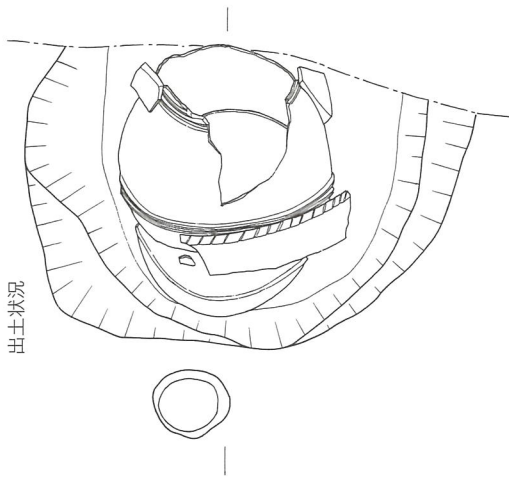
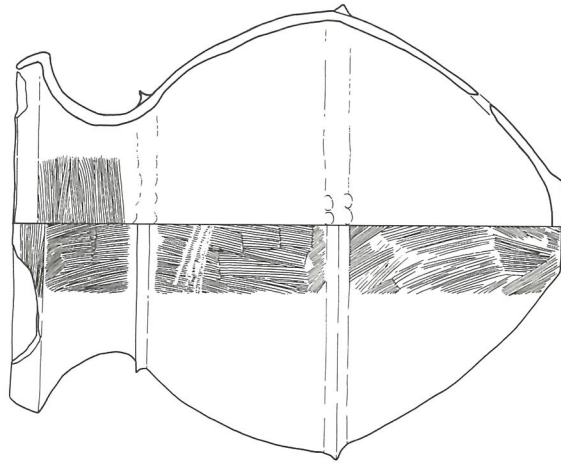
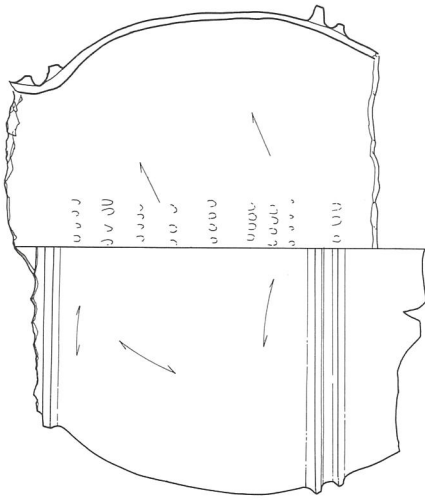
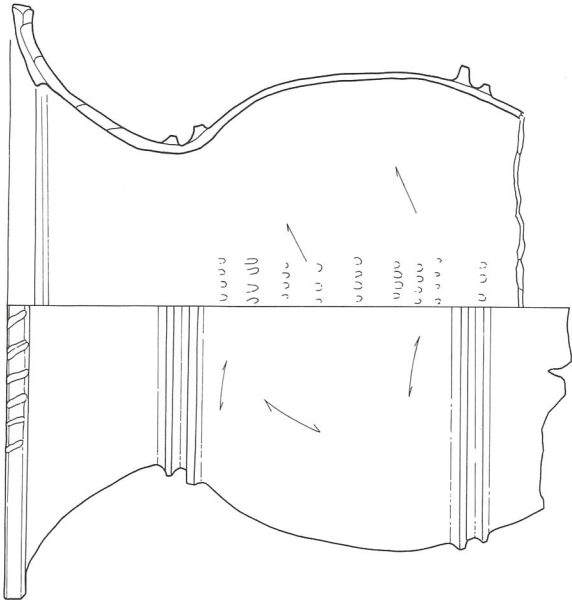
### 甕棺 (図版41、第57図)

#### 上甕

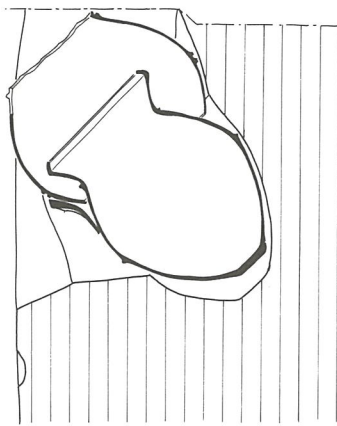
口径41.8cm、器高54.8cmの甕で、口縁部は「く」の状口縁で、頸部に三角突帯を貼付け、底部は平底である。外面は、口縁部から頸部・三角突帯は最終的にヨコナデを施している。胴部等はタテハケを施している。内面の調整は、口縁部・頸部でヨコナデで、胴部にはタテハケの小口部の痕跡が残り、最終的にはナデている。胎土は石英質砂粒等を含み、黄茶色を呈し、良好な焼成である。



(上墓室元图)



出土状况



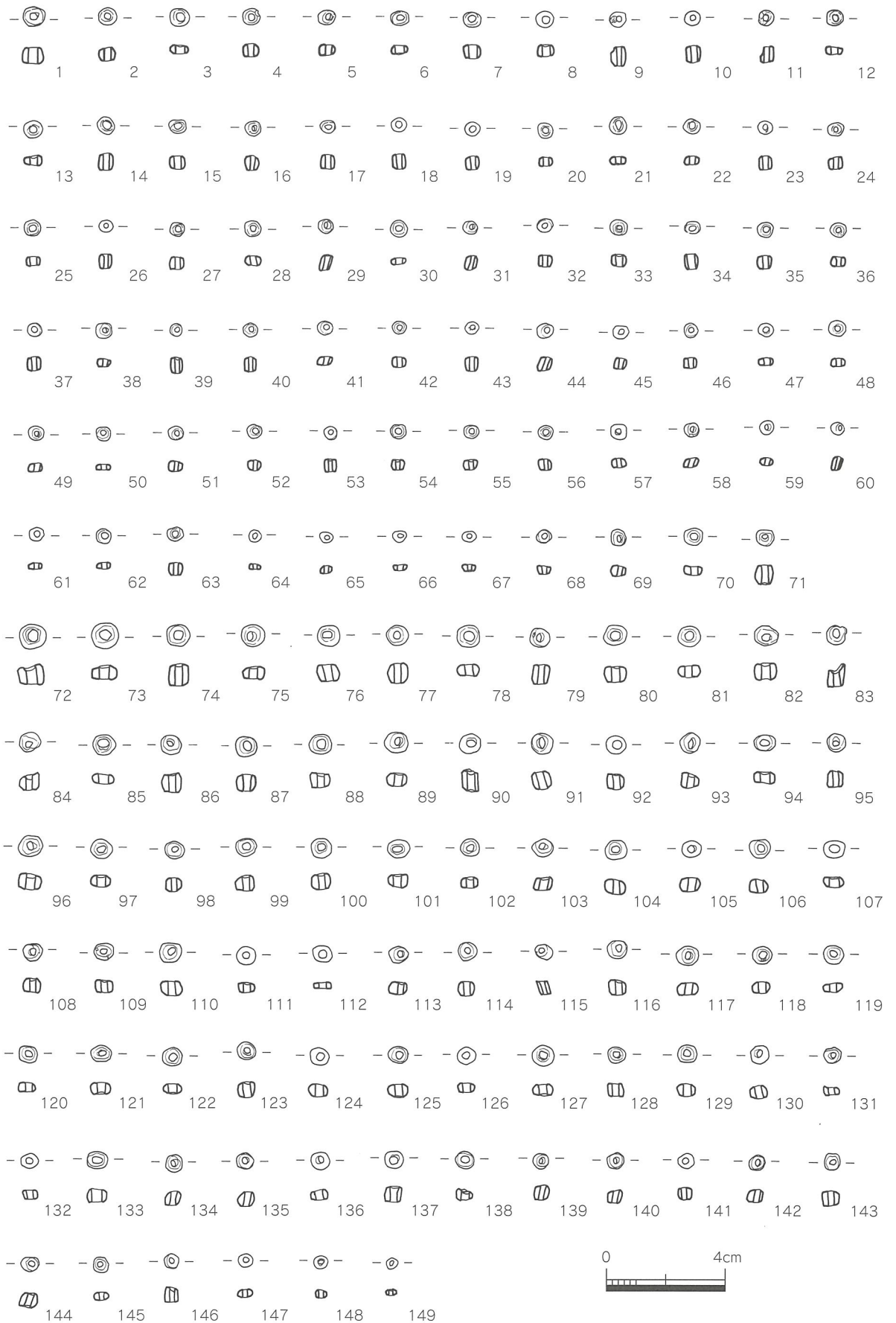
第54图 2号墓棺夹测图 (1/8)

第2表 井原塚地区(D地点)2号甕棺出土ガラス玉計測表①

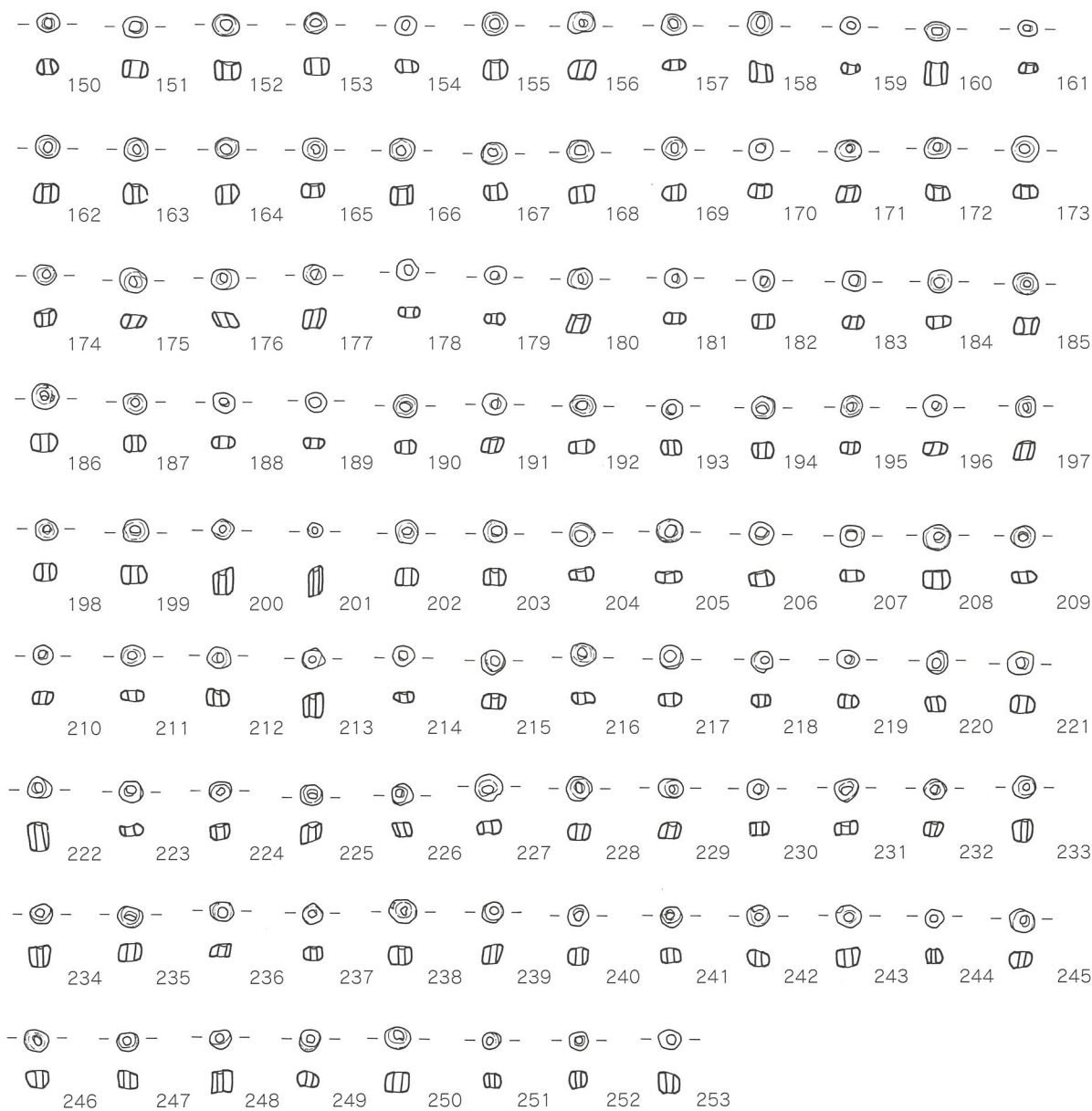
番号	直径(mm)	厚さ(mm)	孔径(mm)	重量(g)	色調	番号	直径(mm)	厚さ(mm)	孔径(mm)	重量(g)	色調
1	4.0	3.0	14.0	0.06	青紺色	66	2.4	1.2	1.0	0.01	〃
2	3.2	2.6	8.0	0.04	〃	67	2.4	1.2	0.9	0.01	〃
3	3.5	1.7	1.3	0.03	〃	68	2.6	1.6	1.1	0.01	〃
4	3.2	2.4	1.0	0.02	〃	69	2.9	2.0	1.0	0.02	〃
5	3.0	2.1	0.9	0.02	〃	70	3.4	1.8	1.3	0.03	〃
6	3.1	1.6	1.4	0.01	〃	71	3.3	3.2	1.5	0.06	〃
7	3.1	2.6	1.5	0.03	〃	72	4.5	3.2	2.0	0.04	淡青色
8	2.9	2.2	1.3	0.03	〃	73	4.7	2.4	1.9	0.06	〃
9	2.9	3.7	0.7	0.03	〃	74	3.7	3.8	1.8	0.07	〃
10	2.9	3.1	0.8	0.03	〃	75	3.9	2.5	1.3	0.05	〃
11	2.9	3.0	0.9	0.03	〃	76	3.8	3.1	1.8	0.05	〃
12	3.0	1.7	1.2	0.02	〃	77	3.7	3.5	1.2	0.05	〃
13	3.2	1.9	1.2	0.02	〃	78	4.1	2.2	1.7	0.04	〃
14	3.0	2.7	1.2	0.03	〃	79	3.2	3.5	1.1	0.05	〃
15	2.9	2.3	1.4	0.01	〃	80	4.1	3.0	1.8	0.06	〃
16	2.6	2.6	1.0	0.02	〃	81	3.9	2.2	1.6	0.04	〃
17	2.6	2.5	1.1	0.02	〃	82	4.1	3.1	1.4	0.05	〃
18	2.8	2.4	1.1	0.02	〃	83	3.1	4.1	1.8	0.03	〃
19	2.7	2.5	1.1	0.02	〃	84	3.5	3.6	1.1	0.04	〃
20	2.6	1.7	1.1	0.01	〃	85	3.8	1.8	1.8	0.03	〃
21	2.9	1.5	1.4	0.01	〃	86	3.4	3.4	1.2	0.06	〃
22	3.0	1.7	1.2	0.02	〃	87	3.6	3.6	1.3	0.05	〃
23	2.4	2.4	0.9	0.01	〃	88	3.8	3.8	1.9	0.04	〃
24	2.7	2.3	1.0	0.02	〃	89	3.7	3.7	1.3	0.04	〃
25	2.8	1.8	1.2	0.01	〃	90	3.4	3.4	1.8	0.04	〃
26	2.6	2.6	0.7	0.02	〃	91	3.6	3.6	1.6	0.05	〃
27	2.7	2.2	1.0	0.02	〃	92	3.2	2.8	1.6	0.04	〃
28	2.9	1.7	1.1	0.02	〃	93	3.4	2.7	1.6	0.03	〃
29	2.4	3.0	1.2	0.02	〃	94	3.6	2.2	1.8	0.02	〃
30	3.0	1.4	1.2	0.01	〃	95	3.1	2.9	1.4	0.03	〃
31	2.5	2.6	0.7	0.02	〃	96	4.1	2.8	1.8	0.04	〃
32	2.8	2.2	1.0	0.02	〃	97	3.5	2.0	1.6	0.03	〃
33	2.9	2.3	1.1	0.02	〃	98	3.2	2.6	0.8	0.03	〃
34	2.6	2.8	1.3	0.02	〃	99	3.6	2.8	1.3	0.04	〃
35	2.7	2.4	1.0	0.02	〃	100	3.4	2.6	1.4	0.04	〃
36	2.8	2.0	0.7	0.02	〃	101	3.6	2.5	1.6	0.04	〃
37	2.6	2.3	0.8	0.02	〃	102	3.2	1.9	1.4	0.02	〃
38	2.8	1.7	1.0	0.01	〃	103	3.4	2.4	1.9	0.03	〃
39	2.4	2.8	0.8	0.02	〃	104	3.7	2.8	1.2	0.04	〃
40	2.4	2.6	0.8	0.02	〃	105	3.3	2.5	1.7	0.03	〃
41	2.8	1.7	1.1	0.01	〃	106	3.5	2.5	1.2	0.04	〃
42	2.6	1.8	1.0	0.02	〃	107	3.5	2.0	2.0	0.03	〃
43	2.6	2.5	0.9	0.02	〃	108	3.3	2.6	1.2	0.03	〃
44	2.4	2.4	1.1	0.02	〃	109	3.3	2.2	1.2	0.03	〃
45	2.5	2.2	1.0	0.02	〃	110	3.9	2.6	1.5	0.04	〃
46	2.6	2.0	1.0	0.02	〃	111	3.2	1.9	1.2	0.02	〃
47	2.6	1.4	1.2	0.01	〃	112	3.1	1.2	1.5	0.01	〃
48	2.7	1.7	1.0	0.01	〃	113	3.5	2.5	1.1	0.03	〃
49	2.6	1.7	0.9	0.01	〃	114	3.2	2.7	1.2	0.03	〃
50	2.5	1.4	1.0	0.01	〃	115	2.6	2.4	0.8	0.02	〃
51	2.6	2.0	0.7	0.01	〃	116	3.6	2.9	1.6	0.04	〃
52	2.4	1.9	0.8	0.01	〃	117	3.7	2.2	1.2	0.04	〃
53	2.2	2.2	0.8	0.01	〃	118	3.3	2.1	1.3	0.03	〃
54	2.6	1.9	1.0	0.01	〃	119	3.4	1.9	1.5	0.02	〃
55	2.5	1.8	0.8	0.01	〃	120	3.3	1.7	1.6	0.01	〃
56	2.4	2.1	0.8	0.02	〃	121	3.4	2.0	1.3	0.02	〃
57	2.7	1.7	1.0	0.01	〃	122	3.3	1.7	1.4	0.02	〃
58	2.4	1.7	0.8	0.01	〃	123	3.0	2.6	1.3	0.03	〃
59	2.4	1.5	0.8	0.01	〃	124	3.5	2.2	1.3	0.04	〃
60	2.0	2.5	0.7	0.02	〃	125	3.4	2.2	1.6	0.03	〃
61	2.4	1.2	1.0	0.01	〃	126	3.0	1.6	1.4	0.01	〃
62	2.5	1.2	1.2	0.01	〃	127	3.6	2.0	1.3	0.03	〃
63	2.6	2.3	1.0	0.02	〃	128	3.0	2.3	1.3	0.03	〃
64	2.3	1.3	0.8	0.01	〃	129	3.4	2.2	1.6	0.03	〃
65	2.2	1.4	0.9	0.01	〃	130	3.0	2.3	1.4	0.02	〃

第3表 井原塚地区（D地点）2号甕棺出土ガラス玉計測表②

番 号	直径(mm)	厚さ(mm)	孔径(mm)	重量(g)	色 調	番 号	直径(mm)	厚さ(mm)	孔径(mm)	重量(g)	色 調
131	3.1	1.6	1.4	0.01	〃	193	2.9	2.0	1.4	0.02	〃
132	2.8	1.7	1.3	0.02	〃	194	3.2	2.3	1.5	0.02	〃
133	3.5	2.4	2.0	0.03	〃	195	3.0	1.8	1.1	0.01	〃
134	3.0	2.5	1.0	0.02	〃	196	3.3	2.1	1.2	0.02	〃
135	3.0	2.4	1.0	0.02	〃	197	3.0	2.8	1.2	0.04	〃
136	3.2	1.9	1.2	0.02	〃	198	3.2	2.5	1.0	0.03	〃
137	3.1	2.7	1.5	0.03	〃	199	3.6	2.4	1.4	0.04	〃
138	3.2	2.2	1.4	0.02	〃	200	3.0	3.8	1.2	0.05	〃
139	2.8	2.3	1.0	0.02	〃	201	2.3	4.3	1.1	0.02	〃
140	2.6	2.3	1.2	0.02	〃	202	3.4	2.3	1.4	0.03	〃
141	2.8	2.0	1.1	0.01	〃	203	3.2	2.2	1.5	0.03	〃
142	2.9	2.3	1.1	0.02	〃	204	3.3	1.8	1.6	0.01	〃
143	3.1	2.7	0.9	0.03	〃	205	3.6	1.7	1.7	0.03	〃
144	3.2	2.8	1.2	0.03	〃	206	3.4	2.4	1.8	0.03	〃
145	2.8	1.7	1.0	0.01	〃	207	3.2	1.6	1.8	0.02	〃
146	2.4	2.5	0.9	0.01	〃	208	3.7	2.6	1.7	0.05	〃
147	2.6	1.8	0.9	0.01	〃	209	3.2	1.7	1.5	0.02	〃
148	2.4	1.7	1.0	0.01	〃	210	2.9	1.9	1.3	0.02	〃
149	1.9	1.2	0.6	0.01	〃	211	3.2	1.4	1.4	0.02	〃
150	3.1	2.3	1.0	0.02	〃	212	3.1	2.4	1.3	0.04	〃
151	3.7	2.2	1.8	0.03	〃	213	3.1	3.4	1.2	0.04	〃
152	3.6	2.8	1.6	0.04	〃	214	2.9	1.2	1.1	0.01	〃
153	3.4	2.2	1.8	0.03	〃	215	3.1	1.8	1.5	0.02	〃
154	3.3	1.9	1.5	0.02	〃	216	3.3	1.6	1.2	0.02	〃
155	3.5	2.9	1.4	0.04	〃	217	3.2	1.9	1.3	0.02	〃
156	4.0	2.8	1.0	0.06	〃	218	2.8	1.7	1.0	0.01	〃
157	3.4	1.7	1.2	0.02	〃	219	3.0	1.9	1.0	0.02	〃
158	3.4	3.0	1.9	0.05	〃	220	3.2	2.3	1.0	0.03	〃
159	2.9	1.7	1.3	0.01	〃	221	3.6	2.4	1.2	0.03	〃
160	3.4	3.2	1.8	0.03	〃	222	3.0	3.5	1.3	0.04	〃
161	2.6	1.4	1.1	0.01	〃	223	3.2	1.7	1.2	0.02	〃
162	3.4	2.7	1.2	0.03	〃	224	3.0	2.4	0.8	0.03	〃
163	3.5	2.8	1.0	0.03	〃	225	3.4	2.6	1.0	0.03	〃
164	3.1	2.9	1.8	0.03	〃	226	3.0	2.2	1.0	0.03	〃
165	3.2	1.9	1.4	0.02	〃	227	3.8	2.1	1.5	0.04	〃
166	3.4	2.9	1.3	0.04	〃	228	3.4	2.4	1.2	0.03	〃
167	3.4	2.2	1.3	0.03	〃	229	3.2	2.4	1.2	0.03	〃
168	3.7	2.4	1.4	0.04	〃	230	3.0	2.1	1.3	0.02	〃
169	3.5	2.7	1.2	0.04	〃	231	3.4	1.9	1.4	0.03	〃
170	3.5	2.2	1.0	0.02	〃	232	3.2	2.1	1.2	0.03	〃
171	3.4	2.6	1.3	0.04	〃	233	3.2	3.0	0.9	0.05	〃
172	3.6	2.1	1.3	0.02	〃	234	3.0	3.0	1.3	0.03	〃
173	3.6	2.1	1.4	0.03	〃	235	3.4	2.4	1.4	0.04	〃
174	2.9	2.2	1.0	0.02	〃	236	3.1	2.0	1.6	0.02	〃
175	3.3	2.0	1.5	0.03	〃	237	3.0	1.9	1.4	0.02	〃
176	2.9	2.1	1.6	0.03	〃	238	3.8	2.6	0.8	0.05	〃
177	3.1	2.7	1.2	0.03	〃	239	2.8	2.5	1.4	0.02	〃
178	3.1	1.6	1.3	0.02	〃	240	3.0	2.1	1.4	0.03	〃
179	2.8	1.8	1.0	0.01	〃	241	3.1	2.0	1.1	0.02	〃
180	2.9	2.7	1.4	0.02	〃	242	3.1	2.2	1.4	0.02	〃
181	3.0	1.8	1.1	0.02	〃	243	3.4	2.6	1.4	0.03	〃
182	3.1	2.0	1.3	0.02	〃	244	2.6	2.2	1.2	0.02	〃
183	3.1	1.7	1.4	0.02	〃	245	3.4	2.4	1.4	0.03	〃
184	3.4	1.8	1.5	0.02	〃	246	3.4	2.4	1.2	0.03	〃
185	3.4	2.4	1.3	0.03	〃	247	3.0	2.5	1.4	0.02	〃
186	3.6	2.5	1.0	0.04	〃	248	3.2	2.9	1.2	0.03	〃
187	3.1	2.3	1.1	0.03	〃	249	3.0	2.2	1.2	0.02	〃
188	3.1	1.7	1.3	0.02	〃	250	3.5	2.6	1.3	0.04	〃
189	2.9	1.7	1.7	0.01	〃	251	2.4	2.0	1.0	0.01	〃
190	3.2	1.8	1.8	0.02	〃	252	2.7	2.4	0.9	0.02	〃
191	3.2	2.0	1.7	0.03	〃	253	3.1	2.9	1.1	0.03	〃
192	3.5	2.0	1.6	0.03	〃						



第55図 2号甕棺墓出土ガラス玉実測図① (1/2)



第56図 2号甕棺墓出土ガラス玉実測図② (1/2)

器面にはススが付着しているため、日常用土器の転用である。

#### 下甕

口径40.9cm、器高52.5cmの甕で、口縁部は「く」の状口縁で、頸部に三角突帯を貼付け、底部は平底である。外面は、口縁部から頸部・三角突帯は最終的にヨコナデを施している。胴部等はタテハケを施している。内面の調整は、口縁部・頸部でヨコナデで、胴部は丁寧にナデている。胎土は石英質砂粒等を含み、赤茶色を呈し、良好な焼成である。器面の口縁部から胴部最大径にはススが付着しているため、日常用土器の転用である。

### 5号甕棺墓 (図版25、第58図)

墓壙はほとんど削平をうけ、形状は不明である。概報では報告していなかった遺構で、遺構番号もついていない。甕棺は墓壙底面に貼り付くような形で検出した。甕棺は頸部から底部まで残存していたが、半分以上削られた状態であった。埋葬角度、上甕については不明である。甕体サイズからおそらく乳幼児用の甕棺と考えられる。(川村)

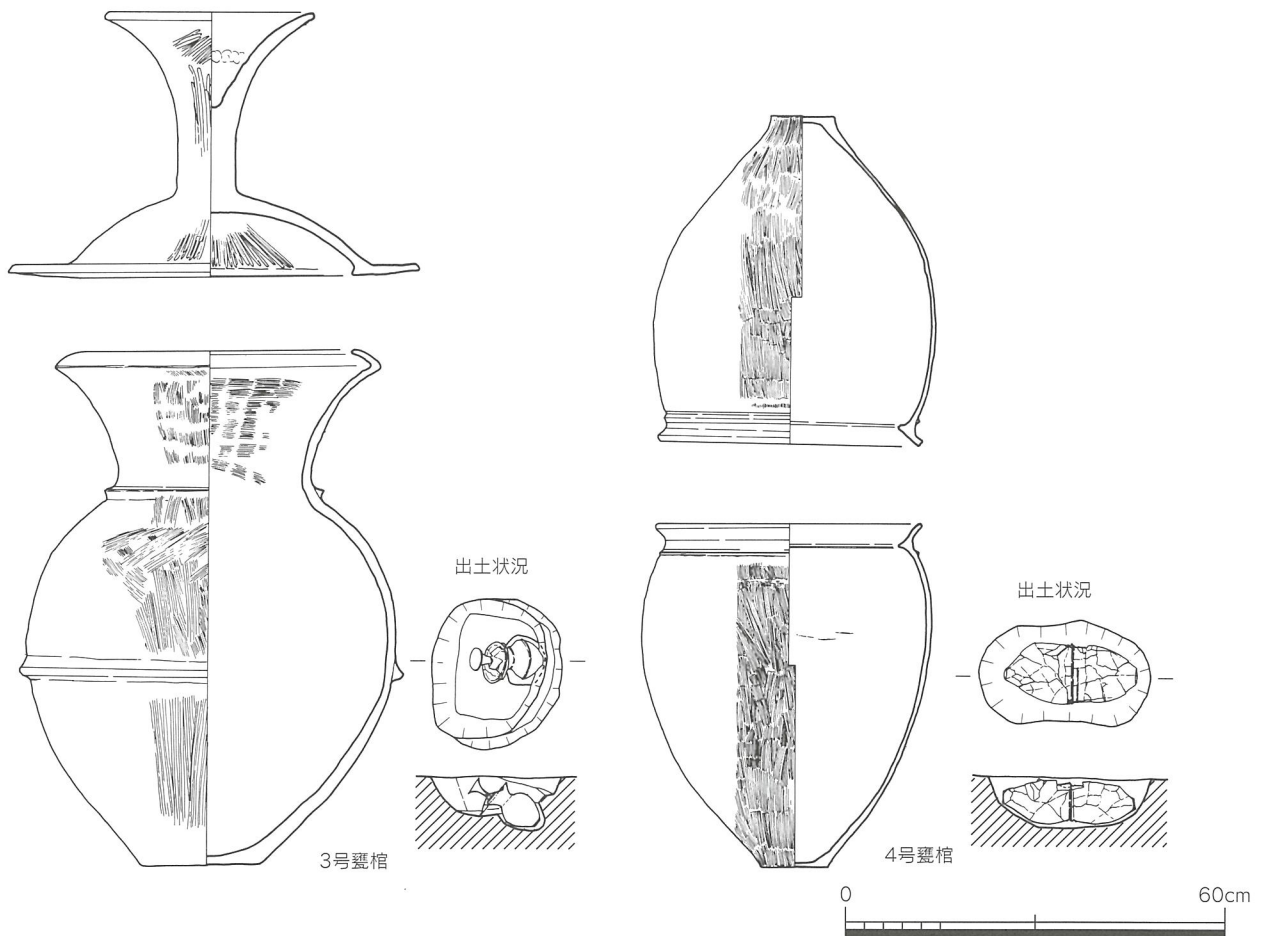
### 甕棺 (図版41、第58図)

広口壺の頸部以下が残存していた。胴が大きく張り、小さい底部をもつ。底部はやや上げ底で、径約10cmで、厚みは1cmである。最大胴径の部分にM字突帯を2条めぐらす。突帯はつまみあげた形態をしており、シャープさに欠けている。最大胴径が41.5cmで、底部にかけてはすっきりとすぼまっている。

外面調整は、上半がヨコナデ、下半は板状工具による縦方向ナデで工具痕が残る。内面調整は器表面が剥がれており不明である。胎土は緻密で微粒な石英、長石、赤色粒子を含む。焼成は良好、色調はにぶい橙色を呈している。(牟田)

### 6号甕棺

S K 420として報告をしていた甕棺で、頸部打ち欠きの壺棺が埋葬されてあった。墓壙は細長い楕円形をしていたが、削平が激しく詳細は不明である。遺構の写真は撮影していない。



第57図 3・4号甕棺実測図 (1/12)

## 甕棺 (第58図)

壺形土器の頸部やや下部を、丁寧に打ち欠いて利用している。最大胴径は突帯やや上位にあり、底部まではややポツテリとしたつくりである。底部は平底で、底径11.4cm。最大胴径38cm、口縁打ち欠き部径29.5cm～35cmで、残存高は23cm～25.5cmである。突帯はコの字のやや下方に垂れ気味の一条突帯をめぐらしている。

外面調整は上半はタテハケ後板ナデ、下方は幅の狭い単位の短いタテハケを施し、底部付近はハケ後ナデ調整を行なっている。内面調整は上半は明瞭なハケが観察できる。櫛描きのような深く鋭い工具による調整で、斜め方向のハケ後横方向のハケを施している。下半部は放射状に広がる筋状の痕跡がのこる。底部は棒状の工具でつついたような凹凸がみられる。

胎土は1～3mm大の石英、長石、金雲母を含み、焼成は良好、色調はにぶい黄橙色を呈している。黒斑あり。(牟田)

### 7号甕棺墓 (図版24・25)

SK415を切る隅丸方形の土壇で、小児棺と考えられる。写真で遺構は確認できるが、遺物の確定ができなかったため、時期など詳細はわからない。棺は、小型の日常用甕を転用した物と考えられる。(牟田)

### 8号甕棺 (図版25)

SK430と報告していた土坑である。隅丸楕円形の墓壇を持ち、大半が削平されている。棺には広口壺を使用したと考えられるが、遺物の確定ができなかったため、時期等詳細は不明である。おそらく周囲の甕棺墓と同じ時期に当てはまる物と考えられる。

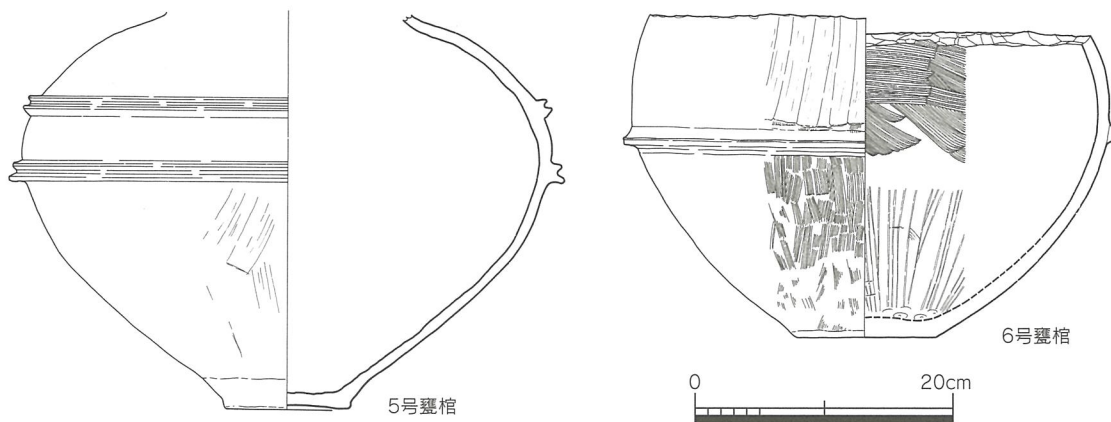
以上、8基の甕棺墓が調査区から確認された。甕棺墓の造営時期は弥生時代中期後半～後期中頃と考えられる。甕棺が分かっている6基を見てみると、1号甕棺以外はすべて小児用の甕棺であったと思われる。残りの2基に関しても、写真からおそらく小児用の棺であった可能性が高い。

(牟田)

## ②土壇墓

### 1号土壇墓

1号・4号甕棺墓の間で、SK412を切って検出した土壇墓である。写真は概報に載せているた



第58図 5・6号甕棺実測図 (1/6)

め、今回は省略する。長さ200m、幅0.6mを測る。

甕棺墓より後出するものと考えられる。

## 2号土壇墓（図版25）

SK413に切られる二段掘りの土壇で、土壇墓と考えられる。出土遺物等はなく、詳細な時期は不明である。

土壇墓と考えられる土壇はほかにも存在するが、その殆どは調査区外に切られており、詳細が分からないため今回は2基のみ報告を行なう。（牟田）

## ③祭祀土坑（図版26）

祭祀土坑として調査区東端から検出した楕円形のSK410と、西端から検出し半分は調査区外に切られるSK435がある。

### 1号祭祀土坑（SK410）（図版26）

平坦な楕円形の土坑で甕、壺、高坏などの丹塗土器が出土している。完形のものには甕1点だが、ほかの遺物は遺構の削平が大きく破片のものばかりである。

土坑の規模は不明だが、やや東西に長い楕円形の土坑である。底面は平坦で、現況で約10cmの深さしか残存していない。出土遺物から遺構の時期は、弥生時代中期後半と考えられ、1号甕棺とほぼ同時期にあたる。

### 出土遺物（図版42、第59図）

1は中型甕で、口縁部は内側に殆ど発達しないT字口縁で、やや下方に下がっている。口縁部平坦面には等間隔で暗文が、口縁外端部には刻み目が施されている。頸部と胴部に1条ずつM字突帯を貼り付け、胴上半部に最大胴径をもつ。底部にかけてすぼまり、平底の底部がつく。外面調整は、全体的に大変丁寧に施されており、頸部突帯と胴部突帯の間は縦方向のヘラミガキ、胴中位は横方向のヘラミガキ、底部付近は縦方向のヘラミガキが施されている。口縁部はヨコナデで、口縁端部の刻みは等間隔にヘラ状工具によって、上面平坦部の暗文は幅の小さいヘラ状工具によって施されている。内面調整は、斜め方向のハケ調整が殆どで、底部付近は指押さえとナデ調整を行なっている。器表面には赤色顔料が口縁平坦部から底部まで丁寧に塗布されている。口径28.6cm、器高32.8cm、底径6.5cmである。

2・3は底部で、2は底径7.6cmの平底で、3は底径8.6cmの平底である。2は外面調整にタテハケが明瞭に残り、所々に粘土痕が観察できる。

4は広口壺の口縁部で、口縁外端部に深く、鋭い刻みを持つ。口径は20cmで、あまり頸部にかけてすぼまらない形態をしている。外面調整はナデ、内面調整はヨコナデを行なっている。

5は高坏の杯部で、丹塗りである。口縁は平坦なT字口縁で平坦部には横方向のヘラミガキが施されている。外面調整はナデとヘラミガキ、内面調整は横方向の丁寧なヘラミガキを行なっている。口径は27cmで、焼成は良好である。

6は口縁端部に刻みをもつ甕の口縁で頸部がしまる形態をしている。口縁はやや立ち上がり、内側への張り出しはなく、頸部にM字突帯を貼り付けている。外面調整はナデ、内面調整は板ナデである。口径26.8cm。



7は丹塗りの大型壺の口縁部である。口縁部平坦面、外面に丹塗りの痕跡がのこる。口縁外端部はやや凹む。器面調整は内外面ともにハケ調整をおこなう。

9は甕棺の口縁部分で、口縁部は15cmくらいの長さしか残っていなかった。打ち欠きによるものではない。胎土は1~2mm大の石英、長石、赤色粒、黒色粒を含む。焼成は良好で、色調は内外ともに橙色である。

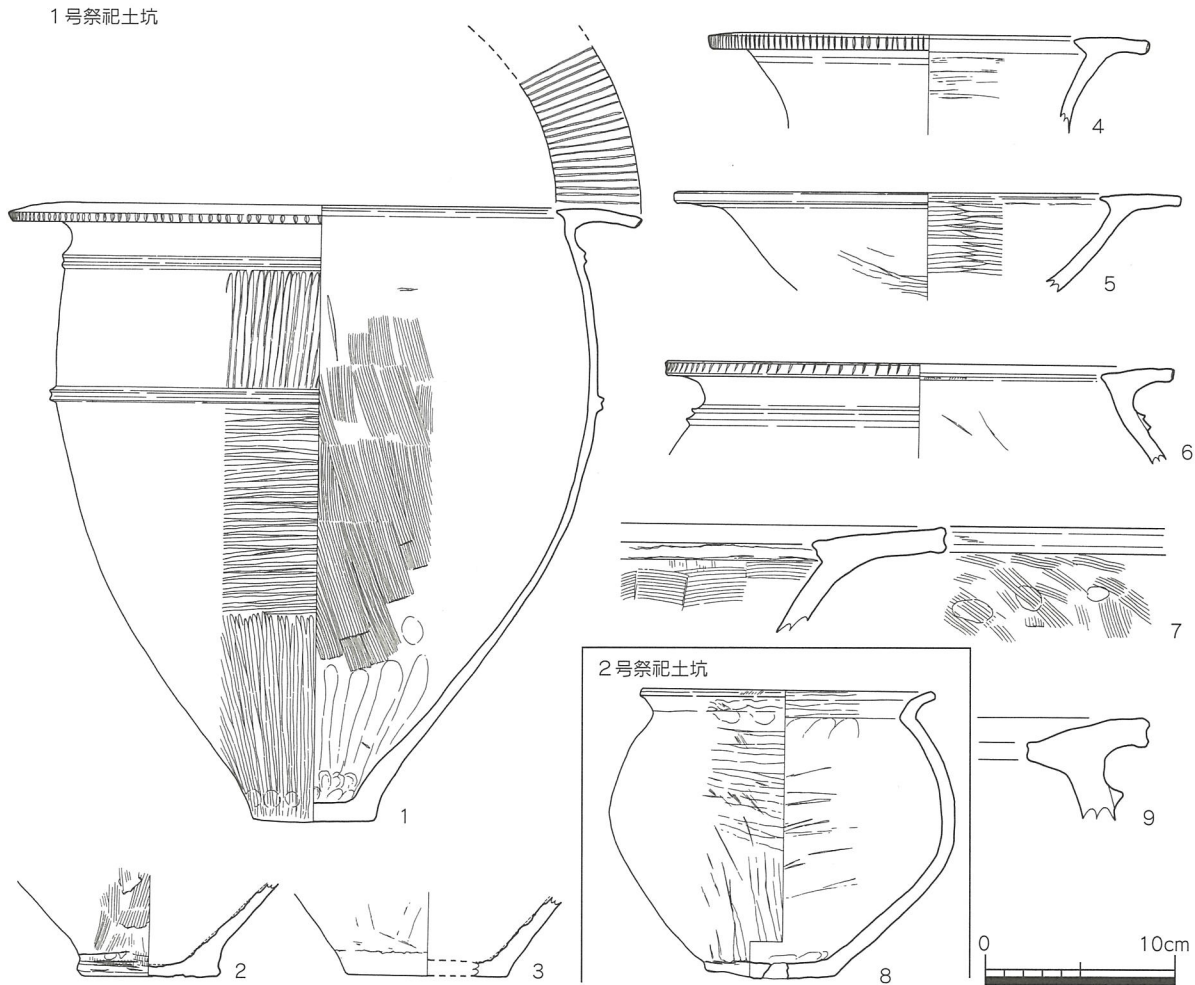
## 2号祭祀土坑 (S K435) (図版26)

二段掘りの円形の土坑で、底面より若干浮いた位置で短頸壺が出土している。壺は完形で底部中央に穿孔を施している。土坑はややすり鉢状に中央が窪んでいるが、調査区外に切られるため詳細は不明である。土坑は、一段掘り下げた後に約10~15cmのテラス部分を残し、さらに掘り下げている。

土坑の大きさは東西幅1.2mである。

## 出土遺物 (図版42、第59図)

8は、短頸壺で完形品である。口縁部はやや立ち上がり気味の「く」の字口縁で、胴部中位に最大胴径をもち大きく張る。底部にかけてはあまりすぼまらず、底部への屈曲もややあまく、やや凸レンズ状の底部を持つ。底部に中央には焼成後穿孔があり、外面での孔径は10×9mm、内面の孔径は3×6mmである。



第59図 祭祀土坑出土土器実測図 (1/4)

外面調整は雑な横方向のヘラミガキをおこない、胴下半部は板状工具によるナデ調整。頸部は接合痕の部分了指押さえによって成形している。内面調整は、胴部板状工具によるヨコナデ、口縁部はヨコミガキ、底部は指押さえによる調整を行なっている。

外面上半部に丹塗の痕跡がみられるが、スリップが赤色を呈しているのか、胎土そのものの色調なのか判断が難しい。黒斑あり。口径11.6cm、器高11.5cm、底径5.1cmである。

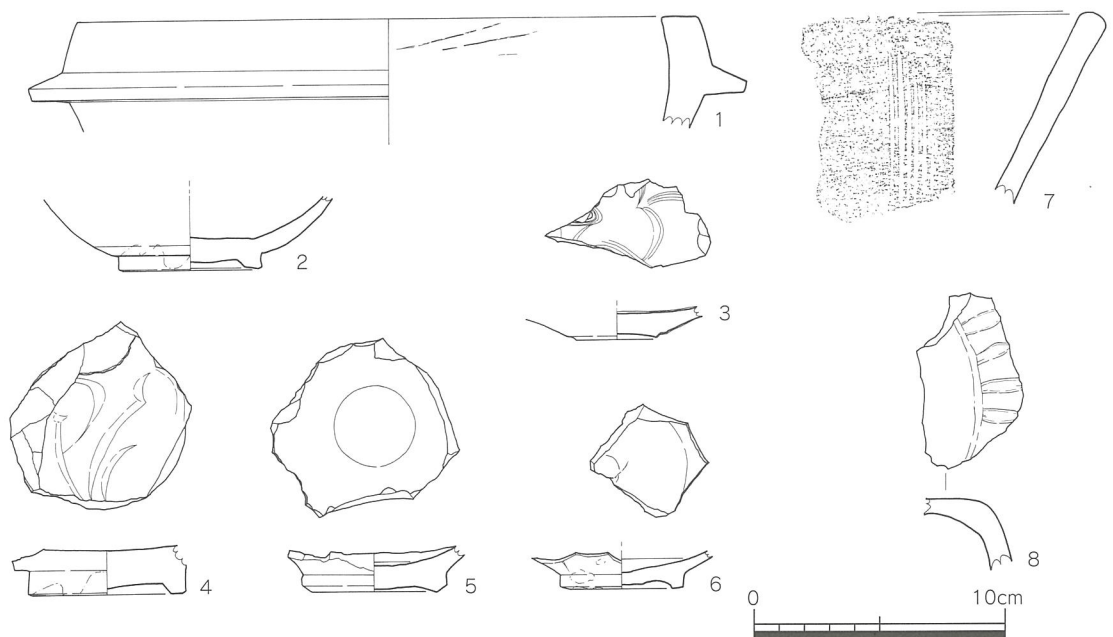
祭祀土坑は2基とも弥生時代中期後半～後期前半で、甕棺の造営時期とも重なっている。おそらく、調査区外には当該期の墓群がさらに広がっていたと考えられる。また、同時期の遺構として、調査区から南東へ700mほどのところに井原塚廻遺跡があり、そこから祭祀土坑と甕棺墓が検出している。  
(牟田)

#### ④歴史時代の遺構と遺物

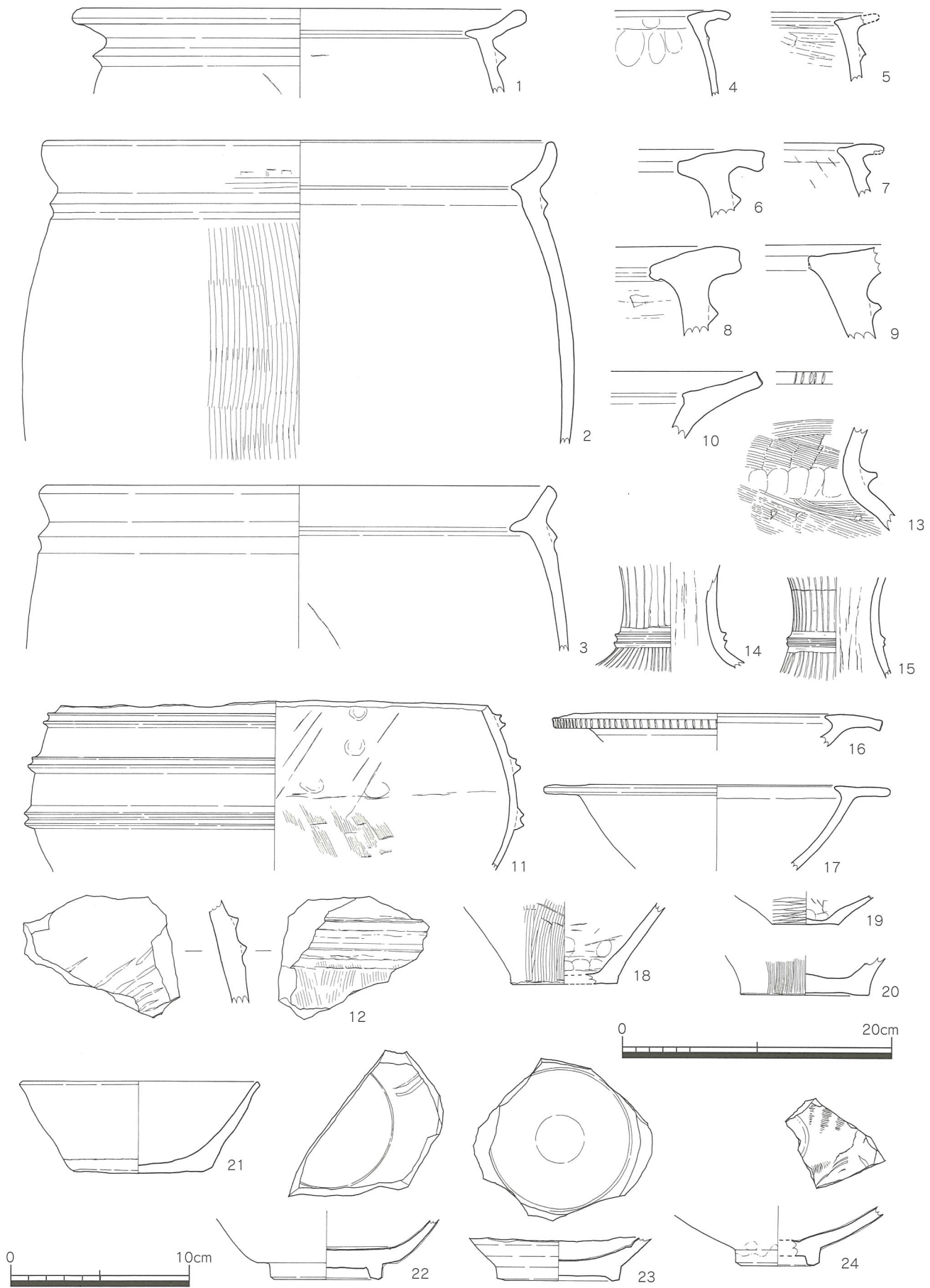
中世の遺構として溝状遺構6条 (SD401、402、405、408、409、410) が確認された。

##### 出土遺物

1は滑石製の石鍋で、口径24.8cm。外面には煤が付着している。内外面ともに削った後に丁寧に研磨している。2は青磁碗の高台部分である。釉は見込みから高台部分脇までかかる。釉薬の色は若干白濁したオリーブ黄色である。高台径5.7cmである。3は、SD408から出土した青磁皿の破片で、上げ底上に削ったベタ高台で高台以外は施釉している。底径3.3cm。見込み部分に櫛描文が入っている。5はSD402から出土した白磁製の瓦玉で、ケズリ形成のしっかりとした高台がのこる。外面は露胎している。高台径5.8cm。6は、SD408出土の白磁皿片である。外面は露胎し、一部釉が付着する。高台径5cm。体部高台付近にかすかに片切彫による文様がわずかに観察できる。7は、SK410付近で出土した陶器製の挿鉢である。内面に5本のすり目が観察できる。8は淡青色の釉がかかる合子の蓋である。SD409から出土した。蓋のカーブの部分には縦の模様が施され



第60図 歴史時代の遺構出土土器実測図 (1/3)



第61図 包含層出土遺物実測図 (1~20は1/4、21~24は1/3)

ている。釉には氷裂が多くみられる。直径は約6cmと考えられる。

(牟田)

### ⑤包含層 (図版42、第61図)

今回の調査区は水田による削平が著しかったが、包含層内の遺物(第61図)をみると、中期後半の甕棺片、祭祀土器片など、甕棺墓に関する遺物が多くみられる。その他、奈良～鎌倉時代にかけての遺物も含まれている。

#### 出土遺物

1～12は甕棺の一部と考えられる。1は口径32cmで外面に煤が付着する。2は口径37.2cmで外面に煤が付着する。3は口径38.6cm。4、5、7は小型の甕の口縁部で甕棺に使用されたかは不明。6、8、9は大型甕棺の口縁部で、いずれも小片のため口径等は不明。10は大形の丹塗り壺の口縁部で端部に刻みをもつ。11は頸部打ち欠きの壺である。M字突帯を3条貼り付けている。12はシャープな三角突帯を貼り付けた甕棺の胴部と考えられる。13は、大型の壺の頸部である。14、15は丹塗りの袋状口縁壺の頸部である。16は口縁端部に刻みをもつ高坏で、口径18.3cm。17は内外面とも丹塗りの高杯で口径は約26cm。18は甕の底部で底径8cm。19は丹塗りの壺の底部で外面に横方向のミガキがのこる。底径5cmである。20は、厚みのあるやや上げ底の甕の底部で、底径9.6cmである。

21は土師器の杯で、口径13cm、器高5.2cm、底径7.5cmで、底面中心に煤のような黒色の付着物が観察できる。調整は内外面ともに回転ナデ、底部外面はヘラケズリ。22は、青磁碗で、沈圏線を彫りこみその外側に二本の片切彫の文様が入る。釉は高台部分まで施しており、灰オリーブ色を呈している。高台径5.8cm。23は、白磁の瓦玉で、見込み部分に深い沈圏線を施している。釉は外面にはなく、見込み部分に灰白色の不透明の釉がかかる。胎土に黒色粒子が混入する。高台径6.9cm。24は、白磁の皿で見込み部分に沈圏線、櫛描文、線画文がみられる。釉は灰色で見込みから高台部分脇までかかる。高台外面に砂目痕がのこる。高台径4cmである。

(牟田)

### (3) 小結

今回の調査区では1基しか成人用大型棺が出土していないが、包含層にはかなりの数の甕棺片、祭祀土器片が含まれていることから、おそらく周辺に弥生時代中期から後期にかけての墓群が存在すると考えられる。これまでの調査成果から周辺の墓群として、調査区北側に約100mの調査地点(八龍Ⅱ-30～32)から中期後半の甕棺墓群、北東に200mの調査地点(八龍Ⅱ-10)でも同時期からやや古い時期の甕棺墓群がまとまって検出している。三雲・井原遺跡の南東部はこれまであまり調査が行なわれていないが、近接した3地点で墓群が形成されていることと包含層の遺物の出土状況から、南東部にはある程度広範囲に墓群が形成されていたと想定される。しかし、調査された面積も狭い範囲のため、墓群の詳細な情報は得られていない。今後の調査で、明らかにしていきたい。

今回の報告は主に墓制を中心に報告を行なっている。そのため、生活遺構については別の機会でも報告したい。生活遺構として、竪穴式住居跡6棟、掘立柱建物跡1棟、土坑38基を検出している。竪穴式住居跡、掘立柱建物跡はSB、土坑はSKと標記しており、概報の中で若干紹介を行っている。

(牟田)

## IV. 石器・鉄器・玉類

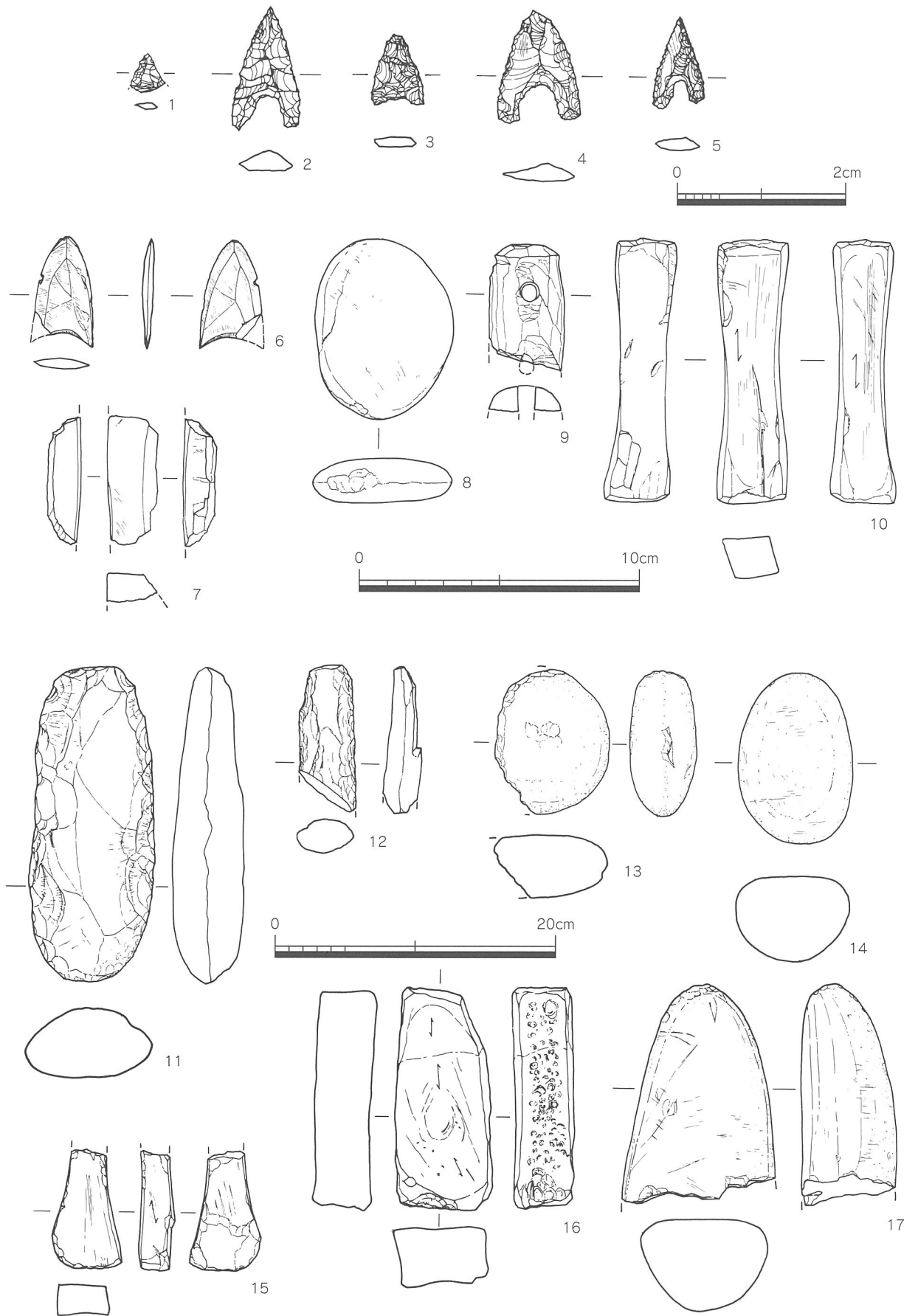
本報告内の各遺構から出土した石器と鉄器をまとめて報告する。しかし、宮ノ下地区Aトレンチ1号木棺墓出土鉄製刀子と、井原堺地区D地点2号甕棺墓出土ガラス玉に関しては各地点の報告の中で紹介している。

### 石器 (図版43、第62図)

1～5は黒曜石製の打製石鏃である。1は八龍地区234番地北区の9～10号住居内より出土した石鏃の先端部分である。残存1.0cm、最大幅0.95cm、厚さ0.2cm、重量0.15g。黒曜石はやや透明感がある。2・3は、八龍地区235番地から出土した。2はPit13から出土したほぼ完形の石鏃である。凹基無茎石鏃で基部のえぐりが深く、脚部の先端は丸い。先端部分がやや欠損している。残存長3.25cm、最大幅1.8cm、厚さ0.55mm、重量2.16gで、漆黒の混じり物のない黒曜石を使用している。3は1号住居から出土した平基無茎石鏃である。長さが1.9cm、最大幅1.4cm、厚さ1.3cm、重量0.9cmで、完形品である。4は宮ノ下地区Aトレンチ土坑内埋土より出土した凹基無茎石鏃で、基部のえぐりが深く脚部は丸く仕上げている。裏面は平坦で縁に調整痕がみられる。完形品である。長さ3.1cm、最大幅2.2cm、厚さ0.45cm、重量2.19gで、やや透明感のある黒曜石を使用している。5は井原地区D地点SK408出土の凹基無茎石鏃で基部のえぐりが深く、脚部の先端は丸い。長さ2.5cm、最大幅1.4cm、厚さ0.35cm、重量0.71g。6～10は宮ノ下地区Aトレンチから出土した石器である。6は4号住居埋土から出土した磨製の凹基無茎石鏃で、長さ3.9cm、最大幅2.1cm、厚さ0.4cm、重量3.79g。灰オリーブ色の石材を利用している。7は4号住居床面から出土した粘板岩製の仕上げ砥石で、裏面は剥がれている。側面と表面の3面使用している。残存長4.5cm、幅1.7cm、厚さ1.1cmである。8は、8号住居埋土内から検出した淡赤褐色の石英製叩き石である。長軸の両端に使用痕がある。川原石のように丸く表面が滑らかである。長径6.5cm、短径5.0cm、厚さ1.6cm。9は1号土坑埋土より出土した有孔石錘である。裏面は剥離している。表面は粗割して成形している。残存長4.6cm、幅2.7cm、厚さ1.2cmである。10は砂岩質の砥石で完形品である。包含層より出土している。所々深く溝状にくぼんでいる。4面とも使用している。長さ9.4cm、幅2.4cm、厚さ2.3cmである。

11～14は八龍地区221番地から出土し、11は表土、12～13は大溝内より、14はPit5より出土している。11は玄武岩製の大型の短冊形打製石斧である。刃部はやや磨耗しており、剥離痕が明瞭でない。全長22.8cm、幅8.8cm、厚さ5cmで。12は小型の玄武岩製の短冊形打製石斧で刃部は欠損している。残存長10.5cm、幅4.0cm、厚さ2.5cm。13は河原石を利用した敲石で、上面中央と側面に使用痕が観察される。残存長10.4cm、幅8.2cm、厚さ4.7cmである。14は河原石を使用した磨石で、断面カマボコ状の石の底面を磨面として使用し、使用面は平坦で平滑になる。不定方向の使用痕が残る。長さ12.3cm、幅8.2cm、厚さ6.1cmである。

15は八龍地区235番地Pit17出土の砂岩質の砥石で、弥生時代後期の甕形土器が共伴している。砥石は全面使用しており、ところどころ深くスジ状にくぼむ。残存長8.5cm、幅5.0cm、厚さ2.3cm。16・17は宮ノ下地区東トレンチ出土の石器で、16は、祭祀土坑南横のピットから出土した砂岩質の砥石で、幅の広い2面のみ使用している。側面は成形時の敲打痕が残り、片面のみ火を受けて赤



第62図 出土石器実測図 (1~5は2/3、6~10は1/2、11~17は1/4)

変した部分や黒斑がある。完形の砥石である。長さ15.9cm、幅6.8cm、厚さ4.3cm。17は2号溝埋土から検出した河原石を使用した磨石で、断面三角形の底面部分に研磨痕がみられる。残存長16.0cm、幅10.8cm、厚さ6.5cm。

#### 鉄器・玉類 (図版44、第63図)

1・2は八龍地区221番地から出土している。1は大溝出土の有茎逆刺付の鉄鏃である。茎の部分が欠損している。復元長5.1cm、幅2.3cm、厚さ0.2cmである。2はPit25から出土した長頸鏃の篋被の部分と考えられる。残存長5.1cm、幅0.6cm、厚さ0.4cmである。3・4は宮ノ下地区北区から出土した鉄鏃である。3は1号住居の埋土内より出土した鉄鏃で、鏃身部分はやや厚みがある形態である。側面から見通すと反る部分は無く、直線的である。残存長6.7cm、幅は鏃身部分1.2cm、篋被部分0.4cm。4は、鉄鏃の篋被部分かと思われるが工具の可能性もあり、不明。断面の形態は長方形である。残存長3.5cm、幅0.6cm、厚さ0.4cm。

5は八龍地区221番地の中世土坑から出土した馬具である。銜の部分にあたると思われる。断面の直径は0.9cmで、遊環と連結する部分で0.7cmである。

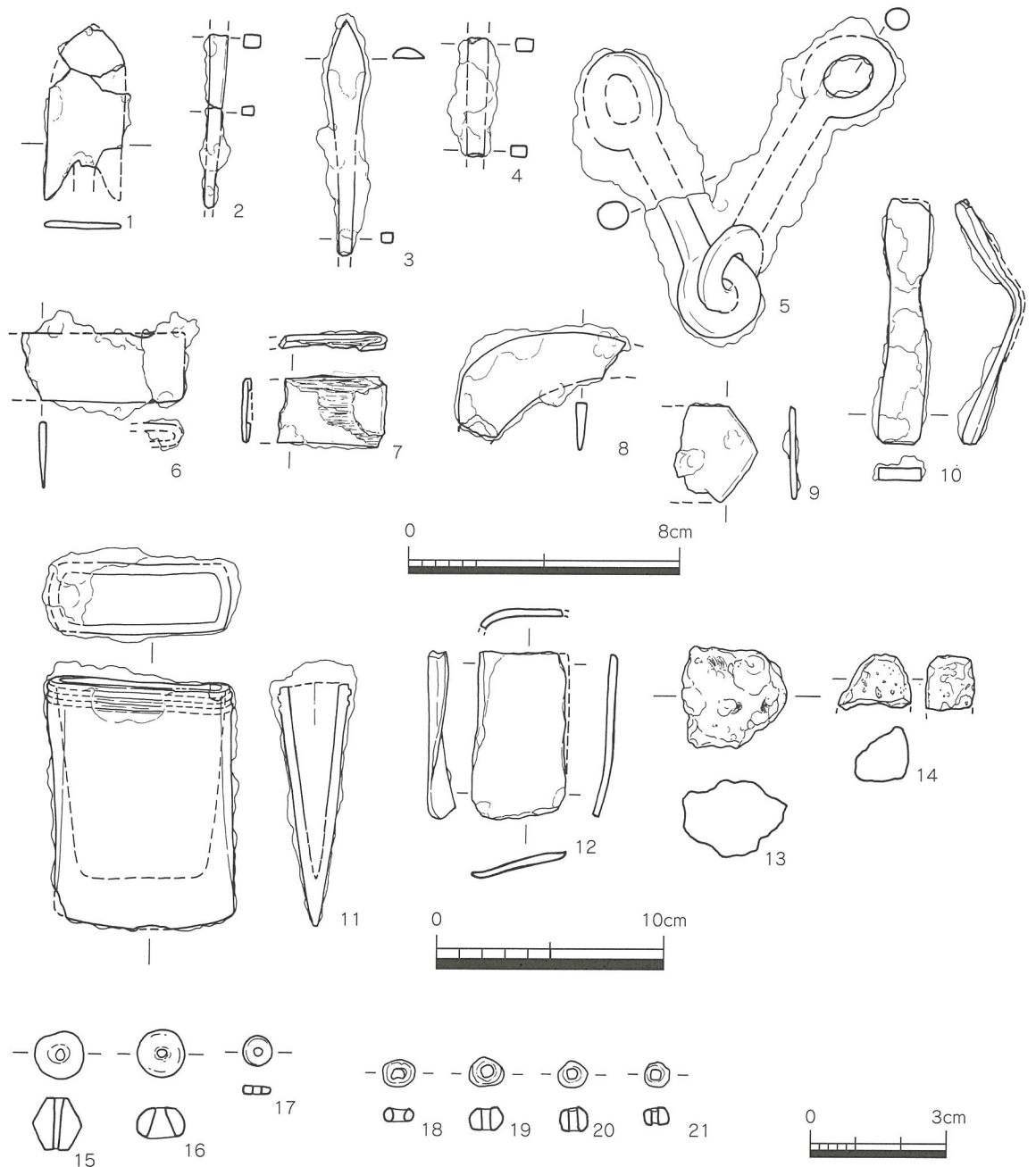
6は八龍地区235番地の3号住居埋土から出土した穂摘み具で、木質等は残存しない。残存長4.8cm、幅2.1cmで、刃部を持つ。7～9は宮ノ下地区から出土した鉄器である。7は、Aトレンチの3号住居床面から出土した穂摘み具で木質が残っている。残存長2.0cm、幅3.1cm、厚さ0.25cmで錆ぶくれのため、刃部は明瞭ではない。8は、Cトレンチの1号住居床面から出土した鉄片で、ややカーブして下部に刃部を持つ。左側は鎌の折り返し部分が欠損して錆びているものかとも考えたが、形態が鎌にするにはやや不明瞭なため、ここでは不明鉄器としておく。残存長4.7cm、幅は厚いところで2.2cm、厚みは厚い部分で0.4cmである。9はAトレンチ包含層内から出土した不明鉄片である。残存長2.4cm、幅2.8cm、厚さ0.15cmである。10は、井原地区D地点のSK411から出土した板状の不明鉄片である。長さ7.2cm、幅1.5cmである。

11は堺地区253番地の包含層内から出土した、2条の突帯付の鑄造鉄斧である。完形で刃部にかけては錆ぶくれがあまりないが、袋部は錆に覆われておりX線を透過するまで突帯は観察できなかった。刃部は一部刃こぼれ状に欠損している。全長は11.1cm、基部幅8.2cm、刃部幅8.1cm、袋部幅7.0cm、基部の厚さ3.5cmである。12は宮ノ下地区Aトレンチ地山直上包含層内出土の板状鉄片である。側面が一部折り返したような状態になって折損しており、袋状鉄斧のような形態をしている。しかし刃部にあたる部分が折損しているため明確なことは分からない。下部付近が若干よじれており曲がっている。全長7.3cm、幅4.1cm、最大幅0.45cm。

13・14は宮ノ下地区の包含層から出土している。13は鉄滓で、Aトレンチ1号土坑検出面から出土した。14は、Bトレンチ西拡張部分の包含層から出土した鉄鉱石と思われる遺物である。磁石反応があり、断面には銀色の光沢をもつ粒子が含まれている。

15～17は八龍地区235番地出土の玉類である。15は1号住居の床面から出土した水晶製の算盤玉で、穿孔は片側穿孔、ややいびつな円形をしている。水晶は不純物を含まず透明度が高い。全長は1.12cm、幅は1.17cm、孔径は0.22cm、重量は1.68gである。色調は無色透明である。16は、同じく1号住居床面から出土したヒスイ製の丸玉である。穿孔は片側穿孔で片方の孔径が非常に大きい。色調は淡緑色をしている。径は1.04cm、厚さ0.72cm、孔径は0.2～0.6cm、重量は1.18gで

ある。17は、1号土坑から出土した滑石製の白玉である。色調は灰褐色で、径0.4cm、厚み0.14cm、孔径0.13cmで、重量は0.03gである。18~21は井原地区D地点出土のガラス小玉である。18はS X 404上層出土で径4.6mm、厚さ2.0mm、孔径1.9mm、重量0.06gで、色調は青紺色である。19~21は出土遺構が不明で、19が径5.0mm、厚さ3.3mm、孔径1.4mm、重量0.1g、色調は青紺色である。20が径4.3mm、厚さ3.3mm、孔径1.4mm、重量0.08g、色調は青紺色である。21は径3.6mm、厚さ2.5mm、孔径1.3mm、重量0.05g、色調は青紺色である。(牟田)



第63図 出土鉄器・玉類実測図 (1~10は1/2、11~14は1/3、15~17は2/3)



## V. 科学分析

### 1. 前原市井原遺跡出土ガラス資料の材質調査

福岡市埋蔵文化財センター 比佐陽一郎・片多雅樹

#### 1. はじめに

前原市井原遺跡D地点から出土したガラス小玉について蛍光X線分析法による材質調査を行った。ガラスは石英に融剤や着色剤などの材料を添加して作られるが、近年の理化学的手法を用いた調査によりこれらの組成には幾つかの種類があり、その系譜や流通経路、歴史的変遷などが解明されつつある。

#### 2. 対象資料と調査方法について

今回調査を行ったのは小児甕棺から出土した小玉149点で、色調により青紺色71点と淡青色78点に分類される。本来ならば個体ごとに寸法や重量、比重等の計測、あるいは顕微鏡観察を行うべきところであるが、資料は糸に通した状態で保管されており、これを解いて個別にこれらの調査を行うことは時間的な制約から困難であったため、そのままの状態から番号を付与し個体ごとの分析作業のみを実施した。

蛍光X線分析は資料にX線を照射し、含まれる各元素から生じる二次X線（特性X線）を検出器でとらえ、X線エネルギーとその強度をピークとして表すものである。出土ガラス資料は長期間に及ぶ埋蔵環境下で風化が進み組成の変化が起こっている場合があり、風化層を物理的に除去し、更に標準資料を用いた校正により各元素の定量値を算出することで、より精度の高い調査が可能であるが、今回は完全な非破壊での調査とし、定性分析のみに止めている。

ガラス資料は強いX線を照射すると変色が起きる場合があり、今回の対象資料が数mm大の小玉であることから、作業には微弱なX線でも高い検出感度の得られるエネルギー分散型で、X線の照射面積を0.3mmφと絞ることのできる微小領域用の装置（エダックス社製/Eagle  $\mu$  probe）を用いた。その他の条件は以下の通り。

対陰極：モリブデン（Mo）／検出器：半導体検出器／印加電圧：20～40kV（電流値任意）／測定雰囲気：真空／測定範囲0.3mmφ／測定時間120～300秒

作業は糸に通した資料を試料ステージ上にそのまま置き、ステージを移動させて分析を行い各個体ごとのデータを得た。

日本の弥生時代のガラスには、肥塚隆保氏によるこれまでの調査で、アルカリ珪酸塩ガラスと鉛珪酸塩ガラスのあることが知られている。アルカリ珪酸塩ガラスは、融剤に酸化カリウムを用いるカリガラス（ $K_2O-SiO_2$ 系）と、融剤に酸化ナトリウムを用いるソーダ石灰ガラスに区別され、更にソーダ石灰ガラスは酸化アルミニウム含有量の高いもの（ $Na_2O-Al_2O_3-CaO-SiO_2$ 系）と、低いもの（ $Na_2O-CaO-SiO_2$ 系）に区分される。鉛珪酸塩ガラスには、鉛ガラス（ $PbO-SiO_2$ 系）と鉛バリウムガラス（ $PbO-BaO-SiO_2$ 系）がある。定量値が算出されれば、それによる同定が可能であるが、今回の調査では完全非破壊分析による定性分析であり、得られた蛍光X線の特徴と相対強度から判定することになる。測定はすべての資料を対象としたが、結果は色調による分類に対応するものであったので、1点ずつの結果は割愛し、分類ごとの内容を以下に記すこととする。

### 3. 調査結果

#### 3-1. 青紺色グループ

マグネシウム(Mg)、アルミニウム (Al)、ケイ素 (Si)、カリウム (K)、カルシウム (Ca)、チタン (Ti)、マンガン (Mn)、鉄 (Fe)、コバルト (Co)、銅 (Cu) 等の元素が検出された。特にケイ素、カリウムの強いピークが観察され、二成分系のガラスであるカリガラスの特徴を示している。青紺色の色調はコバルトは着色材料に基づくものと推定され、特に強いピークが観測される鉄、マンガンはコバルトに伴う不純物と考えられる。これらは従来から弥生時代～古墳時代の遺跡で出土している青紺色のカリガラスと同じ特徴を示すものである。

#### 3-2. 淡青色グループ

青紺色グループと同じく、ケイ素(Si)、カリウム(K)の強いピークが検出された他、マグネシウム(Mg)、アルミニウム(Al)、カルシウム(Ca)、チタン(Ti)、鉄(Fe)、銅(Cu)、鉛(Pb)のピークが検出され、着色要因の異なるカリガラスと考えられる。鉛の検出については鉛珪酸塩ガラスに比べてそのピークは低く、着色に青銅が用いられたことによる混入の可能性も指摘されているが詳細は不明である。

### 4. まとめ

カリガラスは中国やインド、東南アジアで流通し、ヨーロッパ等西方には見られない組成のガラスであることから「アジアのガラス」とも言われている。日本では弥生時代に盛行し、その多くは青色系統の小玉である。その後古墳時代に入る頃から次第に減少、古墳時代の後期には途絶えたとされる。肥塚氏が行ってきた従来の分析調査では、弥生時代の遺跡から出土する青紺色のカリガラスには、例外なく数%に及ぶマンガンが含有しており、これは中国や韓国で出土する同色のカリガラスの特徴とも一致している。このような高いマンガンを含む着色用コバルト鉱石は中国産の特徴とされ、これらのカリガラスが中国で製造されたと考えられる根拠となっている。今回の調査は定量値を算出していないため相対的な比較に過ぎないが、強いマンガンのピークが見られることからこのガラスの範疇に含まれるものと考えられる。

今回の分析結果は全点カリガラスであることを示したが、本資料は弥生時代後期に属するものとされており、これまで報告されている弥生時代のガラスの様相とよく一致するものであった。また完全非破壊による表面的な定性分析であったが、大雑把な種類の同定という目的は十分に果たせたものとする。

糸島地域は古代伊都国に比定される地域であり、当時の先進技術の一つであったガラス製品も数多く出土している。これまでも先学によって多くの調査が進められているものの、それを上回る数の資料があり、十分なデータが出揃っている状況とは言えない。今回の作業を含め、これらガラス資料の分析データが、今後の研究の一助となれば幸いである。

最後になりましたが調査の機会を与えていただいた前原市教育委員会の岡部裕俊氏、並びに日頃ガラスの調査に関してご指導いただいている奈良文化財研究所の肥塚隆保氏に感謝申し上げます。

### 参考文献

肥塚隆保1996「化学組成から見た古代ガラス」『古代文化』第48巻8号 財団法人古代学協会

肥塚隆保1998「主成分からみた古代ガラスとその歴史の変遷」『保存科学研究集会1998』奈良国立文化財研究所

## 2. 三雲八龍遺跡から出土した小玉の材質調査

福岡岡市埋蔵文化財センター 比佐陽一郎

三雲八龍遺跡から出土した小玉1点について、材質の解明を目的とした調査を行ったので、その結果をここに記す。

対象となった資料は径10.6mm、厚さ7.0mm、重量1.18gを計り、乳白色に緑が混じった半透明の色調を呈する。肉眼観察により石製品と推定されたものの断定には至らず、顕微鏡観察により気泡など人工的な手が加わった痕跡が認められなかったことからガラスではないと判断した。

更にその裏付けと、石材であれば、その種類を明らかにすることを目的として、蛍光X線分析を行った。装置は対象資料が小型であることを考慮し、微少領域用エネルギー分散型の装置を選択。以下の動作環境により分析作業を進めた。

分析装置：エダックス社製・Eagle  $\mu$ -plove / 対陰極：モリブデン (Mo) / 検出器：半導体検出器 / 印加電圧：40kV・印加電流：205~240  $\mu$ A / 測定雰囲気：真空 / 測定範囲0.3mm  $\phi$  / 測定時間300秒

なお、分析は微少領域用という装置の特性を利用し、色調（乳白色と緑色）の違いなどに留意した複数の箇所を任意に選定して行った。

分析の結果、各分析場所で大きくは似たような結果が得られているものの、細かい部分では違いも見られる。すべての部分で共通して検出された元素としては、珪素(Si)が最も強く、次に鉄(Fe)、以下カルシウム(Ca)、アルミニウム(Al)等と続き、他に微弱なピークとしてナトリウム(Na)、マグネシウム(Mg)、ストロンチウム(Sr)等がある。この他、分析箇所によってピークが現れたり確認できなかったりするものとしてカリウム(K)、チタン(Ti)、セリウム(Ce)、クロム(Cr)、マンガン(Mn)、ニッケル(Ni)等が挙げられる。この内カリウムやクロム以外のものについてはピークが小さく、他のピークとの重複などで不明瞭なものもあり、実際に含まれるか否かの判断は難しい。各分析箇所における主な元素のX線強度を別表に示す。

なお、特に緑色の部分を分析した場合に、不特定の各所で元素として同定し得ないピークが観測される。これらは単独で存在していたり、ピークの形状が元素として検出されるものに比べてなだらかなものなどがある。明確な判断はできないが、何らかの散乱X線であろうと思われる。

乳白色と緑の混在する色調を呈する石材には硬玉、軟玉、苦灰石、蛇紋岩、アマゾナイト（天河石）などがあるとされるが（安部〔上野〕1998）、今回の資料の場合、検出元素の種類やX線強度の特徴などから、硬玉、即ちヒスイ輝石（Jadeite： $\text{Na}(\text{Al},\text{Fe})\text{Si}_2\text{O}_6$ ）である可能性が強いと考えられる。上記の分析結果は、過去に当センターで分析を行ったJadeiteの結晶構造を持つ石材のものとも近い結果を示している。また、地学団体研究会他編集による『地学事典』の「ひすい・翡翠」（端山1982）によれば、その色調はクロムに起因することが記されているが、本資料でも特に緑色の強い部分で微弱ながらクロムのピークが観測されている。

更に、念のためアルキメデス法によるみかけの比重測定も行った。大気中で測定した重量を水中で測定した重量（＝体積）で割った結果、3.35 g/cm<sup>3</sup>という数値が得られた。これもヒスイ輝石の比重3.34（豊他1998）に極めて近い数値となっている。

以上の結果から、この小玉はヒスイ輝石（Jadeite）＝硬玉であると考えられる。

分析No.	分析箇所	電圧値 kV	電流値 μA	主要な各元素のエネルギー強度 (単位: cps)							
				Na-Kα	Mg-Kα	Al-Kα	Si-Kα	K-Kα	Ca-Kα	Cr-Kα	Fe-Kα
2	表側緑色部分-1	40	205	2.73	2.13	44.45	173.12	6.72	95.46	1.95	149.78
3	表側緑色部分-2	40	240	3.36	2.30	46.95	206.82	2.35	90.56	4.05	140.82
6	表側白色部分	40	220	3.84	2.06	52.93	227.16	2.40	87.87	-※	108.05
5	裏側緑色部分	40	210	3.21	2.03	43.74	203.18	3.39	96.07	28.54	175.79
4	裏側白色部分	40	220	2.97	2.15	43.42	191.96	2.08	86.44	3.11	128.65

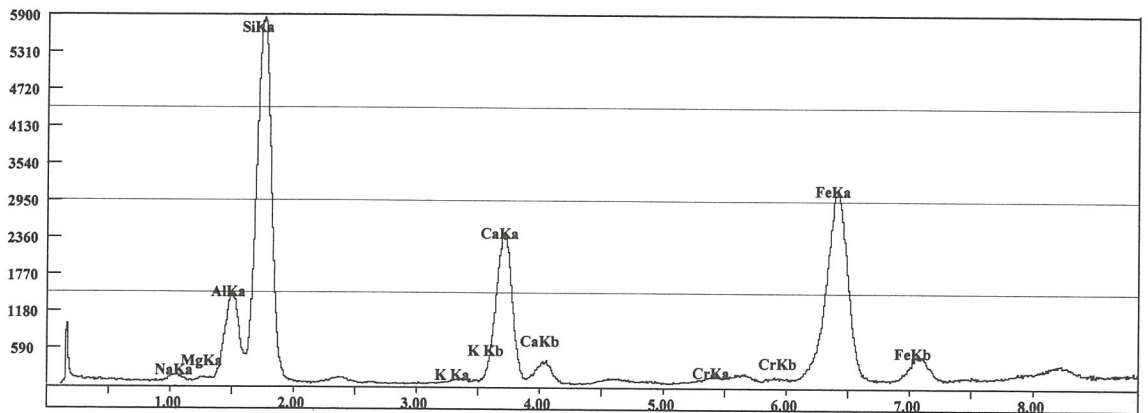
※ピークとして確認できない

### 参考文献

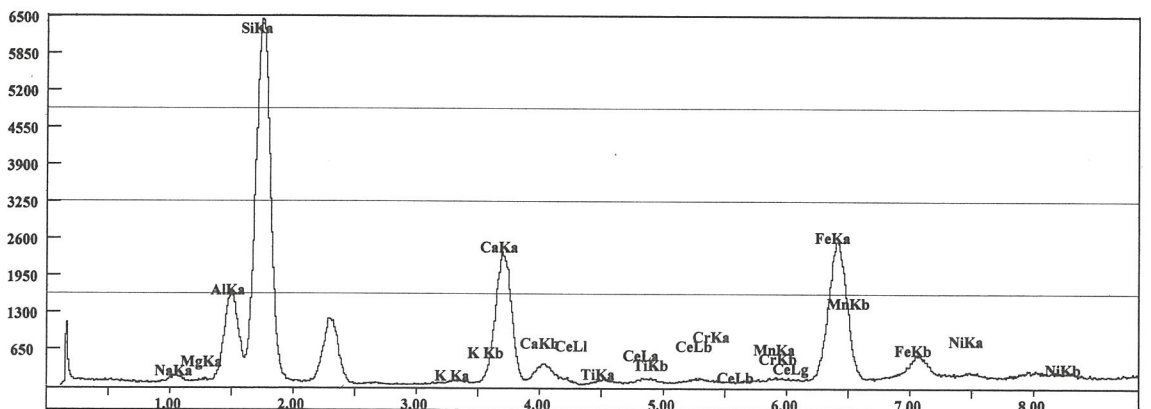
安部裕久 (上野禎一) 1998 「SD2出土の勾玉について」『光岡辻ノ園』宗像市文化財調査報告第43集 宗像市教育委員会

端山好和1982「ひすい・翡翠」『増補改訂 地学事典』平凡社

豊遙秋・青木正博1998『検索入門 鉱物・岩石』保育社



第64図 No.3 表側緑色部分蛍光X線の分析結果



第65図 No.6 表側白色部分蛍光X線の分析結果

## VI. おわりに

今回報告を行なった調査地点は4地区12トレンチである。これらの成果と、これまでの調査成果を踏まえて遺跡南東部の旧地形、および大溝周辺の遺構の様相を概観してみたい。時期は大溝の形成された弥生時代中期後半から埋没する弥生時代終末期～古墳時代前期までを中心とする。

はじめに旧地形の復元、次に大溝、周辺遺構についての検討を行なっていきたい。

### ① 三雲・井原遺跡南東部の旧地形の復元（第66図）

三雲・井原遺跡は、南部の背振山地から北側に向かって続く扇状地上に位置しており、南から北に向かって緩やかに傾斜している。これまでの調査からこの扇状地上にはいくつかの谷（窪地）が入り、東西両側には瑞梅寺川と川原川の氾濫原が広がっていることが確認されている（第66図）。

今回の調査区内の旧地形は、西側の宮ノ下地区から東側の八龍地区にかけて緩やかに下がっており、宮ノ下地区Aトレンチの西端で標高41.4m、八龍地区235番地で標高37.8mであった。八龍235番地では西側の道路から約28mのところ段落ちが確認されており、この段落ち部分が微高地の東端で、それ以东は川原川の氾濫原と考えられる。

また、三雲堺地区247番地と253番地では、それぞれ南側と北側に徐々に地山が落ち込んでおり、ここに窪地があったことが想定される。この窪地は、堺I-2地区、堺281番地で遺構が確認されているため、西側には伸びてはいかないようであるが、東側へは八龍地区II-10の南側を通り、赤崎川の方へ伸びる可能性が考えられる。

以上の旧地形をふまえ大溝の延長方向考えると、八龍地区で確認された大溝は三雲堺地区の窪地で西側は途切れてしまう可能性も出てくる。つまり大溝は遺跡の周囲を囲むのではなく、地形を活かしながら台地部分にのみめぐらされた溝との解釈も可能である。もし、窪地を避けてさらに西側に延長するとなれば、宮ノ下地区でも発見されなかったことから、その方向はある程度定まってきたことになる。今後この窪地の範囲を明らかにしていかなければならないだろう。

北東側への大溝の延長方向は、イフ、石橋地区で大溝が確認されていることから、さらに北へ伸びていく可能性が想定される。大溝は、東側を流れる川原川の氾濫原を除く台地部分に伸びると考えられるため、台地の落ち込み部分を確定して遺跡東部の旧地形の復元をおこなっていかなければならない。現段階で表示している東部氾濫原の範囲は、圃場整備前の台地ラインから想定しており調査で確認した部分は少ない。今後の調査で明らかにしていきたい。

### ② 大溝（第67図）

これまでに大溝は八龍、寺口、石橋、イフ地区の4地区で確認されている（第66図）。ここでは、それぞれの地区の大溝がどのように関連しているのかを検討してみたい。

#### （1）八龍地区

八龍地区では2条の大溝が検出している。北側に巡る大溝（大溝Ⅰ）と南側の溝（大溝Ⅱ）の間隔は約20mあり、大溝Ⅰの規模は幅2.7～3.5m、深さ83から110cm、断面は底面がややレンズ状の逆台形で一方が2段掘りになっている。遺物の出土状況の特徴として、中層以下には殆ど遺物を含まず上層に完形を含む土器層が形成されていることが挙げられる。大溝Ⅱは、幅3.2m、深さ

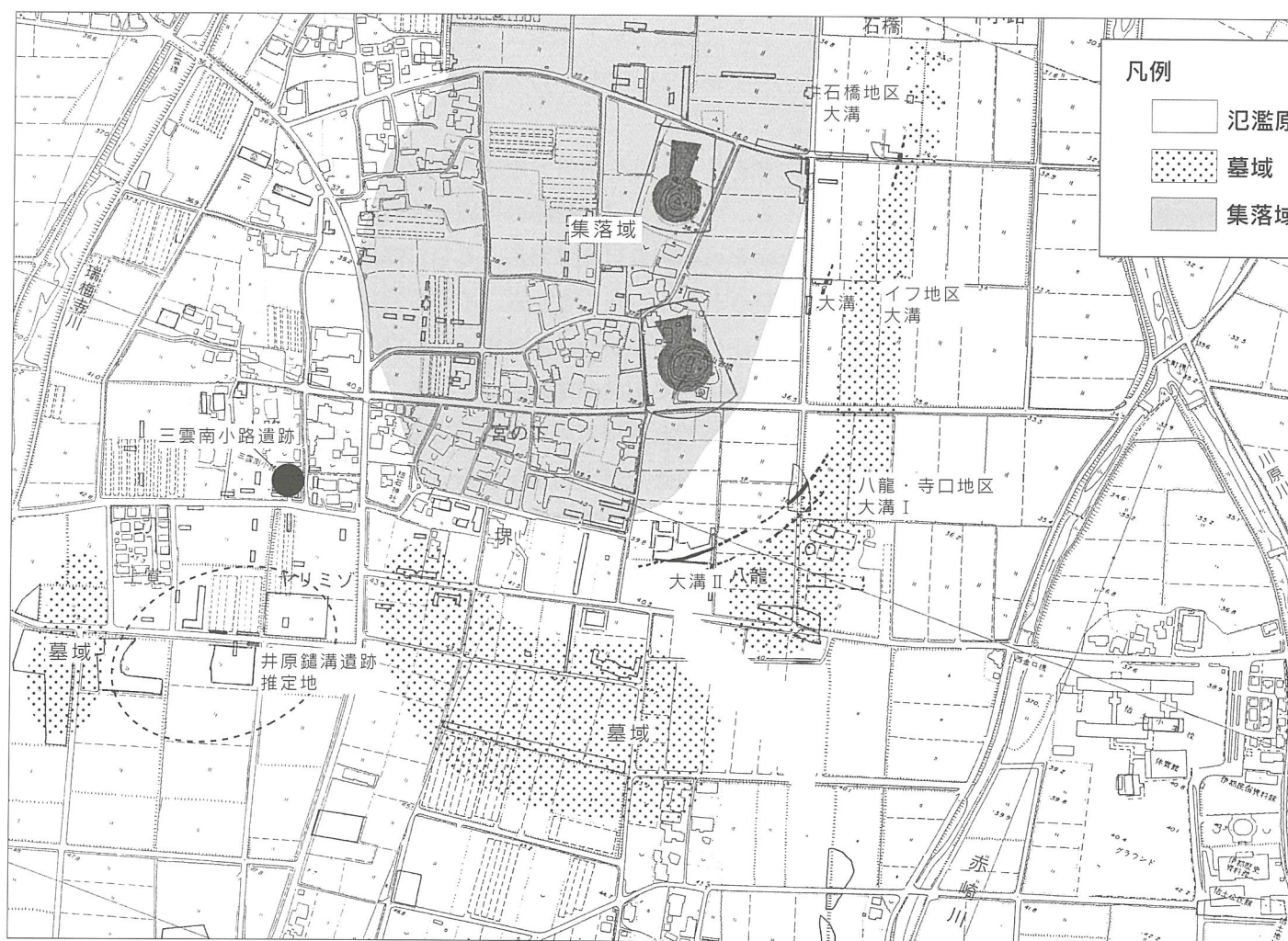
1.1mで断面形態は大溝Ⅱと同じく逆台形をしている。遺物は下層から弥生時代中期後半、上層から古式土師器（布留式古段階）の土器が出土している。

### (2) 寺口地区

寺口地区も八龍地区と同様2条の溝が想定されているが、南側の溝は一部が調査区外のため落ち込みが確認されているのみで、大溝であるか確定はできていない。しかし、八龍地区で確認されている2条の大溝間の間隔と比較し、この落ち込み部分を大溝の一部と想定している。2条の溝の間隔は約25mあり、八龍地区で確認された溝よりも若干幅が広い。北側大溝の幅は約3.6m、深さ約1mで断面形態は底面がややレンズ状の逆台形で一方の掘り方が若干2段掘りになっている。遺物の出土状況や時期、埋土の状況は八龍地区の大溝と共通しており、時期幅は弥生時代中期後半～古墳時代前期（布留式古段階）である。大溝の断面形態や造営時期、主軸方向から、八龍と寺口地区の大溝は一連のものと考えられる。

### (3) イフ地区

イフ、石橋地区で確認されている大溝と、八龍・寺口地区の大溝Ⅰ・Ⅱとの関連をしてみる。イフ地区の大溝は、主軸方向から八龍・寺口地区の大溝とは別のものと考えたい。大溝は、幅約4.3m、深さ約70cmで、他の地区の大溝と比べると幅が広い。断面形態は扁平な逆台形を呈して



第66図 三雲・井原遺跡南東部概念図 (1/5,000)

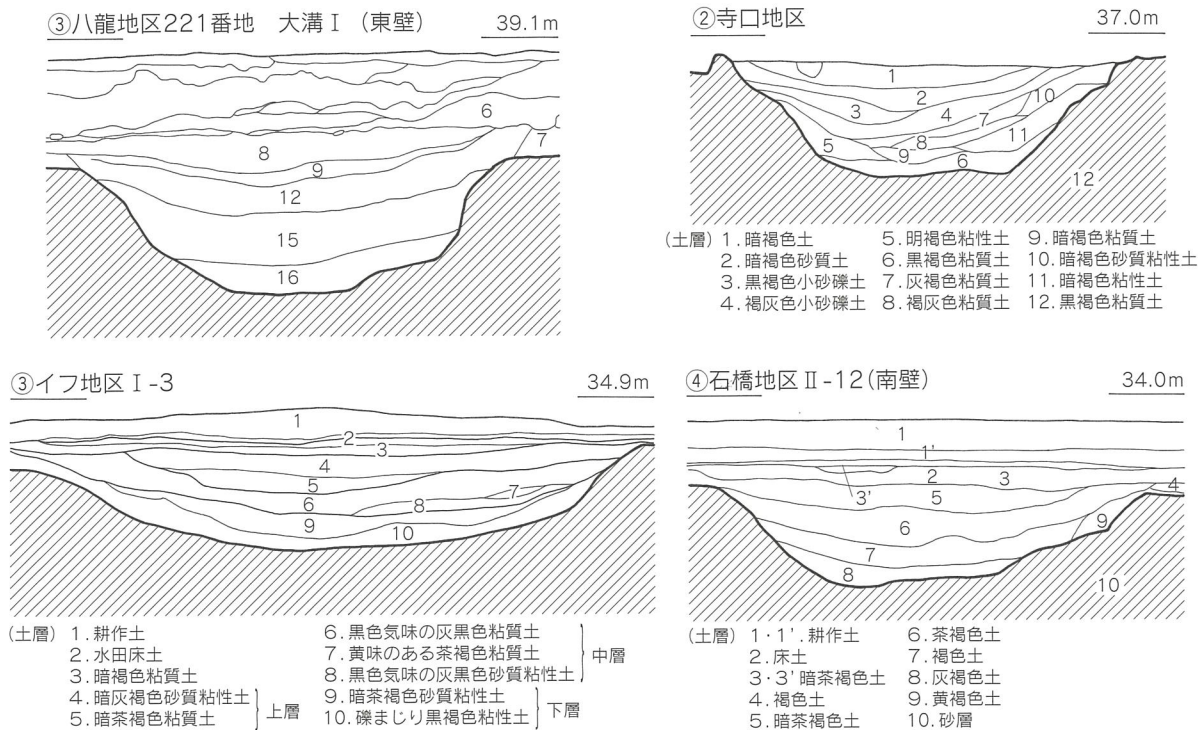
おり、2段掘り等はみられない。遺物は大溝Ⅰ・Ⅱと同様に上層に集中しており、同じ時期に造営されている。

(4) 石橋地区

石橋地区の大溝は、幅3.5m、深さ80cmで断面形態は逆台形で、一方の掘り方が2段掘りを行なっている。遺物の出土状況や時期は八龍地区とほぼ同様で、下層から若干古い時期の遺物が出土している。主軸方向は、狭い調査区のため正確ではないがほぼ磁北に沿っている。

遺物の出土状況、造営時期は全ての溝でほぼ同様であるため、主軸方向から検討すると、イフ地区の大溝と石橋地区の大溝は一連のものとも考えることも可能である。しかし、断面形態では石橋地区の大溝はイフ地区よりも大溝Ⅰと類似している。八龍地区の大溝と一連のものとは仮定するならば、石橋地区周辺で大溝が確認されていないことから、イフ地区の大溝の延長方向が途絶えてしまうという問題が残る。現段階ではイフ地区と石橋地区の大溝が一連であると想定しておきたい。石橋地区の大溝がどのように続いていくのかは今後、寺口地区～イフ地区間の調査によって明らかにしていかなければならない。

このように、三雲・井原遺跡の南東部には、弥生時代中期後半から終末期にかけて八龍・寺口地区の2条（大溝Ⅰ・Ⅱ）、イフ地区の1条の三ヶ所に大溝が延びていたと考えられる。また、大溝は、中・下層から遺物が殆ど出土しない状況から、弥生時代終末期に一気に埋没したと考えられ、土師器が大量投棄される前には溝としての機能を終えていたものと考えられる。



第67図 大溝土層断面図 (S=1/60)

### ③ 三雲・井原遺跡南東部の復元（第66図）

大溝の造営時期に伴う三雲・井原遺跡南東部の遺構を検討してみたい。

これまでのトレンチ調査で、大溝の南側にあたる井原塚地区、三雲塚地区、八龍地区から弥生時代中期を中心とする甕棺墓群が確認されている。八龍地区Ⅱ-10地点からは弥生時代中期中葉～後半にかけての甕棺墓28基が、三雲塚地区ではⅡ-30～32、Ⅱ-27、Ⅰ-6～8からは中期後半～終末期の甕棺墓が合計9基、本報告の井原塚地区（D地点）から中期後半～後期にかけての甕棺墓6基が確認されている。また、包含層にも甕棺片や祭祀遺物など墓域に関する遺物が多く含まれていることから、大溝南東部周辺には広範囲に墓域が広がっていた可能性が高い。

このように、中期後半から後期前半の墓域は主に井原塚、三雲塚、八龍地区などの南部に集中しており、三雲南小路遺跡、井原鑿溝遺跡等の厚葬墓が位置する微高地とは谷部で隔てられた位置に分布している。後期～終末期の石棺墓群は東部の寺口地区、及び、西側の上覚地区など台地の縁辺部に集中している。これらの石棺墓群は台地縁辺にほぼ並行して列状に並んでいるため、今後の調査でさらに北、南側へと墓群が帯状に展開していく可能性がある。特に、寺口地区の北側、イフ、石橋地区では大溝の時期に伴う墓域が検出していないため、今後の調査で明らかにしていきたい。

これまでの調査では、集落域は大溝の北西部に集中し、墓域が確認されている地域から当該期のものは確認されていない。集落域と墓域は意識的に分けられていたと考えられる。また、南東部では大溝によって、墓域と集落域との間を区画されていたと想定される。そして、寺口、上覚地区の終末期の石棺墓群が営まれる時期には、大溝は埋没しはじめ、墓域と集落域の区分としての役割はほぼ終えていたものと考えられる。

今回の報告では、トレンチ調査という限られた情報の中で集落域の復元を行なった。しかし、南西部、及び東部の大溝の延長方向が不明であるため、集落域の確定ができず、想定の域を出ない。今後、さらに大溝についての具体的な情報得て、再度検討を行ないたい。

#### （引用文献）

- |       |      |         |                   |          |
|-------|------|---------|-------------------|----------|
| 小池史哲編 | 1981 | 『三雲遺跡Ⅱ』 | 福岡県埋蔵文化財調査報告書第60集 | 福岡県教育委員会 |
| 小池史哲編 | 1982 | 『三雲遺跡Ⅲ』 | 福岡県埋蔵文化財調査報告書第63集 | 福岡県教育委員会 |



## 写真図版

---

図版2



a. 7・9号住居 (南から)



b. 7号住居遺物出土状況



c. 9号住居遺物出土状況



a. 2～7号住居 (北から)

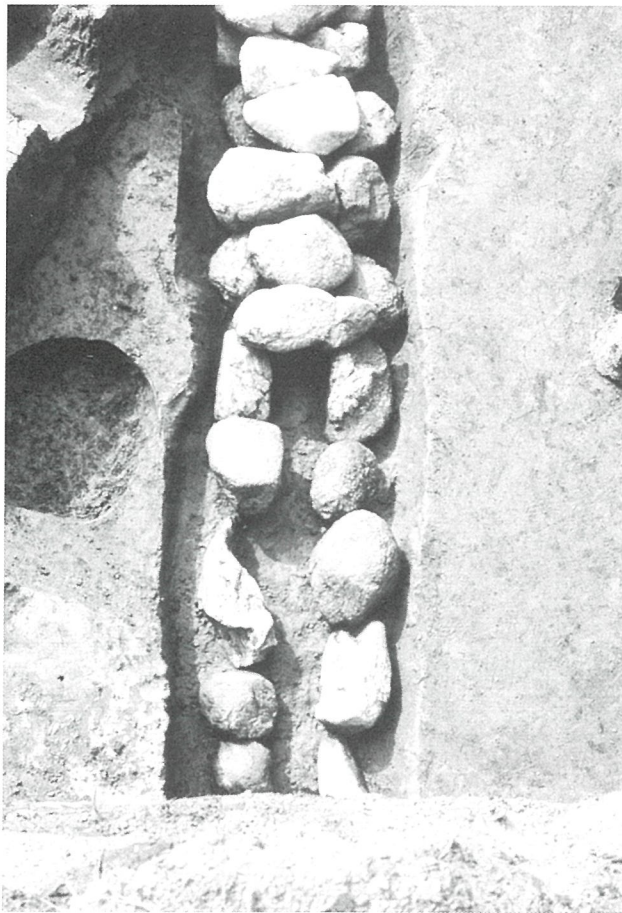


b. 9～11号住居 (南から)

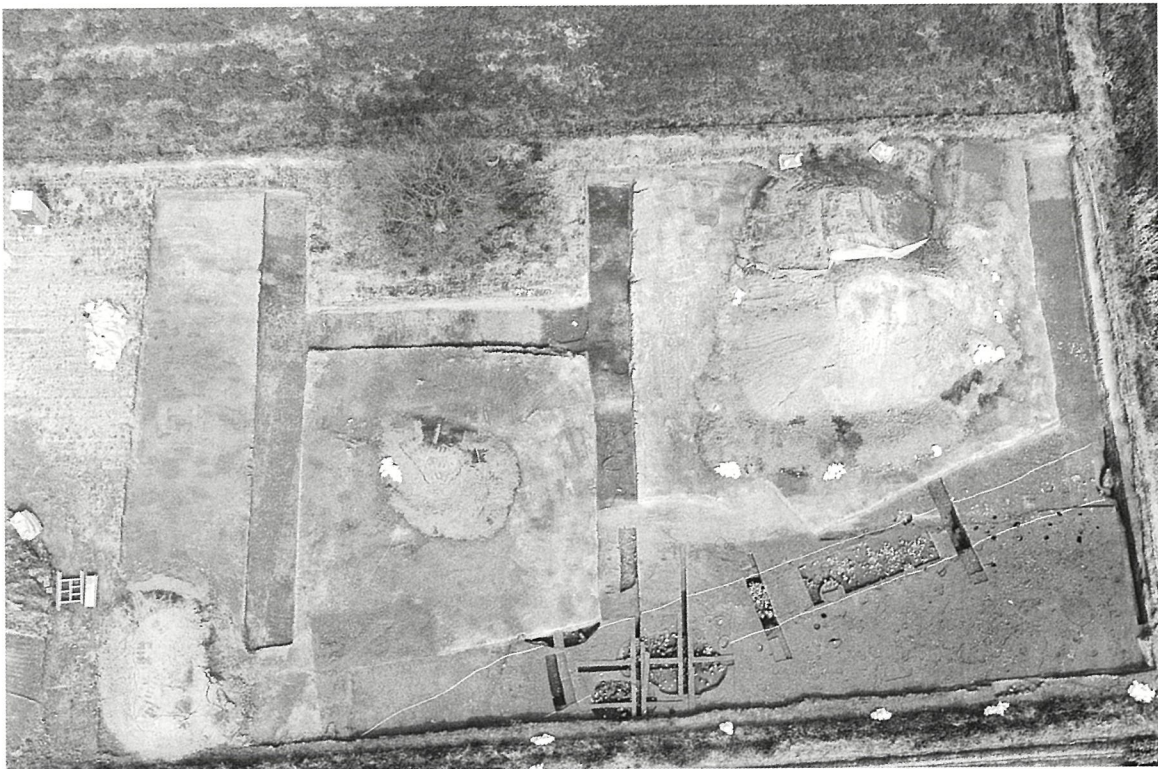
図版4



a. 八龍地区247番地全景 (南から)



b. 石組溝 (北から)



a. 八龍地区221番地全景 (南から)

図版6



a. 大溝遺構全景（東から）



b. 同上（北側上空から）



a. 大溝遺構東壁土層断面 (I-2トレンチ)



b. 大溝遺構東壁土層断面 (IIトレンチ)



c. 大溝遺構遺物出土状況

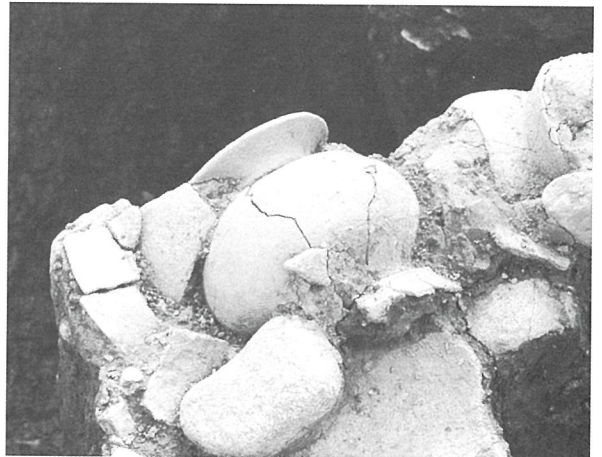


d. 同左

図版8



a. 初期須恵器出土状況



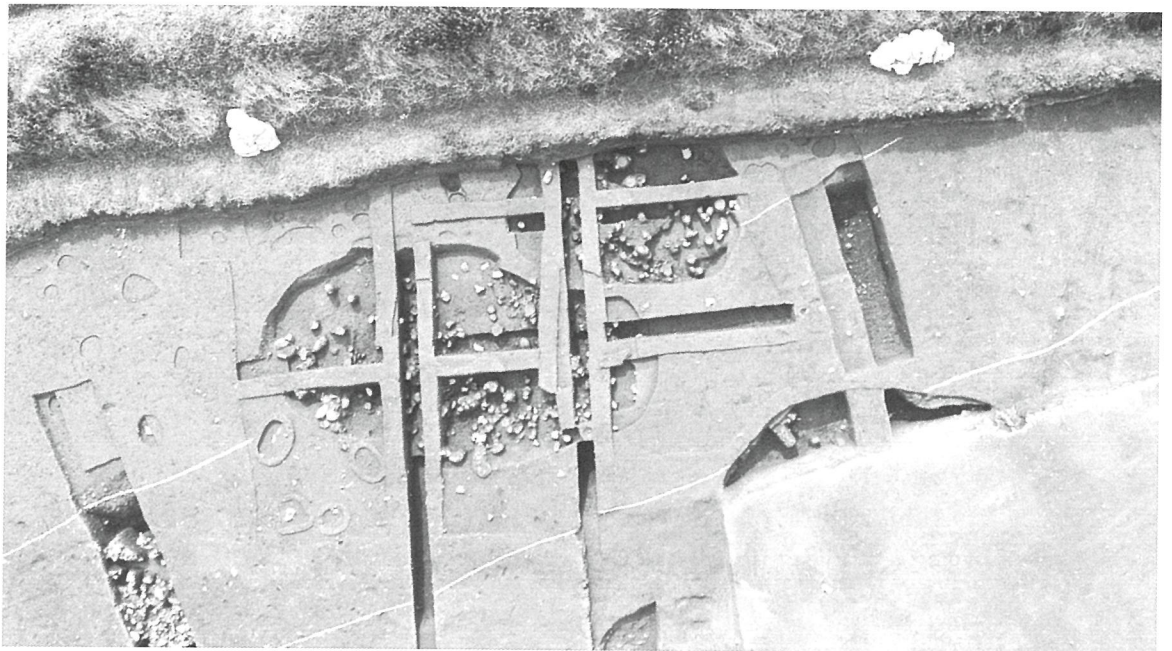
b. 脚付二重口縁壺出土状況



c. 底部穿孔甕出土状況



d. 同左 半裁状況



e. 1・2号土坑 (北から)





a. 八龍地区235番地全景 (西から)



b. 1・2・3号住居 (西から)

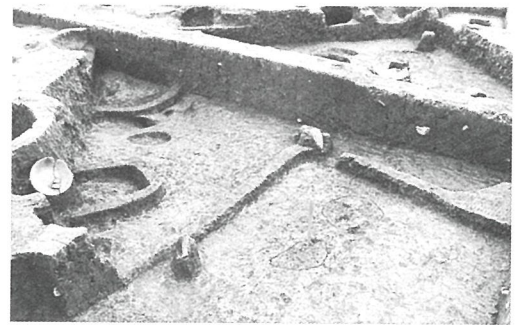
図版10



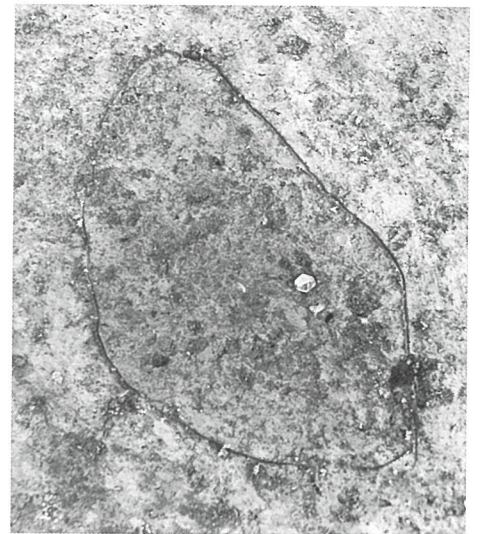
a. 1号住居 (東から)



b. 同上 炉跡周辺土器出土状況



c. 水晶玉出土地点・高杯出土pit (東から)



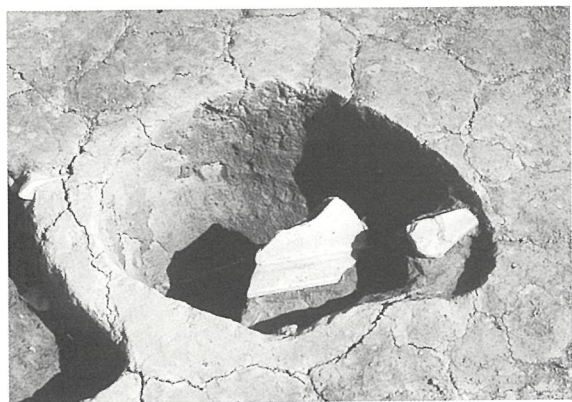
d. 1号住居床面水晶玉出土状況



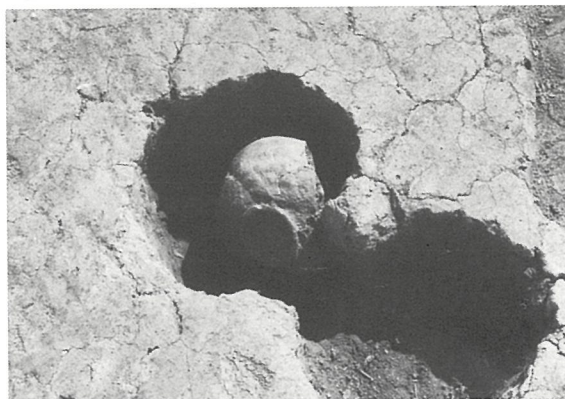
a. 石組溝検出状況 (北から)



b. 高杯出土状況 (90号柱穴)



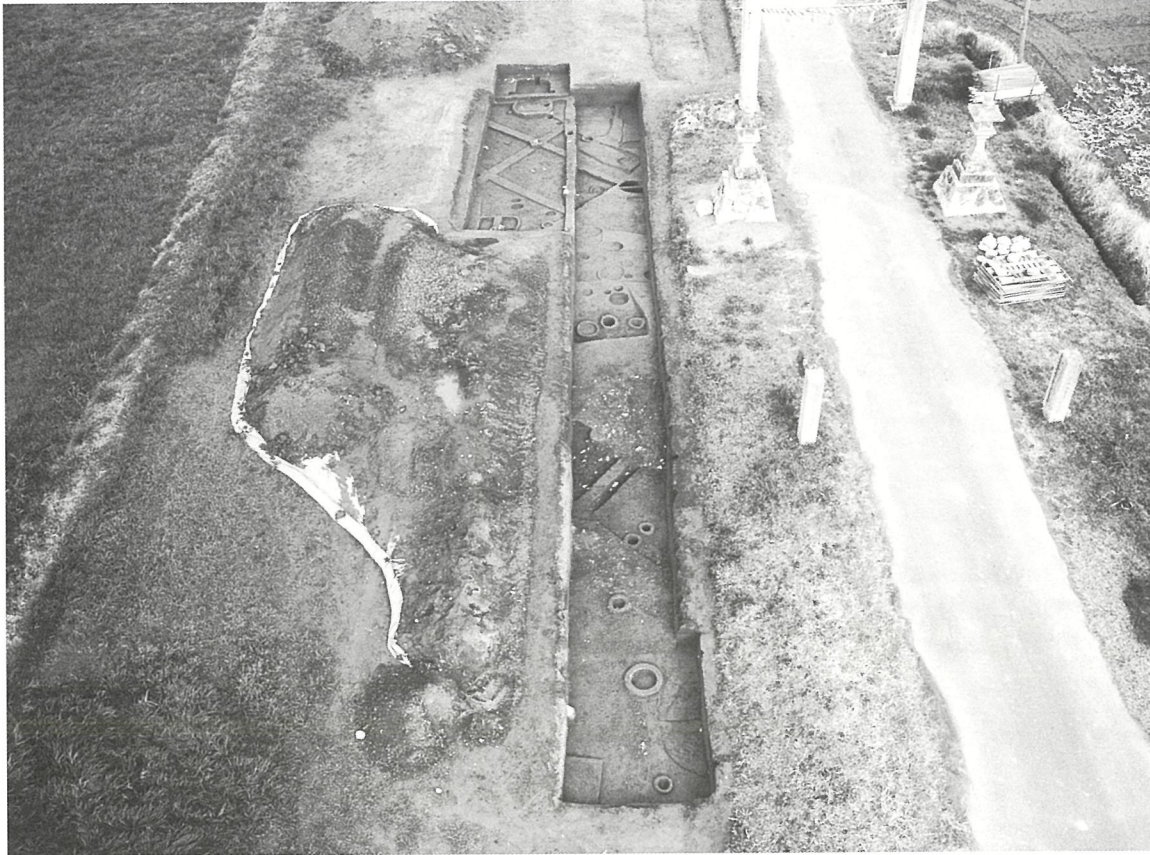
c. 砥石出土状況 (17号柱穴)



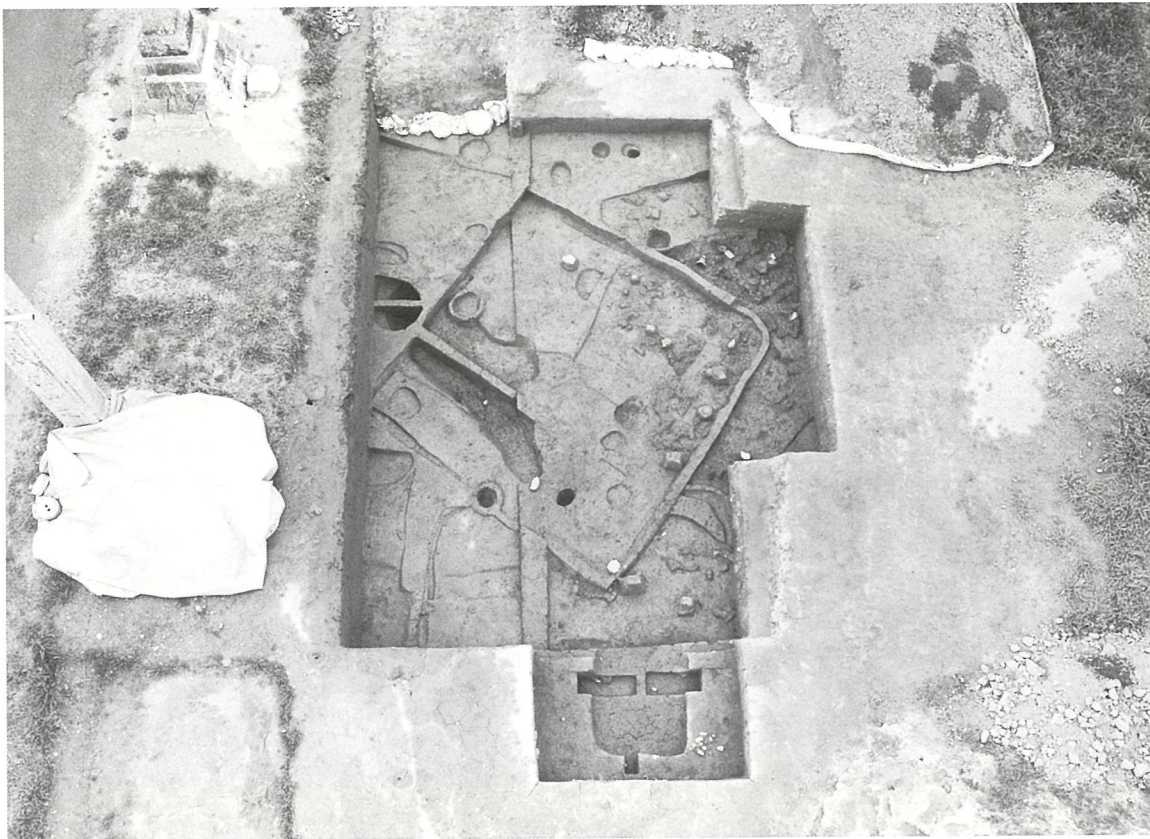
d. 瓦器碗出土状況 (89号柱穴)



a. 堺地区253番地全景 (北から)

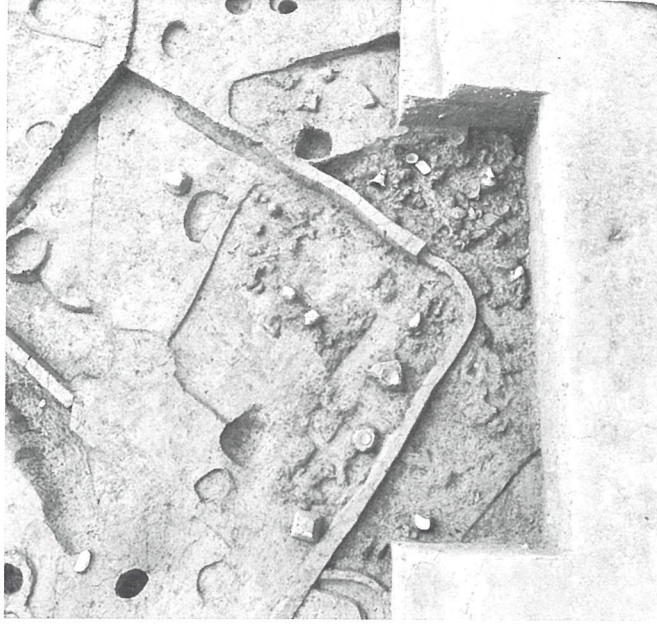


a. 宮ノ下地区Aトレンチ全景（西から）

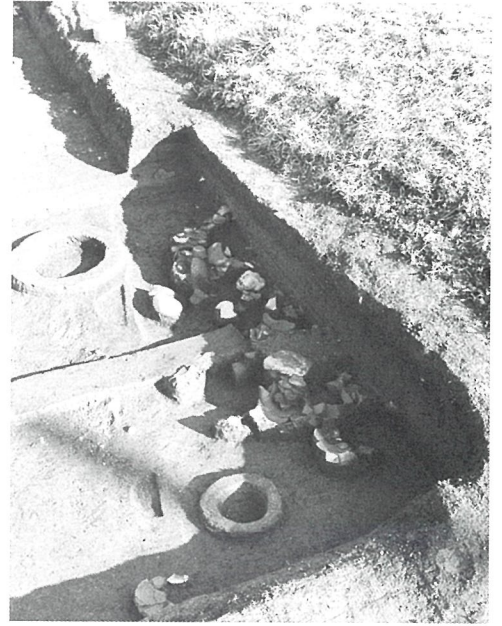


b. 北側拡張区全景（東から）

図版14



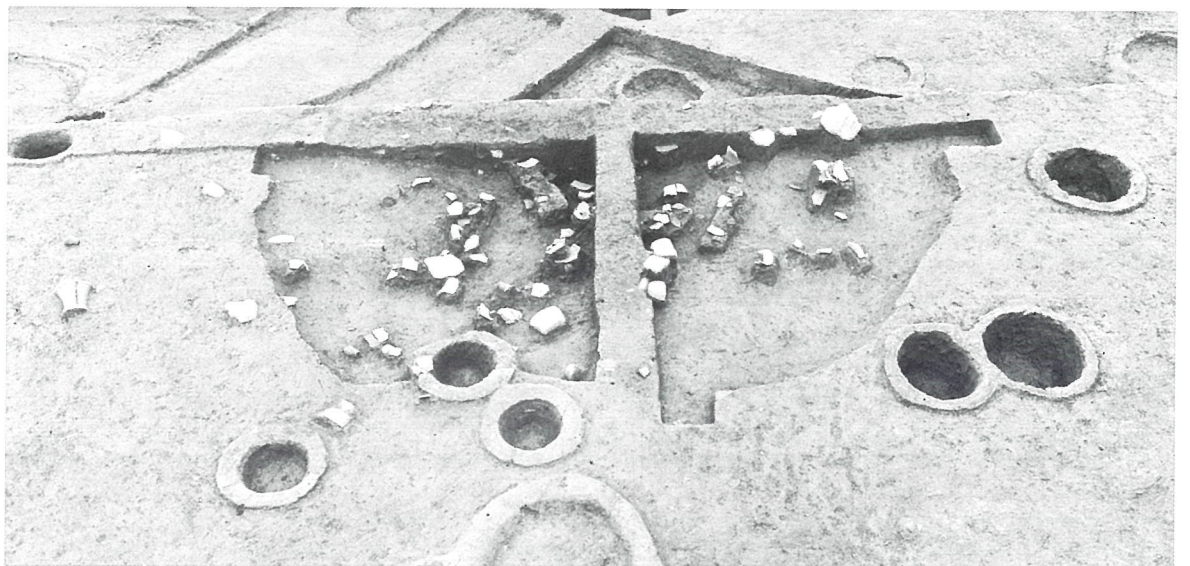
a. 4号住居 (東から)



b. 8号住居 (西から)



c. 4号住居床面焼土層断面 (西から)



d. 1号土坑検出状況 (北から)



a. 木棺墓 (東から)

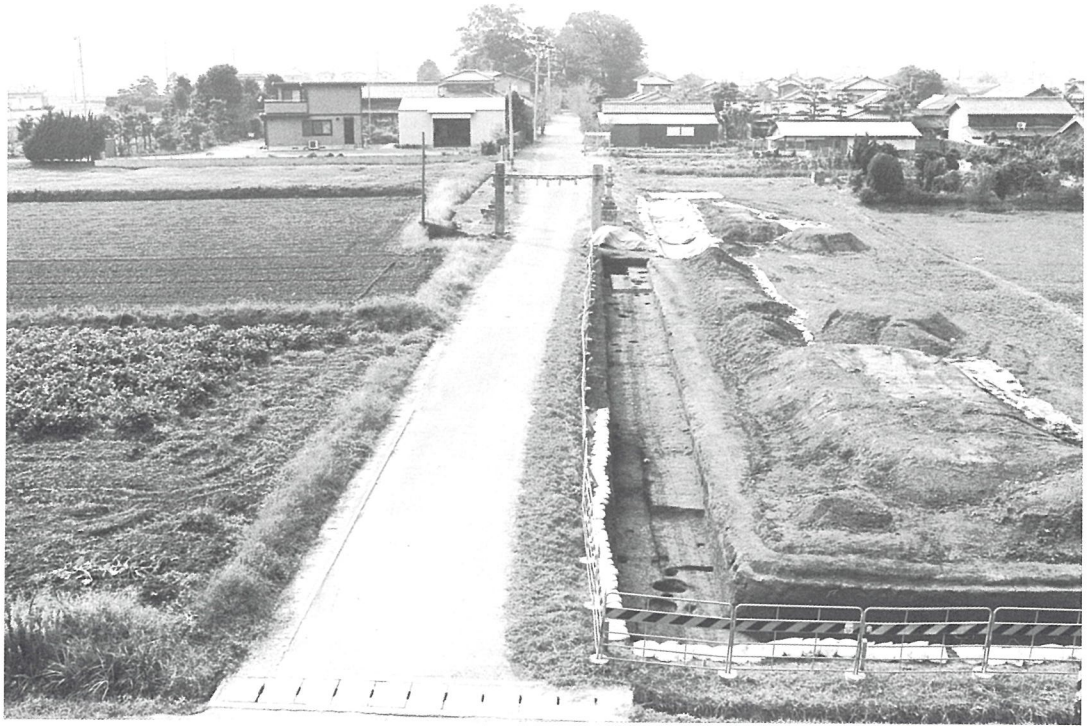


b. 同上 (南東から)



c. 副葬品検出状況 (北から)

図版16

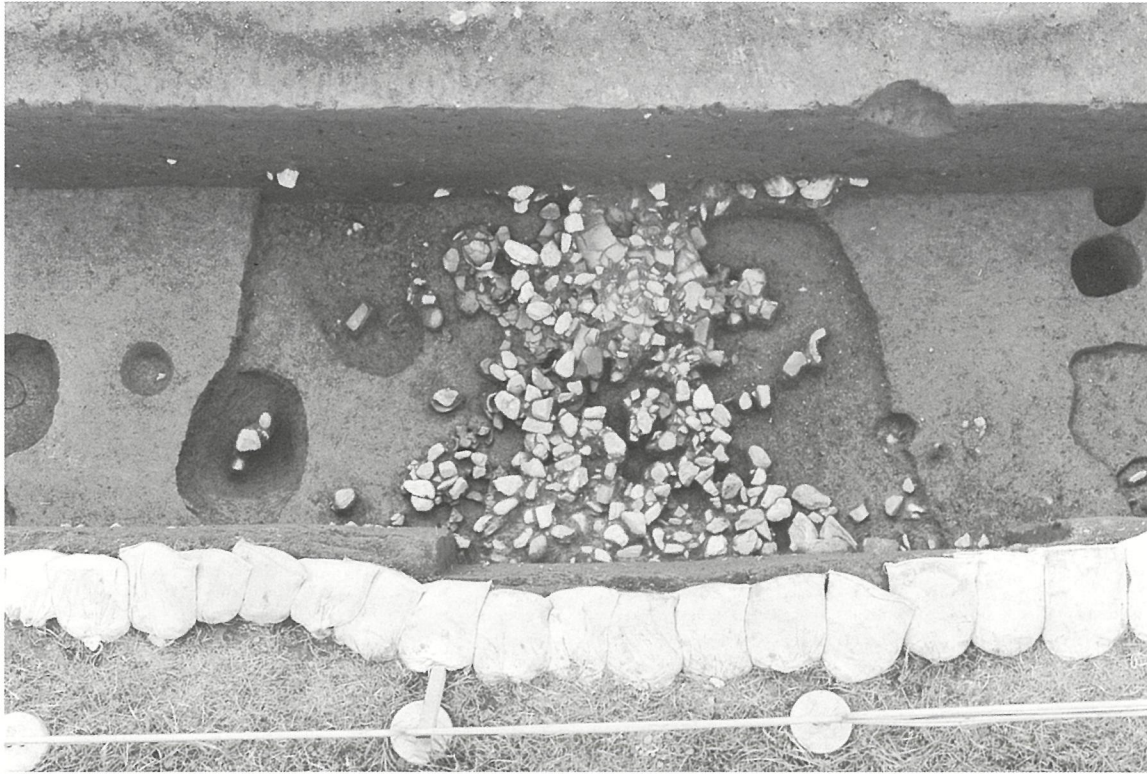


a. 宮ノ下地区Bトレンチから細石神社をのぞむ (東から)



b. Bトレンチ全景 (東から)

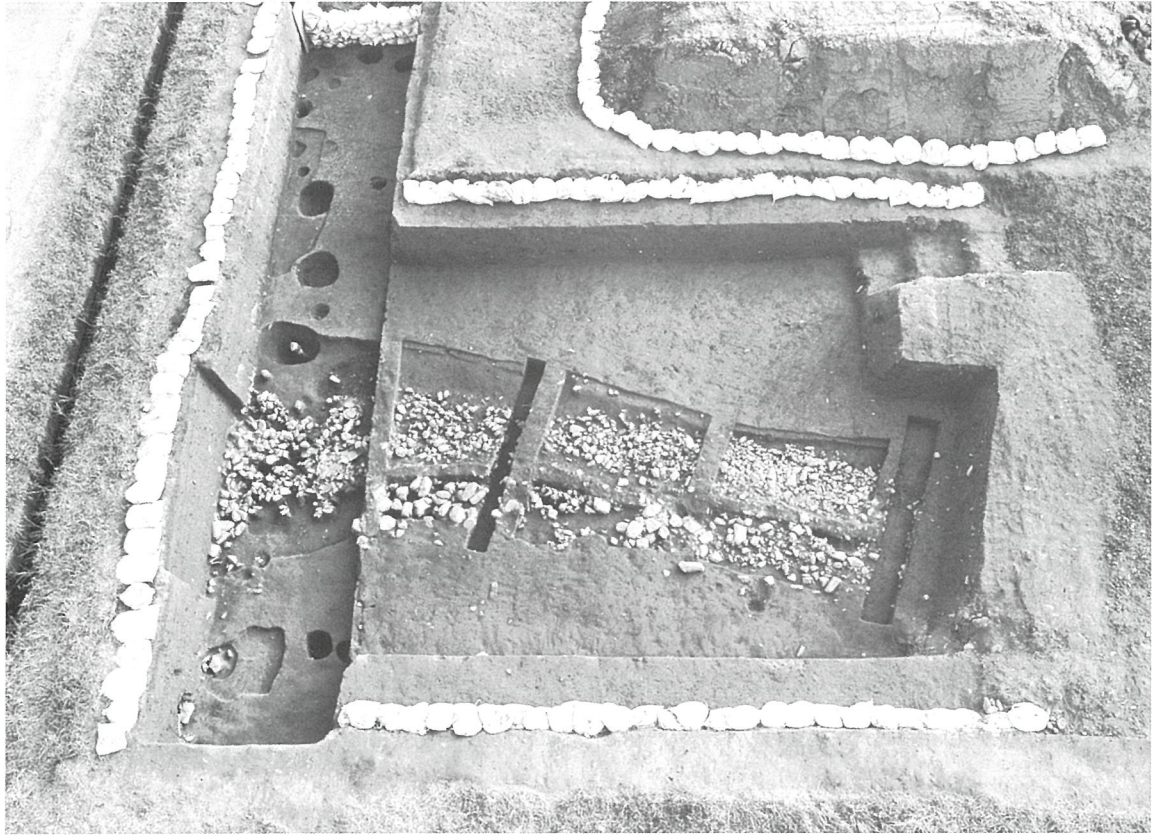




a. 祭祀土坑 (中世溝に切られている状況、東から)



b. 同上検出後全景 (北東から)



a. 溝状遺構全景（北から）



b. 溝状遺構Aトレンチ土層断面  
（東から）



c. Bトレンチ南壁土層断面

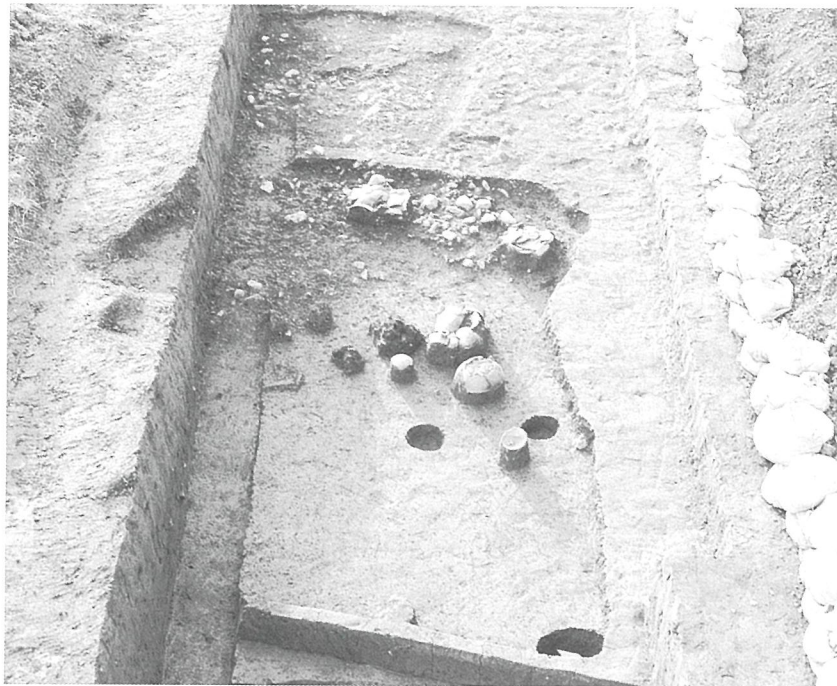


a. 宮の下地区Cトレンチ全景 (東から)

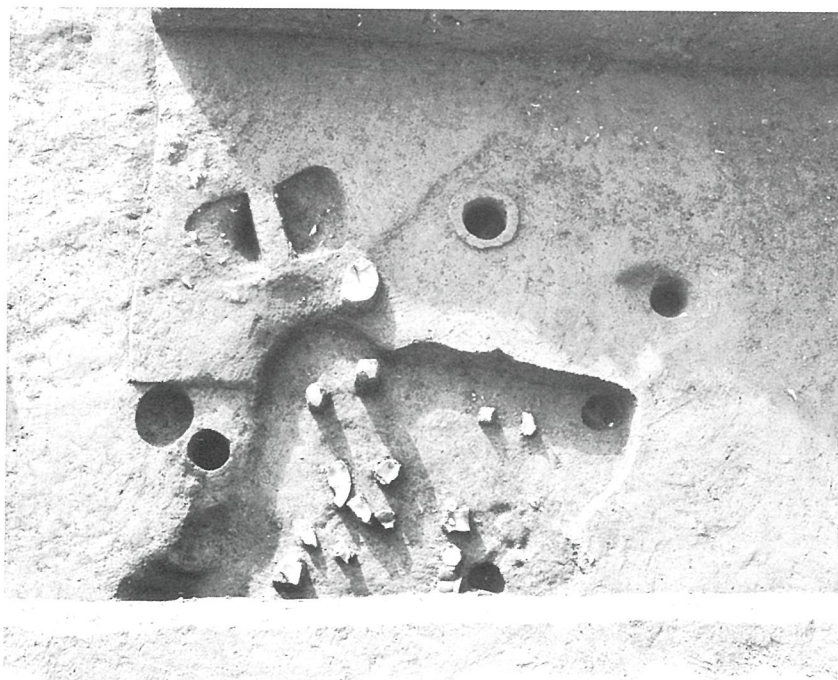


b. 1号住居 (南から)

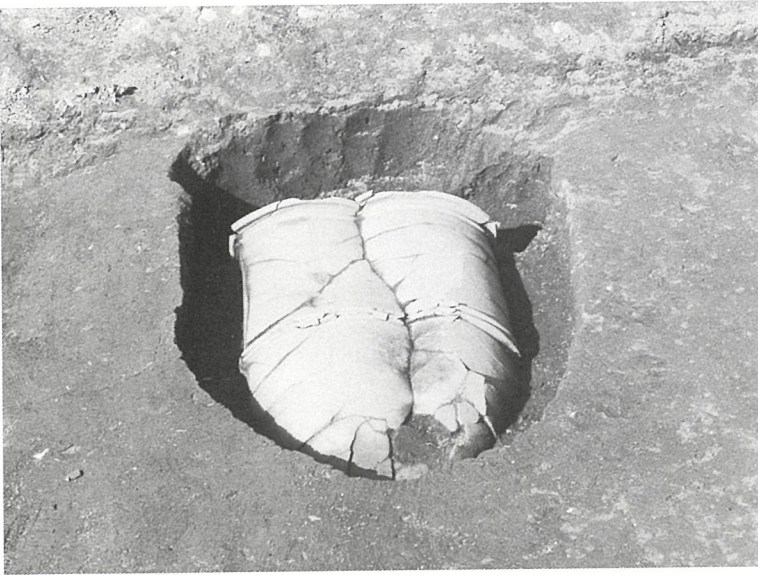
図版20



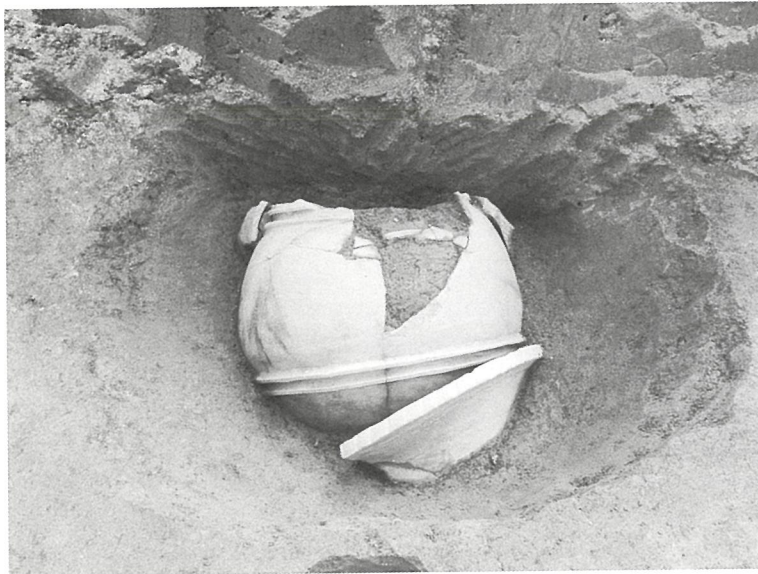
a. 1・2号住居 (東から)



b. 1・2号土坑 (東から)



a. 井原堺地区 (D地点)  
1号甕棺墓検出状況

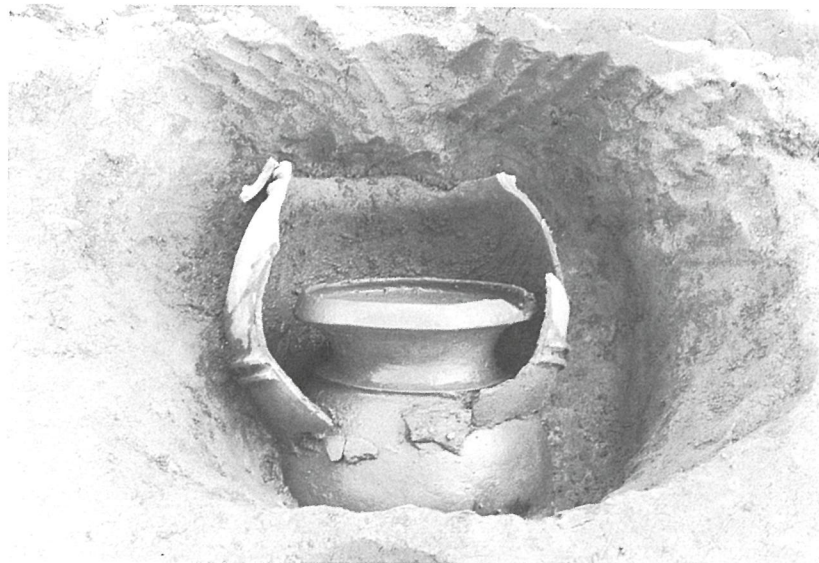


b. 2号甕棺墓検出状況 (北から)

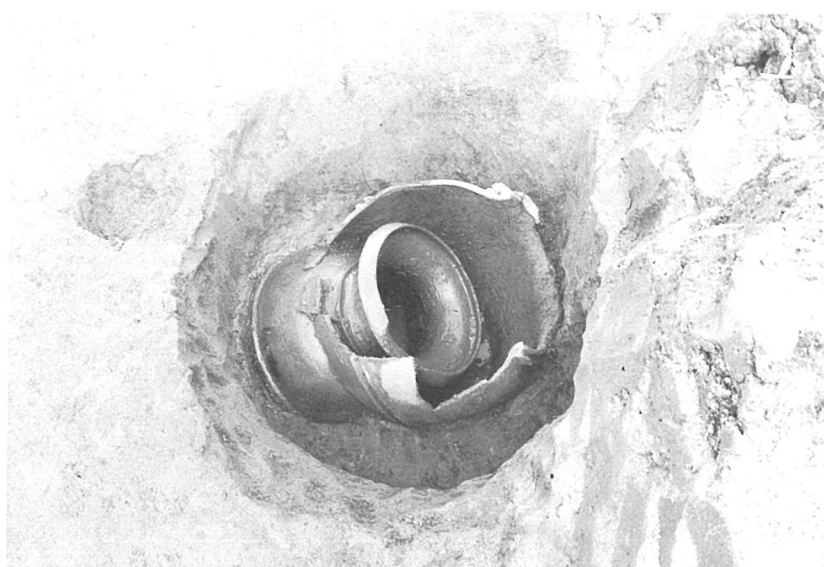


c. 同上 (西から)

図版22



a. 2号甕棺墓上甕半裁状況  
(北から)



b. 同上 (西から)



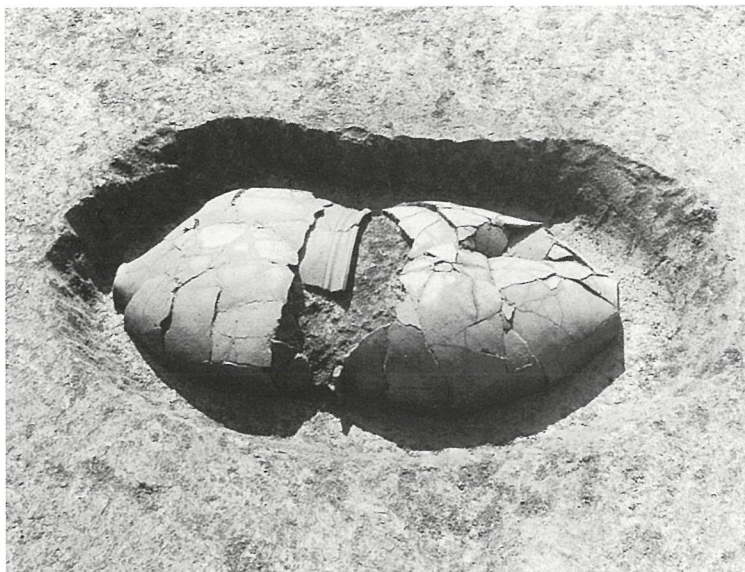
c. 同上 下甕検出状況  
(北から)



a. 3号甕棺墓検出状況 (北から)

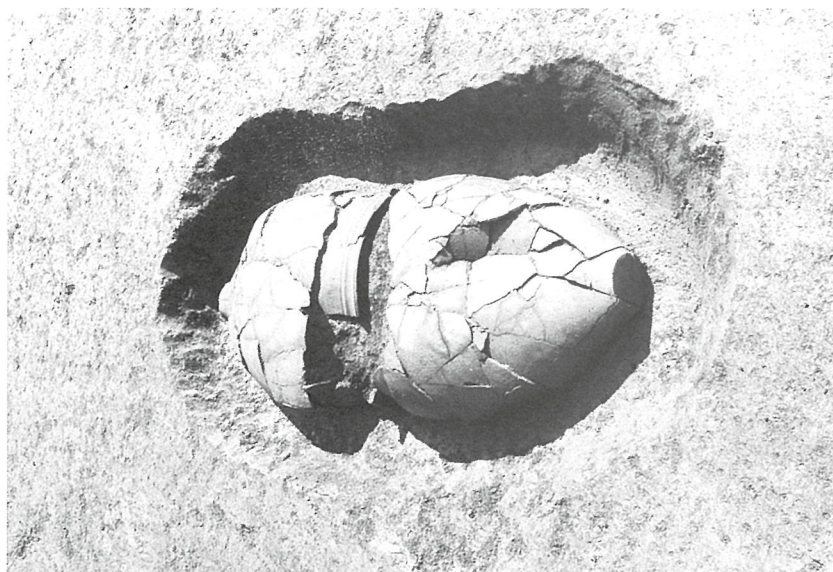


b. 同上 (東から)

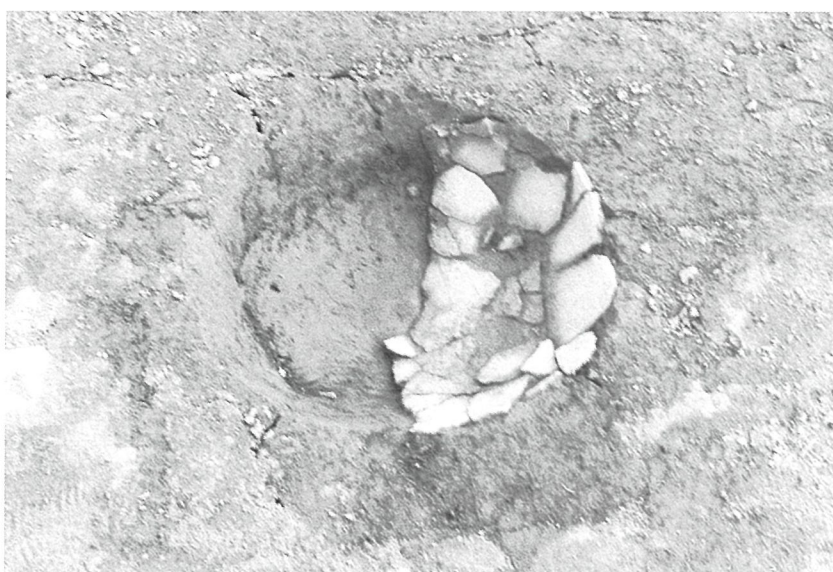


c. 4号甕棺墓検出状況 (北から)

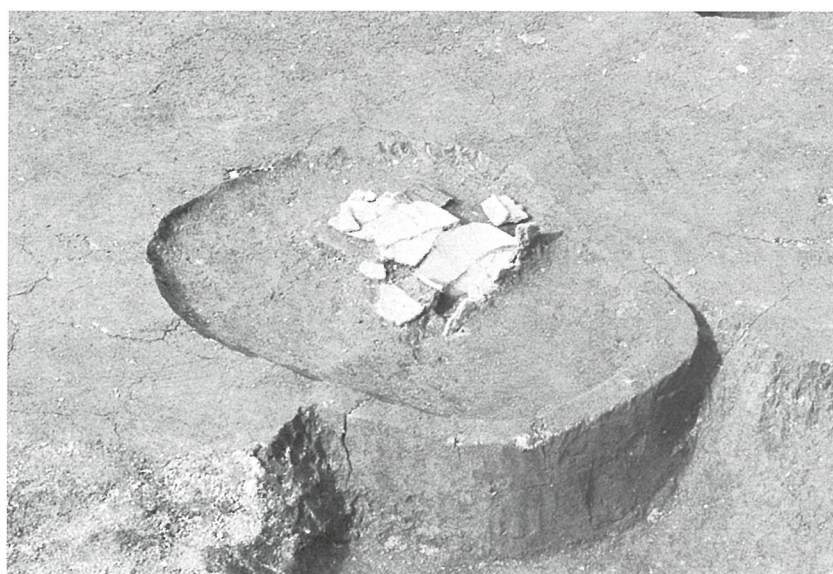
図版24



a. 4号甕棺墓検出状況  
(北東から)



b. 5号甕棺墓検出状況



c. SK416内甕出土状況  
(南から)





a. SK416 (北から)



b. SK430土器出土状況  
(北から)



c. 2号土壇墓 (北から)

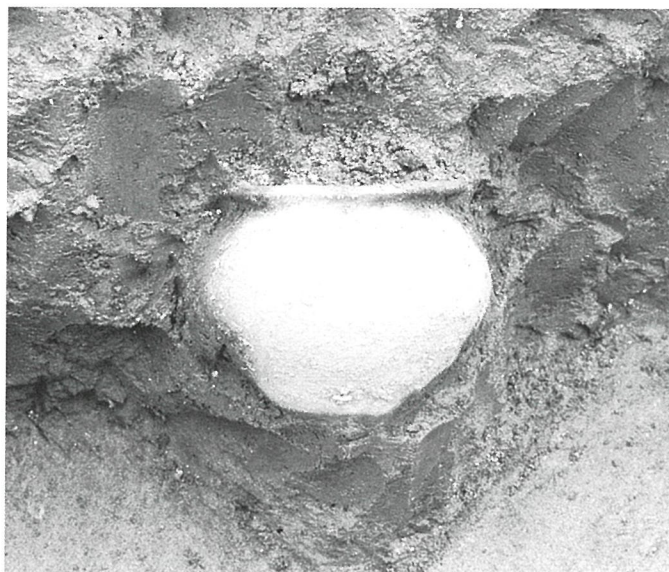
図版26



a. 1号祭祀土坑  
(SK410)  
(東から)



b. 2号祭祀土坑  
(SK436)  
(北から)



c. 同上 (拡大)

八龍地区234番地北区住居出土遺物



4-5



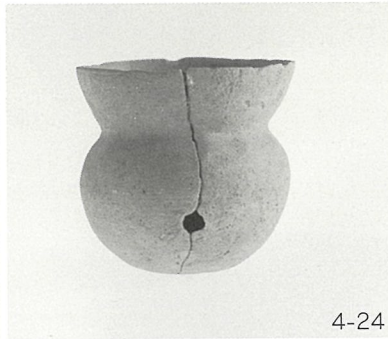
4-23



4-34



4-10



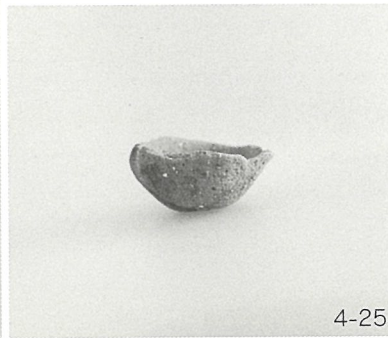
4-24



4-35



4-13



4-25



4-38



4-21



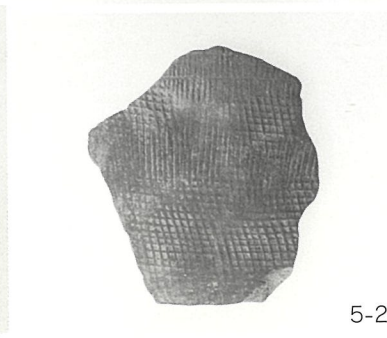
4-30



5-1



4-33



5-2

図版28

八龍地区234番地住居出土遺物



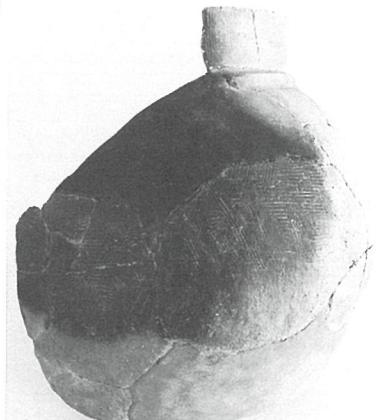
5-2



5-4

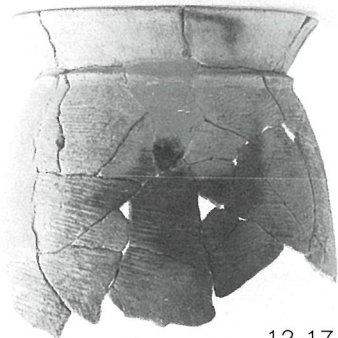


12-19



13-27

八龍地区221番地  
大溝出土遺物①



12-17



12-21



13-30



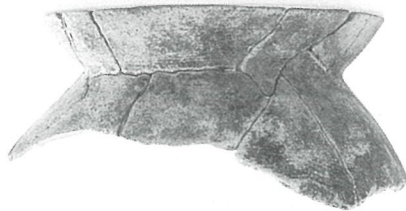
12-26



13-32



12-18

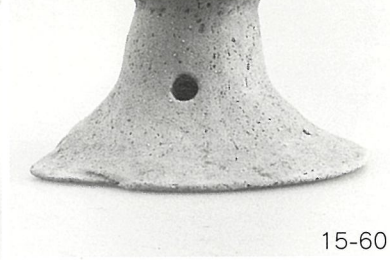
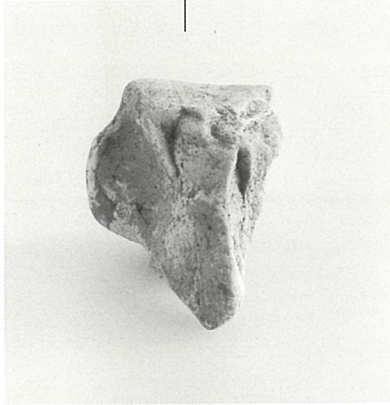
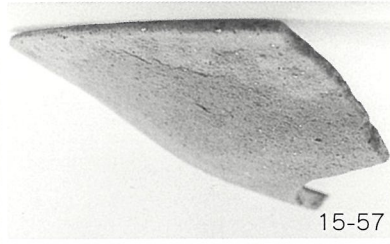
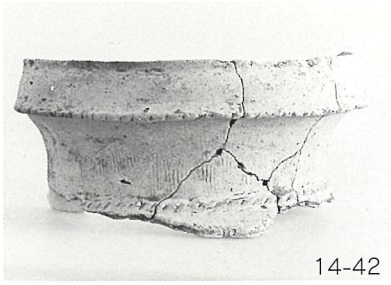
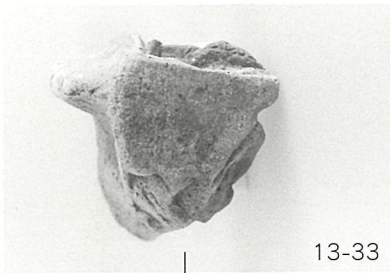


12-25



13-32

大溝出土遺物②

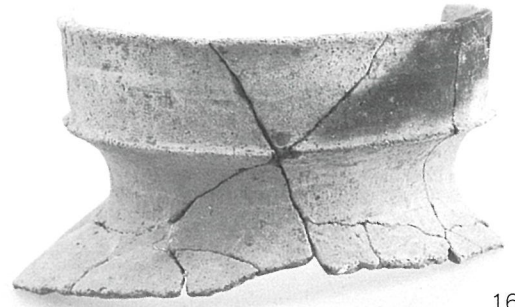


図版30

大溝出土遺物③



16-67



16-72



16-73



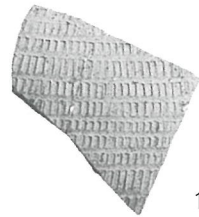
16-69



16-74



16-70



17-1



17-2

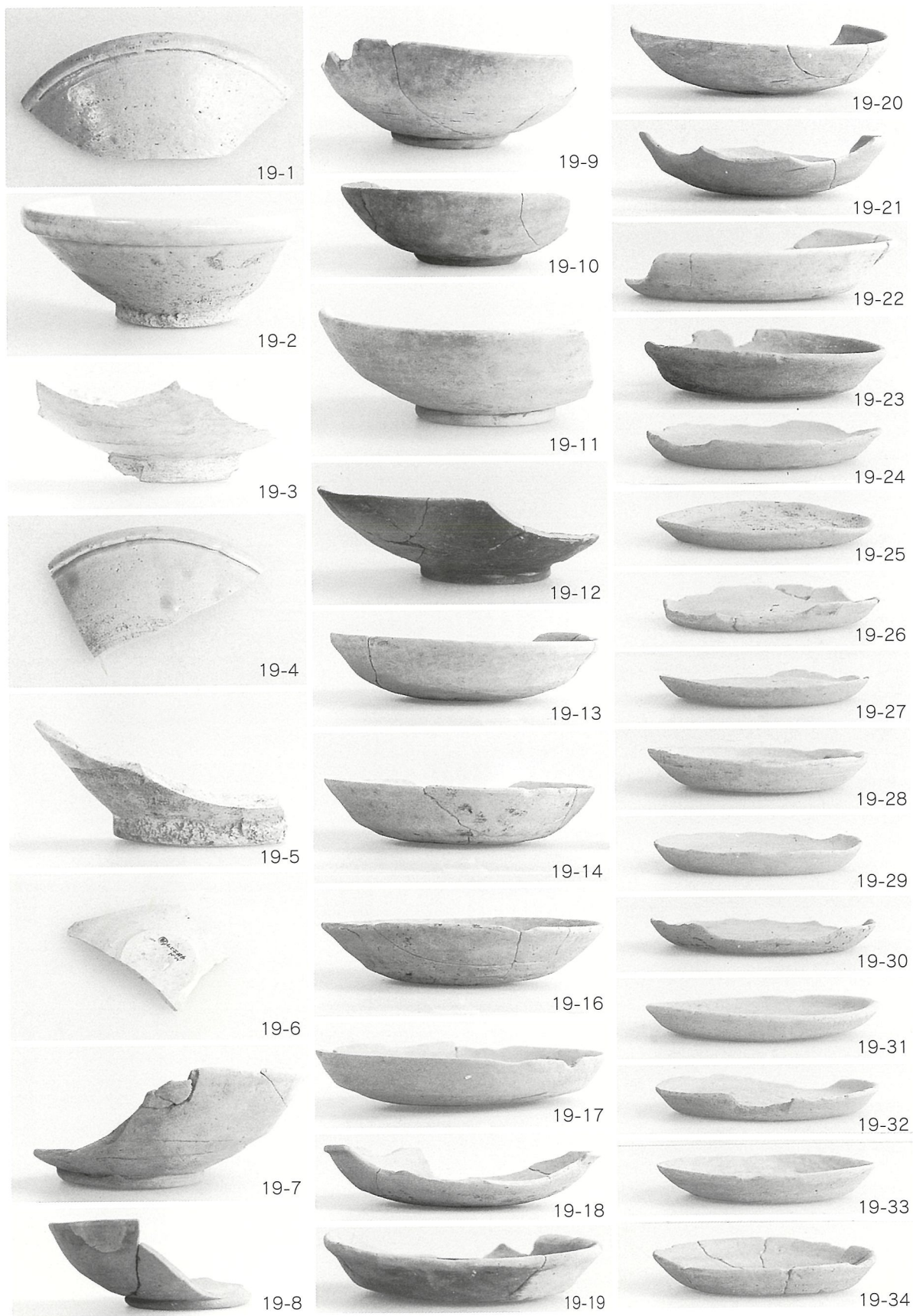


17-3



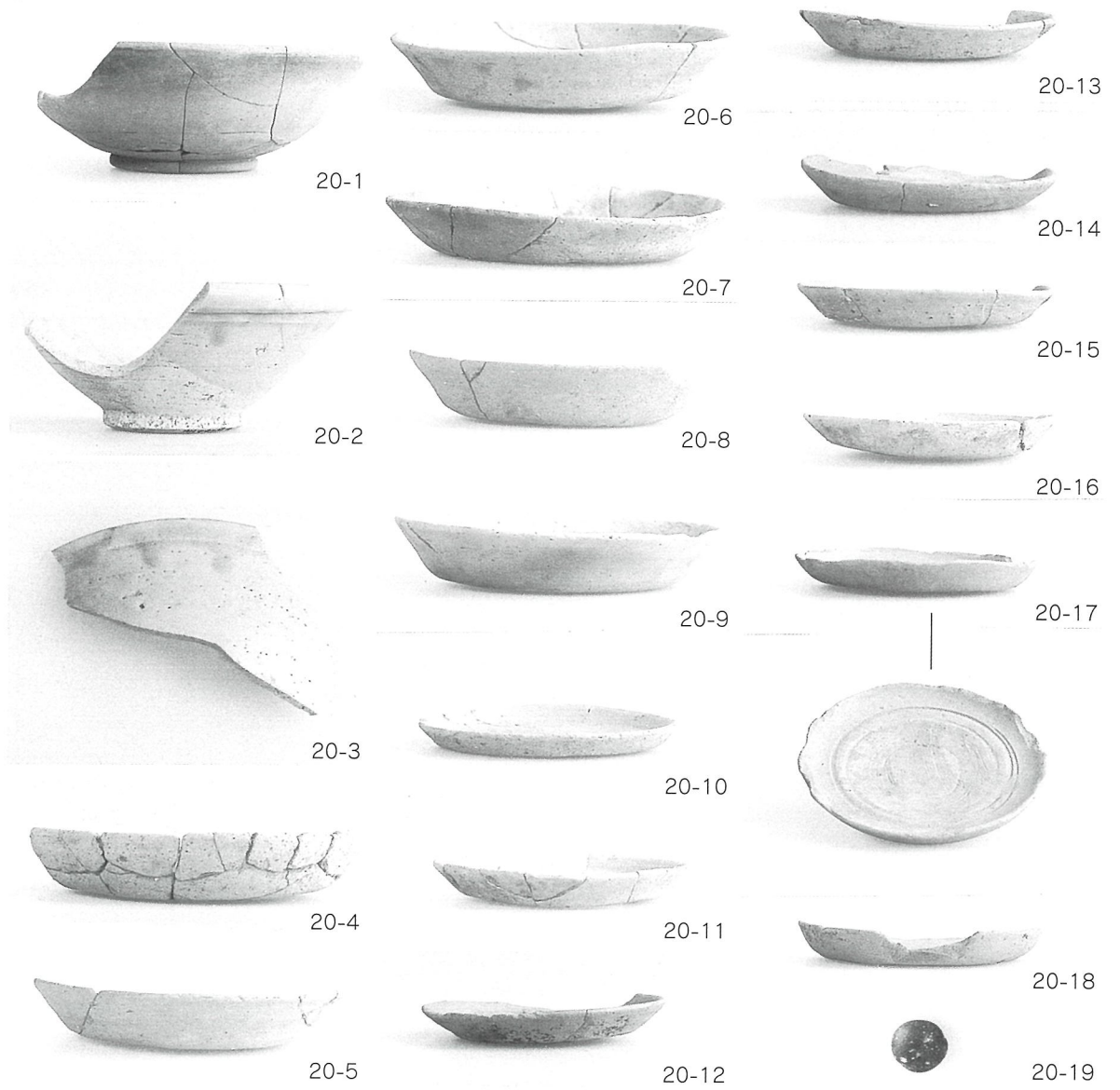
17-4

八龍地区221番地1号土坑出土遺物



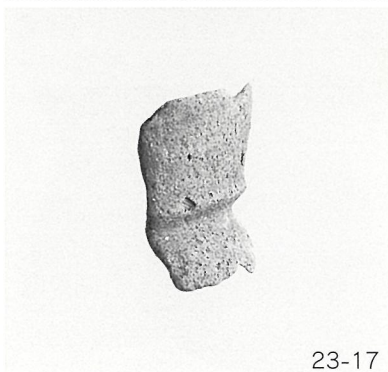
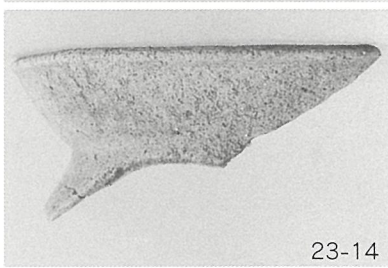
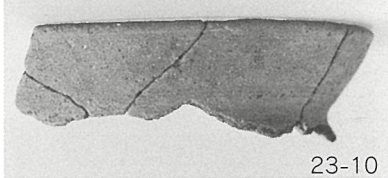
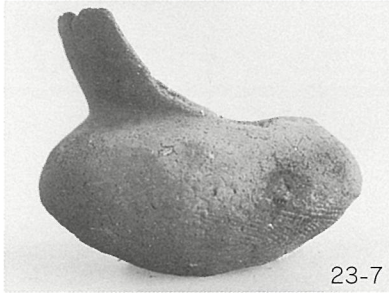
図版32

八龍地区221番地2号土坑出土遺物





八龍地区235番地住居出土遺物

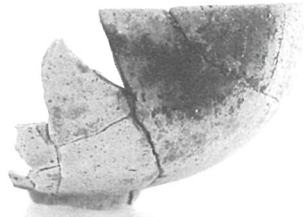


図版34

その他の遺構出土遺物



24-3



32-4



32-15



24-7



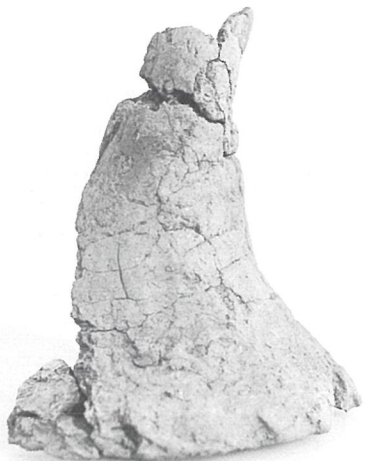
32-7



32-16



32-9



宮の下地区Aトレンチ  
住居出土遺物①



32-1



32-10



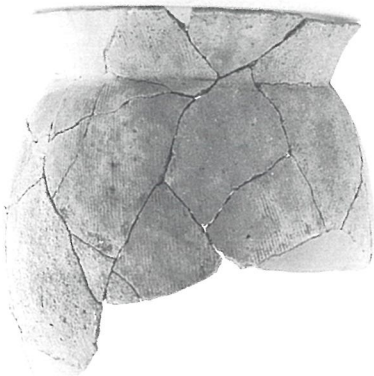
32-2



32-11



32-17



32-3

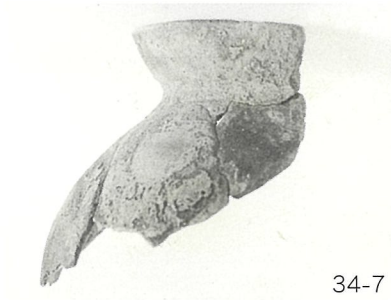
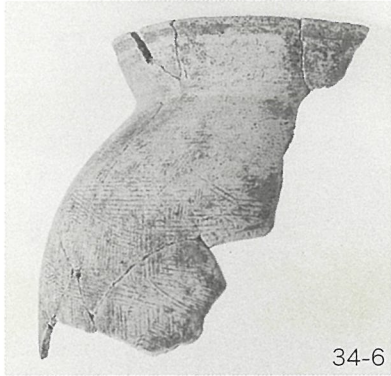
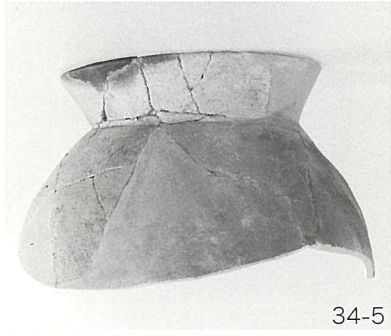
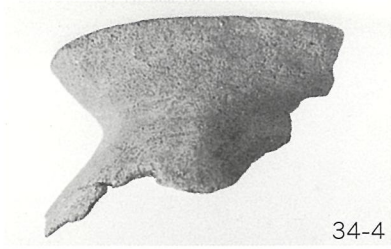
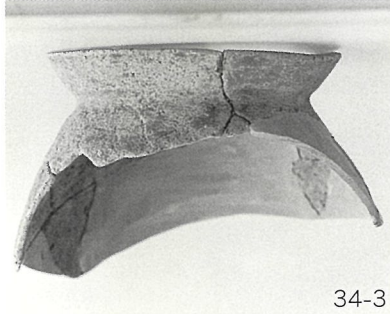


32-14

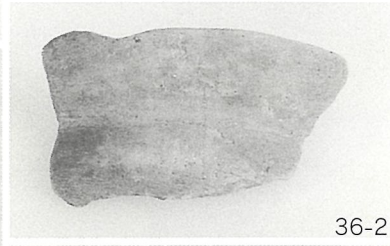
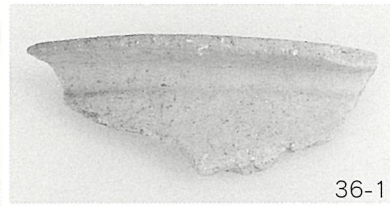


32-18

住居出土遺物②



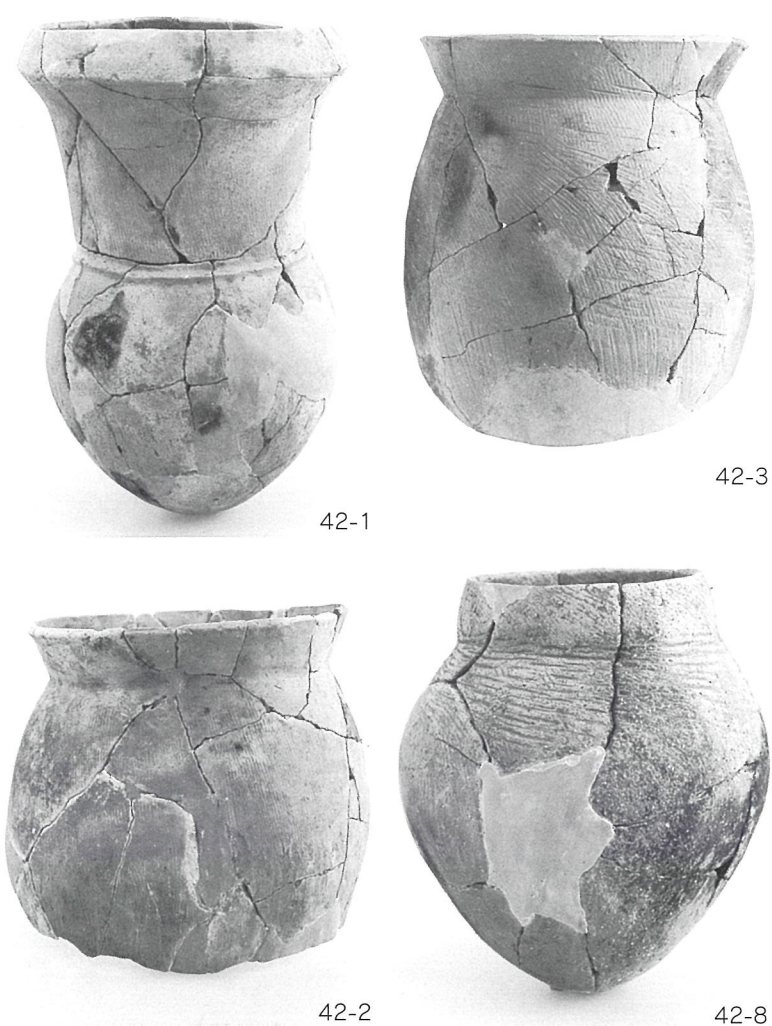
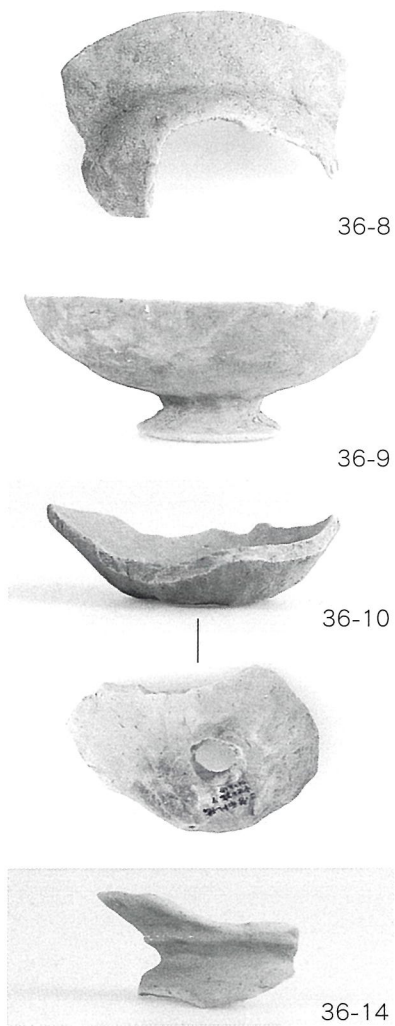
1号土坑出土遺物①



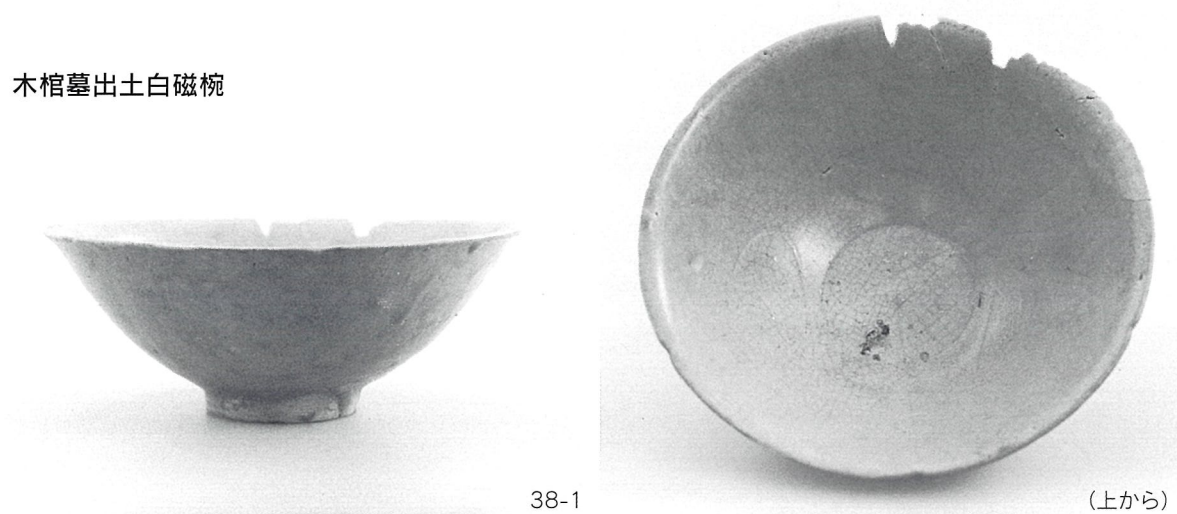
図版36

1号土坑出土遺物②

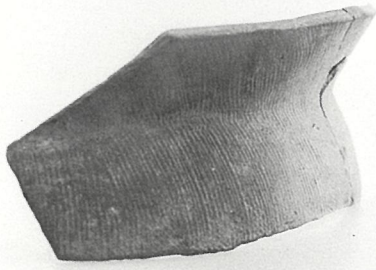
Bトレンチ祭祀土坑出土遺物①



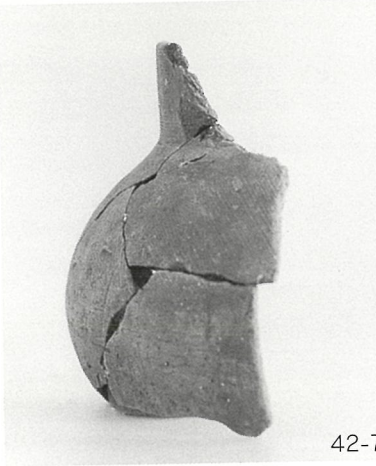
木棺墓出土白磁椀



祭祀土坑出土遺物②



42-5



42-7



42-9



43-13



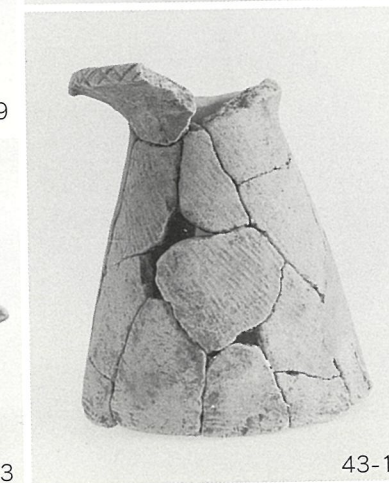
43-10



43-11



43-12



43-17



43-14



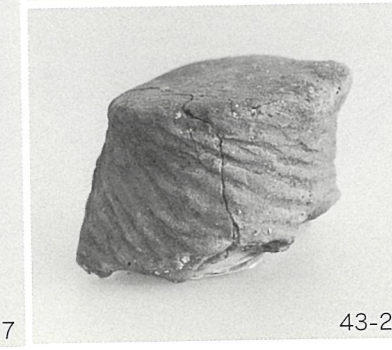
43-18



43-19



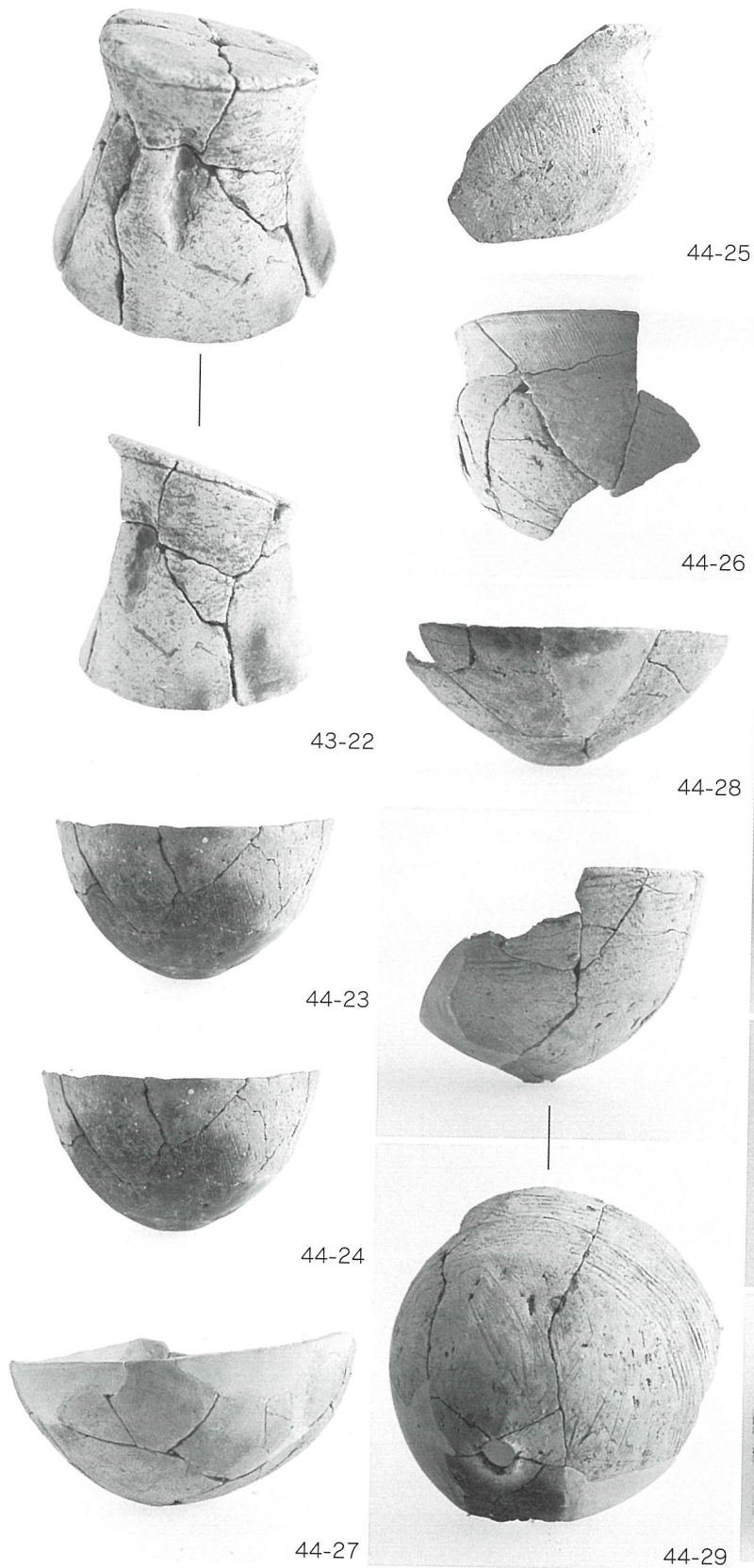
43-20



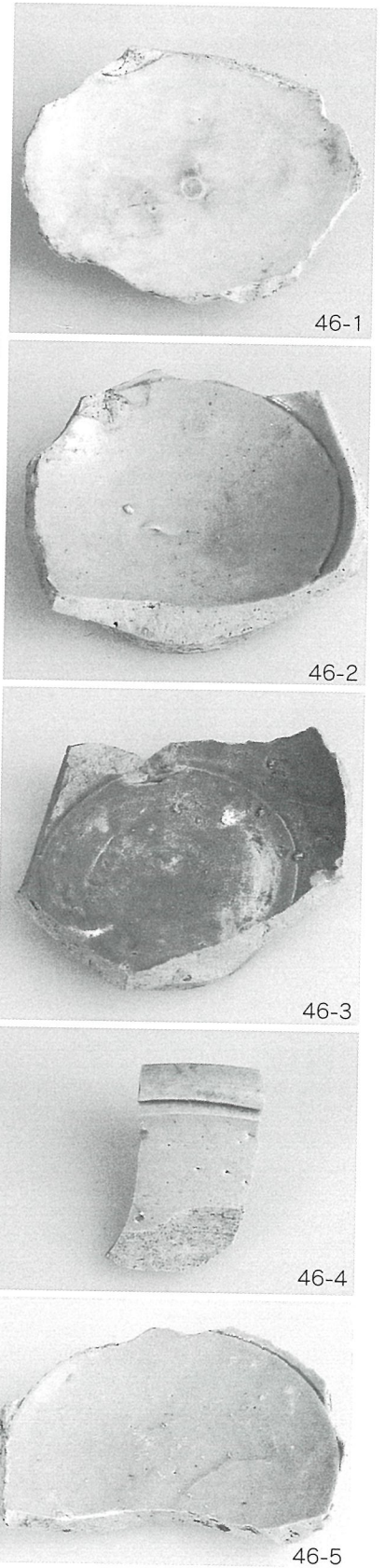
43-21

图版38

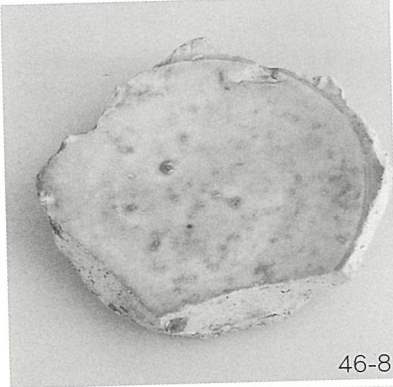
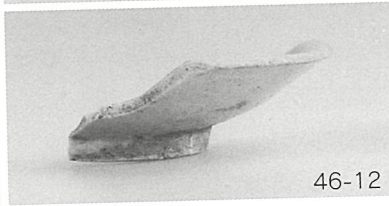
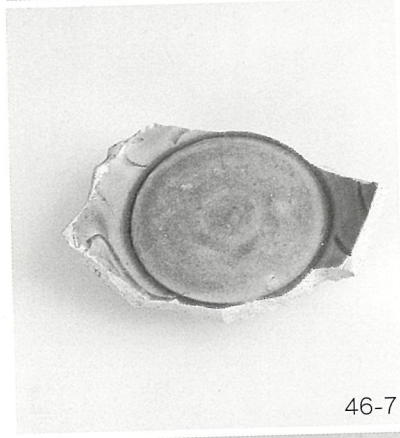
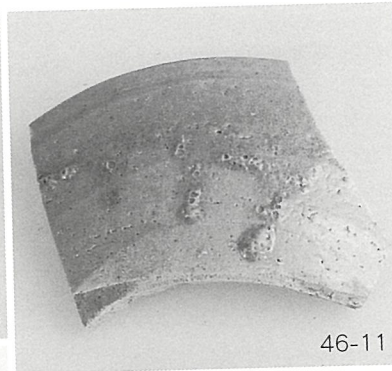
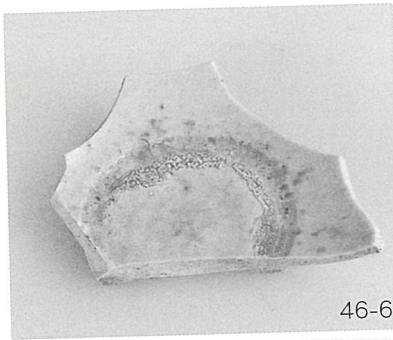
祭祀土坑出土遺物③



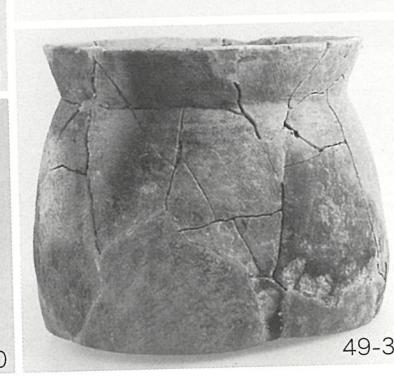
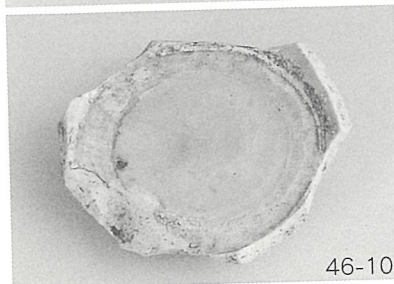
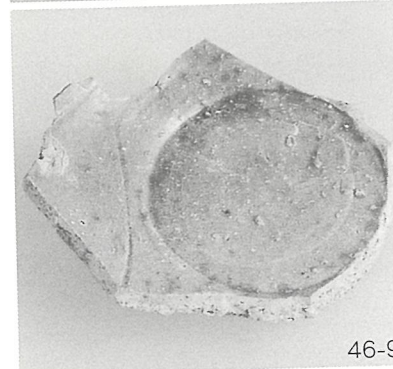
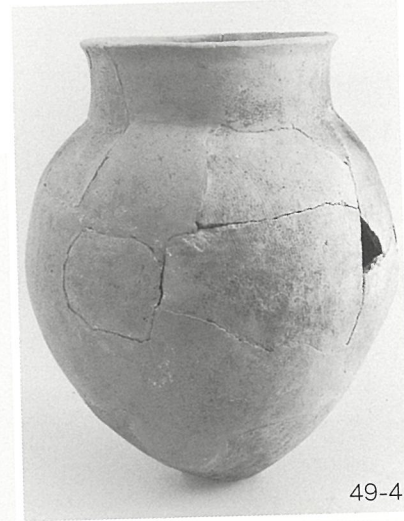
1·2号溝出土遺物①



1・2号溝出土遺物②



Cトレンチ住居出土遺物



图版40

1号土坑出土遺物



49-8



51-2



51-3



51-1



51-6



51-4

3号甕棺

井原堺地区(D地点)

1号甕棺

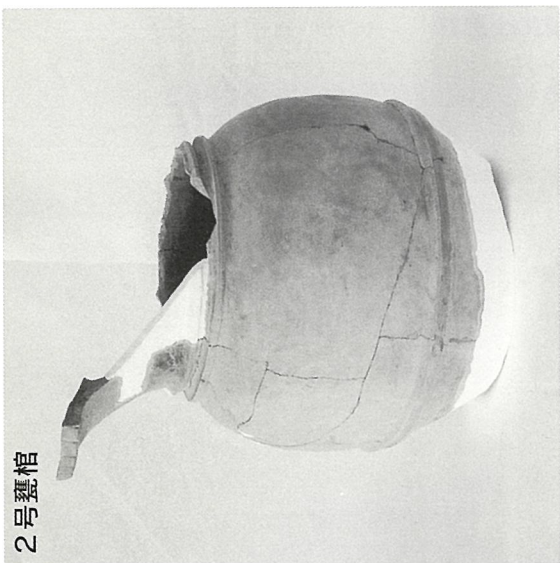


53-1

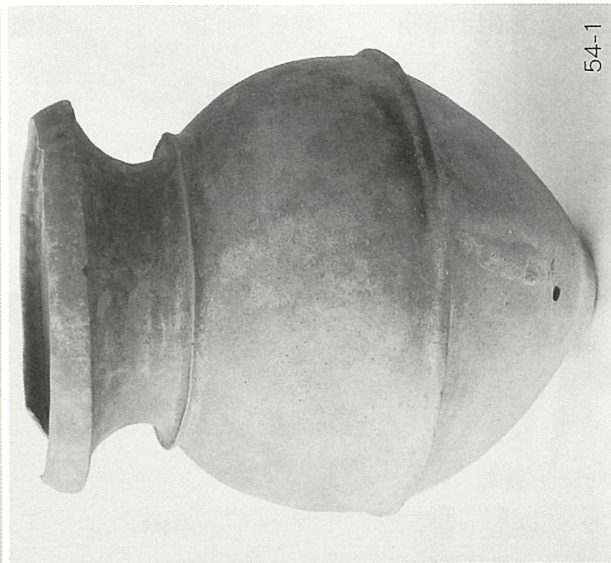


57-1

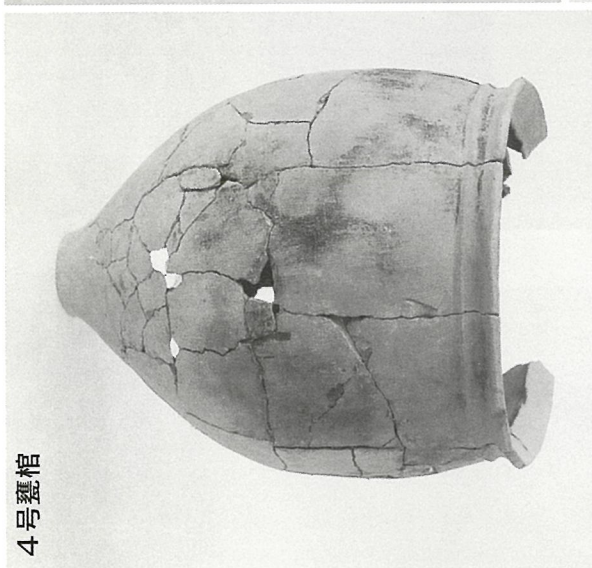




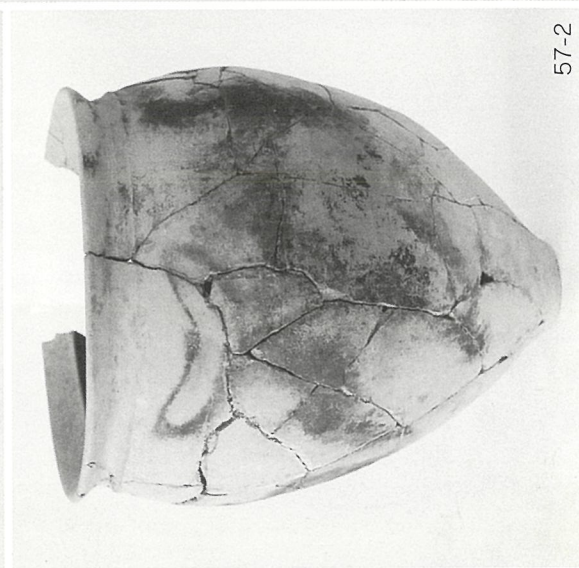
2号甕棺



54-1



4号甕棺

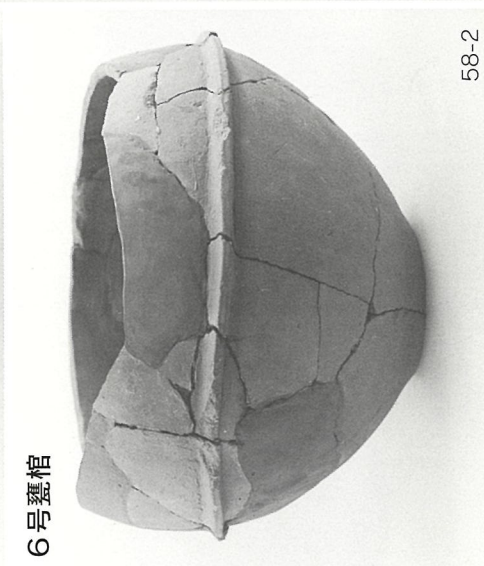


57-2



5号甕棺

58-1



6号甕棺

58-2

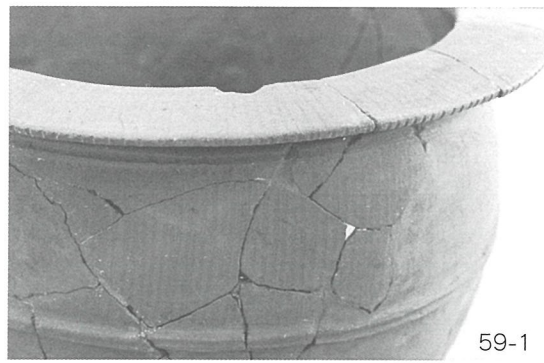
図版42

祭祀土坑出土遺物

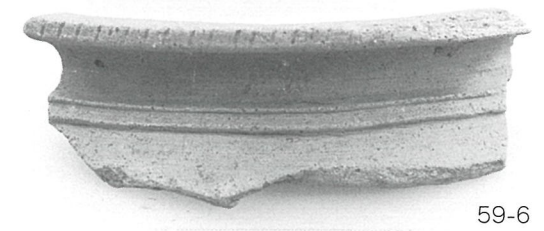
包含層出土遺物



59-1



59-1



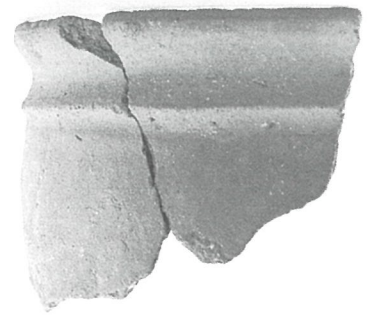
59-6



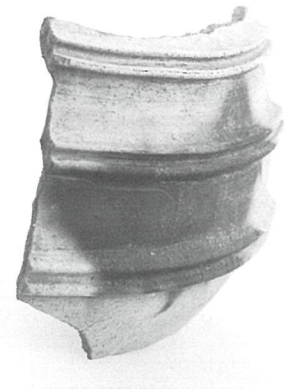
59-8



59-8



61-3



61-11



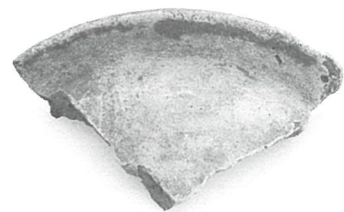
61-19



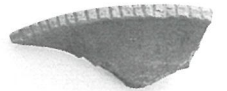
61-14



61-15



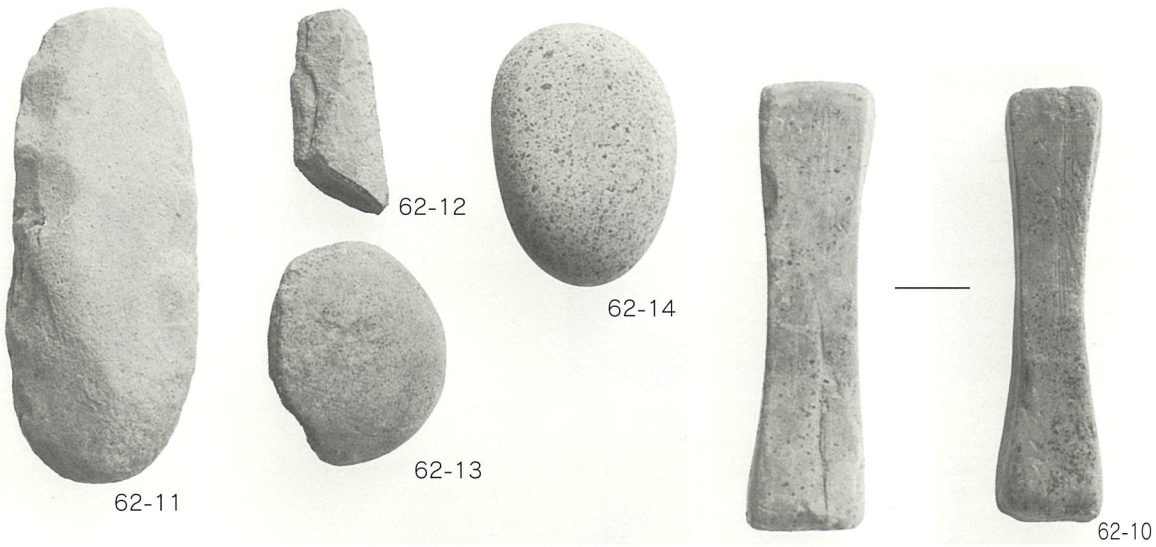
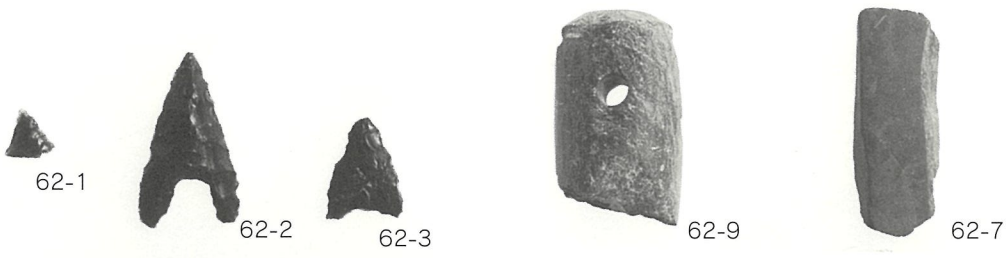
61-17



61-16



61-21



图版44



# 報 告 書 抄 録

フリガナ	ミクモ・イワライセキ ハチリュウ・ミクモサカイ・ミヤノシタ・イワラサカイチクヘン								
書名	三雲・井原遺跡 八龍・三雲塚・宮ノ下・井原塚地区編								
副書名	前原市文化財調査報告書								
巻次	第82集								
シリーズ名	三雲・井原遺跡群								
シリーズ番号	Ⅲ								
著者名	角浩行 川村博 岡部裕俊 比佐陽一郎 片多雅樹 牟田華代子								
編集機関	前原市教育委員会								
所在地	福岡県前原市前原西一丁目8番14号								
発行年月日	平成14年3月31日								
フリガナ	フリガナ			コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号						
三雲・井原遺跡	①福岡県前原市大字三雲234番地(北区)				33° 32' 00"	130° 14' 21"	昭和56年	約33㎡	緊急調査
	②同上(南区)						昭和56年	22㎡	緊急調査
	③同上221番地						平成10年11月~3月	330㎡	重要遺跡確認調査
	④同上235番地						平成14年9月~11月	140㎡	緊急調査
	⑤同上247番地						平成10年10月~12月	110㎡	緊急調査
	⑥同上253番地						平成12年	120㎡	重要遺構確認調査
	⑦同上248・249番地						平成11年12月~2月	115㎡	重要遺構確認調査
	⑧同上281-1番地						平成8年11月~1月	73㎡	緊急調査
	⑨同上284~286番地						平成13年10月~1月	220㎡	重要遺構確認調査
	⑩同上291番地						平成13年10月~3月	78㎡	重要遺構確認調査
	⑪前原市大字井原1033番地						昭和56年	960㎡	緊急調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項				
三雲・井原遺跡①	集落	古墳	竪穴住居、土坑	石鏃片、土師器、韓式土器他					
三雲・井原遺跡②	集落	古墳中世	竪穴住居、土坑、石組溝	土師器他					
三雲・井原遺跡③	集落	弥生古墳中世	大溝、土坑	弥生土器、土師器、初期須恵器、陶磁器、瓦器、石器、鉄器他	大溝遺構の延長方向を確認				
三雲・井原遺跡④	集落	弥生中世	古墳近世	竪穴住居、土坑、石組溝	弥生土器、土師器、瓦器、石器、ヒスイ玉、水晶製算盤玉、鉄器他				
三雲・井原遺跡⑤	集落	散布地	ピット						
三雲・井原遺跡⑥	集落	弥生古墳中世	土坑、ピット	陶磁器、弥生土器	甕棺片、土師器他	包含層より完形の鑄造鉄斧が出土			
三雲・井原遺跡⑦	集落	弥生古墳中世	ピット	弥生土器、土師皿、陶磁器他					
三雲・井原遺跡⑧	集落・墓地	弥生古墳中世	土坑、ピット	弥生土器、土師皿他					
三雲・井原遺跡⑨	集落・墓地	弥生古墳中世	竪穴住居、土坑、木棺墓、祭祀土坑、溝他	弥生土器、土師器、陶磁器、鉄刀子、摘鎌、砥石、石鏃	中世の副葬品を所有する木棺墓検出				
三雲・井原遺跡⑩	集落	弥生古墳中世	竪穴住居、土坑	弥生土器、鉄器					
三雲・井原遺跡⑪	墓地・集落	弥生古墳中世	甕棺墓、祭祀土坑、溝、土坑	ガラス玉257個、甕棺、弥生土器、陶磁器	副葬品をもつ甕棺墓を検出				

# 三雲・井原遺跡Ⅲ

—— 八龍・三雲堺・宮ノ下・井原堺地区の調査 ——

福岡県前原市大字三雲・井原所在遺跡の調査報告

前原市文化財調査報告書 第82集

2003年3月29日

発 行 前原市教育委員会  
福岡県前原市前原西一丁目1番1号  
TEL 092-323-1111

印 刷 (株)重富印刷  
福岡県前原市前原東三丁目1番8号  
TEL 092-322-0191 FAX 092-324-2661